財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第404集

# 吹屋糀屋遺跡

国道353号（鯉沢バイパス）補助公共道路改築事業（国道・円滑）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第5集

2007

群馬県渋川土木事務所
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第404集

# 吹屋糀屋遺跡

国道353号（鯉沢バイパス）補助公共道路改築事業（国道・円滑）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第5集

2007

群馬県渋川土木事務所
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

榛名山二ツ岳と遺跡位置（○）

Ⅰ区　FP下極小区画水田跡及び放牧地跡全景

# 序

吹屋糺屋遺跡は、平成13年度に（国）353号（鯉沢バイパス）道路改築事業に伴い、群馬県土木部（現 県土整備局）からの委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査いたしました。

当遺跡の北には、古墳時代後葉に噴火した榛名山二ッ岳降下軽石によって覆われていた国指定史跡黒井峯遺跡があります。火山災害によって被災した当時の集落の姿が、軽石直下からそのまま発見された、画期的な遺跡です。

吹屋糺屋遺跡でも、黒井峯遺跡と同時刻に存在した水田跡や放牧地跡を調査いたしました。軽石降下直前の水田耕作方法や土地利用方法が明らかになってまいりました。

さらに、古墳時代中葉の集落跡も調査し、多量の土器など出土遺物を得ることができました。中には当時としては珍しい、畿内産の須恵器も混じっており、当時の先端技術の一部が、当地域に導入されていた証を見ることができました

本報告書はこの貴重な資料を所収し、本事業に伴う報告書の第５冊として刊行されることになりました。

報告書刊行に至るまでには、群馬県県土整備局、渋川土木事務所、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会の諸機関並びに地元関係者の皆様に大変なご尽力を賜りました。

心から感謝の意を表すとともに、本書が広く活用され、郷土の歴史の解明に大いに役立つことを願い序とします。

平成19年２月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　高　橋　勇　夫

# 例　言

1．本書は国道353号（鯉沢バイパス）補助公共道路改築事業（国道・円滑）に伴って行われた吹屋糀屋遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．遺跡所在地　群馬県渋川市吹屋字糀屋（旧子持村）

3．事業主体　群馬県（渋川土木事務所）

4．調査主体　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

5．調査期間　平成13年４月１日～平成14年３月31日

6．整理期間　平成17年４月１日～平成19年３月31日

7．発掘調査・整理体制

事務担当

小野宇三郎、高橋勇夫、吉田　豊、木村裕紀、赤山容造、津金沢吉茂、住谷　進、矢崎俊夫、中東耕志、能登　健、宮前結城雄、大島信夫、笠原秀樹、小山建夫、石井　清、竹内　宏、須田朋子、吉田有光、齋藤恵利子、栗原幸代、今泉大作、佐藤聖行、森下弘美、片岡徳雄、清水秀紀、吉田恵子、並木綾子、内山佳子、若田　誠、佐藤美佐子、本間久美子、狩野真子、田村恭子、吉田笑子、鶴岡真希子、今井もと子

調査担当

（発掘）　調査研究部第３課長　下城　正

調査担当　山口逸弘　山村美二　小保方香里

（整理）　調査研究部資料整理第２課長　相京建史

調査研究部資料整理第２グループリーダー　関　晴彦

整理担当　山口逸弘

整理嘱託員　鹿沼敏子

整理補助員　渡部あい子、大塚とし子、矢島三枝子、小林　聖

遺物写真　佐藤元彦

保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、森田智子、津久井桂一、多田ひさ子

土器実測　田中精子、小菅優子（器械実測班）

8．発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

9．発掘調査及び報告書作成には以下の方々にご協力・ご指導を賜った。記して感謝の意を表します。

群馬県渋川土木事務所、群馬県教育委員会文化課、渋川市教育委員会、
石井克巳、太田国男、大塚昌彦、小川卓也、小林　修、小林一弘、小林　正、坂口　一、櫻井秀哉、佐藤信孝、鈴木徳雄、田口一郎、土井道昭、外山政子、日沖剛史、福田貫之、町田智美、松村和男、山本千春、横田美由紀

10．分析・委託　自然科学分析（テフラ分析・植物珪酸体分析）：（株）古環境研究所　第Ⅳ章に掲載

遺構測量・トレース・デジタルトレース：株式会社測研

出土遺物実測トレース：技研測量株式会社、有限会社　毛野考古学研究所

電磁波探査：応用地質株式会社

11．本文執筆及び編集　山口逸弘

# 凡　例

1．本書挿図中に使用した方位は、座標北を表している。

2．６図は国土地理院２万５千分の１地形図「金井」「鯉沢」「渋川」「伊香保」を使用した。

3．テフラの呼称として、榛名山二ッ岳渋川テフラ（Hr-S）→Hr-FAあるいはFA、榛名山二ッ岳伊香保テフラ（Hr-I）→Hr-FPあるいはFP、浅間Ｂ軽石→As-B、浅間Ｃ軽石→As-Cを用いた。

4．遺構・遺物図の縮尺については、下記を基本としたが厳密に統一していない。各挿図中のスケールを参照していただきたい。

《遺構》　竪穴住居跡　1/60、炉・竈　1/30、水田跡・畠跡　1/200・1/100・1/60・1/40

《遺物》　土器類　1/2・1/3・1/4、石製品・石器類　1/1・1/2・1/3・1/4

5．水田跡などの面積は、デジタルプラニメーターで３回計測した平均値を採用した。

6．遺物計測値は、口径・底径・高さ・長さ・幅・厚さは小数点第２位を四捨五入し㎝単位で、重量は電磁式はかり等を使用し、g・kg単位で表示した。

7．遺構計測値は基本的に竪穴住居跡は上端の長軸・短軸を計測した。水田跡は下端を計測した。

8．なお、本報告書１～２章は、国道353号線関連に伴う調査報告書「北牧大境遺跡」「中郷恵久保遺跡」とほぼ内容が一致する箇所がある。同一事業での刊行であり、加除筆後再録させていただいた。

# 目　次

口絵・序・例言・凡例・目次
挿図・表・図版目次

Ⅰ　調査経過
　1．調査に至る経過　1
　2．調査の経過　1
　3．調査の方法　5

Ⅱ　周辺の環境
　1．地理的環境　6
　2．歴史的環境　9
　3．基本土層　10

Ⅲ　検出された遺構と遺物
　1．概要　13
　2．Hr-FP上で検出された遺構と遺物　14
　3．Hr-FP下で検出された遺構　57
　4．Hr-FA下で検出された遺構　99
　5．ローム上面で検出された遺構と遺物　111
　6．遺構計測表及び遺物観察表　239

Ⅳ　分析
　Ⅰ　吹屋祇屋遺跡の土層とテフラ　294
　Ⅱ　吹屋祇屋遺跡におけるプラント・オパール分析　298
　Ⅲ　吹屋祇屋遺跡における花粉分析　302

Ⅴ　まとめ　305

抄録　写真図版　奥付

# 挿図目次


| | | |
|---|---|---|
| 1図 | 国道353号線路線図 | 2 |
| 2図 | 遺跡位置と周辺地形図 | 4 |
| 3図 | 遺跡位置と段丘分布図（S＝1:50,000） | 7 |
| 4図 | FAとFPの陸下範囲（S＝1:200,000） | 8 |
| 5図 | 基本土層図 | 10 |
| 6図 | 周辺遺跡分布図（S＝1:25,000） | 11 |
| 7図 | FP上面全体図 | 15 |
| 8図 | Ⅰ区FP上面遺構配置図 | 16 |
| 9図 | Ⅱ区FP上面遺構配置図 | 17 |
| 10図 | Ⅲ区FP上面遺構配置図 | 18 |
| 11図 | 1号住居跡床面・出土遺物 | 25 |
| 12図 | 2号住居跡床面 | 25 |
| 13図 | 3号住居跡床面・竈・出土遺物（1） | 26 |
| 14図 | 3号住居跡出土遺物（2） | 27 |
| 15図 | 4号住居跡床面・竈 | 27 |
| 16図 | 4号住居跡出土遺物（1） | 28 |
| 17図 | 4号住居跡出土遺物（2） | 29 |
| 18図 | 5号住居跡床面・　床下 | 30 |
| 19図 | 5号住居跡竈・出土遺物 | 31 |
| 20図 | 6号住居跡床面・床下・出土遺物（1） | 32 |
| 21図 | 6号住居跡出土遺物（2） | 33 |
| 22図 | 7号住居跡床面・出土遺物 | 33 |
| 23図 | 8号住居跡床面・竈・出土遺物 | 34 |
| 24図 | 9号住居跡床面・竈・出土遺物 | 35 |
| 25図 | 10号住居跡床面・床下 | 36 |
| 26図 | 10号住居跡竈・出土遺物 | 37 |
| 27図 | 34号住居跡床面・出土遺物 | 38 |
| 28図 | 1・2号掘立柱建物跡 | 39 |
| 29図 | 3・4号掘立柱建物跡 | 40 |
| 30図 | 5・6号掘立柱建物跡 | 41 |
| 31図 | 1・2号溝 | 42 |
| 32図 | Ⅱ区FP上面土坑群 | 43 |
| 33図 | Ⅱ区FP上面12・14～16・31・35号土坑・出土遺物 | 44 |
| 34図 | Ⅲ区東側FP上面溝・土坑群 | 45 |
| 35図 | Ⅲ区東側FP上面溝・土坑群断面図 | 46 |
| 36図 | Ⅲ区FP上面48・82・83・92～95・100号土坑 | 46 |
| 37図 | Ⅲ区中央FP上面溝・土坑群（1） | 47 |
| 38図 | Ⅲ区中央FP上面溝・土坑群（2） | 48 |
| 39図 | Ⅲ区西側溝・土坑群 | 49 |
| 40図 | Ⅲ区FP上面96～99・101～103・108～117号土坑 | 50 |
| 41図 | 1号井戸跡出土遺物（1） | 51 |
| 42図 | 1号井戸跡出土遺物（2） | 52 |
| 43図 | 1号井戸跡出土遺物（3） | 53 |
| 44図 | 1号井戸跡出土遺物（4） | 54 |
| 45図 | 1号井戸跡出土遺物（5） | 55 |
| 46図 | FP上面遺構外出土遺物 | 56 |
| 47図 | FP下面全体図 | 66 |
| 48図 | Ⅰ区FP下面全体図 | 67 |
| 49図 | Ⅰ区東側FP下面 | 68 |
| 50図 | Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（1） | 69 |
| 51図 | Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（2） | 70 |
| 52図 | Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（3）<br>耕起中水田跡と代掻き後水田跡 | 71 |
| 53図 | Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（4）代掻き後水田跡 | 72 |
| 54図 | Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（5） | 73 |
| 55図 | Ⅰ区FP下面断面図（1） | 74 |
| 56図 | Ⅰ区FP下面断面図（2） | 75 |
| 57図 | Ⅱ区FP下面全体図 | 76 |
| 58図 | Ⅱ区東側FP下面（1） | 77 |
| 59図 | Ⅱ区東側FP下面（2） | 78 |
| 60図 | Ⅱ区中央FP下面 | 79 |
| 61図 | Ⅱ区西側FP下面（1） | 80 |
| 62図 | Ⅱ区西側FP下面（2） | 81 |
| 63図 | Ⅱ区FP下面断面図 | 82 |
| 64図 | Ⅱ区FP下面アマリ土平・断面図 | 82 |
| 65図 | Ⅲ区FP下面全体図 | 83 |
| 66図 | Ⅲ区FP下面（1） | 84 |
| 67図 | Ⅲ区FP下面（2） | 85 |
| 68図 | Ⅲ区FP下面（3） | 86 |
| 69図 | Ⅲ区西側FP下面（1） | 87 |
| 70図 | Ⅲ区西側FP下面（2） | 88 |
| 71図 | Ⅲ区東側FP下面（1） | 89 |
| 72図 | Ⅲ区東側FP下面（2） | 90 |
| 73図 | Ⅲ区東側FP下面断面図（1） | 91 |
| 74図 | Ⅲ区東側FP下面断面図（2） | 92 |
| 75図 | FA上面サク状遺構全体図 | 93 |
| 76図 | Ⅰ区FA上面全体図 | 94 |
| 77図 | Ⅰ区FA上面サク状遺構 | 95 |
| 78図 | Ⅰ区FA上面断面図 | 96 |
| 79図 | Ⅱ区FA上面断面図 | 96 |
| 80図 | Ⅱ区FA上面全体図 | 97 |
| 81図 | Ⅲ区FA上面全体図 | 98 |
| 82図 | FA下面全体図 | 100 |
| 83図 | Ⅰ区FA下面全体図 | 101 |
| 84図 | Ⅰ区FA下面小区画水田跡（1） | 102 |
| 85図 | Ⅰ区FA下面小区画水田跡（2） | 103 |
| 86図 | Ⅰ区FA下面断面図 | 104 |
| 87図 | Ⅱ区FA下面全体図 | 105 |
| 88図 | Ⅱ区FA下面遺状遺構 | 106 |
| 89図 | Ⅱ・Ⅲ区FA下面遺状遺構 | 107 |
| 90図 | Ⅲ区FA下面全体図 | 108 |
| 91図 | Ⅲ区FA下面遺状遺構 | 109 |
| 92図 | Ⅲ区FA下面凹地 | 110 |
| 93図 | ローム上面全体図 | 112 |
| 94図 | Ⅰ区ローム上面遺構配置図 | 113 |
| 95図 | Ⅱ区ローム上面遺構配置図 | 114 |
| 96図 | Ⅲ区ローム上面遺構配置図 | 115 |
| 97図 | 11号住居跡（凹地）・出土遺物 | 131 |
| 98図 | 13号住居跡床面・床下・出土遺物 | 131 |
| 99図 | 14号住居跡・床面・出土遺物 | 132 |
| 100図 | 15号住居跡床面・焼土・床下・出土遺物（1） | 133 |
| 101図 | 15号住居跡出土遺物（2） | 134 |
| 102図 | 17号住居跡床面 | 134 |
| 103図 | 17号住居跡竈 | 135 |
| 104図 | 17号住居跡出土遺物（1） | 136 |
| 105図 | 17号住居跡出土遺物（2） | 137 |
| 106図 | 18号住居跡床面・竈 | 138 |
| 107図 | 19号住居跡床面 | 139 |

108図　19号住居跡遺物出土状況・出土遺物（1）　140
109図　19号住居跡出土遺物（2）　141
110図　19号住居跡出土遺物（3）　142
111図　20号住居跡床面・出土遺物（1）　143
112図　20号住居跡出土遺物（2）　144
113図　21号住居跡床面　144
114図　21号住居跡竈　145
115図　22号住居跡床面　145
116図　22号住居跡断面図・竈　146
117図　22号住居跡出土遺物（1）　147
118図　22号住居跡出土遺物（2）　148
119図　23号住居跡床面・出土遺物　149
120図　24号住居跡床面　149
121図　24号住居跡炉・出土遺物（1）　150
122図　24号住居跡出土遺物（2）　151
123図　25号住居跡床面・床下・出土遺物（1）　152
124図　25号住居跡出土遺物（2）　153
125図　26号住居跡床面　154
126図　27号住居跡床面・出土遺物　154
127図　28号住居跡(焼土)・出土遺物　155
128図　29号住居跡床面・床下・出土遺物（1）　156
129図　29号住居跡出土遺物（2）　157
130図　31号住居跡床面　158
131図　31号住居跡竈　159
132図　31号住居跡出土遺物（1）　160
133図　31号住居跡出土遺物（2）　161
134図　31号住居跡出土遺物（3）　162
135図　32号住居跡床面・床下・出土遺物　163
136図　33号住居跡床面・竈・出土遺物（1）　164
137図　33号住居跡出土遺物（2）　165
138図　36号住居跡床面　165
139図　36号住居跡断面図・出土遺物　166
140図　37号住居跡・床面・竈　167
141図　37号住居跡出土遺物　168
142図　38号住居跡床面　169
143図　38号住居跡竈・出土遺物（1）　170
144図　38号住居跡出土遺物（2）　171
145図　38号住居跡出土遺物（3）　172
146図　38号住居跡出土遺物（4）　173
147図　38号住居跡出土遺物（5）　174
148図　39号住居跡竈　174
149図　39号住居跡床面　175
150図　39号住居跡出土遺物　176
151図　40号住居跡床面　177
152図　40号住居跡床下・竈　178
153図　40号住居跡出土遺物（1）　179
154図　40号住居跡出土遺物（2）　180
155図　41号住居跡床面・出土遺物（1）　181
156図　41号住居跡出土遺物（2）　182
157図　42号住居跡床面・出土遺物　182
158図　43号住居跡床面・出土遺物　183
159図　44号住居跡断面図　183
160図　44号住居跡床面・出土遺物（1）　184
161図　44号住居跡出土遺物（2）　185
162図　45号住居跡床面・竈・出土遺物　186
163図　46号住居跡床面・竈・出土遺物（1）　187
164図　46号住居跡出土遺物（2）　188
165図　7号掘立柱建物跡　191
166図　8号掘立柱建物跡　192
167図　7号溝　192
168図　ローム上土坑（1）・出土遺物　193
169図　ローム上土坑（2）　194
170図　ローム上土坑（3）・出土遺物　195
171図　1号土器集中遺構分布図・出土遺物（1）　200
172図　1号土器集中遺構出土遺物（2）　201
173図　2号土器集中遺構分布図（上層）　202
174図　2号土器集中遺構分布図（下層）　203
175図　2号土器集中遺構遺物出土位置（上層）　204
176図　2号土器集中遺構遺物出土位置（下層）・出土遺物（1）　205
177図　2号土器集中遺構出土遺物（2）　206
178図　2号土器集中遺構出土遺物（3）　207
179図　2号土器集中遺構出土遺物（4）　208
180図　3号土器集中遺構分布図　208
181図　3号土器集中遺構出土遺物（1）　209
182図　3号土器集中遺構出土遺物（2）　210
183図　3号土器集中遺構出土遺物（3）　211
184図　4号土器集中遺構分布図・出土遺物　211
185図　ローム上遺構外出土遺物（1）　212
186図　ローム上遺構外出土遺物（2）　213
187図　ローム上遺構外出土遺物（3）　214
188図　ローム上遺構外出土遺物（4）　215
189図　ローム上遺構外出土遺物（5）　216
190図　ローム上遺構外出土遺物（6）　217
191図　ローム上遺構外出土遺物（7）　218
192図　ローム上遺構外出土遺物（8）　219
193図　ローム上遺構外出土遺物（9）　220
194図　ローム上遺構外出土遺物（10）　221
195図　ローム上遺構外出土遺物（11）　222
196図　ローム上遺構外出土遺物（12）　223
197図　ローム上遺構外出土遺物（13）　224
198図　ローム上遺構外出土遺物（14）　225
199図　ローム上遺構外出土遺物（15）　226
200図　ローム上遺構外出土遺物（16）　227
201図　ローム上遺構外出土遺物（17）　228
202図　ローム上遺構外出土遺物（18）　229
203図　ローム上遺構外出土遺物（19）　230
204図　ローム上遺構外出土遺物（20）弥生　231
205図　ローム上遺構外出土遺物（21）弥生　232
206図　ローム上遺構外出土遺物（22）弥生　233
207図　ローム上遺構外出土遺物（23）縄文　234
208図　ローム上遺構外出土遺物（24）縄文　235
209図　ローム上遺構外出土遺物（25）縄文　236
210図　ローム上遺構外出土遺物（26）縄文　237
211図　ローム上遺構外出土遺物（27）縄文　238

Ⅳ章　Ⅰ吹屋梳屋遺跡の土層とテフラ
図1　試料採取地点　297
図2　各地点の土層柱状図　297

Ⅳ章　Ⅱ吹屋梳屋遺跡におけるプラント・オパール分析
図1　吹屋梳屋遺跡における
プラント・オパール分析結果　300

Ⅳ章　Ⅲ吹屋梳屋遺跡における花粉分析
図1　吹屋梳屋遺跡における花粉ダイアグラム　304

# 図版目次


図版 1
Ⅱ区FP上面全景
Ⅲ区FP上面全景
図版 2
1 号住居跡
2 号住居跡
3 号住居跡
4 号住居跡
5 号住居跡
6 号住居跡
7 号住居跡
8 号住居跡
図版 3
9 号住居跡
10号住居跡
34号住居跡
3 号掘立柱建物跡
4 号掘立柱建物跡
Ⅲ区FP上近景
1 号井戸
1 号井戸
図版 4
Ⅰ区　FP下面全景
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡
図版 5
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡　水口
Ⅰ区　FP下極小区画水田跡　畦畔の崩れ
Ⅰ区　FP下東台地と低地
Ⅰ区　FP下 3 号溝
Ⅰ区　FP下 4 号溝
図版 6
Ⅰ区　FP下西側水路
Ⅰ区　FP下西側水路
Ⅰ区　FP下東台地放牧地跡
Ⅰ区　FP下東台地放牧地跡
Ⅰ区　FP下東台地放牧地跡
Ⅰ区　FP下東台地放牧地跡
Ⅰ区　東台地サク状遺構（FA上調査）
Ⅰ区　東台地サク状遺構（FA上調査）
図版 7
Ⅱ区　FP下面全景
Ⅱ区　FP下畠跡と馬路痕
Ⅱ区　FP下放牧地跡
Ⅱ区　FP下放牧地跡
Ⅱ区　FP下アマリ土
図版 8
Ⅱ区　FA上調査全景
Ⅱ区　サク状遺構（FA上調査）
Ⅱ区　サク状遺構（FA上調査）
Ⅱ区　サク状遺構（FA上調査）
図版 9
Ⅲ区　FP下面全景（東から）
Ⅲ区　FP下面全景（西から）
図版10
Ⅲ区　FP下極小区画水田跡
Ⅲ区　FP下極小区画水田跡
Ⅲ区　FP下極小区画水田跡
Ⅲ区　FP下極小区画水田跡
Ⅲ区　FP下極小区画水田跡（馬路痕）
Ⅲ区　サク状遺構検出作業（FA上面）
Ⅲ区　サク状遺構検出作業（FA上面）
Ⅲ区　サク状遺構検出作業（FA上面）
図版11
Ⅰ区　FA下小区画水田跡
Ⅰ区　FA下小区画水田跡
Ⅰ区　FA下小区画水田跡（畝畦）
Ⅱ区　FA下遺状遺構
Ⅲ区　FA下遺状遺構
図版12
Ⅰ区　ローム上面全景
Ⅱ区　ローム上面全景
図版13
Ⅲ区　ローム上面全景
13号住居跡
14号住居跡
15号住居跡
15号住居跡遺物出土状態
図版14
17号住居跡遺物出土状態
17号住居跡竈遺物出土状態
17号住居跡
17号住居跡竈
18号住居跡
19号住居跡遺物出土状態
19号住居跡遺物出土状態
19号住居跡床下
図版15
20号住居跡床下
20号住居跡炭化材出土状態
21号住居跡
21号住居跡竈
22号住居跡
22号住居跡竈
23号住居跡
23号住居跡遺物出土状態
図版16
24号住居跡
24号住居跡炉
25号住居跡
26号住居跡
27号住居跡
27号住居跡遺物出土状態
28号住居跡（焼土）
29号住居跡
図版17
31号住居跡
31号住居跡竈
図版18
32号住居跡
32号住居跡遺物出土状態
33号住居跡
33号住居跡竈
36号住居跡
36号住居跡遺物出土状態
37号住居跡
37号住居跡竈
図版19
38号住居跡
38号住居跡遺物出土状態
38号住居跡遺物出土状態
38号住居跡竈遺物出土状態
38号住居跡竈
図版20
39号住居跡
39号住居跡調査前の凹み
39号住居跡竈
39号住居跡床下
39号住居跡床面より周堤帯上を臨む
図版21
40号住居跡
40号住居跡竈
41号住居跡
41号住居跡遺物出土状態
42号住居跡
42号住居跡炭化材出土状態
43号住居跡
43号住居跡遺物出土状態
図版22
44号住居跡
44号住居跡炉 1
44号住居跡炉 2
45号住居跡
45号住居跡竈
46号住居跡
46号住居跡遺物出土状態
46号住居跡竈
図版23
7 号掘立柱建物跡
8 号掘立柱建物跡
1 号土器集中遺構
2 号土器集中遺構
2 号土器集中遺構
2 号土器集中遺構

図版24
3号土器集中遺構
3号土器集中遺構
4号土器集中遺構
4号土器集中遺構
26号土坑
29号土坑
30号土坑
36号土坑
図版25
104号土坑
105号土坑
106号土坑
128号土坑
130号土坑
131号土坑
132号(左)・133号(右)土坑
139号土坑(右)
図版26
1号・3号・4号住居跡出土遺物
図版27
4号・5号住居跡出土遺物
図版28
6号・10号住居跡出土遺物
図版29
34号住居跡・1号土坑・1号井戸出土遺物
図版30
1号井戸出土遺物
図版31
1号井戸・FP上面遺構外出土遺物
図版32
11号・13～15号・17号住居跡(1)出土遺物
図版33
17号住居跡出土遺物(2)
図版34
17号(3)・18号・19号住居跡(1)出土遺物
図版35
19号住居跡出土遺物(2)
図版36
20号・22号住居跡(1)出土遺物
図版37
22号(2)・23号住居跡出土遺物
図版38
24号・27号住居跡出土遺物
図版39
25号住居跡(1)出土遺物
図版40
25号(2)・28・29号住居跡出土遺物
図版41
31号住居跡(1)出土遺物
図版42
31号住居跡(2)出土遺物
図版43
33号・36号・37号住居跡(1)出土遺物
図版44
37号(2)・38号住居跡(1)出土遺物
図版45
38号住居跡(2)出土遺物
図版46
38号住居跡(3)出土遺物
図版47
38号住居跡(4)出土遺物
図版48
39号・40号住居跡(1)出土遺物
図版49
40号住居跡(2)出土遺物
図版50
41号・42号・44号住居跡(1)出土遺物
図版51
44号住居跡(2)出土遺物
図版52
45号・46号住居跡出土遺物
図版53
1号土器集中遺構出土遺物
図版54
2号土器集中遺構(1)出土遺物
図版55
2号土器集中遺構(2)出土遺物
図版56
2号土器集中(3)・3号土器集中遺構(1)出土遺物
図版57
3号土器集中遺構(2)出土遺物
図版58
3号土器集中(3)・4号土器集中遺構出土遺物
図版59
ローム上　土坑・遺構外(1)出土遺物(古墳時代)
図版60
遺構外(2)出土遺物(古墳時代)
図版61
遺構外(3)出土遺物(古墳時代)
図版62
遺構外(4)出土遺物(古墳時代)
図版63
遺構外(5)出土遺物(古墳時代)
図版64
遺構外(6)出土遺物(古墳時代)
図版65
遺構外(7)出土遺物(古墳時代)
図版66
遺構外(8)出土遺物(古墳時代)
図版67
遺構外(9)出土遺物(古墳時代)
図版68
遺構外(10)出土遺物(古墳時代)
図版69
遺構外(11)出土遺物(古墳時代)
図版70
遺構外(12)出土遺物(古墳時代)
図版71
遺構外(13)出土遺物(古墳時代)
図版72
遺構外(14)出土遺物(弥生時代)
図版73
遺構外(15)出土遺物(弥生時代)
図版74
遺構外(16)出土遺物(縄文時代)
図版75
遺構外(17)出土遺物(縄文時代)

# Ⅰ　調査経過

## 1．調査に至る経過

国道353号線鯉沢バイパスは、渋川市内を走る一般国道17号及び国道353号線の交通渋滞の緩和を図るため、国道17号の鯉沢バイパスと合わせて計画された延長2.2km・2車線の道路で、建設区間は渋川市白井から渋川市北牧である。平成8年度にはその一部0.8kmが供用開始された。この部分に関しては、白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡として、平成3年～平成6年に(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行い、報告書を刊行している。

国道353号線鯉沢バイパスの残りの区間1.4kmの建設について、平成10年度に群馬県道路建設課から県教育委員会文化財保護課に対し、建設予定区域内の遺跡の存否についての事業照会があった。これを受けて文化財保護課では、工事対象地域が榛名山二ッ岳の火山性噴出物による、古墳時代文化層の良好な遺存で知られる場所であることから、用地上問題の少ない北牧地区（北牧大境遺跡）で試掘を実施したところ、二ッ岳降下軽石上から平安時代の住居跡、軽石下から古墳時代の水田跡を発見したため、本調査に向けて協議を開始した。

平成11年度前半、地元子持村教育委員会の協力を得て、当該地域における周知の遺跡の存否および範囲を詳細に検討し、道路予定区域全体に遺跡が存在することが判明したため、11年度後半に全面本調査を実施する方向で協議を進めた。路線内の調査対象遺跡に対して、村教育委員会との協議により小字毎に各遺跡を分別し、大字と小字を併記して、遺跡名を呼称する方法をとった。すなわち、東から中郷恵久保遺跡（本遺跡）・吹屋三角遺跡・中郷田尻遺跡・吹屋梵屋遺跡・北牧大境遺跡・北牧壱町ヶ坪遺跡・北牧沖田遺跡を対象遺跡とし、平成11年11月から本格的な発掘調査が、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団によって開始されることになった（1図）。尚、当初調査予定であった、北牧壱町ヶ坪遺跡及び北牧沖田遺跡に関しては、平成13年1月に、事業団の協力の下、文化財保護課による試掘が行われたが、遺構・遺物を検出し得ず、二ッ岳降下軽石（Hr-FP）も二次堆積層を見ることから、本調査の対象から除外することになった。

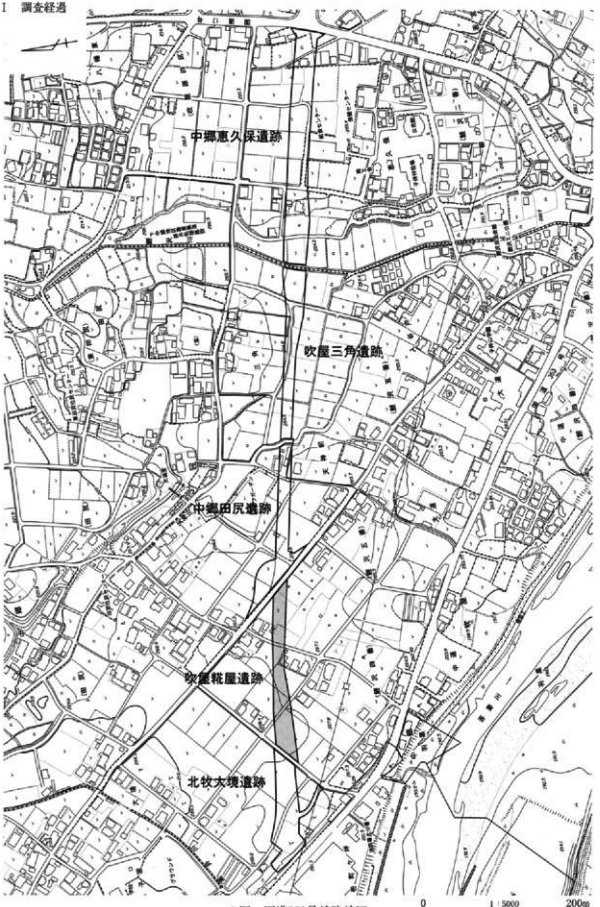
## 2．調査の経過

国道353号線（鯉沢バイパス）の発掘調査は、平成11年11月に中郷恵久保遺跡Ⅱ区と吹屋三角遺跡Ⅰ区～Ⅲ区の一部から着手した。これは路線内に存在する未収地と工事工程の関連であり、平成12年度は中郷恵久保遺跡Ⅱ区・Ⅲ区、北牧大境遺跡の発掘調査を行い、平成13年度は吹屋梵屋遺跡、中郷恵久保遺跡Ⅰ区・Ⅲ区の調査を完了させた。それまで未収地と工事行程の関係から調査未着手であった、吹屋三角遺跡Ⅲ区西と中郷田尻遺跡は平成16年度に行われた。

吹屋梵屋遺跡がある旧子持村内の殆どの遺跡では、古墳時代に降下した二ッ岳降下軽石（Hr-FP）に厚く覆われており、本遺跡も1.5m以上のHr-FPの堆積が確認されている。また、このFP下にも降下火山灰（Hr-FA）が堆積しており、各々その直下が、古墳時代の地表面であり重要な文化層-調査面となる。さらに下位層では縄文時代や弥生時代の文化層が存在しており、そのため、調査はFP上・FP下・FA下・ローム上といった最低4面の調査面が存在するのである。

吹屋梵屋遺跡の調査でもこの4面の調査にあたり、調査区を南北に分断する町道を境に東からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区と分けて、その都度、各区毎に4面の文化層を調査面として、各面の調査記録を執り行う調査方法を行った。

平成13年4月、調査事務所を吹屋梵屋遺跡Ⅲ区に設置し（これは前年度北牧大境遺跡調査事務所の継続であるが）、調査着手をⅡ区FP上面から行った。本来ならば、Ⅰ区FP上面から調査を進めるべきで




1図　国道353号線路線図

あったが、用地買収後の上物（園芸林）撤去が果たされておらず、やむなくⅡ区より調査を行った。

Ⅱ区FP上面では、平安時代の住居跡7軒を中心に掘立柱建物遺構6棟など、小規模ながら該期の集落跡を検出した。Ⅱ区FP上面の調査終了時にⅠ区の上物撤去が果たされたため、当初の調査工程に戻り、Ⅰ区調査を本格化した。FP上面では、平安時代住居跡3軒を調査することができたが、遺構の密度は薄く、該期集落の東限と見做せた。

Ⅰ区FP下面は東台地の放牧地跡と中央部分の極小区画水田跡を検出した。境界には2条の溝が南北に走向する事によって、放牧地と水田が画され、当時の台地と低地の土地利用の格差が一望に把握できる好資料となった（巻頭カラー参照）。また、東台地放牧地跡のFA上における耕作痕調査では、畠のサク状遺構が検出され、FA降下後に畠作→放牧地への転換が示唆された。

Ⅰ区FA下面では低地部分に小区画水田跡を調査した。Ⅰ区FP下面の極小区画水田跡と比して、やや遺存度が低いものの、当地に置けるFA下遺構は極めて稀少であり、重要な調査例といえよう。

Ⅰ区ローム上面では、古墳時代中葉の集落跡の調査となった。竪穴住居跡4軒を確認した。このうち11号住居跡は、西側台地部分FA下面において凹みとして確認されたため、住居跡の存在を予想し11号住として命名したが、床面は検出し得ず、炉・竈も認められなかったため、住居跡の存在は確実ながらも、明確に把握できなかった住居跡である。また、12号住や16号住は後の整理作業に置いて住居跡としては認知出来なかったため、欠番扱いとした。その他の3軒の住居跡は東台地で調査された。東台地は東接する中郷田尻遺跡とほぼ同一台地といえ、当遺跡で検出された該期集落の西限と捉えられよう。

Ⅰ区中央の低地部には、氾濫跡が数箇所確認できた。出土遺物は土器と石器に限られ、中郷恵久保遺跡に見るような木製品の出土は無かった。

Ⅰ区調査終了後、Ⅰ区を残土置き場とし、Ⅱ区の調査にあたった。既にFP上面の調査は終了しているので、2面目であるFP下面の調査から行った。

FP下面では放牧地跡を検出した。凹地やアマリ土による集石箇所、及び馬蹄痕からなる。また、畠の畝とサクが不鮮明ながらも確認でき、放牧地に供される前は、畠地として利用されていた。さらにFA上の耕作痕調査では、一段階古い畠サク状遺構が検出され、FA降下後は畠→畠→放牧地という変遷が想起された。

Ⅱ区FA下面では、西端で道状遺構を検出した。その他は馬蹄痕跡と凹地によって構成される放牧地跡と見ることができた。

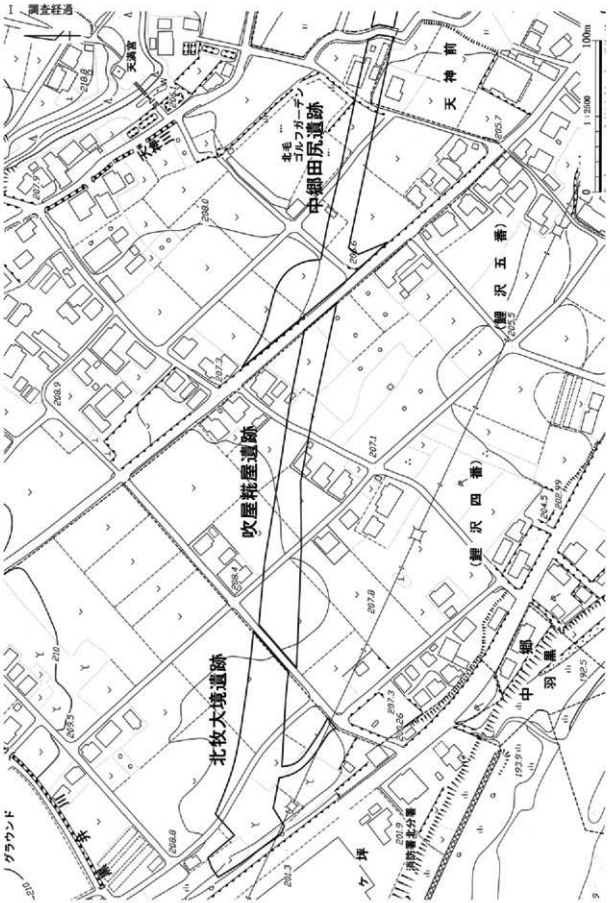
Ⅱ区ローム上面は、古墳時代中葉の住居跡群の調査に終始した。FA下面で見られた凹地が住居跡を示唆していたが、埋没が完了した浅い住居跡などは、掘り込みが黒色土中に止まり、検出に手間取った。Ⅱ区では、合計17軒の古墳時代中葉の住居跡を調査したが、竈を付設する住居跡の中には、西壁に設ける例が見られ、住居跡内竈導入期における、過渡的な様相が把握できた。

Ⅲ区は、調査工程上最後の調査区となった。

FP上面は、Ⅰ・Ⅱ区に比して遺構密度が高く、土坑・溝が重複する様相で検出された。これは、西接する北牧大境遺跡Ⅰ区と同様の様相で、中世～近世段階の屋敷あるいは大型施設の存在が示唆された。中でも、1号井戸からは、宝篋印塔・五輪塔など石造物が再利用された状態で出土しており、Ⅲ区及び北牧大境遺跡Ⅰ区にかけて祭祀空間も予想された。

Ⅲ区FP下は東側に極小区画水田、西側に放牧地跡が検出された。Ⅰ区と同様に土地利用の多様性が見られたが、両者の間は貧弱な大畦が走向するのみで、Ⅰ区で見られたような大溝による分割状況では無かった。また、FA上面における耕作痕調査では、水田跡・放牧地跡共に下層よりサク状遺構が検出されており、畠放棄後に水田と放牧地という二者の土地利用へ変化した状況が把握できた。

Ⅲ区FA下では、調査区東端で道状遺構を検出した。これはⅡ区西端で調査した道状遺構の南延長であり、当地における南北の動線を窺わせる貴重な資




2図　遺跡位置と周辺地形図

料となった。

ローム上ではⅠ・Ⅱ区と同様に古墳時代中葉の集落跡の調査となった。濃密な分布ではないものの、検出された住居跡は良好な遺存で、かつ凹地として存在を示す例もあり、調査は試行錯誤の繰り返しを重ねた。また、掘立柱建物跡や土器集中遺構も確認され、集落跡の内容を濃いものとしている。

整理作業は、平成17年４月に着手したが、出土遺物が多量であり、平成18年度にまで継続した。

調査日誌抄録

平成13年

４月３日　現地確認

　初旬　Ⅱ区FP上面より調査着手

　下旬　Ⅰ区表土剥ぎ着手。Ⅱ区と併行調査

５月初旬　Ⅰ区FP上面調査終了。FP下面着手

　中旬　Ⅰ区FP下面　極小区画水田跡と放牧地跡

　　中郷恵久保遺跡と併行調査へ

　　Ⅱ区FP上面調査終了

　下旬　Ⅰ区FA上調査終了。FA下面着手

６月初旬　Ⅰ区谷部FA下小区画水田跡を検出。

　中旬　Ⅰ区黒色土人力で掘り下げ。

　下旬　13号住・15号住等調査

７月初旬　Ⅰ区ローム上調査終了。Ⅱ区FP下面調査へ

　中旬　Ⅱ区FP下面放牧地跡検出。馬蹄痕等

　下旬　Ⅱ区FA上面で耕作痕調査。猛暑続く。

８月初旬　Ⅱ区FA上耕作痕調査継続。サク状遺構良好

　中旬　Ⅱ区FA下調査着手。凹み・遺状遺構検出

　下旬　Ⅱ区FA下面調査終了

９月初旬　Ⅱ区黒色土の掘り下げ、ローム面へ。

　　遺物多数

　下旬　Ⅱ区～24号住等調査

10月初旬　Ⅱ区ローム上調査継続

　中旬　Ⅱ区に建つ調査事務所解体。Ⅰ区に新設

11月初旬　Ⅲ区表土剥ぎ着手。Ⅱ区調査継続

　中旬　Ⅲ区FP上面調査着手。

　下旬　Ⅱ区ローム上調査終了

12月初旬　Ⅲ区FP上面調査継続　34号住・１号井戸等

　中旬　Ⅲ区FP上面調査終了　FP下面へ

　下旬　Ⅲ区重機によるFP除去

平成14年

１月初旬　Ⅲ区FP下面調査。極小区画水田跡と放牧地跡

　中旬　Ⅲ区FA上面耕作痕調査。サク状遺構

　下旬　Ⅲ区FA上面調査終了

２月初旬　Ⅲ区FA下面調査。遺状遺構・凹地を検出

　中旬　黒色土掘り下げ。土器多数出土

　下旬　Ⅲ区ローム上古墳時代住居跡調査

３月初旬　Ⅲ区ローム上住居跡調査継続（38住等）

　中旬　Ⅲ区ローム上住居跡調査継続（44住等）

３月20日　ローム上面調査終了。埋め戻し

## 3．調査の方法

本遺跡の調査区については、便宜的に現道を境にし東よりⅠ～Ⅲ区と大別したグリッドは国家座標に一致させた１辺４ｍの方眼を設定し、南北方向に算用数字二桁を、東西方向にはアルファベット25文字を２つ組み合わせたものをあてはめた。国家座標は、国道353号線調査区を全て網羅するようにし、グリッド呼称も東端の遺跡である中郷恵久保遺跡から順次増えるようにした。

遺構の平面測量は上記グリッド杭を基準として、Hr-FP上面の平安時代～中・近世遺構群は平板測量と簡易遣り方測量を併用し、1/20・1/10縮尺を基本とした。また、Hr-FP下及びHr-FA下水田は、全て電子平板測量で1/40図を基準として業務委託した。ローム上面で確認された古墳時代の集落跡は、平板測量と簡易遣り方測量を併用し、包含層出土遺物についても、特殊な出土状態を想起させる例については、出土地点の記録化に努めた。

写真記録は、基本的に６×７・35㎜の白黒フィルムと35㎜リバーサルフィルムを使用した。また、全景写真などに際しては、高所作業車及びヘリコプターによる撮影を行っている。

掘削方法であるが、表土及びHr-FPは重機による掘削除去を行い。それ以下のFAや黒色土包含層は人力による掘削を基準とした。無論各調査面の精査や掘削は人力によるものである。特に、Hr-FP下面の調査では、従来の当地域での事業団調査では、通常移植ゴテなどのHr-FP除去作業後、馬蹄痕の検出を目的とした、より詳細な除去方法として刷毛によるFP除去作業が行われてきた。しかしながら本遺跡の場合、刷毛は使用せず、移植ゴテと竹箆などによる除去作業に止めた。これは、Hr-FP直下面の新鮮な生活面をより当時のまま記録化するという、村教育委員会の調査指針を参考にしており、実際に刷毛によるHr-FP除去作業よりも多くの情報を得ることができた。

# Ⅱ　周辺の環境

## 1．地理的環境

吹屋銅屋遺跡が所在する浅川市吹屋は、東を利根川で、南西を吾妻川で画され、さらに北は子持山山麓斜面が控える。河岸段丘と山麓台地によって構成されている。視野を広げれば、当地域は榛名山・赤城山に挟まれ、利根川が流れ出す谷を跳め、関東平野を南に望む地点である。いわば関東平野の北西端に位置する扇の要に位置するといえよう。

本遺跡の周辺地域は、古墳時代の２度にわたる榛名山による火山災害を受けている。最初の噴火が６世紀初頭といわれる火砕流を伴う火山灰の降下で、２度目が６世紀中葉に起こった大規模な軽石降下による災害である。特に本遺跡や黒井峯遺跡は、この軽石降下の軸線上にあり、軽石災害により壊滅的な打撃を受けた地域内に位置すると言えよう（４図）。

さて、前述の利根川と吾妻川による河岸段丘は、当時からの段丘面として捉え得るものと考えられており、各段丘面における古墳時代当時の土地利用傾向も重要な研究視点として注意されている。ここで各段丘面の地形的な様相を確認しておく（３図）。

浅田面：利根川・吾妻川の最下位段丘面である。利根川・吾妻川との比高差は数mで、ローム層は形成されておらず沖積地が主体を占める。古墳時代の遺跡分布としては、浅田古墳や伊熊・有瀬古墳群などが知られており、墓域あるいは水田等の生産域と考えられる。

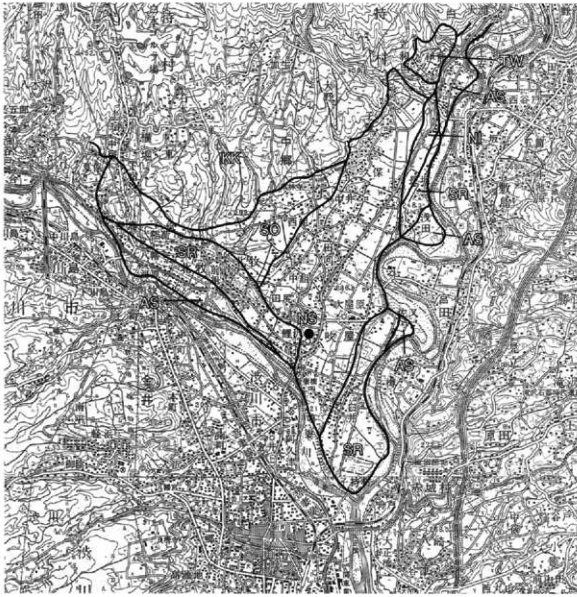
白井面：利根川・吾妻川に沿うように形成された、第２位の段丘面である。標高は約200m前後で、吾妻川沿いには段丘崖が見られ、洪積台地状の景観を見せる。事実これまでの発掘調査では、利根川右岸の白井地区で礫層上位に未発達なローム層が確認されており、台地的な様相をしめしている。一方吾妻川左岸側の発掘調査では、台地と埋没谷が調査されており、一部沖積地を含む様相を示す。これは、雙林寺面の境にある湧水点を中核とした小河川による低地形成によるものと考えられ、利根川右岸の白井地区とは対照的な様相を見せている。段丘面形状は北から南へ僅かな傾斜を見せるものの、ほぼ平坦面に近く、居住地として最適な様相であるが、古墳時代中葉に関しては、水田・畠・放牧地など生産域に供された例が主体を占める。後葉に至ってはFP上に群集墳などが見られる。

西伊熊面：利根川右岸の西伊熊周辺のみで見られる。白井面の上位に形成された小規模な段丘面で、段丘幅も150m程度でしかない。標高は230m前後で、ボーリング調査では上部ローム層が確認されており、段丘形成は２万２千年前と見られている。

立和田面：浅川市北部の立和田周辺の規模の小さい段丘である。詳細は不明である。

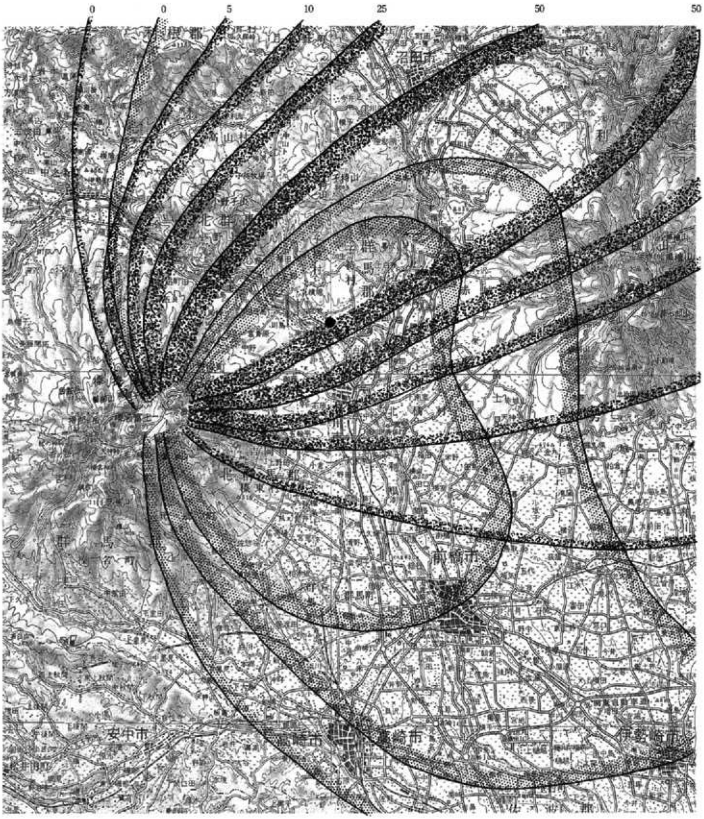
長坂面：南北に長く、また広く子持村の主要な部分を占める段丘面である。中部ローム層が確認されており、６～７万年前の形成といわれる。北から南へ緩やかな傾斜を示し、同様に段丘面の中央を鱒沢川が流れ、両岸に沖積地を形成する。また、湧水点も雙林寺面にかけて見られることから、台地と低地が群在する微地形が予想されよう。標高の高い台地遺跡、すなわち田尻遺跡や舘野遺跡などでは集落跡が、標高の低い台地遺跡中郷恵久保遺跡等では畠や放牧地が調査されている。また、鱒沢川が形成した低地帯では水田跡が確認されている。

雙林寺面：子持山南麓～東南麓に形成された段丘である。標高250m以上の最上位段丘とみてよく、子持村市街地を眺望する高さにある。長坂面と同様にローム層の発達が著しい面であり、中部ローム層が確認されている。北側に広がる子持火山扇状地の裾野と一体化した地形傾斜を示すが、南端あるいは東端に至ると、一際聳える段丘崖を形成する。換言すれば古墳時代中葉においても、眼下の生産域を望む高さであり、黒井峯遺跡や西組遺跡にみるように中核的な集落域が形成されていたものと考えられよう。無論、中ノ峯古墳や水田跡や畠跡の検出状況から、墓域・生産域としても供されていたようだ。




| | | | |
|---|---|---|---|
| 子持火山噴出物＝KK | 雙林寺面＝SO | 長坂方面＝NS | 立和田面＝TW |
| 西伊熊面＝NI | 白井面＝SR | 浅田面＝AS | |

3図　遺跡位置と子持村段丘分布図（S＝1：50,000）
（国土地理院5万分の1「中之条」「沼田」「前橋」「榛名山」使用）
（『子持村誌上巻』1987を参照）




4図　FAとFPの降下範囲（S＝1：200,000）

## 2．歴史的環境

子持村及びその周辺は、古墳時代に榛名山の２度の噴火による火山災害を受けた地域であり、そのため、遺構の遺存度が極めて良好であり、降下当時の瞬時の姿をとどめていると言って良い。特に降下軽石（FP）の堆積は厚く、降下軸線上にある調査遺跡では２m を誇る層厚を示している。（４図）このことは、FP降下後の攪乱が下層にまで及ばず、重複遺構を見ない状況で、FP直下の面－６世紀中葉の生活面を検出できる特性を持つ。またその下層に見られる降下火山灰（FA）直下面も古墳時代中葉の遺構がFA下に及ばない限り、当時－６世紀初頭の良好な生活痕跡を我々に提示する。前者－FP直下の集落跡として黒井峯遺跡、FA直下の例として渋川市中筋遺跡はあまりにも著名である。子持村とその周辺地域は、古墳時代集落・墳墓・生産跡研究に具体的なデータが包蔵されているのであり、極めて重要な地域である。ここでは、周辺地域の古墳時代遺跡の分布を概観してみよう。

**集落跡**

黒井峯遺跡（14）は子持村の上位段丘面である雙林寺面に位置する。FP直下の古墳時代集落遺跡として知られ、当時の集落内施設が複数単位として捉えられる集落跡である。発掘調査も数次に渡り行われ、その都度新しい視点の調査方法と新事実が提供されている。また、周辺にも同時期の集落跡が見られており、西組遺跡（12）・押出遺跡（13）・田尻遺跡（７）が知られる。集落内施設として、竪穴住居跡以外に平地式住居跡・生け垣・畠・水田・樹木跡・水場などが調査されており、総合的な集落様相の把握が可能な地域でもある。最近では、吹屋恵久保遺跡で、FP直下の竪穴住居跡が１軒ながら調査されており、新たなデータを加えることになった。これらの集落跡は鯉沢川流域・長坂面・雙林寺面に集中して確認されており、当時の居住中心地域が想定できよう。

古墳時代前葉の集落跡としては中郷恵久保遺跡（５）に北接する八幡神社遺跡（６）や赤城町樽舟戸遺跡（33）等が挙げられるが、FAとFPの堆積が厚く、調査例は少ない。

**生産跡**

生産跡も上記の段丘面上の埋没谷に水田が営まれており、また台地上には畠が検出されている。さらに下位段丘の白井面では、北牧相野田遺跡（16）や、北牧大境遺跡（１）、中郷恵久保遺跡、吹屋荒屋遺跡（２　本遺跡）、吹屋三角遺跡（４）、鯉沢瓜田遺跡・吹屋瓜田遺跡（21）などで水田跡が調査されている。いずれも良好な水田跡を検出しており、一地域の水田耕作様相の把握に欠かせない遺跡群であろう。さらに、これらの遺跡ではFA下水田跡も同時に検出されており、周辺地域では数少ないFA下遺構として位置付けられている。

**利根川白井面の様相**

一方、利根川流域の白井面では村教委、事業団で白井遺跡群など多くの発掘調査が行われているが（22）、FP下集落跡を検出した例は無い。畠跡・放牧地跡が主体であり、水田の検出も見られない。利根川に注ぐ小河川や現状の調査範囲で広範囲の埋没谷も見られないことから、水利上の理由を一義的に、水田開発あるいは集落設営が敬遠された地域と考えられよう。しかしながら、放牧地跡としての馬蹄痕跡の存在は、当時の家畜馬の管理形態を考える上で、多くの検証を経ているが、研究課題は蓄積しており、さらに考察を重ねなければならないだろう。

**墳墓**

白井面の下位段丘の浅田面では、浅田古墳群（26）が著名である。葺石、埴輪列を当時のまま確認できた例として、注目されている。さらに近接する有瀬古墳群（27）は積石塚を主体としており、これもFP下より当時の姿を顕存化した例で、調査を重ねる度に、新事実が明らかになる重要な遺跡である。その他では、黒井峯遺跡などに近接して中ノ峯古墳（19）が調査されている。

**祭祀跡**

黒井峯遺跡などFP下やFA下の集落跡では、祭祀

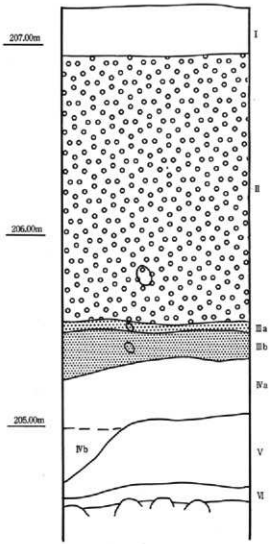
跡が恒常的に検出されるが、利根川対岸の赤城町深詰原Ⅰ・Ⅱ遺跡（28）では乳文鏡や鉄製品が豊富な土器類と白玉類と伴出しており、集落内の祭祀跡とは少なからず差が認められ、注目されよう。

## 3．基本土層

これまで述べてきたとおり、本遺跡のある渋川市北部は古墳時代後半の２度に渡る火山災害を受けた地域の一つである。火山性噴出物Hr-FA（火山灰）とHr-FP（軽石）直下面は、そのまま古墳時代後葉の地表面であり、発掘調査に際しては、多くの情報を提供する文化層である。また、この他にもFP上面では古代集落跡やローム上面では古墳時代前葉～中葉の集落跡及び弥生時代や縄文時代の遺構・遺物が検出されている。さらに、ローム中の旧石器時代の文化層も吹屋中原遺跡等で確実に存在する例が知られている。

本遺跡の調査では、各地区の基本柱状図は記録化してきたが、巨視的に各遺跡の基本土層を比較する必要性もある。模式図ではあるが、Ⅱ区土層柱状図を提示し、基本土層としたい。また、ローム層に相当する層位としては、黄褐色ローム質土を上層に堆積する基盤礫層がある。本文中や土層註内で記述したローム塊は厳密なローム層ではないが、この基盤礫層中の黄褐色土である。

Ⅱ区18号住付近土層




5図　基本土層図

Ⅰ　表土層
Ⅱ　Hr−FP（FP）層
Ⅲa　暗褐色土～黒褐色土　FAが土壌化した層
Ⅲb　Hr−FA（FA）層
Ⅳa　黒褐色～黒色土　粘性強い。縄文時代～古墳時代中葉の遺物包含層。地点によっては上層に淡色黒ボク土の堆積が見られる
Ⅳb　黒褐色～黒色土　住居跡埋土。
Ⅴ　黄褐色軟質土　ローム質で、堆積が厚い。地点によっては砂質で円礫を含む
Ⅵ　黄褐色基盤礫層　白井面上面である。大型の円礫を主体とする

6図　周辺遺跡分布図　1：25,000

第１表　主な周辺遺跡一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 遺跡の概要 |
|---|---|---|
| 1 | 北牧大境遺跡 | 事業団調査。FA・FP下水田。平安時代集落など |
| 2 | 吹屋梳屋遺跡 | 事業団調査。本遺跡。５c集落、FA・FP下水田・畠、平安時代集落など |
| 3 | 中郷田尻遺跡 | 事業団調査。弥生時代集落。FA下集落。FA上で確認された平地住居跡や瓦など |
| 4 | 吹屋三角遺跡 | 事業団調査。FA・FP下水田。北接地点を村教委調査。FP下古墳・水田 |
| 5 | 中郷恵久保遺跡 | ４c～５c集落、FA・FP下水田・畠跡等。南に庚申塚古墳（長尾村11号墳）がある |
| | （吹屋恵久保遺跡） | 村教委調査。中郷恵久保遺跡に北接する。FP直下の竪穴住居跡・垣・畠跡などが調査されている。長坂面におけるFP下集落跡の検出は極めて貴重である |
| 6 | 八幡神社遺跡 | 村教委調査。古墳時代前期集落・土壙墓、FP下集落・畠跡など |
| 7 | 田尻遺跡 | 村教委調査。弥生集落・墳墓。FP下集落・畠・道等、平安時代集落 |
| 8 | | 村№75。古墳時代と縄文時代の包蔵地とされる |
| 9 | 中組遺跡 | 村教委調査。FP下盛土跡（境界）・耕起面、平安時代集落 |
| 10 | 池田沢東遺跡 | 村教委調査。FP下道・畠・境界・耕起面を検出。花塚古墳（FP下古墳）を含む |
| 11 | 館野遺跡 | 1962年群大調査。FP下集落。村教委調査では畠跡 |
| 12 | 西組遺跡 | 村教委調査。FP下集落、黒井峯遺跡の周辺集落か？。平安時代集落 |
| 13 | 押出遺跡 | 村教委調査。弥生時代再葬墓・方形周溝墓、FP下集落、平安時代集落 |
| 14 | 黒井峯遺跡 | 村教委調査。国指定史跡。FP下集落としてあまりに著名。竪穴住居、平地建物・家畜小屋・道・水場・水田等が調査・確認されている。古墳時代後期の集落単位が把握でき、また住居の上屋構造等地上構造物を示唆する資料など情報量は多い |
| 15 | 丸子山遺跡 | 村教委調査。弥生時代～古墳時代方形周溝墓、FP上・FP下古墳。丸子山古墳等 |
| 16 | 北牧相野田遺跡 | 村教委調査。FA下・FP下水田。FP下水田面は耕起中を呈す |
| 17 | 畑中遺跡 | 村教委調査。FP下水田 |
| 18 | 後田遺跡 | FP下水田 |
| 19 | 中ノ峯古墳 | 1979年調査。県指定史跡。FP下古墳。袖無型横穴式石室を持つ円墳 |
| 20 | 吹屋中道遺跡 | 村教委調査。FP下水田・畠 |
| 21 | 鯉沢瓜田遺跡<br>（吹屋瓜田遺跡） | 村教委調査。事業団調査。FA下・FP下水田。FP下水田は耕起中を示す |
| 22 | 白井遺跡群<br>白井北中道・白井丸岩<br>白井南中道・流屋 | 白井北中道等の事業団調査ではFP下放牧地、平安時代集落、中世墓壙群等を調査。村教委調査ではFP下畠、放牧地、平安時代集落を見ている。白井古墳群は金比羅塚・加藤塚等は、FP上と目される。流屋遺跡はFA下集落の可能性がある |
| 23 | 源空寺裏遺跡 | 村教委調査。FP下放牧地跡・境界 |
| 24 | 吹屋中原遺跡 | 事業団調査。FP下畠・放牧地跡 |
| 25 | 吹屋犬子塚遺跡 | 事業団調査。FA下水田・FP下放牧地跡村調査では畠の痕跡を検出 |
| 26 | 浅田古墳群 | 村教委調査。FP下の円墳６基を調査。埴輪列・葺石の保存状態も極めて良好な当地域屈指の古墳。その他に道・境界・水田跡等を調査 |
| 27 | 宇津野・有瀬古墳群 | 村教委調査。FP下の群集墳調査例。積石塚で保存状態も極めて良い |
| 28 | 宮田諏訪原遺跡 | 赤城村教委調査。FA直下とFP直下から祭祀跡群を検出。変形孔文鏡と石製模造品・鉄製品・豊富な土器群等が伴出している |
| 29 | 宮田愛宕遺跡 | FP下祭祀跡。古墳時代集落内の樹木祭祀跡１基 |
| 30 | 宮田廟ノ木遺跡 | FP直下の竪穴住居跡１軒、祭祀跡３基、破砕土器集中遺構等を検出 |
| 31 | 宮田不動古墳 | ５世紀代のB種横ハケを持つ埴輪を出土する古墳 |
| 32 | 宮田畦畔遺跡 | 群大調査。FP下水田跡を調査している |
| 33 | 樽舟戸遺跡 | 古墳時代前期の集落跡（住居跡８軒・祭祀跡１基等）を調査している |
| 34 | 樽遺跡 | 弥生時代集落。樽式土器標識遺跡 |
| 35 | 田尻遺跡 | 弥生時代後期集落。鉄剣出土 |
| 36 | 東町古墳 | FA下古墳 |
| 37 | 坂下町古墳群 | FA下古墳群。1962群大調査 |
| 38 | 坂之下遺跡 | 市教委調査FA下水田、平安時代集落、坂之下館跡 |

# Ⅲ　検出された遺構と遺物

## 1．概要

吹屋祇屋遺跡では、4面にわたる文化層を調査した。前にも述べたように、榛名山二ッ岳を給源とする降下火山灰（FA）と軽石（FP）により、多層化した調査面が当地域の特徴である。

調査手順から、この複数文化層を概観してみよう。

当地域の発掘調査では、洪積台地とはいえ、表土下に厚くFPが堆積している。調査は、表土からFP上面まで掘削し、FP降下後の遺構の検出から始まる。奈良・平安時代の集落跡が目立つが、中世土壙や近世建物跡などもその調査対象である。本遺跡では、平安時代の住居跡をⅠ区では3軒、Ⅱ区では7軒、Ⅲ区で1軒を調査した。その他にⅡ・Ⅲ区に中世～近世に比定される土坑・溝・掘立柱建物跡が見られた。Ⅰ区でも近・現代の落ち込みは存在したが、記録化はしなかった。また、Ⅲ区で検出された井戸跡1基は五輪塔や宝篋印塔の各部位が井戸壁補強材として再利用されていた。

次に、FPを除去し古墳時代後半に比定される調査面を検出する。著名な子持村黒井峯遺跡は、FP直下面の集落跡である。本遺跡の西側には北牧大境遺跡があり、同時期の極小区画水田跡を広域に調査している。本遺跡ではⅠ区で放牧地跡と極小区画水田跡、Ⅱ区では畠放棄後の水田跡と放牧地が検出されている。いずれも当時の土地利用変遷を考えるに重要な資料を提供している。

さて、FP直下面の調査終了後は、即FA下調査ではなく、FA上面において精査を重ね、FP下遺構群の痕跡を探す。本遺跡では畠跡の耕作痕や複数回の畝替えが観察されている。また、未報告遺跡だが、中郷田尻遺跡では、FA上面でFP降下直前ではないにしても、数年前の平地住居跡や垣跡などの生活痕跡を調査している。

FAは、ほぼ10～30cm程の層厚で堆積している。比較的軟質土であるため、人力で掘削する例が望ましい。重機の掘削に頼ると、下面を圧力で痛める結果となる。本遺跡のFA下遺構としては、Ⅰ区で小区画水田跡、Ⅱ・Ⅲ区で道状遺構を見ることができた。その他には明瞭な遺構は見ることはできず、馬蹄痕が散布する状態のFA直下面であった。

FA下の黒色土・黒色粘質土は遺物包含層である。30cm以上の層厚で下位に淡色クロボク土を見る。その為、色調変化による遺構平面確認作業が難しく、ローム面以下に掘り込まないかぎり、判断材料は、遺物の分布と焼土炭化物の分布にとどまる。本遺跡では、詳細な精査を重ねて、31軒の竪穴住居跡を中心とする古墳時代中葉の集落跡を検出した。調査区の制約から、全貌を明らかにできた住居跡は＊軒と少なく、個々の様相を詳細に把握できないが、Hr-FP及びHr-FAによって覆われていた層序条件は良好な残存状態を示していた。大型住居跡の幾つかは、壁外の盛り土施設である「周提帯」の痕跡が残存しており、さらに住居跡本体も埋没化が完了せず、FP除去段階で大きく凹む景観を示し、その存在を明らかにしていた。県内ではこのような例は、子持村と周辺地域のみに限られ、集落遺跡の調査としては破格の好資料を得ることになった。さらに、燃焼施設である竈も東側に設置する「東竈」意外に西壁や南東壁に設けられる例も見られ、竈導入当初の多様な様相が把握できた。

出土遺物としては、土師器を中心に膨大な量を得ることが出来た。また、5世紀後半段階の須恵器も少量ながら出土しており、集落跡の性格の一端を窺わせる資料となった。

ローム上面である古墳時代前葉の調査面では、縄文時代や弥生時代の遺物も出土している。周辺に当該期の包蔵地が存在するものと予想される。

以上、吹屋祇屋遺跡の概要を各調査面を順次概観したが、本報告書では、この調査手順に沿って FP上面（古代～近世）、FP下面（古墳時代後葉）、FA下面、ローム上面といった、時代を遡る例で報告する。

## 2．Hr-FP上の遺構と遺物

吹屋荒屋遺跡におけるHr-FP上の遺構・遺物はⅢ区に集中する傾向を見せる。これは、西接する北牧大境遺跡Ⅰ区の遺構群の延長であり、中世～近世の屋敷・寺跡などの施設の存在が予想されよう。反面住居跡は、疎らながらもⅡ区・Ⅲ区に偏る。北牧大境遺跡Ⅲ区で得られた古代住居跡とは群を別にする集落跡と捉えられよう。

ここでは、住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・井戸跡を報告する。（7～10・46図／図版1）

**竪穴住居跡**

FP上面で調査された竪穴住居跡は11軒である。出土遺物からは、概ね9世紀代に時期が求められ、この傾向は、北牧大境遺跡及び中郷田尻遺跡と同様の時期幅である。竈は全て東壁に設けられ、床面がFPを抜く例は無かった。

1～3号住居跡がⅠ区東側でまとまり、4号住居跡と8～10号住居跡がⅡ区西側で群をなす。Ⅰ区では5・6号住居跡が重複し、7号住居跡と疎らながら一群と見ることができる。あるいは、Ⅱ区東の1～3住と同一集落の可能性もある。Ⅲ区34号住は近接する住居跡はなく、現状ではⅡ区4住・8～10住の一群の延長と考えるが、調査区南側の区域外に延びる別の一群が存在するのかもしれない。

**1号住居跡**（11図／図版2・26）

Ⅱ区東側で検出した。東南半を調査区域外に延ばし、西壁と南壁の一部は1号溝との重複のために逸失していた。また、床面中央に2号土坑が大きく重なっている。

平面形は軸長約3.2m前後の方形と思われる。全体に浅い印象で、壁の立ち上がりも緩やかである。深さは約15cm前後を測り、1号溝・2号坑との重複と併せて遺存度は不良といえよう。

床面はほぼ平坦ながら南西側へやや凹む。黒褐色土による貼床がなされるが、明瞭な硬化面は見られなかった。

竈は見られなかった。おそらく調査区域外に延びるものと考えられる。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は羽釜（2・3）が床直より出土している。

**2号住居跡**（12図／図版2）

Ⅱ区南東隅で検出した。1号溝で大きく壊され、24号土坑など近世～近代の土坑と重複するため、全容や詳細は把握できなかった。明瞭に検出し得たのは西側壁のみで、南北壁や竈は、床面の範囲と僅かな色調差、少量の焼土範囲から類推した。特に竈に関しては、位置と範囲を記録したのみで、詳細な記録は果たし得なかった。

平面形は軸長約2.8m程の方形と思われ、南西隅を調査区域外に延ばす。西壁はやや残存状態が良く、深さ約25cmを測り、しっかりした立ち上がりを検出し得た。

貼床は判然とせず、FP面を地床としているようだ。柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

竈は東壁やや南寄りに少量の焼土範囲と炭化物の散布箇所を推定したが規模等詳細は不明である。

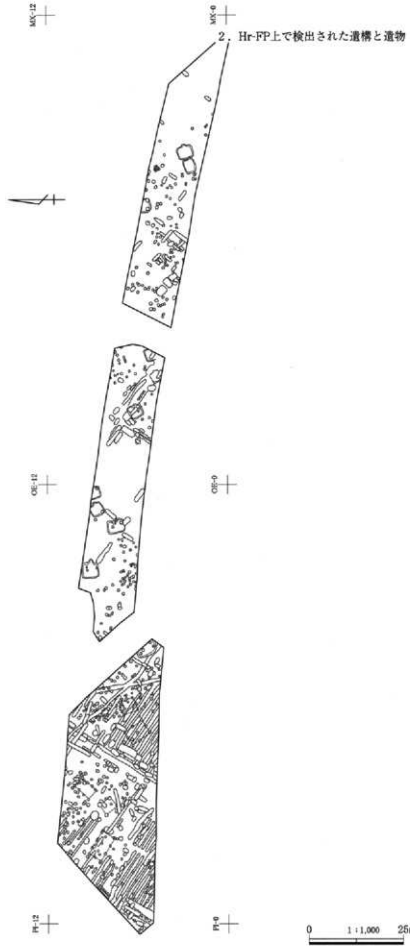
遺物は埴土中より、土師器細片の出土を見るが、図化に至らなかった。

**3号住居跡**（13・14図／図版2・26）

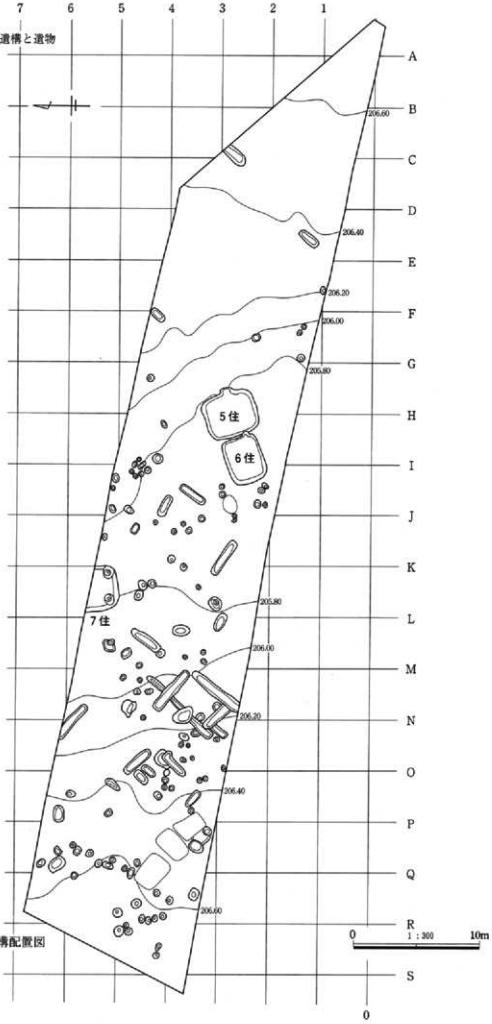
Ⅱ区中央やや東側で調査した。周辺遺構の密度が高く、重複遺構は多い。1号溝が浅く東上面を走り、14号土坑が床面中央で重なる。また、現代の撹乱坑が西壁を大きく壊している。

重複遺構が密集しているが、住居跡本体の遺存度は良好である。軸長約3.5m前後の不整正方形の平面形で、深さは約40cmを測る。西壁以外の壁は、しっかりとした立ち上がりで、明瞭な平面形を示していた。

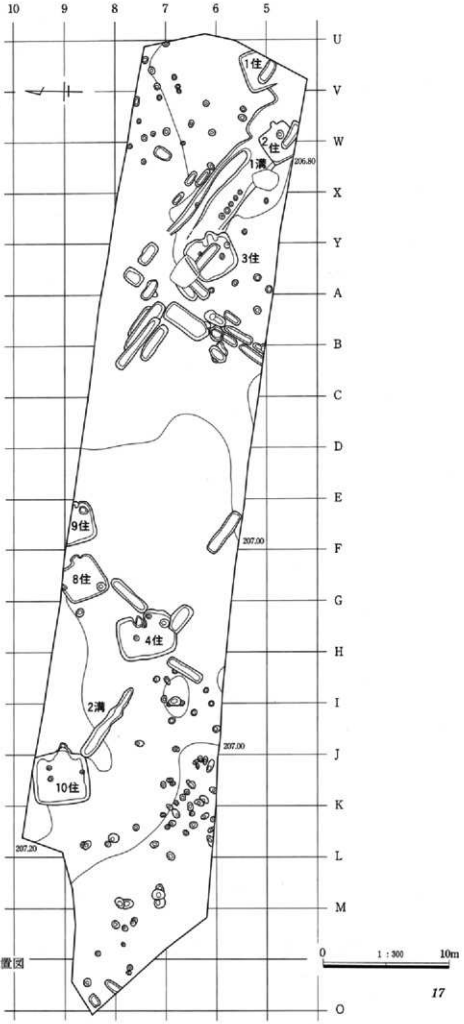
床面は、ほぼ平坦面を築き、黒褐色土を貼床土としていた。硬化面も全体に確認され、特に中央部分に顕著に見られた。



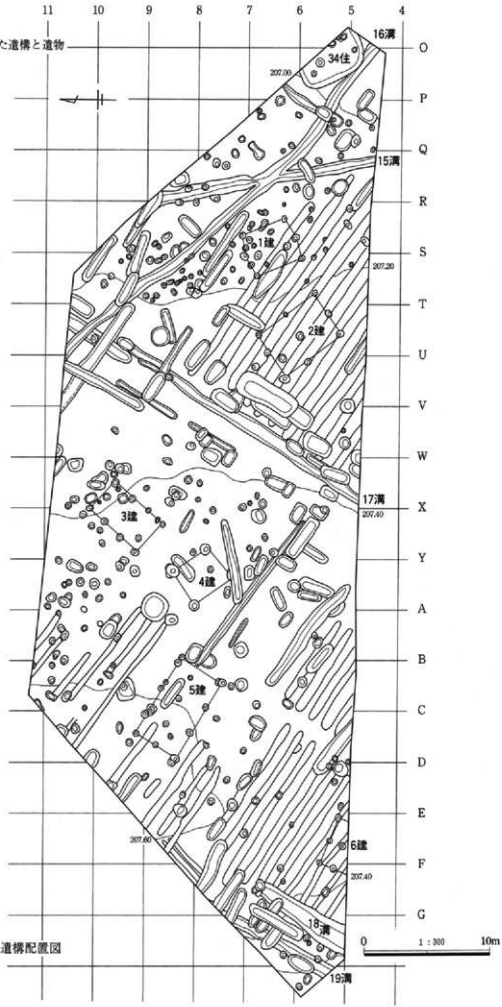

7図　FP上面全体図




8図　I区FP上面遺構配置図




9図　Ⅱ区FP上面遺構配置図




10図　Ⅲ区FP上面遺構配置図

竈は東壁南寄りの南東隅にかけて確認した。軸を住居主軸方位と違え、やや東に傾く状態で設けられ、袖部分に自然石を立たせる明瞭な例である。燃焼部も強く焼土化していた。

柱穴はP1・P3の2基を充てたい。いずれも深さ20cm前後の浅い小穴だが、配置から柱穴と判断した。貯蔵穴はP2を充てる。径約50cm程の土坑で暗褐色土を埋土とする。これも配置から貯蔵穴として判断した。

遺物は鉄製品・鉄滓の出土が目立つ。埋土中よりの出土だが、本住居跡に伴うものと考えられ、住居跡の性格などに参考になる例である。その他では、羽釜（6）と砥石（14）が竈より、灰釉陶器皿（1）が埋土下位より出土している。

**4号住居跡**（15～17図／図版2・26・27）

Ⅱ区中央や西寄りで調査された。23号土坑が南壁を壊し、25号土坑が東壁竈に接する。

平面形は、東壁南半から南壁にかけて大きく湾曲する形態を見せる不整横長長方形を呈す。規模は約3.8×4.7mを測る。深さは40cmを超える良好な遺存度を示し、各壁もしっかりした立ち上がりだった。

床面は暗褐色土を貼床とした平坦面を築く。硬化面は竈から中央部にかけて顕著だった。

竈は東壁中央やや西寄りに設けられ、袖材及び補強材として自然石を多用する例である。燃焼部は僅かに凹み、黒色灰・焼土粒が極薄く堆積していたが、構築材崩落土である焼土塊が奥壁にかけて厚く堆積していた。

柱穴はP1・P2を充てたい。P2は配置上貯蔵穴としての可能性もあるが、径40cm程度の規模から柱穴と判断した。一方、貯蔵穴も規模からP3を考えた。南東すみやや南寄りに設けられる径60cm程の土坑である。

出土遺物は多く24点を図示した。特筆すべきは鉄製品刀子（14）・紡錘車（15）が竈内及び竈周辺より出土している。大型の磨石類（22～24）との関連も興味深い。甕類（13）や羽釜（8・9・10）は貯蔵穴周辺及び竈周辺に集中する、また耳皿（4）が竈北床直で出土している。

**5号住居跡**（18・19図／図版2・27）

Ⅰ区中央で検出した。緩やかな凹地の底面付近で確認され、西に僅かながら6号住居跡竈が重複する。他に重複・近接する遺構・攪乱は無く、良好な遺存度といえよう。

平面形は比較的整った横長長方形を呈し、約3.7×4.2mを測る。深さは約50cm程で、各壁とも緩やかな傾斜ながら、掘り込みはしっかりとしていた。

床面は壁周辺が僅かに凹むが、ほぼ平坦面が意識されていた。貼床は純褐色土で構成され、床面中央部分に硬化面が確認できた。

竈は東壁中央に設けられ、袖等の構築材に自然石が使用される例である。ただし、袖心材の1対の自然石以外は、原位置を移動している物と捉えられ、住居放棄後の竈破壊が行われたものと捉えられた。袖石自体も1回は抜き取られた痕跡を見せており、安定的な様相ではない。また、燃焼部中央に支脚抜き取り坑が看取された。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

出土遺物は多く、土師器・須恵器破片が埋土中より出土したが、殆どが上層出土であり、床直出土の例は無い。僅かに西壁寄りに坏（4）・甕（12）が埋土下位より出土している。

**6号住居跡**（20・21図／図版2・28）

Ⅰ区中央で5号住居跡と重複して調査された。新旧は竈の重複から本6号住が新しい。

平面形は主軸を長軸にする縦長長方形で、約3.6×3.0mの規模である。深さは約50cmを超え、5号住以外に重複遺構は無く、極めて良好な遺存状態といえよう。

床面は僅かな凹凸があるものの、ほぼ平坦面を築き、赤褐色ローム質土を貼床土としていた。硬化面は竈周辺に集中するが、床面中央にも点在していた。

竈は東壁南寄り、東南隅に設けられている。煙道は突出し5号住西壁に重なる。袖材及び奥壁上位に自然石が補強され、特に袖芯材は左右に列状に対応していた。その他に羽釜の破片が南袖上位で出土しているが、これも補強材の一部と捉えることができよう。燃焼部は掘り込みを持たず、焼土・炭化物を厚く堆積する。構築材崩壊による焼土堆積である。

柱穴・貯蔵穴は検出できなかった。

遺物は比較的量が多く11点を図示した。竈内から坏（4）・椀（6）を見るが北西隅埋土下位より完形の坏（3）が出土する。また、羽口（1）も竈南より出土している。

**7号住居跡**（22図／図版2・28）

Ⅰ区中央北の調査区北壁にかかり検出された。北半を区域外に延ばす。重複遺構はない。

平面形はおそらく不整方形で軸長約3.5m前後の規模と思われる。深さは確認面からも50cmを超え、良好な遺存といえよう。

床面は壁際が僅かに凹むが、ほぼ平坦で、褐色ローム質土を貼床としていた。貼床の範囲はやや狭く中央部分に偏る傾向がある。硬化面は顕著には見られなかった。

竈はおそらく調査区域外であろう。

柱穴は南東隅と南西隅のP1・P2を充てたい。径80～95cmを測る大型のもので、貯蔵穴の可能性もあるが、配置上の視点から柱穴と判断した。

遺物量は少なく、埋土中より出土した坏底部破片（1）を図示したのみである。

**8号住居跡**（23図／図版2・28）

Ⅱ区中央北の調査区北壁にかかり検出した。北西隅を調査区域外に延ばす。重複遺構は無いが、東側に9号住が近接する。

平面形は著しい不整方形を呈す。これは南壁辺長と北壁辺長の差が平面形の歪みに反映されたものである。規模は主軸長で3.3×3.4で深さは約25cmを測る。遺存度はやや良好といえよう。壁はやや緩やかな立ち上がりだが、掘り込みはしっかりしていた。

床面は平坦面が意識されながらも、若干北側へ傾く。貼床は暗褐色ローム質土が充てられるが、範囲は狭く床面中央に限られていた。硬化面は貼床範囲に沿って中央部に見ることができた。また、中央部から西壁にかけて炭化材が出土している。焼失家屋としての位置付けが想定されるが、小鍛冶・製鉄関連の所産としても捉えておく必要があろう。

竈は東壁南寄りに設けられている。方形状の燃焼部を突出させ、僅かながらの焼土粒が散布していた。燃焼部と周辺には須恵器甕体部破片や自然石が出土しており、あるいは構築材の一部と捉えられた。さらに大型のFPも同様な散布を見せていたが、構築材としての妥当性は検討しなければならない。

柱穴は北壁際に検出したP1を考えたが、配置・規模とも可能性は薄い。貯蔵穴は南西隅のP2を充てたい。床面より40cmと深く、規模・配置とも良好である。

遺物は比較的多く出土したが、鉄製品（6～9）が床面北東部の床直上にまとまって出土した例が特筆される。椀（3）は中央やや南東よりの床直より、甕（5）は竈内と床直破片が接合する。羽釜（4）は南壁よりの床直上で出土している。

**9号住居跡**（24図／図版3・28）

Ⅱ区中央北の調査区北壁にかかり検出した。竈の大半と住居跡北側半分を区域外に延ばす。西に8号住が近接する。

平面形は、南東隅の湾曲が大きいため、不整方形と判断したが、他の壁は整っており、主軸長約3.4mの方形と思われる。深さは約40cmほどで重複遺構も無く、良好な遺存度といえよう。

床面はほぼ平坦面を築き、暗褐色ローム質土を貼床土としていた。貼床は床面東半分に偏る傾向で、硬化面は貼床面全面に見られた

竈は東壁に設けられる。構築材である粘質土が集中しており、煙道・袖の詳細な分別が果たせなかった。調査区域外と併せて把握されるものである。

柱穴は検出できなかった。貯蔵穴は東南隅に開くP1が妥当である。周辺には、竈の構築材と思われる自然石が散乱していた。

出土遺物は極めて少なく、埋土中より出土の坏（1）と甕底部破片（2）を図示し得たのみである。

**10号住居跡**（25・26図／図版3・28）

Ⅱ区西側の調査区北壁際で調査した。北東隅を調査区域外に延ばすが、全容はほぼ把握できた。南東隅に2号溝が近接するが、重複遺構はなく単独の検出となった。

平面形は主軸に長軸を持つ4.3×4.1m程の整った方形を呈す。各四辺の壁立ち上がりもしっかりしており、深さも60cmを超え良好な遺存状態といえよう。

床面は平坦面を築く。貼床土は赤褐色ローム質土が充てられ、竈から中央部にかけ広く分布していた。硬化面も貼床に沿う様相で確認できた。

竈は東壁ほぼ中央に設けられる。煙道が突出する長軸長70cm、短軸長は40cm前後の大型の竈で、袖材など顕著な構築物は無かったが、両壁の湾曲が大きく、大規模な竈が想定できよう。燃焼部は広く、焼土・炭化物・白色灰が検出できた。焼土化した構築材崩壊土も厚く堆積していた。

柱穴はP1～P3を充てたい。3基とも住居軸からは外れる。配置・規模から判断した。

遺物は住居規模・遺存度の割には少なく、3点を図示し得たのみである。1の坏は東南隅の床直上から、甕（3）はP3直上より出土している。

尚、本住居跡埋土中にFP塊状堆積を確認した。住居埋没過程で、何等かのFP一括廃棄が行われたのか、注意したい土層である。

**34号住居跡**（27図／図版3・29）

Ⅲ区調査区北東隅で調査した。住居跡北半が現道下に延びるため、全容は把握できない。周辺は中世遺構群が多く分布し、16号溝が本住居跡南東隅に重なるが、浅く大きな撹乱には至っていない。

平面形は軸長13mを超える大型の方形を呈すると思われるが、竈位置を類推するに、横長長方形プランが想定できる。深さも90cm以上を測り、良好な遺存状態である。

床面はほぼ平坦で赤褐色ローム質土を貼床としていた。硬化面は中央部にかけて顕著に見られた。

竈の全容は把握できなかったが、調査区壁にかかり構築材の粘質土や焼土が集中して検出され、袖材のまとまりとして把握できた。おそらく竈燃焼部の端部と捉えられるが、出土遺物や構築材自然石の出土が見られず確定的ではない。

柱穴はP2・P3を充てたい。規模・配置からも妥当性が高い。貯蔵穴はP1に可能性を求めたいが、若干規模が小さく、配置上の妥当性から判断した。尚、P3は床下土坑である。

出土遺物は多く14点を図示した。埋土中の出土が殆どであり、床直遺物としては甕（12）、床下遺物では須恵器皿（4）が挙げられる。

**掘立柱建物跡**

FP上面で検出された掘立柱建物跡は全てⅢ区に集中する。これは、前述のように北牧大境遺跡Ⅰ区の延長であり、屋敷跡に近い施設群の存在であり、中世（古代）～近世における当地の重要な居住区あるいは宗教的施設の存在を示唆する。残念ながら掘立柱建物跡に伴う出土遺物は無く、重複関係も時期を決定するには有効な例が無いため、掘立柱建物跡の時期を特定できないが、今後の検証を重ねて、本遺跡Ⅲ区を中心とする台地一帯を該期の屋敷施設群として位置付けなければならないだろう。

**1号掘立柱建物跡**（28図／図版－）

Ⅲ区東側で確認した。周辺は中世～近世の土坑・ピット群、15号溝や16号溝等が群在し、その中の規則性ある小ピットを抽出し、掘立柱建物跡として位置付けた。調査当初は、P1～P4の4本柱による建物跡と想定したが、後の整理作業により、P5・P6を加え、棟持ち柱を付帯する4本柱穴による1間×1間の建物跡と考えた。

長軸方向を北北西に向き、長軸長約3.8m、短軸長3.4mの小規模な長方形を画す。棟持ち柱としたP5～P6間は4.2mを測る。

柱穴規模はP1～P4は概ね径40～50cm、深さ26～35cmと小ピットで構成される。P5・P6はやや大きく、径60cm前後で深さも35～45cmである。

周辺に出土遺物・焼土などは確認されなかった。

**2号掘立柱建物跡**（28図／図版－）

Ⅲ区中央やや東寄りに近世～近代のサク状溝群の中で検出した。周辺にはピットは群在せず、比較的容易な検出だった。柱穴は9基からなり、長軸方位を北西に向ける2×2間の総柱の建物跡である。

規模は約5.5×3.8mで比較的大型の長方形を平面形とする。全体感は整った長方形だが、柱穴間距離はやや差が見られ、P1～P2間がやや長く、P1～P4間がやや短い。上屋あるいは間取りの影響であろうか。P7～P9間、P3～P9間はほぼ等間隔の柱穴配置といえよう。

柱穴規模はP1が径80cmを超え大型だが、あるいは2基相当の重複とも捉えられる。その他は径35～60cm、深さは25～62cmを測る。ほぼ同規模の柱穴で構成される。

遺物・焼土の検出は果たし得なかったが、おそらく時期は古代～中世に比定されるものと思われる。

**3号掘立柱建物跡**（29図／図版3）

Ⅲ区中央やや北西寄りで検出した。周辺には同様の小ピットや土坑が群在しており、ピットの配列から本建物跡を抽出した。

8基の小ピットからなる1×3間の縦長長方形を平面形とする建物跡で、長軸方位は北東を向く。規模は約4.9×2.9mで整った形状である。

柱穴間距離も1.5～1.8mでほぼ等間隔に並ぶ。柱穴規模は径45～60m、深さ25～50m程でほぼ同規模の柱穴で構成されるといえよう。

出土遺物・焼土等を検出し得なかったが、北牧大境遺跡に至近距離にあることを重視すると中世～近世の所産と捉えたい。

**4号掘立柱建物跡**（29図／図版3）

Ⅲ区中央やや西よりで調査した。周辺を93号土坑など近世～近代遺構が群在する中での検出だったが、本掘立柱建物跡を構成する柱穴は大型であり、他のピット・土坑との分別が容易であった。

方位軸を北北東に向ける、4基のピットからなる1×1間の建物跡である。規模は3.3×3.1mで不整方形を呈する。規模は、P1～P3間とP1～P2間の計測値で、P4が若干配置がずれているため、全体親が歪む原因となっている。このP4は93号坑と重複しており、同時に配置上の問題から、建物跡を構成する柱穴としての位置付けに疑問が残る。しかしながら、他に同規模のピットが存在せず、若干の歪みが生じるが、掘立柱建物跡の柱穴として判断した。

柱穴の規模はP1が長軸長1.2mと大型であるがこれは重複ピットの存在のためであろう。P2やP3が示す径80cm、深さ50cm程の大型柱穴からなる掘立柱建物跡である。

出土遺物や焼土等、その他の施設は確認できなかった。

**5号掘立柱建物跡**（30図／図版－）

Ⅲ区西側で検出した。周辺は溝状土坑や小ピットが分布し、抽出に手間取ったが、ピット配置を重視して、本建物跡を判断した。周辺のその他のピットの幾つかは同一軸上に乗り、あるいは付帯設備や他の建物跡の存在が予想されたが、これは抽出できなかった。

長軸方位を北西に向ける2×3間の大型の掘立柱建物跡である。規模は6.9×3.8mで縦長長方形を呈する。比較的整った平面形を印象とするが、各柱穴の幾つかは重複あるいは近接する2基のピットからなる。おそらく建て替えの痕跡と思われるが、新旧の把握にまでは至らなかった。また、建物跡内部に東西に3基のピット列が並ぶ。若干軸をずらすが、

本建物跡に帰属する柱穴として位置付けた。ただ、確定的ではなく他の掘立柱建物跡を構成する柱穴列としての可能性もあり、検討を要する。

焼土・遺物の検出は無かった。時期は特定できないが、平面形が縦長長方形であること、北牧大境遺跡Ⅱ区中～近世遺構群に至近距離にあることから、3号掘立柱建物跡と同様に関連性が窺えよう。

**6号掘立柱建物跡**（30図／図版－）

Ⅲ区西南隅の調査区南壁にかかって検出した。南辺を調査区域外に延ばすため、全容は把握できない。おそらく2×2間以上の方形を呈する建物跡であろう。

柱穴規模も径40～55cmでほぼ同規模で、柱穴間距離もP2～P4、P4～P5は共に1.9mを測り統一性も窺える。

遺物・焼土の検出は果たせなかった。

時期も不明であるが、5号掘立柱建物跡と同様に中世～近世に可能性を求めておきたい。

**土坑・溝**（31～40図／図版29）

本遺跡におけるFP上面の遺構はⅡ区・Ⅲ区に集中し、特にⅢ区の遺構群が顕著である。これまで、平安時代の竪穴住居跡と古代～近世の掘立柱建物跡の概略を述べてきたが、同時に調査された土坑・溝に関しては、各調査区の概要を述べ、個別の詳細な説明は省く。各遺構の計測値等は巻末の遺構計測表を参照して頂きたい。

Ⅰ区：5～7号住居跡が占地する中央の凹地を挟んで、東側の台地部分は極めて遺構が少ない。この傾向は、東接する中郷田尻遺跡Ⅳ区にまで続き、FP上面に関しては遺構密度の稀少な地点といえよう。Ⅰ区西側は長方形土坑などが散在する。おそらく近世～近代の所産と捉えられたが、極めて新しい現代の土坑も混じり、分別がつかなかった。

Ⅱ区：東側には1～3号住居跡が占地するが、2条に分岐する1号溝や2号土坑等が群在する。特に1号溝aの底面には浅い小ピットが列をなす箇所もあり、幅広の底面と併せて、近世段階の道状遺構の可能性も示唆される。3号住西には1号土坑、3号～14号土坑、33号・34号土坑が集まる。長方形土坑や楕円形状の土坑は軸を同一にし北東あるいは直交するように北西を向き、多重複土坑による区画を窺わせる。おそらくⅡ区東側はⅠ区西側の土坑群と同一のグループと捉えられよう。

Ⅱ区西は4号住居跡等があるが、23号土坑や25号土坑など長方形土坑や2号溝が疎らに分布する。西端には19～22号土坑など円形土坑や小ピットが集中していたが、掘立柱建物跡としても抽出し得ず、ピット・円形土坑群と判断した。

Ⅲ区も東側と西側で17号溝を挟んで遺構の集中が偏る。東側には、34号住居跡と1・2号掘立柱建物跡があるが、15号溝と16号溝が交わる。この2つの溝周辺を40～47号土坑、51～53号土坑、62～65号土坑等が群在するが、多重複による区画行為ではなく、独立した意識の元の土坑設置と捉えられよう。一方、17号溝周辺は長方形土坑である54～61号土坑、67～81号土坑、84～91号土坑等が重複するように集中する。Ⅱ区3～14号土坑等見た多重複土坑による区画意識の反映と捉えられる。

Ⅲ区西側は北牧大境遺跡Ⅰ区に東接する。3号～6号掘立柱建物跡の他に1号井戸跡が見られる。その中で87号土坑とその周辺の重複土坑群が17号溝と直交する方位軸を示しており、区画意識の延長と捉えられることができる。この延長の西端に4号掘立柱建物跡が占地する様相は注意を要したい。

また、Ⅲ区南西隅も土坑群が群在する。平行する18・19号溝と軸を交えて118～127号土坑が重複する。多重複区画の一端であろうか。また、18・19号土坑も平行する走向から、道状遺構の可能性がある。

**1号井戸跡**（41～45図／図版3・29～31）

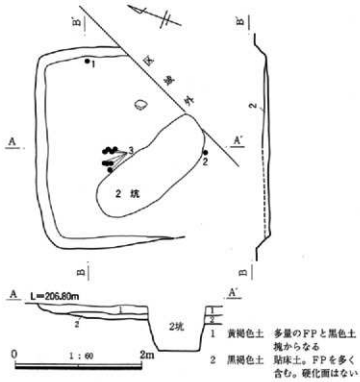
Ⅲ区中央西寄りで調査した井戸跡である。本遺跡の調査では、井戸跡はこの1基であり、単独の占地といえよう。隣接する北牧大境遺跡Ⅰ区では2基の井戸跡が調査されているが、関連性は窺えない。

4号掘立柱建物跡の北西に近接しており、小ピットや近代サク状溝が重複する。

平面形はFP上面においては五角形を呈する。規模は径2m前後で深さは2.1mを測る。下層の黒色粘質土を抜きローム層上層にまで達しているが、調査中の湧水は無かった。

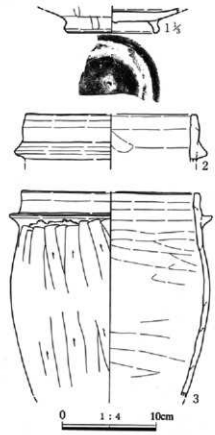
当地域の井戸跡の多くが、当然のようにFP層を掘り抜いているため、壁体であるFPの崩落を防ぐため、何等かの補強がなされている。その殆どの補強材が自然石による乱石積みであるが、本遺跡1号井戸跡の場合は、自然石積みに混在して、五輪塔などの石製品が意図的に積まれた様相である。使用されている部材は、五輪塔空風輪・火輪・水輪、宝篋印塔相輪塔・笠が多く見られた。その他には石臼や茶臼破片も混じるが、墓・宗教的施設の一つである石塔の一部が井戸壁体補強に転用された様相は、特異な印象を受けた。北牧大境遺跡1区では、墓壙などが検出され、墓域の一部と目されているが、本遺跡1号井戸跡の石塔の在り方は、墓域放棄後の五輪塔や宝篋印塔の廃棄行為が想起されよう。出土した石塔はおそらく中世後半の所産と思われ、本井戸跡は、その後の設営と考えられる。

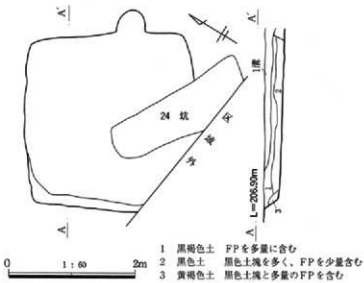
1号井戸壁面補強状況



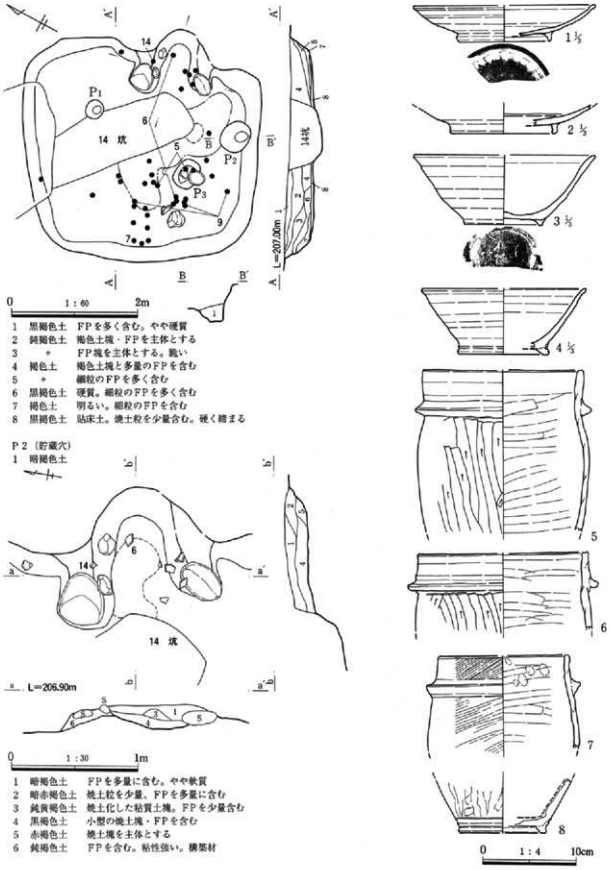

11図　1号住居跡床面・出土遺物

2．Hr-FP上で検出された遺構と遺物

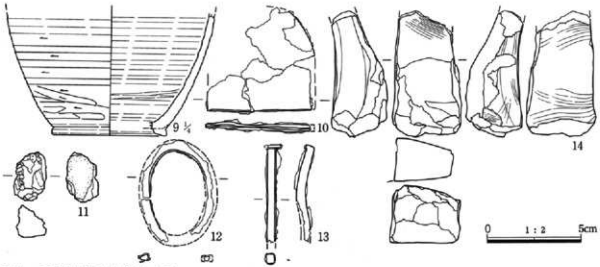


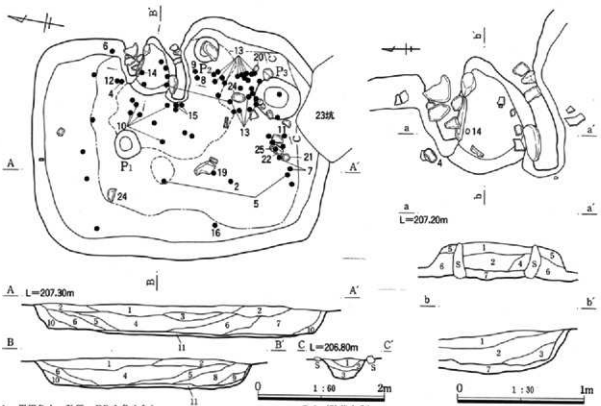

12図　2号住居跡床面




13図　3号住居跡床面・竈・出土遺物（1）




14図　3号住居跡出土遺物（2）

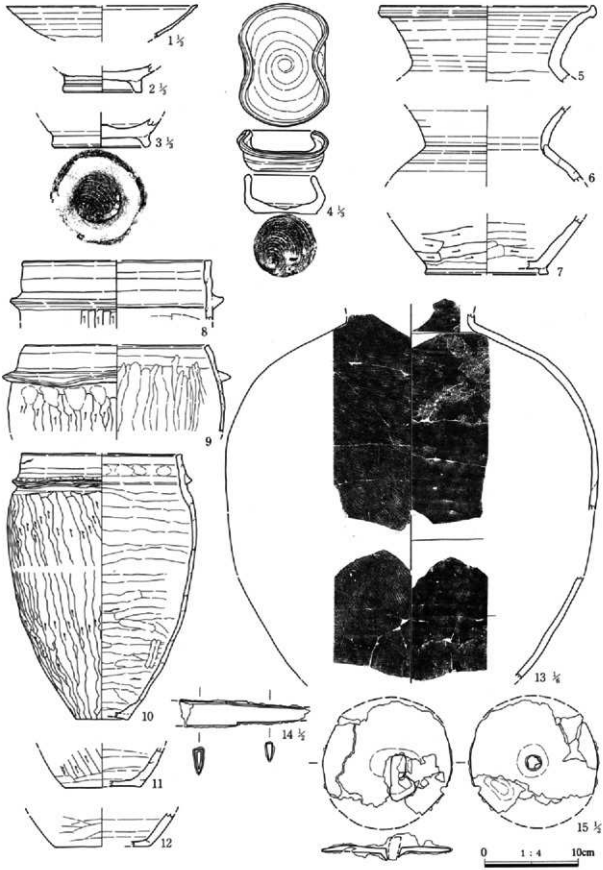



1　黒褐色土　軟質。FPを多く含む
2　暗褐色土　やや暗い。大型のFPを含む
3　褐色土　やや硬質。小型のFPを多く含む
4　暗褐色土　硬質。大型のFP・炭化物を含む
5　〃　やや軟質で明るい。FP・炭化物を含む
6　〃　軟質で明るい。大型のFPを多く含む
7　褐色土　軟質。小型のFPを多く含む
8　黒褐色土　FPを多く含む。焼土粒も見られる。竈埋土
9　〃　大型の焼土塊を含む。竈埋土
10　暗褐色土　FPの塊状堆積が見られる。少量の焼土粒を含む
11　〃　貼床土。小型のFP・礫を含む。硬く締まる

P3（貯蔵穴？）
1　暗褐色土　小型のFPを少量含む
2　褐色土　軟質。大型のFPを多く含む
3　黄褐色土　軟質。FPを主体とする

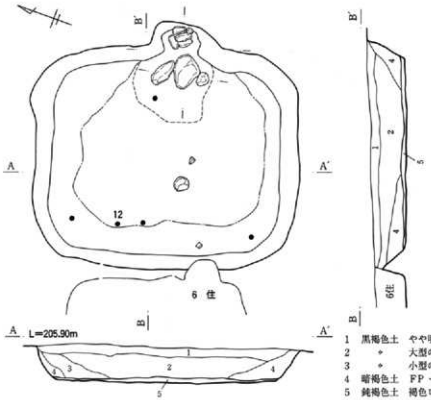
カマド
1　黒褐色土　FPを多く、炭化物を少量含む
2　〃　多量のFP、焼土粒を少量含む
3　〃　大型の焼土塊・FPを多く含む
4　暗褐色土　やや硬質。焼土塊を含む
5　黒褐色土　硬質で明るい。FPを多く含む
6　暗褐色土　FP・焼土粒を少量含む
7　黒褐色土　軟質。焼土塊・炭化物を含む

15図　4号住居跡床面・竈

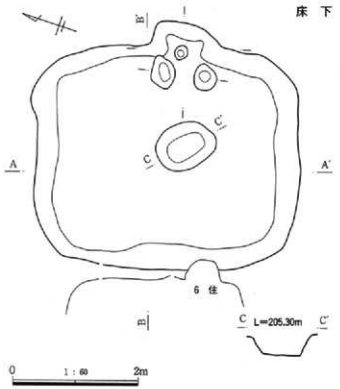



16図　4号住居跡出土遺物（1）

17図　4号住居跡出土遺物（2）




1　黒褐色土　やや明るい。大型のFPを含む
2　〃　大型のFPを多く含む
3　〃　小型のFP・炭化物を少量含む
4　暗褐色土　FP・炭化物・褐色土塊を含む
5　純褐色土　褐色ローム質土による貼床土

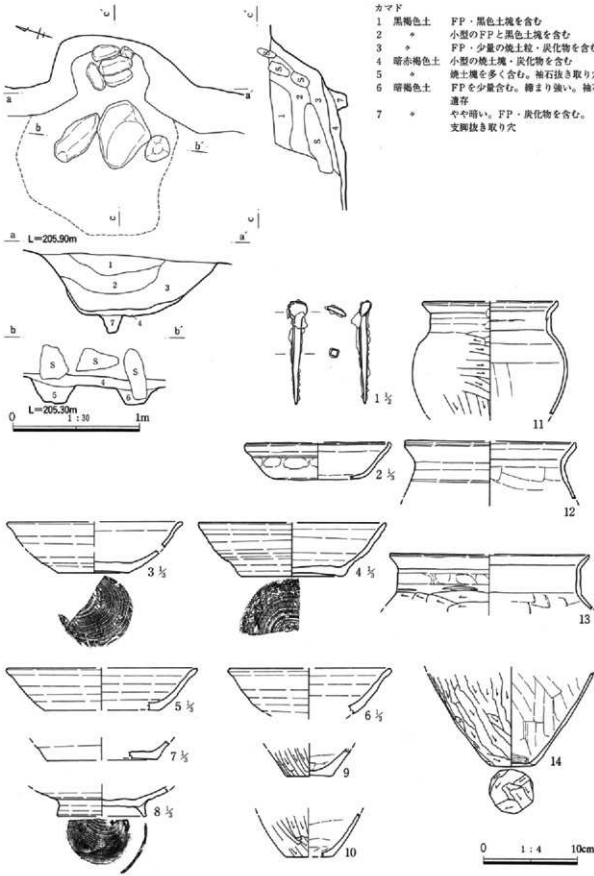



18図　5号住居跡床面・床下

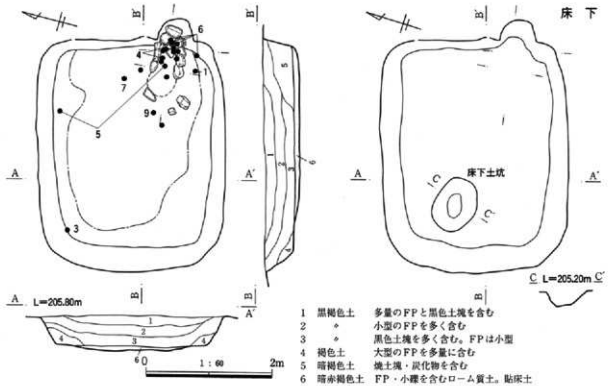
## 2．Hr-FP上で検出された遺構と遺物

カマド

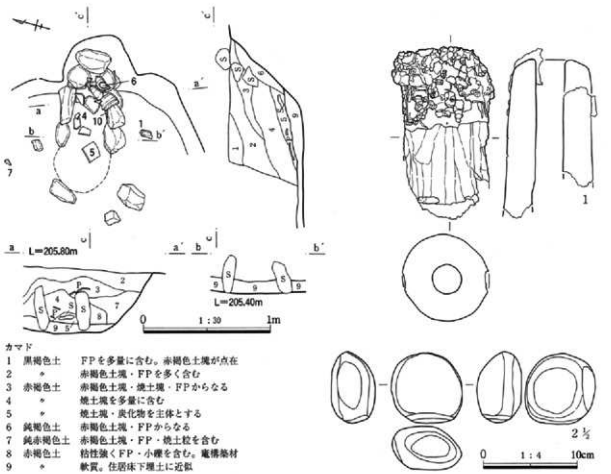
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | FP・黒色土塊を含む |
| 2 | 〃 | 小型のFPと黒色土塊を含む |
| 3 | 〃 | FP・少量の焼土粒・炭化物を含む |
| 4 | 暗赤褐色土 | 小型の焼土塊・炭化物を含む |
| 5 | 〃 | 焼土塊を多く含む。袖石抜き取り穴 |
| 6 | 暗褐色土 | FPを少量含む。締まり強い。袖石遺存 |
| 7 | 〃 | やや暗い。FP・炭化物を含む。支脚抜き取り穴 |




19図　5号住居跡竈・出土遺物

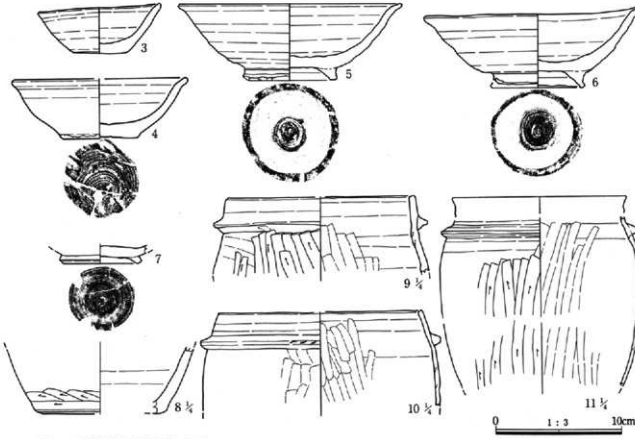



1　黒褐色土　多量のFPと黒色土塊を含む
2　〃　小型のFPを多く含む
3　〃　黒色土塊を多く含む。FPは小型
4　褐色土　大型のFPを多量に含む
5　暗褐色土　焼土塊・炭化物を含む
6　暗赤褐色土　FP・小礫を含むローム質土。貼床土

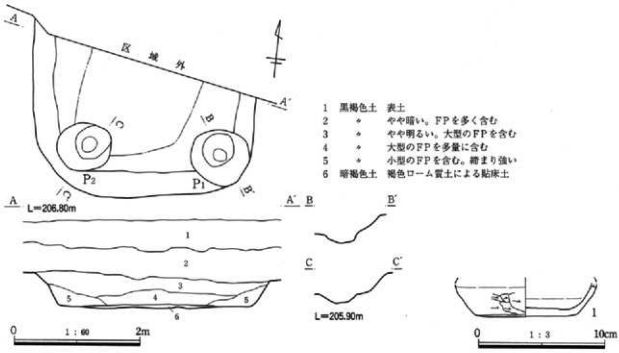



カマド
1　黒褐色土　FPを多量に含む。赤褐色土塊が点在
2　〃　赤褐色土塊・FPを多く含む
3　赤褐色土　赤褐色土塊・焼土塊・FPからなる
4　〃　焼土塊を多量に含む
5　〃　焼土塊・炭化物を主体とする
6　鈍褐色土　赤褐色土塊・FPからなる
7　鈍赤褐色土　赤褐色土塊・FP・焼土粒を含む
8　赤褐色土　粘性強くFP・小礫を含む。竈構築材
9　〃　軟質。住居床下埋土に近似

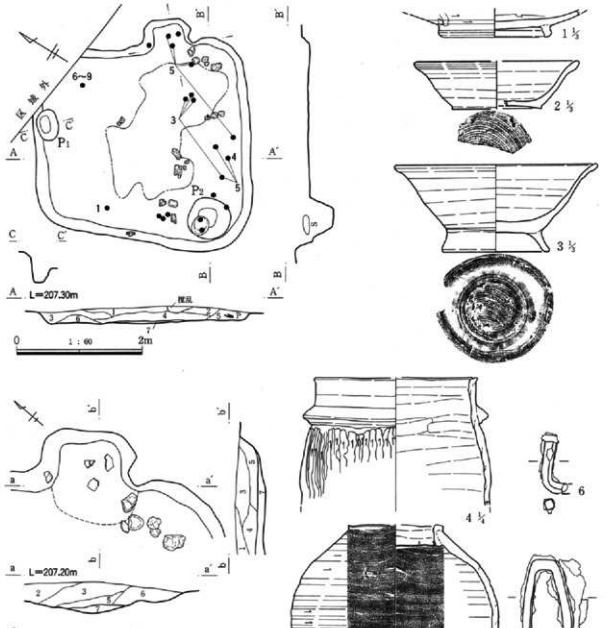
20図　6号住居跡床面・床下・出土遺物（1）




21図　6号住居跡出土遺物（2）



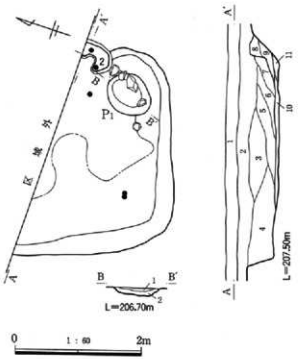

22図　7号住居跡床面・出土遺物



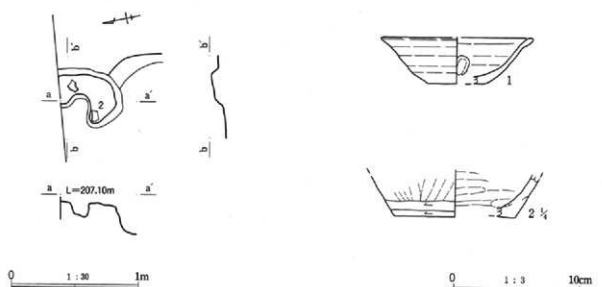

1　暗褐色土　軟質。大型のFP主体
2　黒褐色土　小型のFPを含む
3　褐色土　黒色土塊・多量のFPを含む
4　黒褐色土　FP・大型の炭化物を多く含む
5　褐色土　FPを斑状に含む
6　〃　大型のFP・褐色土塊を含む
7　暗褐色土　貼床土。炭化材散布。やや硬い

カマド
1　暗褐色土　軟質。大型のFPを多く含む
2　暗赤褐色土　やや硬質。焼土塊を主体とする
3　暗褐色土　焼土粒・炭化物を少量含む
4　黄褐色土　軟質。小型のFPを主体とする
5　黒褐色土　硬質。焼土粒・炭化物を含む
6　黄褐色土　FP塊と褐色土塊からなる
7　黒褐色土　FPを多く含む。焼土粒は少量

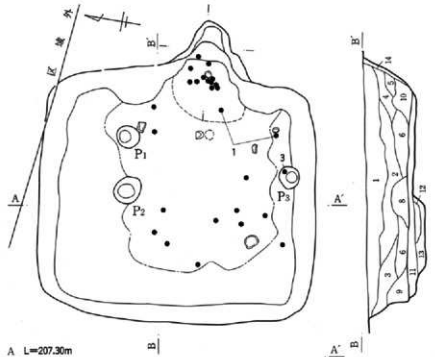
23図　8号住居跡床面・竈・出土遺物



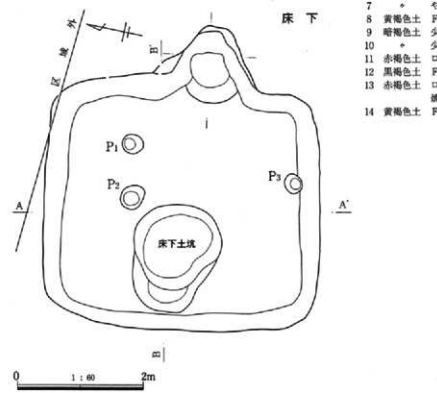

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 表土 |
| 2 | 暗褐色土 | やや暗い。FPを多く含む |
| 3 | 黒褐色土 | やや軟質。大型のFPを多く含む |
| 4 | 暗褐色土 | 軟質。小型のFPを多く含む |
| 5 | 褐色土 | 軟質。小型のFPを多く含む。小礫が混じる |
| 6 | 〃 | 小型の焼土塊・FPを含む。カマド崩落土 |
| 7 | 赤褐色土 | やや暗い。焼土塊を多く含む。カマド崩落土 |
| 8 | 暗赤褐色土 | 焼土化した粘質土。FP・小礫を含む。竈構築材 |
| 9 | 暗褐色土 | 粘質土。小型のFP・小礫を含む。竈構築材 |
| 10 | 〃 | 貼床土。焼土粒を少量含む。硬く締まる |
| 11 | 暗赤褐色土 | 褐色土塊・焼土塊からなる。締まり弱い |



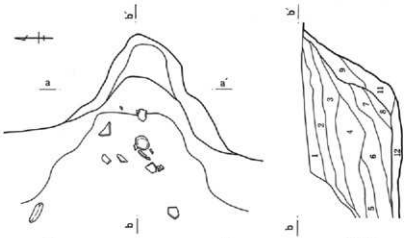

24図　9号住居跡床面・竈・出土遺物

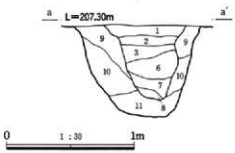



| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 大型のFPを含む。締まり弱い |
| 2 | 純褐色土 | FPを多量に含む。締まり弱い |
| 3 | 褐色土 | 小型のFPを主体とする。締まり弱い |
| 4 | 暗褐色土 | 小型のFPを主体とする。焼土炭化物を含む |
| 5 | 〃 | 赤みを帯び、焼土塊を多く含む |
| 6 | 〃 | 軟質でやや明るい。小型のFP炭化物を含む |
| 7 | 〃 | やや明るい。大型のFPを含む |
| 8 | 黄褐色土 | FPの塊状堆積。床面中央に集まる |
| 9 | 暗褐色土 | 少量のFP・炭化物を含む |
| 10 | 〃 | 少量の焼土粒を含む |
| 11 | 赤褐色土 | ローム質土による貼り床。小礫を含む |
| 12 | 黒褐色土 | FPを含む。床下土坑埋土 |
| 13 | 赤褐色土 | ローム質土による床下土坑埋土。少量の焼土粒を含む |
| 14 | 黄褐色土 | FP主体。脆く軟質。竈構築時の所産 |



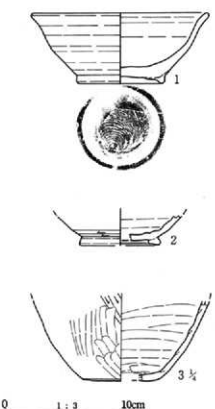

25図　10号住居跡床面・床下



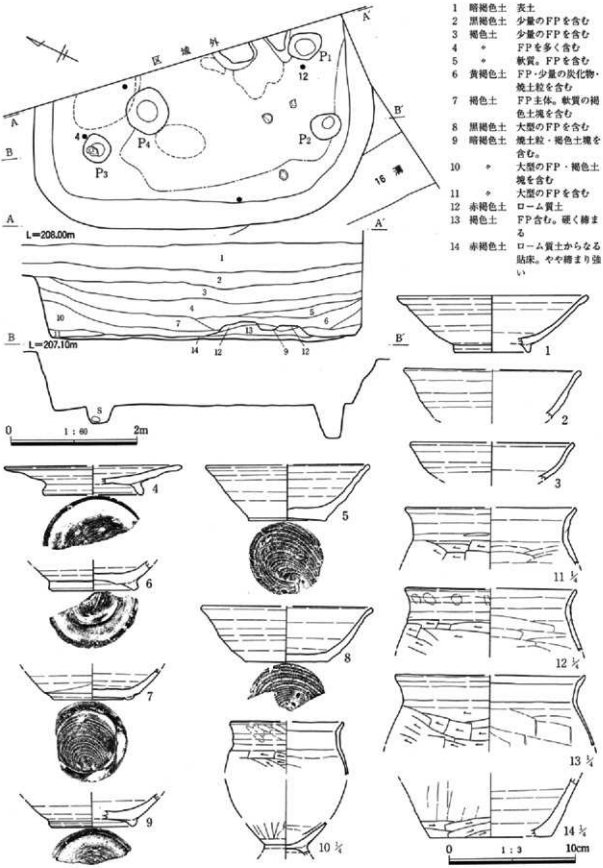




カマド

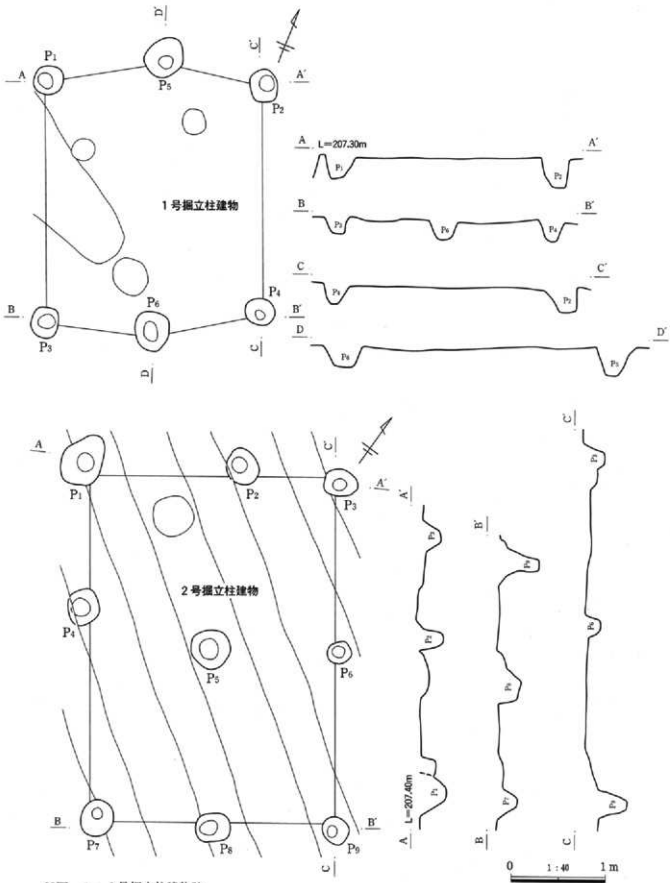
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | やや硬質。小型のFPを少量含む |
| 2 | 暗褐色土 | やや硬質。小型のFP・焼土粒を少量含む |
| 3 | 褐色土 | やや明るい。FP・粘土粒・焼土粒を含む |
| 4 | 純褐色土 | 大型のFP・焼土塊を多く含む |
| 5 | 暗褐色土 | 軟質。小型のFPを多量に含む |
| 6 | 純褐色土 | 焼土塊を主体とする。崩壊土。締まり弱い |
| 7 | 〃 | 焼土塊を主体とする。崩壊土。締まり強い |
| 8 | 赤褐色土 | 焼土層。粒子は細かい。下面使用面 |
| 9 | 純黄褐色土 | 褐色土塊・FPからなる。焼土化する |
| 10 | 暗褐色土 | 褐色土塊を主体とする。焼土化する |
| 11 | 〃 | やや明るい。大型のFP塊を主体とする |
| 12 | 赤褐色土 | 褐色土による埋土。貼床土に近似 |



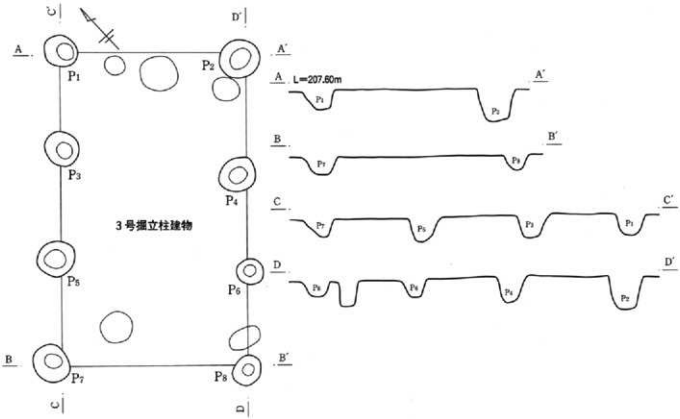

26図　10号住居跡竈・出土遺物

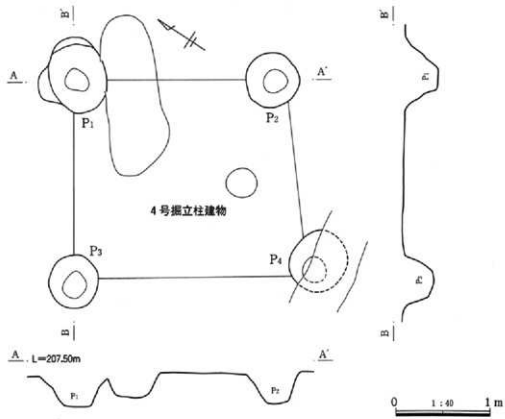



27図　34号住居跡床面・出土遺物

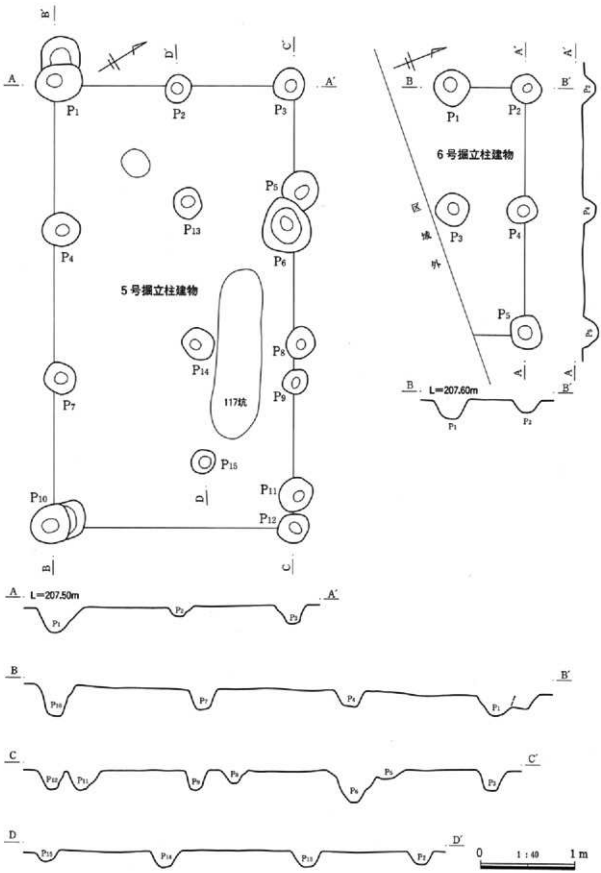



28図　1・2号掘立柱建物跡

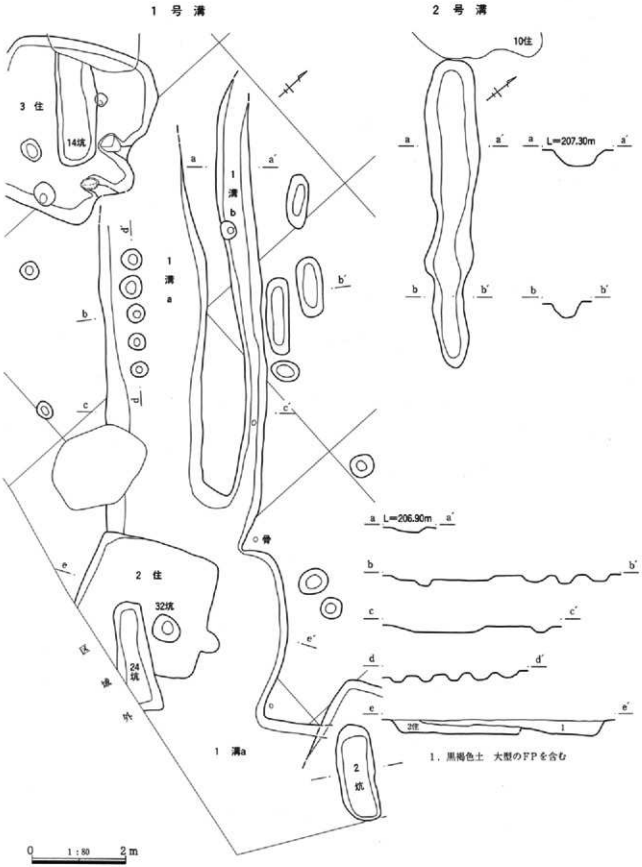


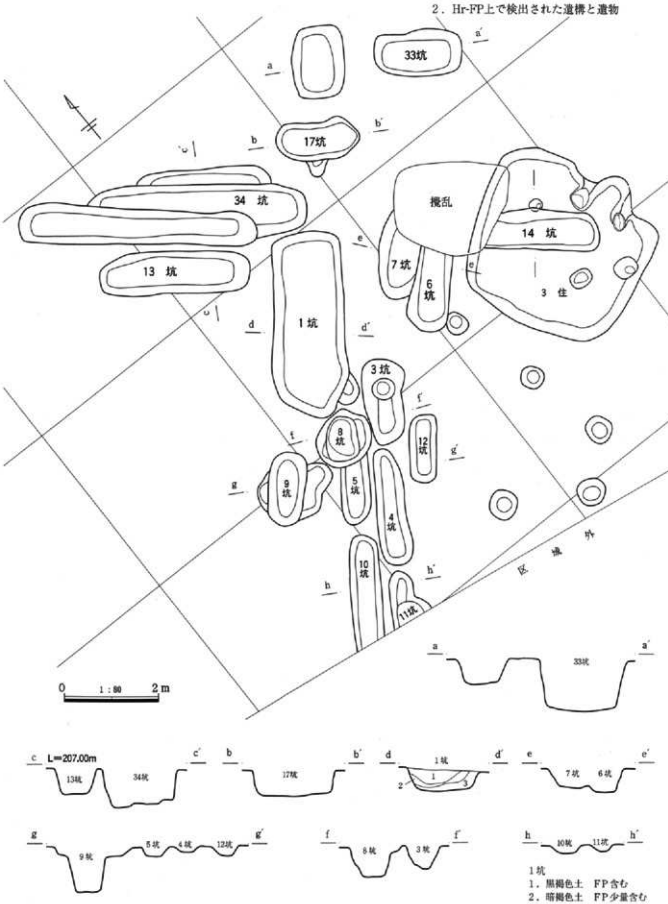

29図　3・4号掘立柱建物跡




30図　5・6号掘立柱建物跡

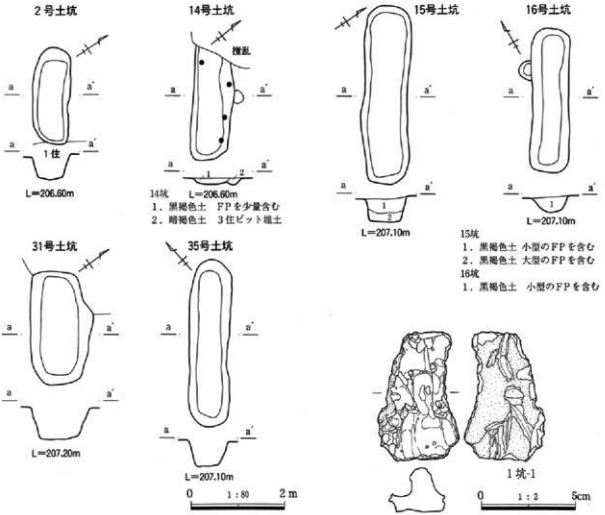

1 号 溝
2 号 溝
3 住
14坑
1 溝 a
1 溝 b
2 住
32坑
24坑
2坑
骨
1 溝a
区域外
10住
L=207.30m
L=206.90m
2住
1
1．黒褐色土　大型のFPを含む
0　1:80　2m

31図　1・2号溝

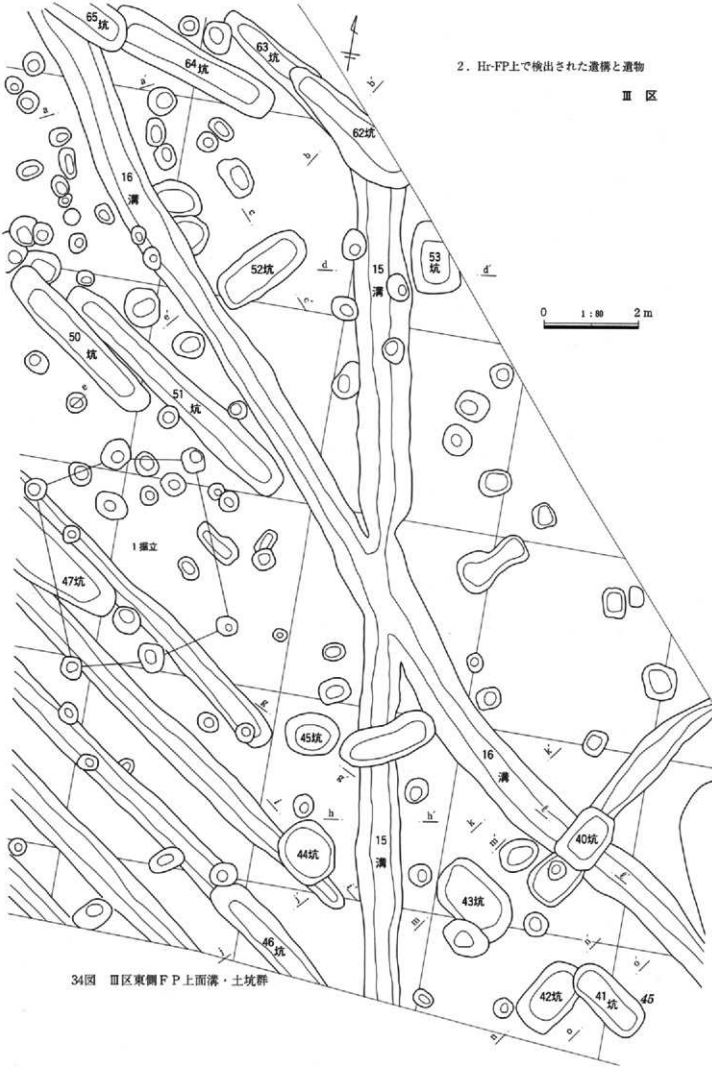



1坑
1．黒褐色土　FP含む
2．暗褐色土　FP少量含む
3．褐色土　FP主体

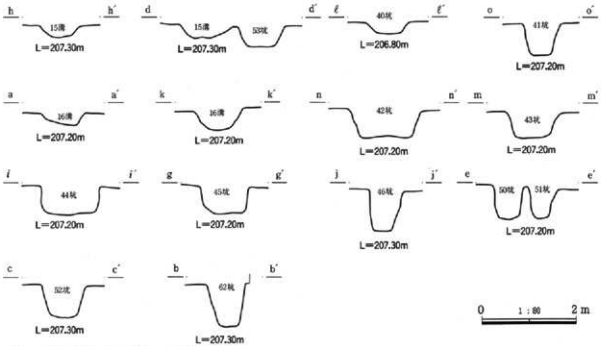
32図　Ⅱ区ＦＰ上面土坑群



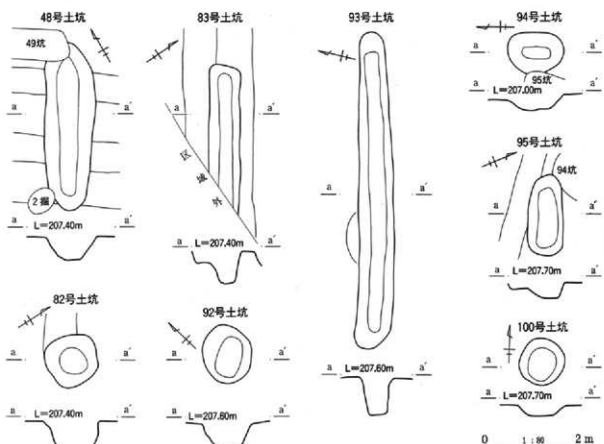

33図　Ⅱ区ＦＰ上面12・14～16・31・35号土坑・出土遺物



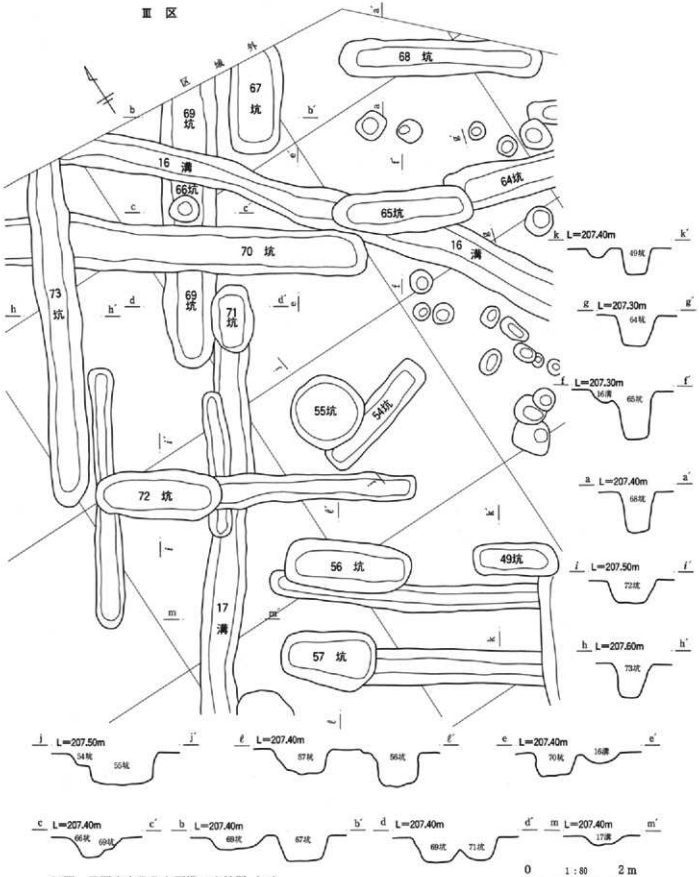

34図 Ⅲ区東側ＦＰ上面溝・土坑群



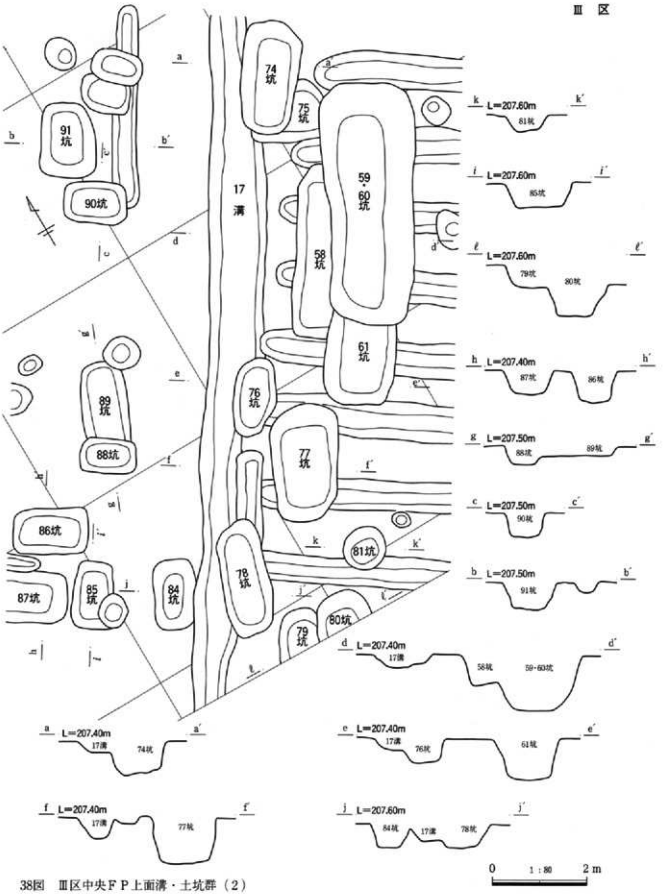

35図　Ⅲ区東側ＦＰ上面溝・土坑群断面図




36図　Ⅲ区ＦＰ上面48・82・83・92～95・100号土坑

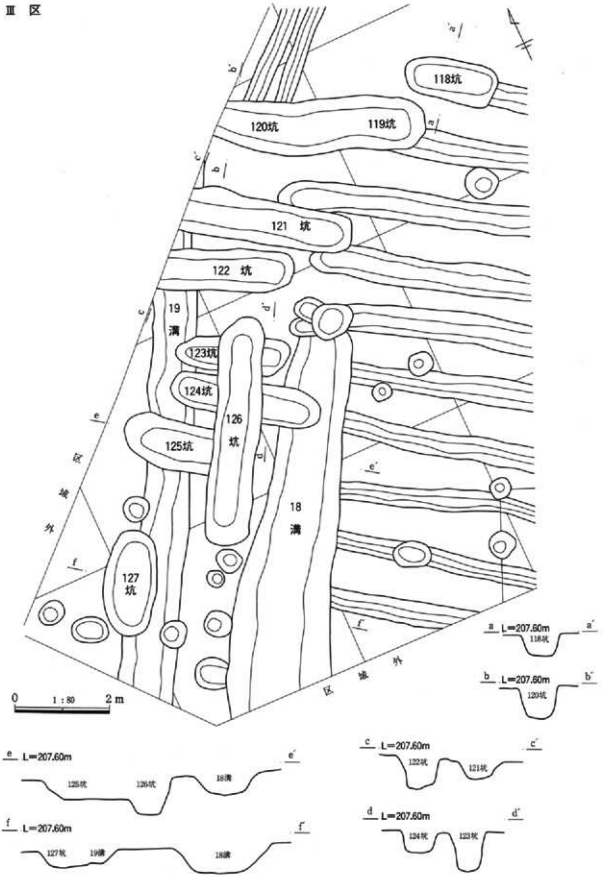



37図　Ⅲ区中央ＦＰ上面溝・土坑群（1）

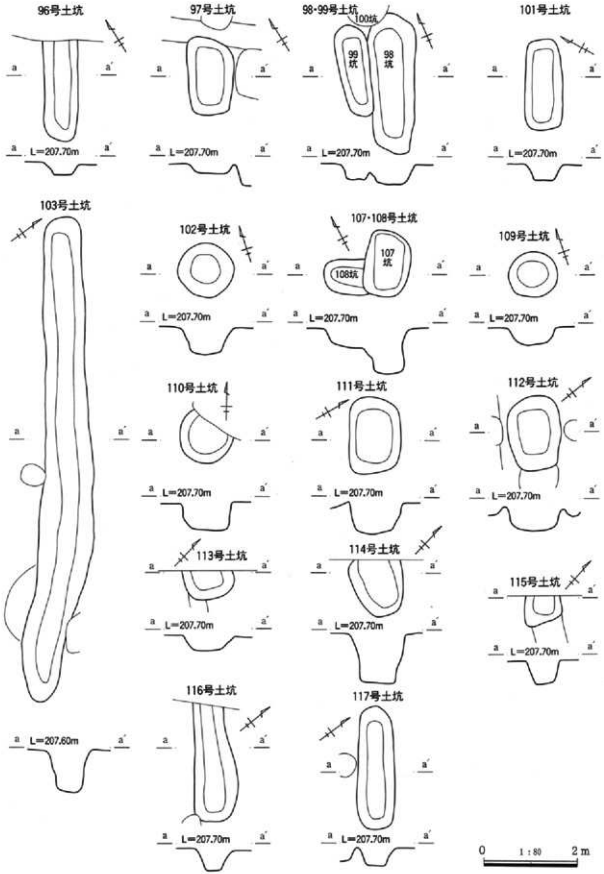



38図　Ⅲ区中央ＦＰ上面溝・土坑群（２）

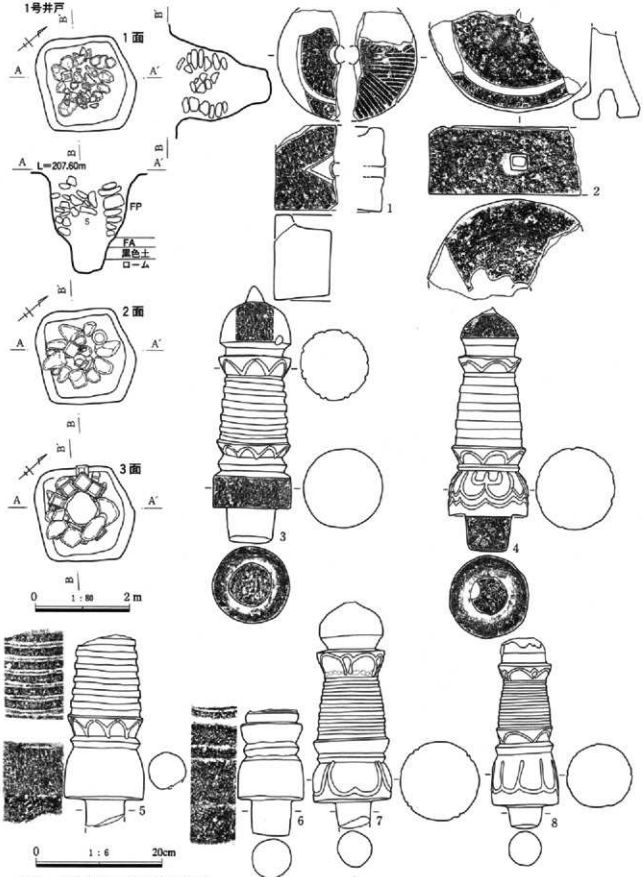
Ⅲ 区



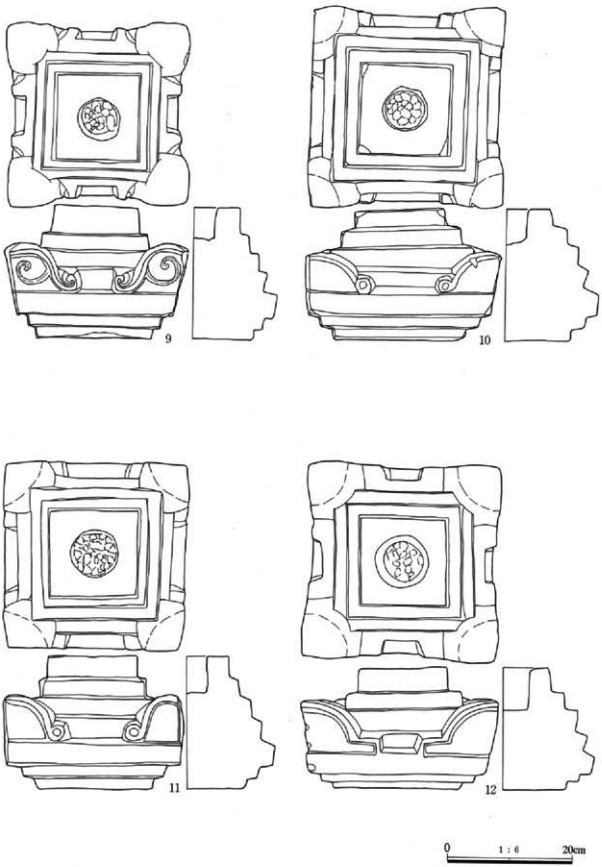

39図 Ⅲ区西側溝・土坑群



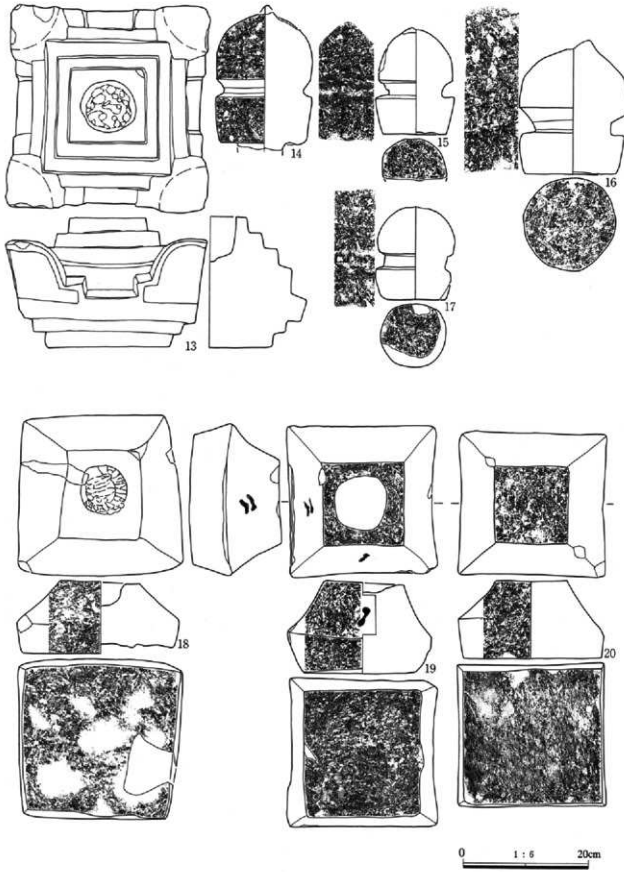

40図　Ⅲ区ＦＰ上面96～99・101～103・108～117号土坑



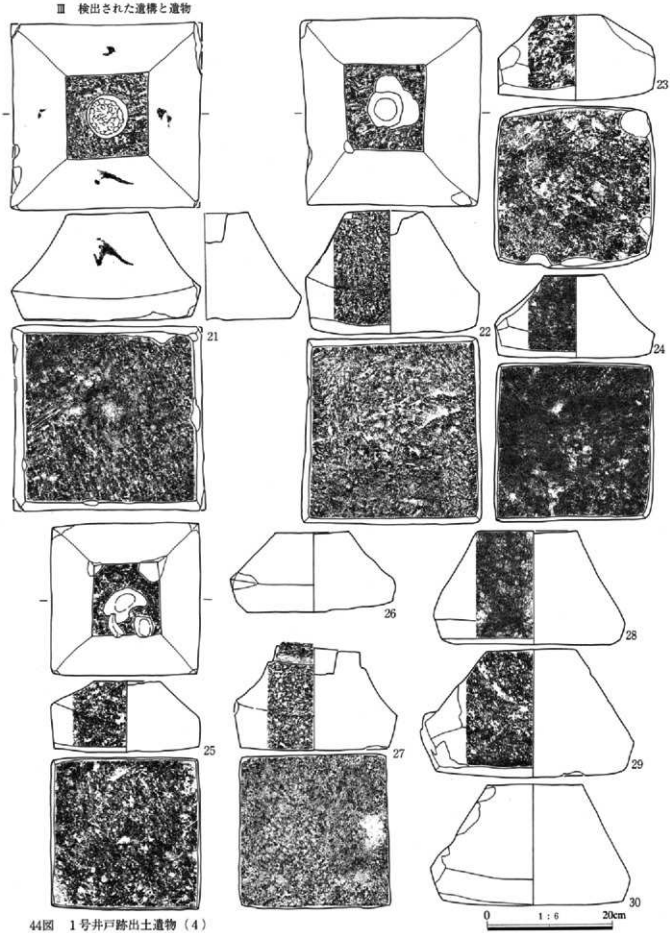

41図　1号井戸跡・出土遺物（1）



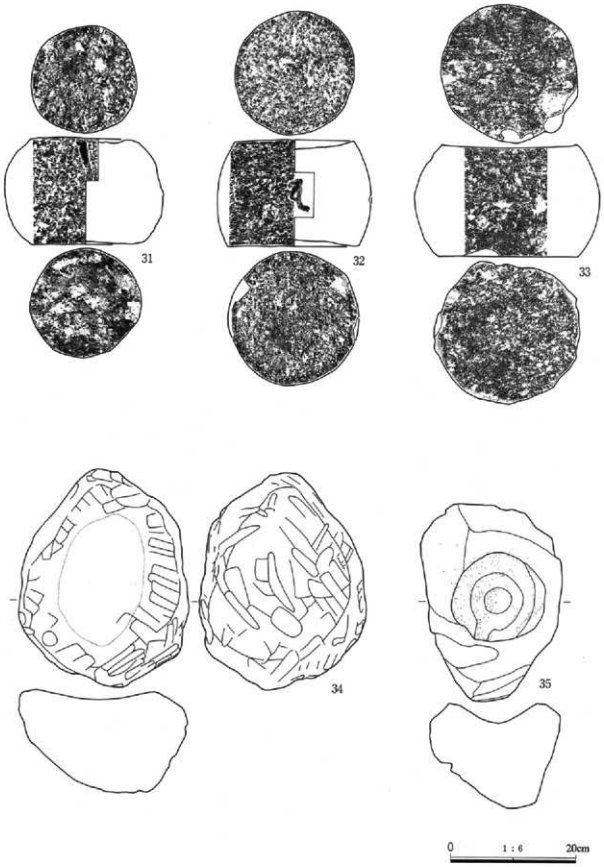

42図　1号井戸跡出土遺物（2）



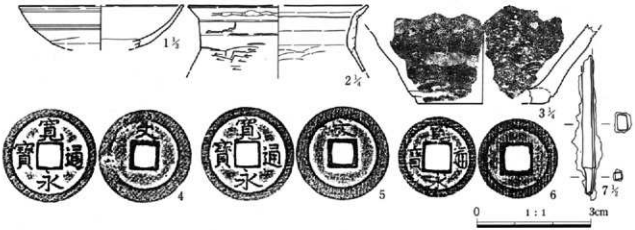

43図　1号井戸跡出土遺物（3）




44図　1号井戸跡出土遺物（4）




45図　1号井戸跡出土遺物（5）




46図　ＦＰ上面遺構外出土遺物

Ⅲ区FP上面全景（西から）

## 3．Hr-FP下の遺構

Hr-FP（FP）は6世紀中葉に榛名山二ッ岳付近の噴火による降下軽石をいう。本遺跡周辺はこのFPの堆積が厚く、著名な国指定史跡黒井峯遺跡では2m近い堆積を見ることができる。

本遺跡でも1m以上の堆積であるが、当時の人々は、この降下軽石被害になすすべもなく、噴火活動の終息を待つのみであったのであろう。また、その後の復旧作業も決して、旧地表面に至らず、厚く積もった軽石上に限られた復興となったのである。

一方このFPの厚い堆積は、旧地表面－古墳時代後半（6世紀中葉）の生活面の保護になり、考古学上極めて良好な情報を提供することになる。FP直下の旧地表面は、厳密にいえば、軽石による埋没が瞬時であり、当時の生活状況を具体化する面でもある。この面で得られた遺構・遺物は同時刻の産物であり、集落跡にしても墳墓・生産跡にしても、すべてが密接に相互関連する複合体といえよう。当時の景観復元が、極めて具体的に試みることのできる、文化層なのである。

吹屋敷屋遺跡におけるFPの堆積も遺跡全域に及び、層厚1m～1.5mの軽石層として、古墳時代後半の生活面を覆っていたのである。

さて、本遺跡のFP直下面では、

Ⅰ区　放牧地跡と極小区画水田

Ⅱ区　放牧地跡

Ⅲ区　極小区画水田跡と放牧地跡

等が検出されている。全て生産跡の検出となったが、集落域を外れたためと捉えられる。水田跡や畠跡の存在は、周辺に集落跡の存在が示唆され、隣接地に集落跡が検出される可能性は極めて高い。

本報告書では、これら検出された各遺構毎の類別・個別の説明を避け、各区の様相を述べつつ、各遺構の説明を加えたい。

**Ⅰ区の調査**（48～56図／図版4～6）

本遺跡最東端の調査区である。村道1号線を挟んで北東に中郷田尻遺跡が隣接する。周辺の地形は中郷田尻遺跡に向かって緩やかな台地形状を見せるが、ほぼ平坦地形に占められる。

しかしながら、FP除去時の調査区内の地形は、中央に埋没谷が存在する起伏のある地形となった。東側が中郷田尻遺跡に繋がる台地の一端が狭い範囲で現れ、西に幅約27m程の低地が広がる様相を見せた。さらに西端も台地となり、調査区内中央に低地－水田跡が展開する景観となった。低地と東側台地の比高差は約1.8m、西側台地との比高差は約0.8mを測る。東側台地は高く、低地との境は勾配のある斜面で区切られる様相である。

**東側放牧地跡**

東側台地は放牧地として供されていた。この利用状況は中郷田尻遺跡でも同様である。狭い範囲の放牧地跡検出ではあるが、水田との境界の様々な施設を見ることができた。

（盛り土）Ⅰ区東台地東端で検出された。高さ10cm程の緩やかな高まりで南北の走向を示す。いわゆる放牧地跡内における畦状遺構に近似する様相である。盛り土は土壌化したFAで構成されていたが、炭化物・焼土は含まない。また踏み跡による凹みが見られ、馬蹄痕の集中が見られた。

（道状遺構）1号道状遺構として、盛り土遺構西2.5mで検出した。浅く凹み、幅50～60cm程で南北に直線的な走向を示す。凹みの底面は硬く締まっており、直線的な走向と併せて、重要な動線と位置付けられよう。

（溝）1号道状遺構の東約1.5mで検出された。幅約80cm、深さ約55cmを測る小規模な溝である。走向は南北方向であるが、蛇行しており底面も不連続な様相である。馬蹄痕にも踏まれており、強い動線や区画線ではないようだ。

（3号溝）東台地における放牧地と低地水田跡を画する、大溝である。幅約90cm、深さは1.2mを超え、1号道状遺構に平行するように南北の走向を示す。

底面は基盤礫層にまで達しており、比較的平坦面を築く。壁は黄褐色ローム質土が主体であるが、崩落のためか、大きくオーバーハングしており、断面は袋状を呈する。埋土として、FPが充満していたが、層位の著しい乱れはなかった。この溝両脇には土塊が多く積まれ、盛り土状となっていた。当時の溝掘削時の排土を両脇に置いたものと考えられる。特に東側の盛り土が高く、3号溝の深さと併せて用地分割の要素となっていたようだ。また、馬蹄痕の途切れもこの盛り土の下位部分で留まる。盛り土と大溝で馬の進入も画されたものと考えたい。

(斜面)　3号溝西は急勾配の斜面が広がる。馬蹄痕は殆ど見られなかったが、踏み跡が南北方向に見られた。水田耕作に関わる移動の痕跡と捉えられる。

(4号溝)　斜面下端を地形に沿った形状で北北西に走向をもって確認された。西には水田跡縦畦が付帯しており、傾斜が緩やかながら、北から南へ下ることから、水田脇を流れる給排水路と位置付けた。底面には錆化した鉄分凝固層が付着していた。

### 水田跡

中央の低地部分には極小区画水田跡が検出された。東側は前述の4号溝、西側は大畦と水路に画された水田跡である。また、北西部にも大畦が東西に設けられ、分割された状態を観察することができた。

(極小区画水田跡)　FP下における水田跡は軸長1m前後の極めて小型の区画水田が展開することで知られる。吹屋靴屋遺跡Ⅰ区で検出した水田跡も短軸長1.5m程の極小区画水田跡と捉えられよう。ただ、長軸長が2mを超える例も多く、全体に長方形区画が主体となった景観を示す。当時の地形傾斜による区画規模の調整であろうか。

(代掻き後水田跡)　区画番号P1001～P1048が代掻きが終了した水田と位置付けた。水田面は平坦で、水口は丁寧に開けられている。水田面に株根痕等が見られないことから、田植え前の水を張った状態と考えられる。

(耕起中水田)　区画番号P1049～P1054を代掻き前の耕起中水田跡と捉えた。耕起中水田とは、水田面の土を掘り起こし、縦畦及び横畦を補修・新設する作業中の工程が看取される水田区画である。

本遺跡の耕起中水田跡は、縦畦・横畦の設定が終わり、水田面の土を中央に寄せた段階、いわゆる「黒ヌリ」が終了した段階と捉えた。軽石災害が無ければ、この後水を掛け流し、中央の土塊を平坦にする代掻き作業に入る予定だったのであろう。

(大畦と水路)　このように、本遺跡の極小区画水田跡は東西に蛇行する大畦を境に、水田耕作工程の差を見ることができた。このような例は、北牧大境遺跡や中郷恵久保遺跡等に見られ、当地域のFP下水田跡では普遍的な様相と見ることができる。また、この東西大畦の南端は大きく盛り土された箇所が検出された。土塊のかたまりが寄せられ、おそらく水路などの浚渫による排土箇所と見ることができよう。大畦は他にもあり、耕起中水田跡区画P1049～P1051の西側に水路と伴に設けられている。やや小規模の大畦だが、水路と連接することにより、西側

3号溝（北から）

4号溝（北から）

の放牧地跡を区画している。

さて、東西大畦と盛り土部の境界（水田区画番号P1046の北西隅）に設けられた水口はかなり大型である。水口下はかなり凹み、強い水流が流れた形跡が観察された。他の代掻き後水田跡の水口は、僅かに凹む程度であるが、P1046の北西隅の水口凹みは土坑状ともいえる凹みである。

あくまで、推測に過ぎないが、FP降下前に豪雨があり、東西大畦の北側が大きく滞水したため、当時の農民が大畦を切ることによって、水を逃がした行動も想像できる。その際、水が滞りなく流れるように、水路や水田内の余剰土を盛り土箇所に排土した可能性を土塊の存在からも推定したい。

このように、本遺跡Ⅰ区で検出した、極小区画水田跡は、代掻き後水田跡と耕起中水田跡に分けられ、両者の工程差を同時に観察できた。さらに、台地との境界を大畦・水路等で画しており、地形を踏まえた利便性のある水田設定と捉え得た。

**西側放牧地跡**

Ⅰ区中央の極小区画水田跡の西側は再度放牧地跡となる。東側台地との境とは対称的に緩やかな斜面地形が連続する。大畦と水路に平行して、盛り土状の僅かな高まりがある。これも畦状遺構と近似するが、水田地形との区画を意味する施設なのか。検討を要する。尚、周辺に垣や杭の痕跡は見出せなかった。しかしながら、馬蹄痕も存在しており、果たして、大畦と水路、畦状遺構のみの区画線で馬の進入が防ぎ得るのか疑問が残る。垣・杭列などの施設の存在を想定すべきであろう。

このほかには、南壁に接して凹地（11号住）があり、水田跡に平行あるいは直交するように踏み跡が確認された。水田への動線の一つと考えたい。

尚、西側放牧地跡は、西接するⅡ区で検出した放牧地跡の延長と捉えられる。

**サク状遺構**

FP直下面の調査後は、水田耕作痕抽出を目的に旧地表面を薄く削平した。暗褐色土（土壌化したFA）を取り除き、FA上面で工具痕等の検出に努めたが、水田跡に関わる積極的な痕跡は見出せなかった。一方、東台地の放牧地跡における、耕作痕調査では、サク状遺構を検出した。南北に延びる幅狭の溝状の痕跡として確認できた。

このことは、FA降下後放牧地跡に供される以前は畠として利用されていたものと捉えられる。同様の傾向は、隣接する中郷田尻遺跡でも検出されたが、中郷田尻遺跡では、平地建物など居住痕跡も見いだされ、FA降下後の土地利用の変遷が単純では無いことが指摘されている。

本遺跡東台地の土地利用変遷は畠→放牧地という単純な変遷を追うに留まったが、なぜ畠を放棄して放牧地としたのか、課題を残す。

Ⅰ区東台地サク状遺構

**Ⅱ区の調査**（57～64図／図版７・８）

本遺跡では中央部分にあたる調査区である。周辺は台地上にあり、ほぼ平坦地形が広がる。FP除去後は、緩やかに南側へ下る傾斜が確認された。

Ⅱ区は全面に馬蹄痕が検出されたことから、台地上に営まれた放牧地跡と判断した。しかしながらⅠ区で検出された放牧地跡とはやや様相を異にしており、FP下面で畠跡３箇所も確認している。馬蹄痕は畠跡の上にも印されており、放棄畠後に馬の放牧が行われた例と考えた。Ⅰ区東台地ではFA上の耕作痕調査で検出したサク状遺構から、畠耕作後放牧地としての用地変換を想定したが、Ⅱ区も同様な変換と考えられる。ただ、Ⅰ区東との差として、畠の畝とサクが残る様相から、畠放棄後短時間で放牧地跡への変換が果たされたものと考えられる。

**東側畠跡**

Ⅱ区東側で北西方向に走向を向けて、十数条の畝とサクを検出した。傾斜に沿った長サク状の形態で、いわゆる「陸苗代」とされる短サク状ではない。サク間は１ｍ前後の間隔であり、分岐する箇所は見られなかった。畝は丸みを帯び、サクとの高低差も無く、放棄された状況が把握された。更に多量の馬蹄痕と小型の土塊が乗り、放牧地として供された様相が判断できた。また、踏み跡が東西に確認された。畠跡の走向とは直交しており、畠耕作に伴う踏み跡ではなく、放牧地内での人の動きと考えた。

**中央土塊群**

Ⅱ区中央東寄りで確認した。ただ、土塊は他の畠跡にも多く見られ、土塊群として別項立てて区分する必要はない。東側と中央の畠跡間の土塊と踏み跡と凹地を中心とした箇所である。

土塊は、用地耕起によるものと考える。また雑草除去時に雑草を集めた箇所も土塊となる可能性もある。いずれにしても、用地を有効に使用するための農作業の結果生じた産物であり、土塊の観察により、土地利用の一端も垣間見える例もある。

（土塊）Ⅱ区における土塊は、土塊が生じた後、やや時間が経過した土塊と思われる。土塊は角張ってはおらず、若干風化が進んだ状況から判断した。さらに、中央土塊群では、踏み跡が土塊を切っており、網の目状に確認されたことからも、土塊が生じた後に、人や馬の往来があったと考えた。

（馬蹄痕）馬蹄痕は他の畠跡に比してやや少ない傾向がある。これは、地面の硬軟が影響しており、畠跡上に較べ、地表面の硬さの差によるものであろう。

（凹地）古墳時代中葉の住居跡が埋没が完了せずに凹地としてその存在を示す箇所である。FP下では、数箇所見られたが、FA下でさらに増えた。FP下の凹地は、土地利用上は平坦化する傾向があるが、残った凹地にかんしては水溜まりなどとして存在していたのであろうか。例えば21号住となる凹地では、馬蹄痕が若干集中する傾向が見られた。

Ⅱ区FP下全景（西から）

**中央畠跡**

Ⅱ区中央やや西寄りで確認した。南北に分かれる箇所があるが、おそらく、踏み跡や土塊によって分断され、当初は一体化した畠と思われる。

北西方向の走向で、傾斜に沿った長サク状の畠である。サク間は80cm～1m程で、東側畠跡より、若干間隔が狭い。畝・サクが分岐する箇所もあり、地形に影響された畝設定であろう。

東側畠跡と同様に、中央畠跡上にも土塊・馬蹄痕が乗り、放棄された畠と判断できた。踏み跡も東西方向のものが多く、これも東側畠跡と同様である。

（道状遺構）2号道状遺構を中央畠跡西側で検出した。北側調査区壁より、南西方向にやや蛇行した走向を示す。南西側で段差下より、やや途切れ気味になり、踏み跡状となって、南側調査区壁に至る。幅約50～60cm、深さ10cm未満の小規模な道状遺構ながら、北東側の底面は硬化しており、往来のある動線として捉えられた。この硬化面は、南側の段差下で不明瞭になり、踏み跡状となる。蛇行する走向や硬化面の不連続から、1号道状遺構とは性格の差が想定され、ここでは踏み跡がより頻繁な往来により道状遺構となったと考えた。また、北東側では、畠跡を切る新旧関係を示す。畠放棄後の所産である。

（アマリ土）2号道状遺構に東接して検出された。集石遺構である。大小の自然石が集まる。踏み跡が東側に見られ、意図的な集石遺構と捉えられる。調査当初は祭祀跡の可能性も想定したが、出土遺物もなく、自然石の配列に規則性もないことから、畠耕作に伴う不要な自然石や土の集積箇所と判断した。

（段差）2号道状遺構の南西部で、比高差約20cm程の段差を検出した。下位に17号住・18号住があり、凹地を利用した段差と見ることができる。段差下には明瞭な施設はないが、踏み跡が数条見られ、馬蹄痕もあることから、放牧地跡の一部と把握できる。

**西側凹地**

Ⅱ区西側で検出された。下位層には古墳時代中葉段階の36号住があり、埋没が完了しない状態で、径5m程の大型の凹地となってFP降下を迎える。Ⅱ

Ⅱ区FP下面放牧地跡（放棄畠跡）

Ⅱ区FP下面アマリ土（集石）

Ⅱ区FP下面放牧地跡検出作業風景

区西側凹地は、畠としては供されておらず、馬蹄痕が多数集まることから、水溜まりとして放牧地内の施設の一つとして存在していた可能性はある。この凹地の東端と西端から段差が派生する。比高差は10cm程度だが、凹地を意識した段差である。また調査区西端でも僅かだが同様の段差を検出した。これらの段差は性格は不明だが、凹地を中心としており、何等かの作業痕跡と見るべきである。

**サク状遺構**

Ⅱ区の調査においても、FP直下面の調査後、FA上面まで旧地表面を削平し、耕作痕抽出調査を行った。その結果、西側を除く調査区の殆どで、サク状遺構を検出し得た。FP下で調査した畠跡のサク部分と合致するサクも存在するが、例えば、東側畠跡は東西に走向するサク状遺構が確認された。さらに、中央土塊群下もサク状遺構が広がる。中央畠跡下はサク間を狭くして検出した。

これらのサク状遺構の様相から、放牧地として供される前は少なくとも２回、あるいは複数回の畠利用が果たされていた例として、重要な調査となった。

Ⅰ区東台地における土地利用変遷は、畠→放牧地という変化が看取されたが、Ⅱ区においては、畠→？→畠→放牧地という変遷を見ることができた。

Ⅱ区FA上面全景（東から）

Ⅱ区FA上面サク状遺構
同方向のサクが重複することから、FA降下後に
少なくとも２回以上の畠耕作が行われていた

Ⅱ区FA上面サク状遺構
異方向のサクが重複する例
東西方向の畠耕作後南北方向の畠を
２回以上行っていたことが解る

**Ⅲ区の調査**（65～81図／図版９・10）

本遺跡西側にあたるⅢ区は、北牧大境遺跡Ⅰ区と現道を隔てて接する調査区である。周辺の地形は、ほぼ平坦地ではあるが、Ⅲ区を中心に南と東西に僅かながら下る地形で、Ⅲ区と北側へ台地状地形が連なる様相を示す。FP下面はほぼ平坦地形ながら、僅かながら西側へ台地状地形が偏る。これは、Ⅲ区東側が水田跡、西側が放牧地跡としての土地利用の差が生じた微地形の差とも捉えられよう。このように調査区内で水田跡と放牧地跡を同時に検出し得たのは、本遺跡Ⅰ区が良好な例である。また中郷恵久保遺跡Ⅰ区でも水田跡と放牧地跡を同時に見ることができた。しかしながら、本遺跡Ⅰ区や中郷恵久保遺跡Ⅰ区は、台地地形と低地部分が際立っており、地形上の理由から放牧地と水田という土地利用選択が果たされたと思われる。しかしながら、本遺跡Ⅲ区における水田と放牧地の選択はほぼ平坦地で行われており、他の２地区とは大きな差と言えよう。さらに、西接する北牧大境遺跡Ⅰ区FP下では広域に極小区画水田跡が検出されており、比高差の無い地形においても、別種の耕地選択が行われた例として意義深い。

**水田跡**

Ⅲ区東側の平坦地で調査した。東端は現道を挟んでⅡ区放牧地跡であり、Ⅱ区放牧地跡とⅢ区水田跡の境界の施設は残念ながら現道下という制約のため調査できなかった。水田跡西端は調査区中央を南東から北西へ延びる大畦によって、放牧地跡と画される。西の現道下に水田境界を仮定すると幅30m弱のやや狭い範囲で供された水田といえよう。

FP下水田跡では普遍的な形態である極小区画水田跡である。軸長１ｍ前後で比較的整った方形区画を主体とする。Ⅲ区で検出された極小区画水田跡は143区画を数え、極小区画と短冊状区画に分けられる。地形傾斜に沿って縦畦を南北に設け、縦畦間を繋ぐ小規模な横畦で小区画する。横畦は縦畦より低く、中間に水口が設けられ、滞水と取排水機能を持つ。また、全ての区画がほぼ代掻きが終了した状態

Ⅲ区FP下面全景（東から）
手前が極小区画水田跡で南北の縦畦が顕著
奥が放牧地跡で、馬蹄痕や踏み跡が集中する

Ⅲ区FP下面極小区画水田跡近景
区画内には土塊が無く、代掻き後の水田と捉えた

Ⅲ区極小区画水田跡より榛名山を臨む

で検出されており、Ⅰ区で見られたような耕起中水田と代掻き後の水田両者を見ることは適わなかった。

(代掻き後水田) Ⅰ区で検出した代掻き後の極小区画水田跡と同様に、耕起後田面を平坦化した状態の水田跡である。全ての区画で水口が開けられ、僅かな土塊を残すものの整った水田面を呈していた。代掻き時の掛け流しが行われた状態であろうか、畦畔も丸みを帯びており、畦塗りが完了した段階と判断できた。ただし、微高地を挟み西の北牧大境遺跡Ⅰ区やⅡ区では、耕起中水田跡が確認されており、地点によっては耕起中の水田区画が存在する例といえよう。

(短冊状区画) 極小区画水田跡の一部に横畦が設けられないため、縦長の長方形状を呈する区画である。本遺跡Ⅲ区では南半の一部、標高205.60～205.70mの間の水田区画が短冊状区画を示す。ある一定の標高幅に集中する傾向が見られた。全て代掻き後の工程を示しており、水田区画途中ではない。隣接する北牧大境遺跡Ⅰ区でも耕起中水田跡の一部が短冊状区画で、区画整形の途中の可能性も示唆されたが、本遺跡の例を見るに、短冊状のまま代掻きに至っていることから、この横畦を設けず植え付けに移行するものと推定したい。

(盛り土) 短冊状区画P3059とP3061の南端に、調査区壁に掛かり僅かではあるが盛り土が確認された。Ⅰ区で見るような顕著な土塊の集合体ではなく、あるいは、島状の施設の可能性もある。

(大畦) 水田跡西端で放牧地跡と画する施設として、大畦を検出した。地形形状に沿ったのか、緩やかに蛇行し南北方向の走向である。幅約50～100cm、高さ約20cm程で、大規模な大畦ではない。Ⅰ区西側で見た大畦のように水路等を付帯せず、放牧地跡に接して設けられている。また、放牧地跡の影響であろうか、土塊が下端あるいは大きく大畦を覆う例もあり、放牧地との境界としては積極的な分割線では無いようだ。

(馬蹄痕) FP下水田跡でありながら、馬蹄痕が検出されている。Ⅲ区東端のP3001やP3008周辺、また水田跡西側のP3135に少量ながら馬蹄痕が観察された。農耕に供された状況とは思われず、おそらく、放牧地跡からの侵入と判断した。垣や柵といった施設は設けられなかったのであろうか。

**放牧地跡**

Ⅲ区西側は放牧地跡である。前述のように、Ⅲ区東の水田跡と北牧大境遺跡Ⅰ区の水田跡に挟まれた微高地に営まれた放牧地跡として認識できる。東西両者との比高差は10～20cmでしかなく、ほぼ平坦地形に水田と放牧地が設けられたと見ることができよう。また、Ⅲ区放牧地跡と北牧大境遺跡Ⅰ区の水田跡の境界は、またも現道下となる。調査の手が及ばず大変残念である。

Ⅲ区の放牧地跡は畦状遺構・踏み跡・凹地・土塊・馬蹄痕からなる。

(畦状遺構) 調査区北壁に接して調査した。土塊・馬蹄痕が乗る高まりより北東方向に分岐して2条の畦状遺構が派生する。東に湾曲する畦状遺構の際には踏み跡が沿い、馬蹄痕が集中する傾向がある。

(踏み跡) 調査区南壁から、畦状遺構に向かい、前述の畦状遺構に沿う踏み跡と重なる例と、凹地に降りる踏み跡1条等を見ることができる。

(凹地) 大型の凹地を南西部の調査区南壁で確認した。下位層の古墳時代中葉の39号住が形成した凹地ではあるが、径10m以上を測る。凹みは緩やかだが、馬蹄痕が集中する傾向が見られた。

Ⅲ区FP下極小区画水田跡の馬蹄痕

**サク状遺構**

Ⅲ区FA上面における耕作痕抽出作業は、西端部を除きほぼ全域にサク状遺構を見たといえよう。FP直下面で極小区画水田跡が広がった東側部分も水田跡下からもサク状遺構を検出した。つまり、水田跡に供される以前は畠として機能しており、台地性の畠耕地から低地性の水田耕地への変換が観察された。さらに、西側の放牧地下位もサク状遺構が確認されたことから、放牧地以前は畠としての土地利用が位置付けられた。また、凹地においてもサクが走向し、凹む地形であっても畠として利用した例と見ることができた。

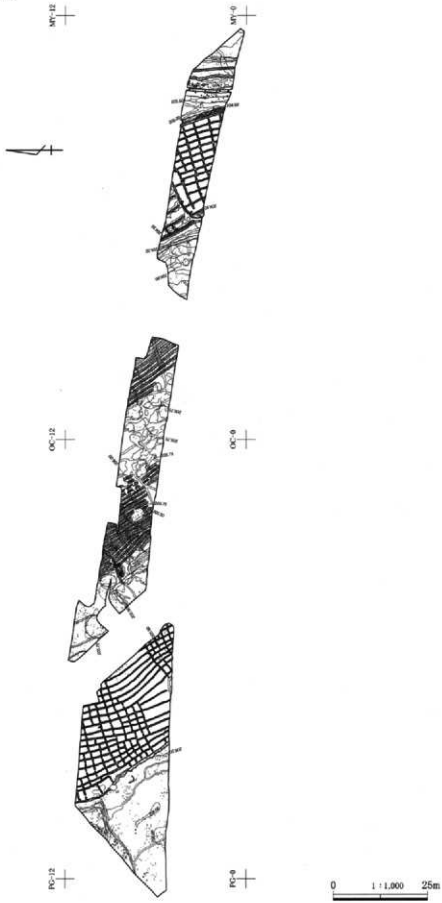
Ⅲ区で調査したサクの走向は東西方向を向き、従来調査してきたⅠ区・Ⅱ区に見られた南北方向の走向とは差が見られた。また、調査区中央東側にあつまるサクは間隔が密集しており、少なくとも２回以上の畝替えが行われた例と看取できた。

Ⅲ区FP下水田跡耕作痕調査風景

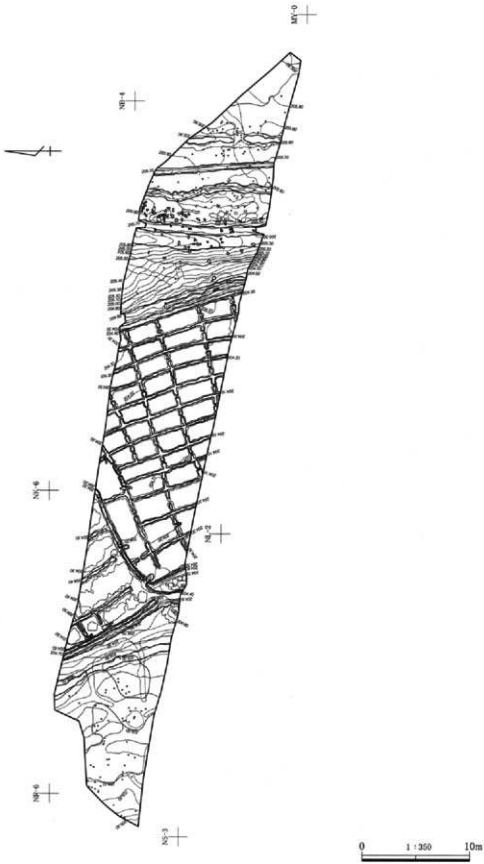
極小区画水田跡下位の調査では、FA上面でサク状遺構が検出された。水田に供される以前は畠として利用されていた証左である

Ⅲ区FP下面全景（西から）

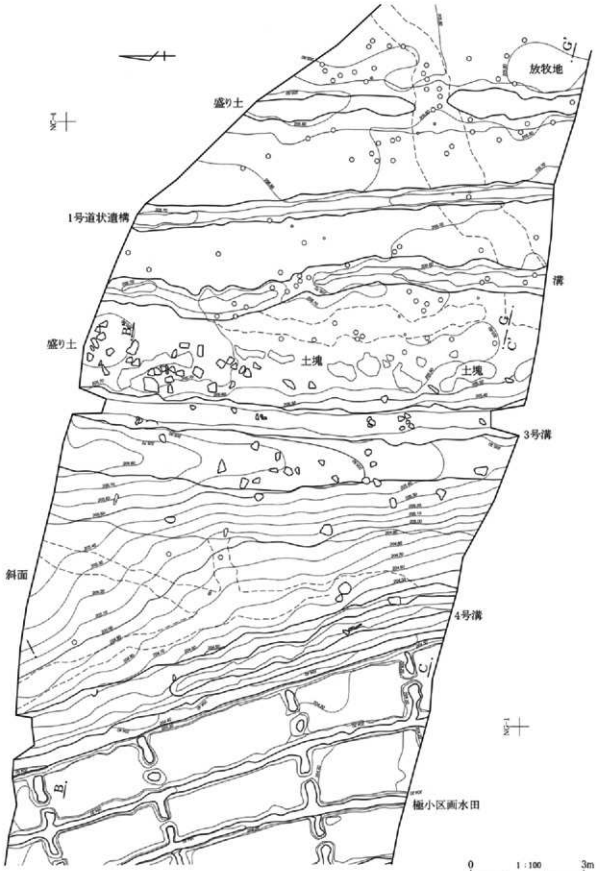
手前が放牧地跡、奥が極小区画水田跡。ただし西接する北牧大境遺跡では極小区画水田跡が調査されている



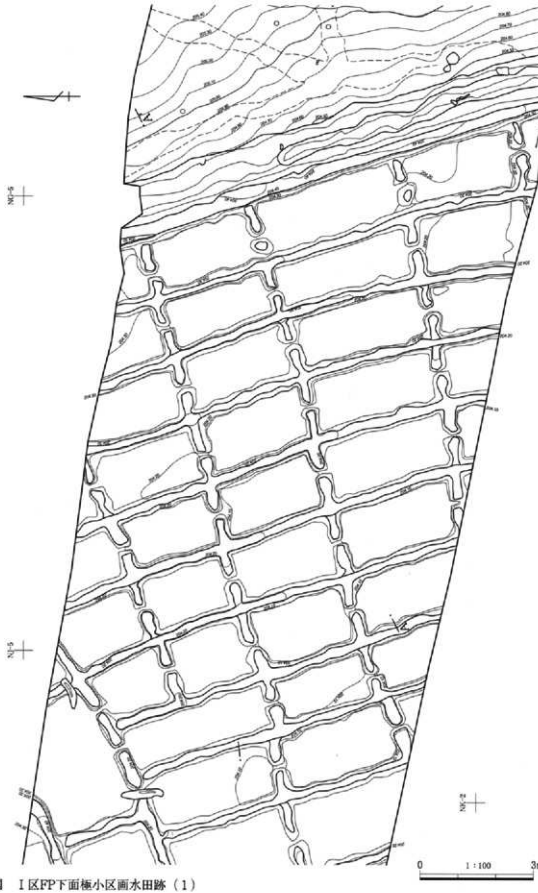

47図　FP下面全体図



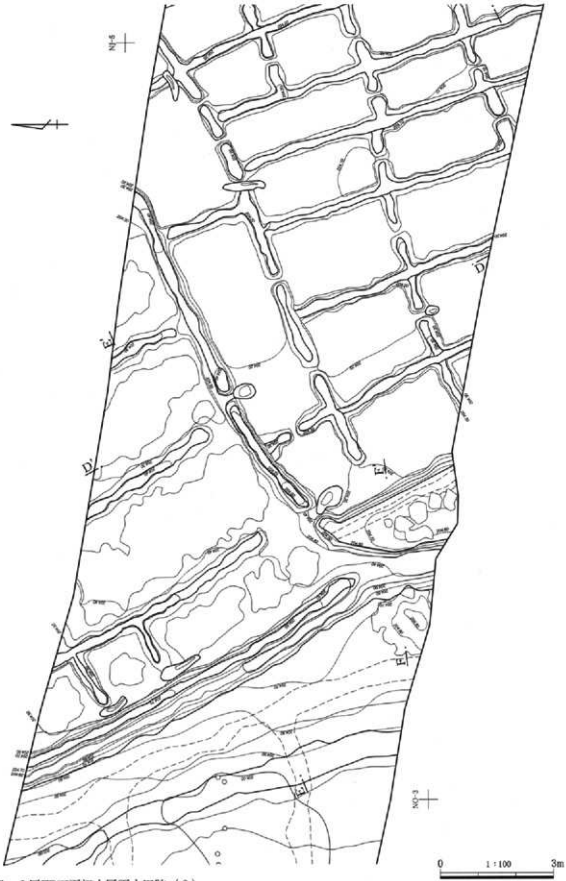

48図　Ⅰ区FP下面全体図



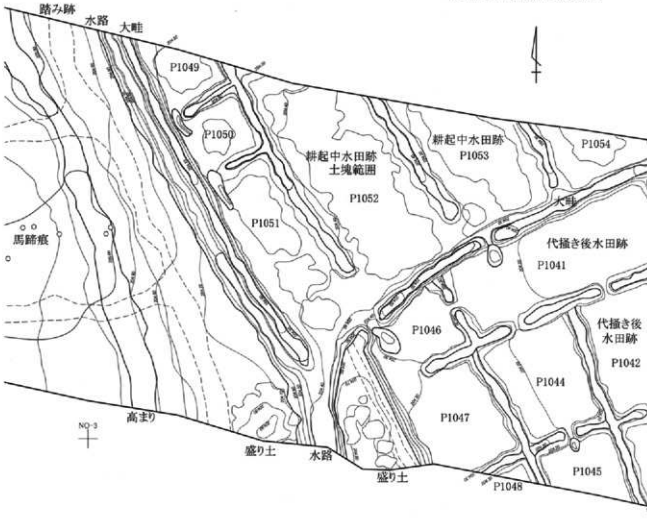

49図　Ⅰ区東側FP下面




50図　Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（1）

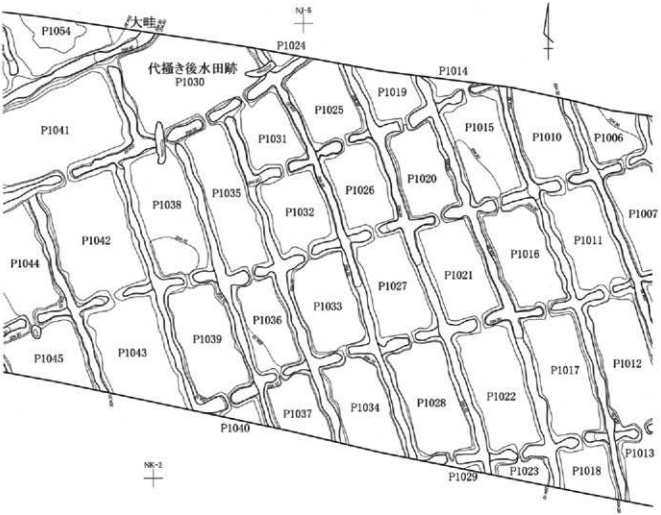


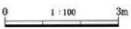

51図　Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（2）



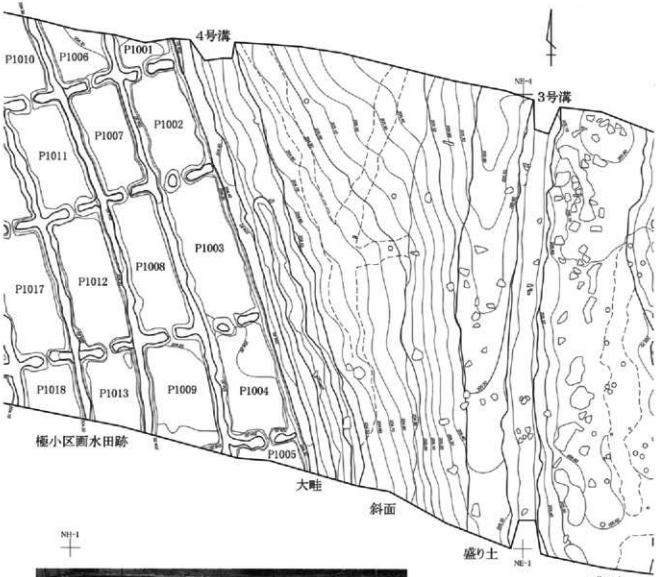
0　1：100　3m

52図　Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（3）耕起中水田跡と代掻き後水田跡



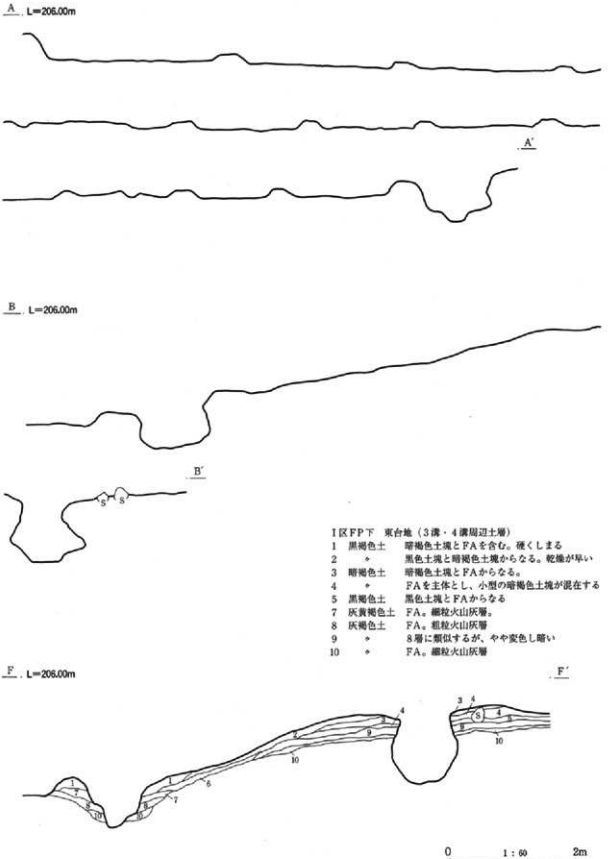



53図　Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（4）代掻き後水田跡

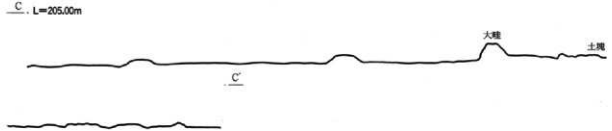


54図　Ⅰ区FP下面極小区画水田跡（5）

0　1:100　3m

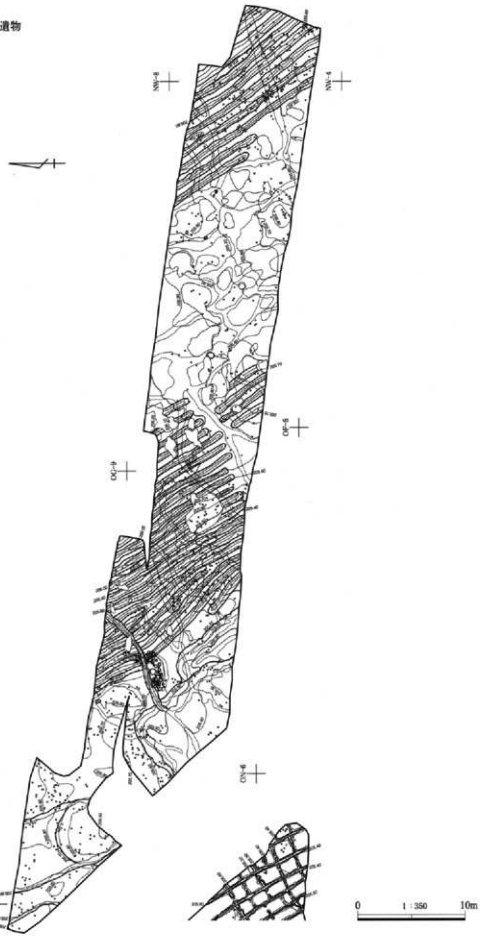



55図　Ⅰ区FP下面断面図（1）

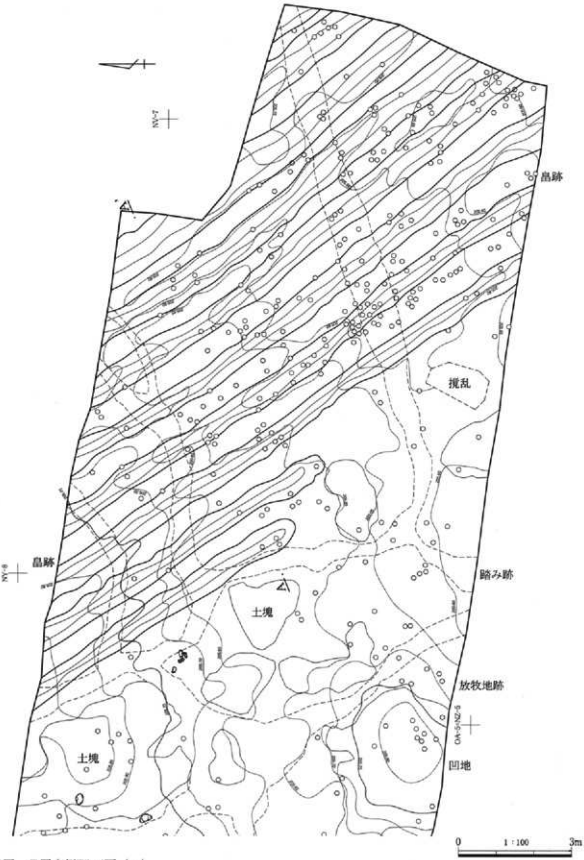


Ⅰ区FP下　5号溝周辺土層
1　暗褐色土　小円礫を含む。軟質で塊状である。盛土
2　〃　1に類似する。赤褐色鉄分凝縮粒を多く含む
3　〃　小型のFA塊を少量含む。粘性強い
4　黒褐色土　黒色土塊を主体としFAを混在する
5　〃　赤褐色鉄分凝縮粒を含む
6　灰褐色土　FA。細粒火山灰層
7　〃　FA。粗粒火山灰層
8　〃　FA。細粒火山灰層
9　黒褐色土　黒色粘質土

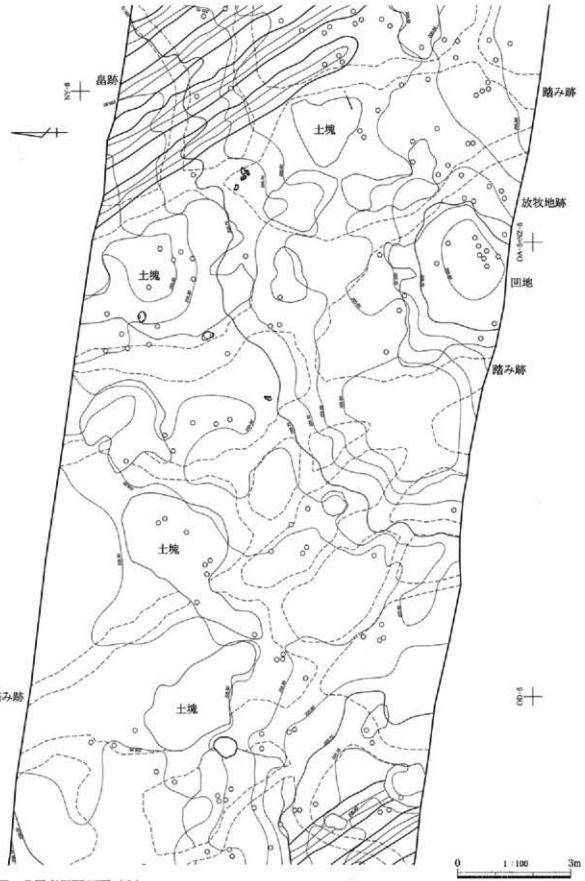
56図　Ⅰ区FP下面断面図（2）



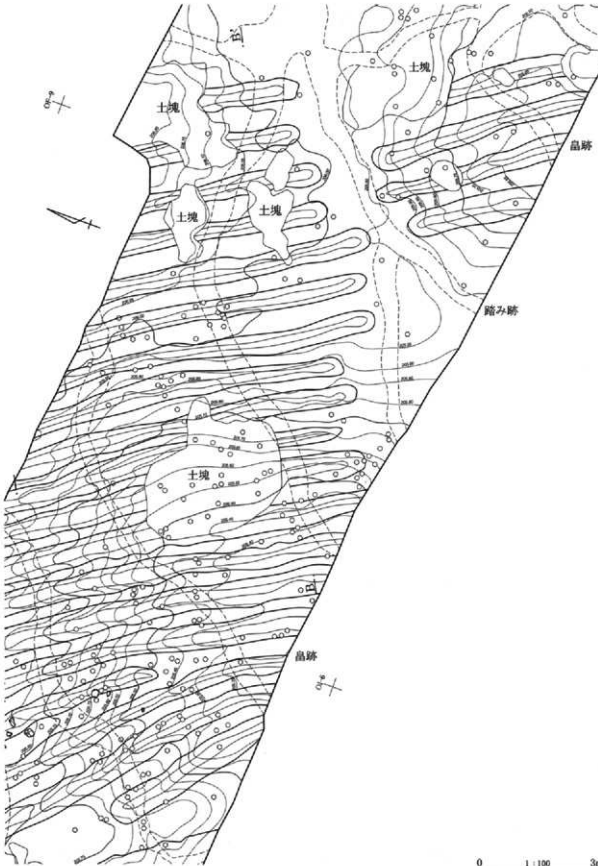

57図　Ⅱ区FP下面全体図



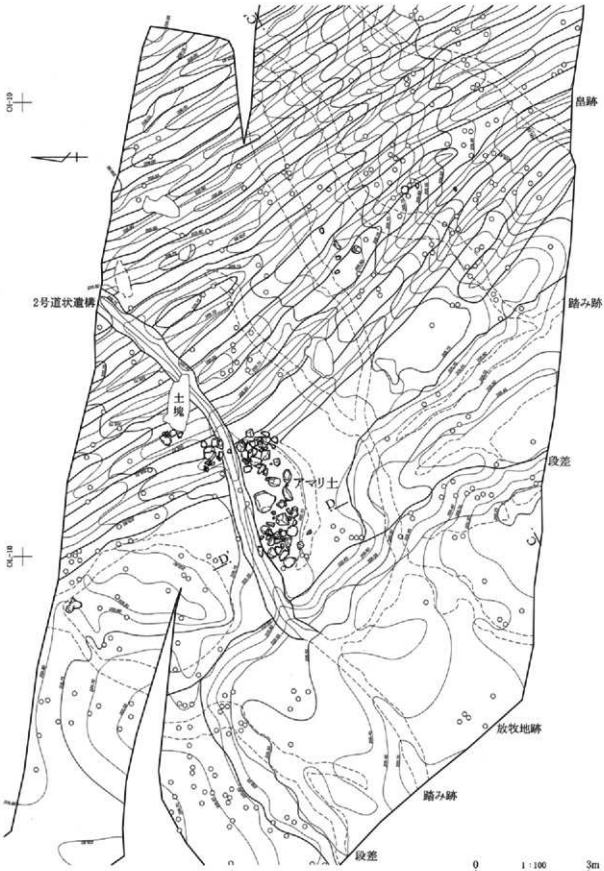

58図　Ⅱ区東側FP下面（1）



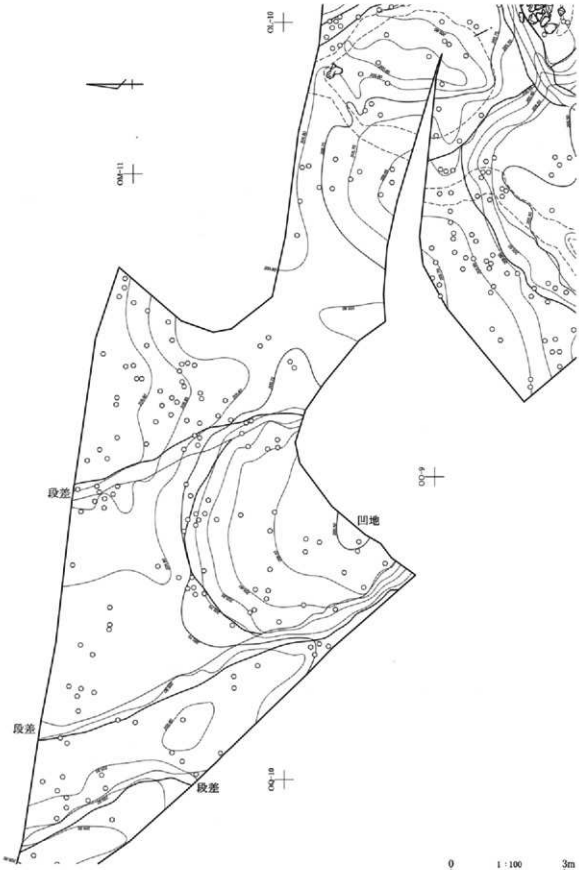

59図　Ⅱ区東側FP下面（2）



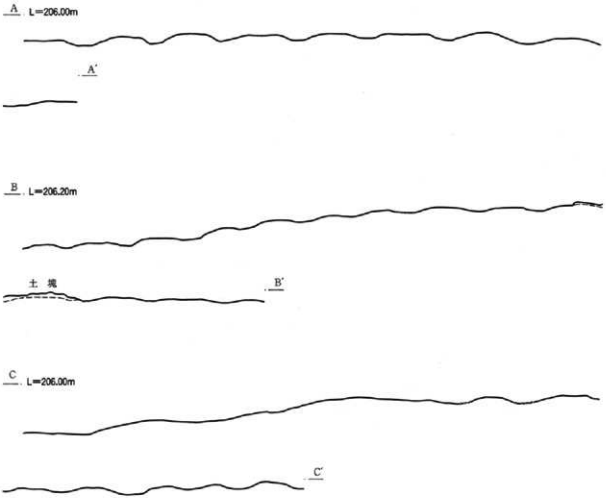

60図　Ⅱ区中央FP下面



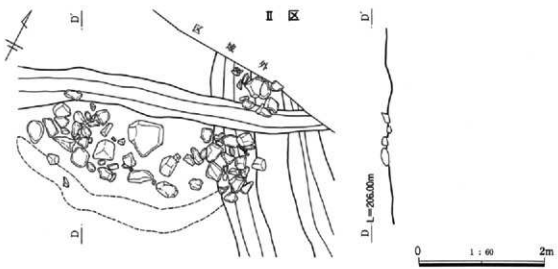

61図　Ⅱ区西側FP下面（1）



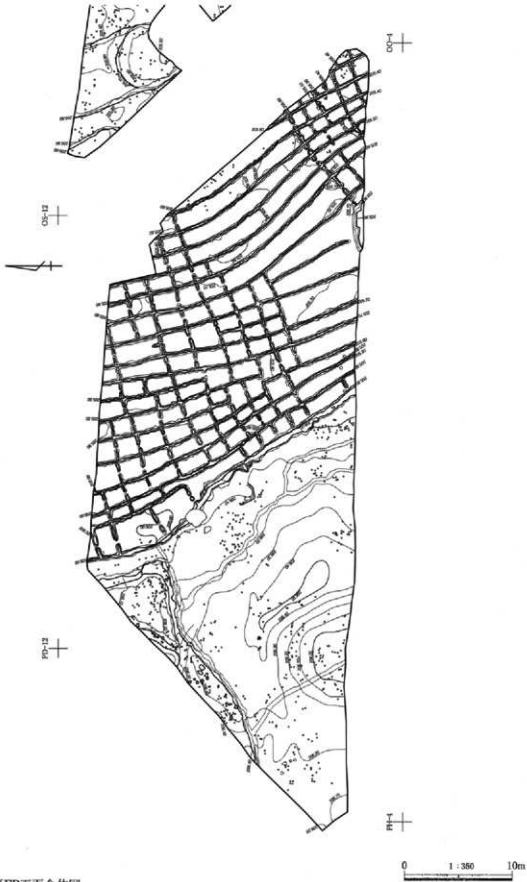

62図　Ⅱ区西側FP下面（2）




63図　Ⅱ区FP下面断面図



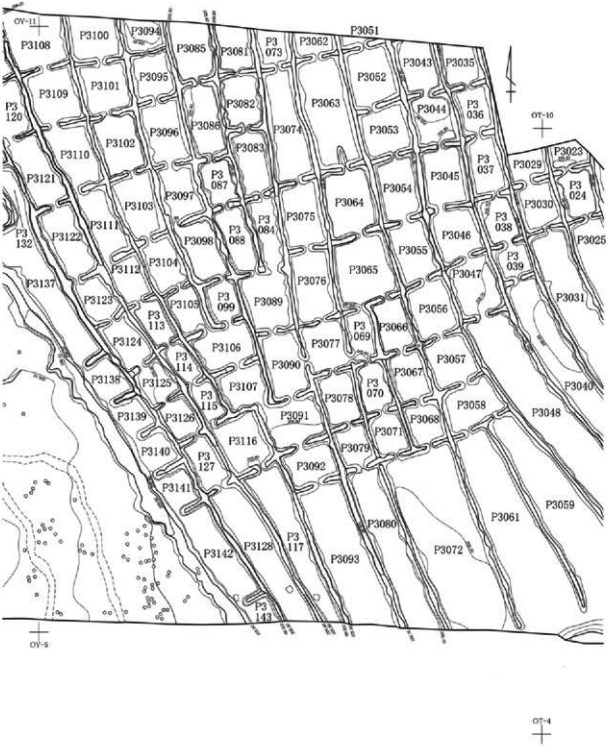

64図　Ⅱ区FP下面アマリ土平・断面図




65図　Ⅲ区FP下面全体図

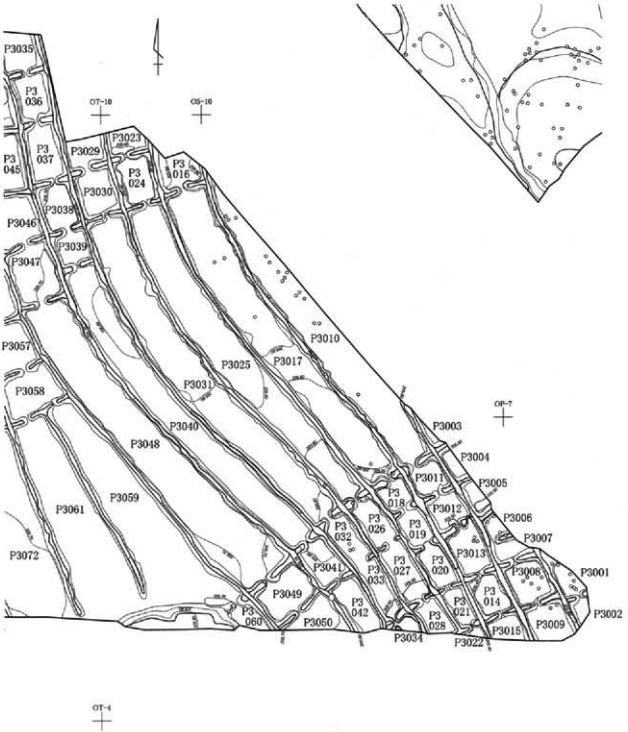
0　1：150　4m

66図　Ⅲ区FP下面（1）

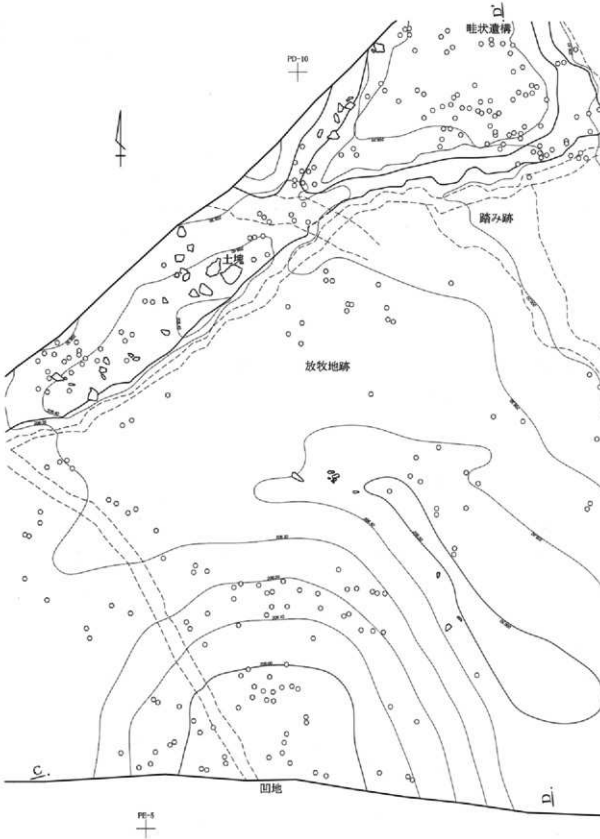



67図　Ⅲ区FP下面（2）

0　1：150　4m

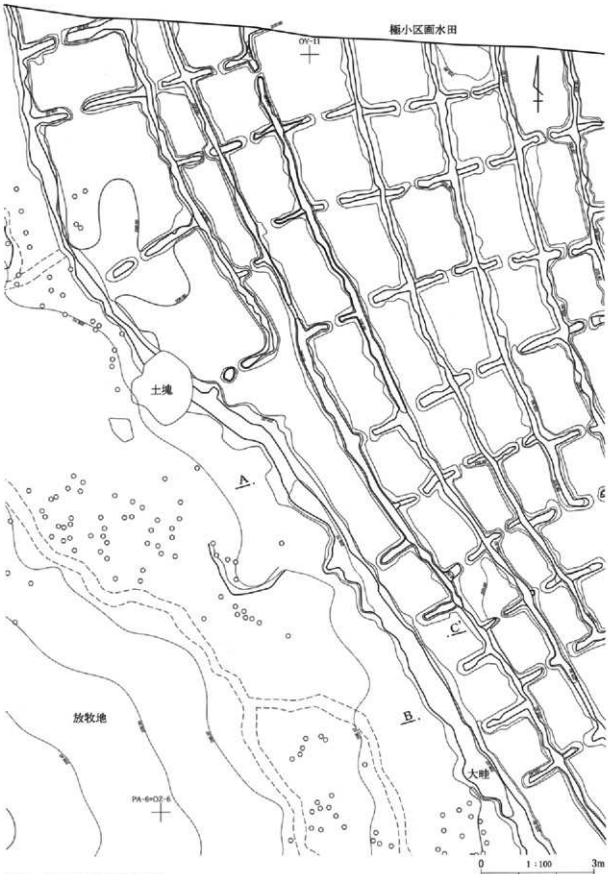

P3035
P3 036
OT-10
OS-10
P3 037
P3029
P3023
P3 045
P3 024
P3 016
P3030
P3038
P3046
P3039
P3047
P3010
P3057
P3017
P3025
P3058
P3031
OP-7
P3040
P3003
P3048
P3004
P3011
P3005
P3 018
P3012
P3061
P3059
P3006
P3 026
P3 019
P3 032
P3007
P3013
P3072
P3 020
P3 027
P3 033
P3008
P3001
P3041
P3049
P3 014
P3 042
P3 021
P3 060
P3050
P3 028
P3002
P3034
P3015
P3009
P3022
OT-4
0
1：150
4m

68図　Ⅲ区FP下面（3）

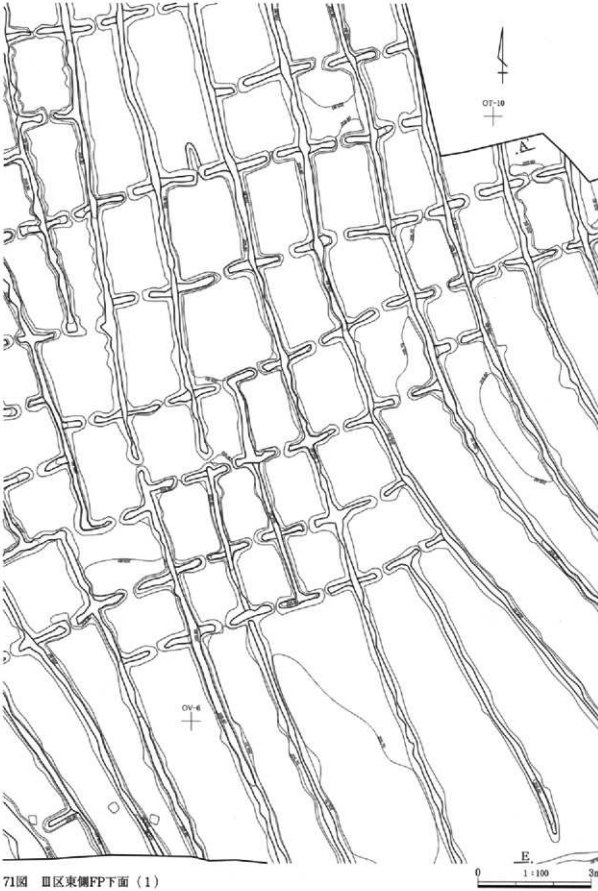



69図　Ⅲ区西側FP下面（1）

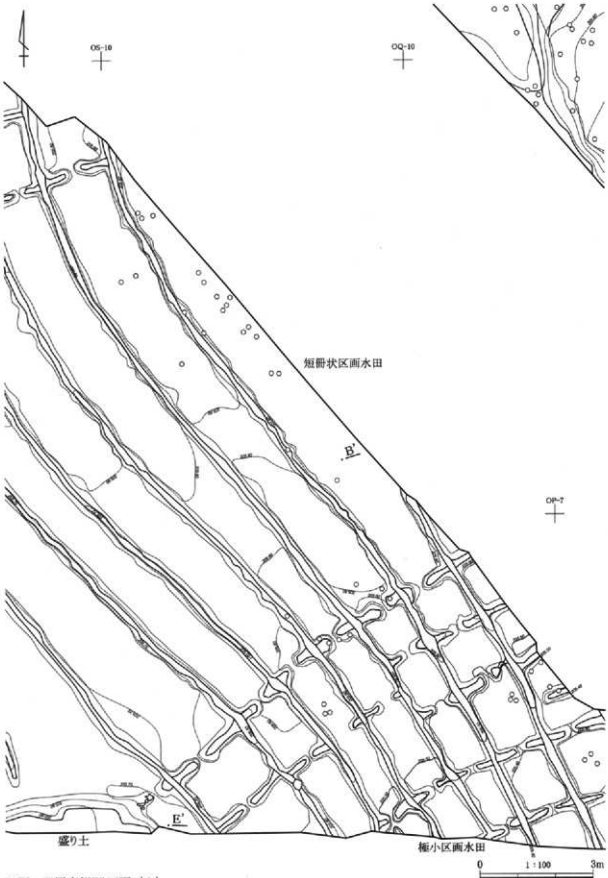
0　1：100　3m



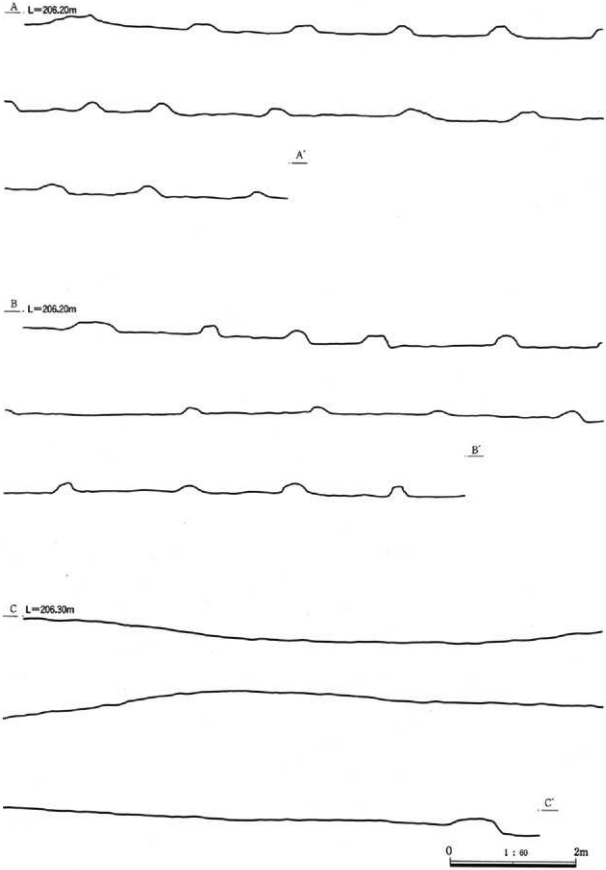

70図　Ⅲ区西側FP下面（2）



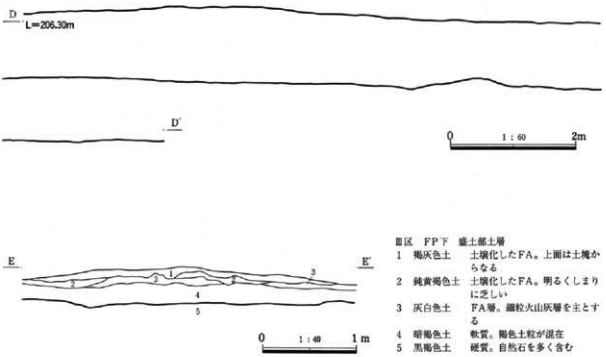

71図　Ⅲ区東側FP下面（1）




72図　Ⅲ区東側FP下面（2）

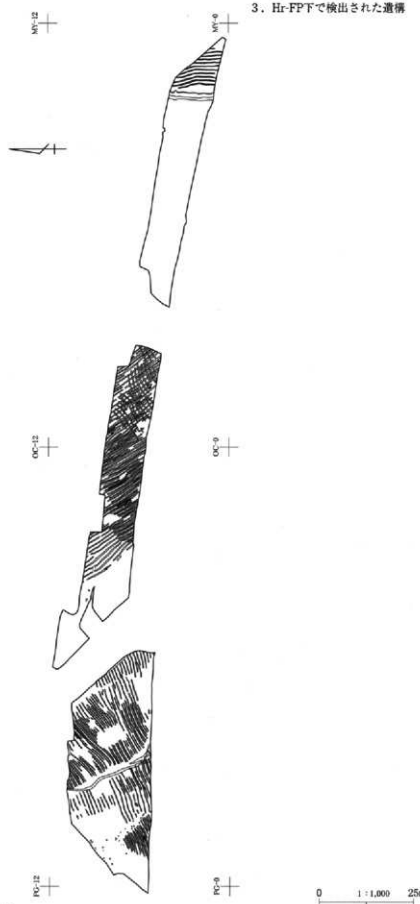



73図　Ⅲ区東側FP下面断面図（1）

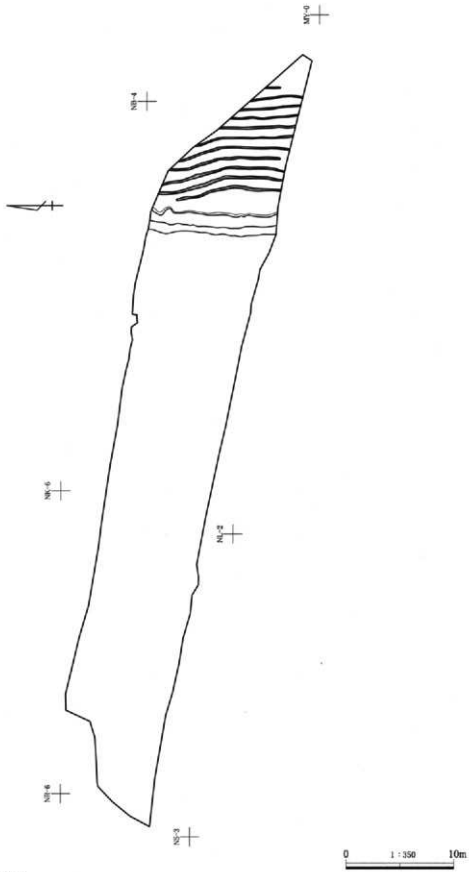



74図　Ⅲ区東側FP下面断面図（2）

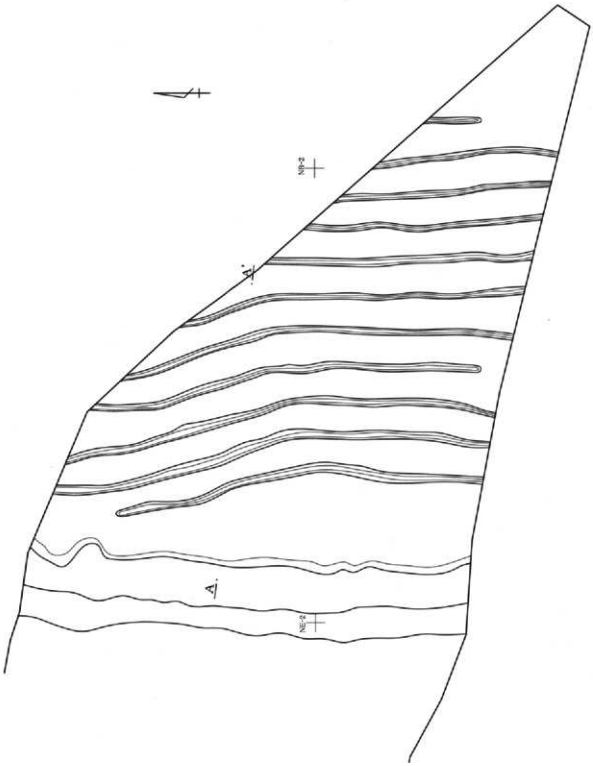
Ⅲ区FP下極小区画水田跡（右下）と榛名山（左上）




75図　FA上面サク状遺構全体図

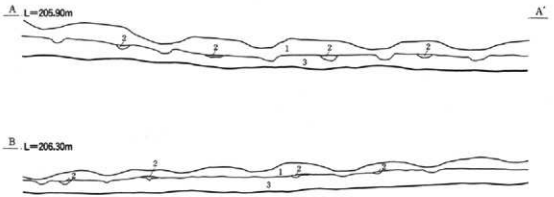



76図　Ⅰ区FA上面全体図



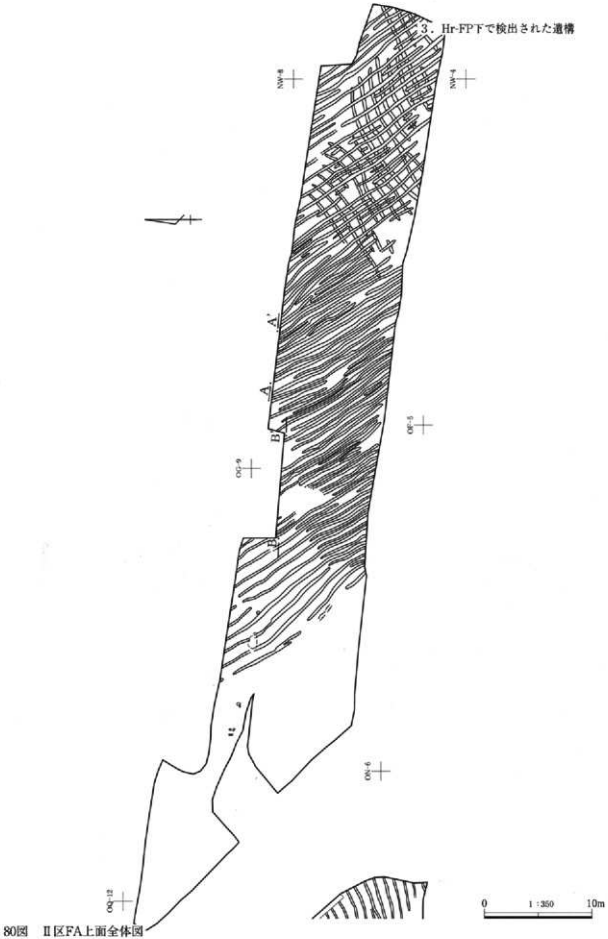
77図　Ⅰ区FA上面サク状遺構

78図　Ⅰ区FA上面断面図

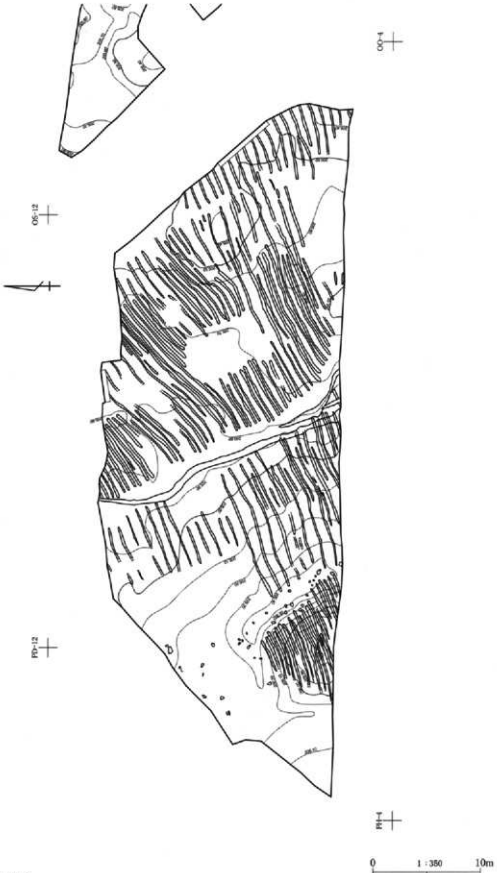



79図　Ⅱ区FA上面断面図

Ⅱ区FA上調査風景




80図　Ⅱ区FA上面全体図




81図　Ⅲ区FA上面全体図

## 4．Hr-FA下の遺構

Hr-FA（FA）下の調査は、榛名山降下火山灰直下面の調査である。FAは火砕流を含むとされているため、おそらく、地表面を焼き尽くした大災害と思われる。FA下面は古墳時代後葉－6世紀初頭前後と捉えられている。

吹屋桃屋遺跡では、10～30cm程のFA堆積が全面に認められた。Ⅰ区東台地斜面は、斜面地形が故、堆積が薄い箇所が認められたが、層位の乱れなく、周辺地帯を覆った火砕流及び火山灰災害を示していた。

調査は、FAを除去することによって当時の地表面を検出することを目的とした。

その結果、

Ⅰ区：中央低地部分で、小区画水田跡を検出した。

Ⅱ区：馬蹄痕を見ることができたが、数箇所凹地以外は西端で道状遺構を確認した。

Ⅲ区：東端でⅡ区西端の道状遺構の延長を検出した。その他では凹地数箇所・馬蹄痕を見た。

以上のように、人間の生活痕跡を遺構と呼ぶならば、厳密な遺構はⅠ区中央部で調査した小区画水田跡とⅡ区・Ⅲ区に跨る道状遺構のみである。また、馬を介在した間接的な生活痕跡として、Ⅱ区からⅢ区にかけて放牧地跡が確認されている。調査では、FA下で検出した馬蹄痕は地形とともに1/40や1/100平面図に全て記録化したが、明瞭な馬蹄痕は少なく、報告書掲載は控えさせていただいた。今後、FA下放牧地跡の調査方法を再考する必要があり、本遺跡で得たFA下面の馬蹄痕跡をもって、放牧地跡として短絡的な性格付けは避けるべきである。検討を要する。

本報告書で扱うFA下遺構は、Ⅰ区で検出した小区画水田跡とⅡ・Ⅲ区で調査された道状遺構である。

**FA下水田跡**（83～86図／図版11）

Ⅰ区中央の瓢没谷で検出した小区画水田である。上層にはFP下水田跡が乗り、2枚の水田面を連続して調査することになった。

本遺跡で調査したFA下水田は、FP下水田跡の範囲とほぼ一致する。すなわち東台地際より、西台地に至るまでの幅約27m間で水田跡を調査した。

尚、東台地にはFP下調査時に検出した3号溝や1号道路上遺構の残存があるがこの両者は、FA下の遺構とは捉えることはできない。しかしながら、4号溝と西側水路・大畦はFA下小区画水田に付帯する施設として考えた。

調査では30区画を確認した。軸長3～5mの不整方形を呈し、FP下極小区画水田跡より大型で規格性に欠ける。この傾向は、当地域のFA下水田跡に共通しており、平野部の例とは差が見られよう。

各畦の高まりは10cm前後で、FP下水田跡と比較すると、遺存状態は良くない。

水口も開けられる例と閉じた例があり、不統一な印象を受ける。水田耕土はFA下の黒褐色粘質土である。下層と色調差も近似するため耕作痕跡も検出されなかった。また、西側にあたるA1027では馬蹄痕が確認された。

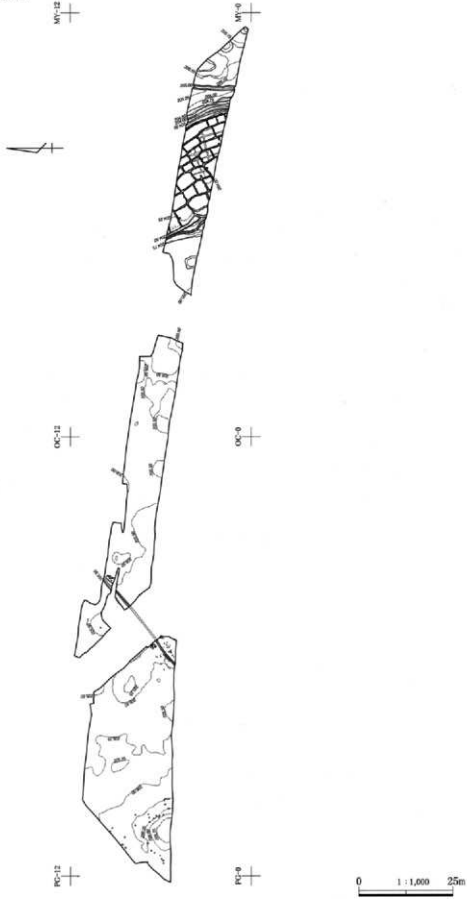
尚、東側区画に重なるように、FP下水田跡の圧痕が見られた。図中破線で示した。

**道状遺構**（88～91図／図版11）

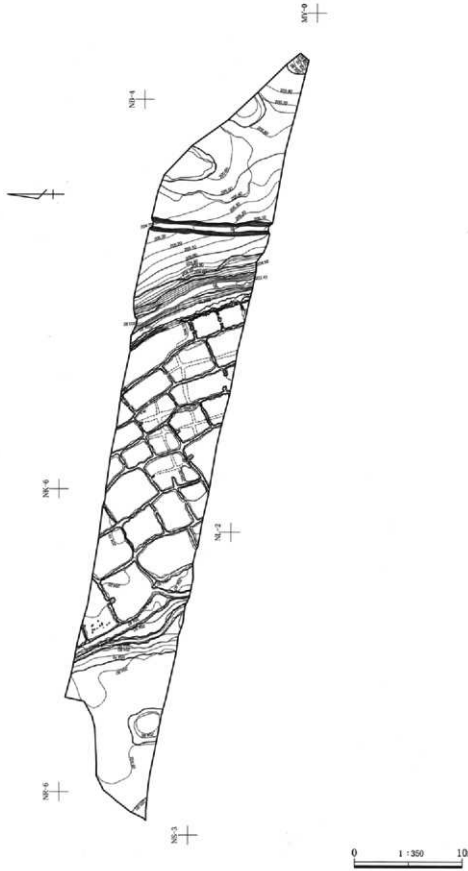
Ⅱ区西端とⅢ区東端を跨ぐ道状遺構を検出している。現道下に隠れる部分が多く、詳細は判然としないが、幅約50cmの緩やかな凹みが北東方向の走向で確認した。底面は硬くしまり、道状遺構としての条件を備える。

**凹地**（87・92図／図版－）

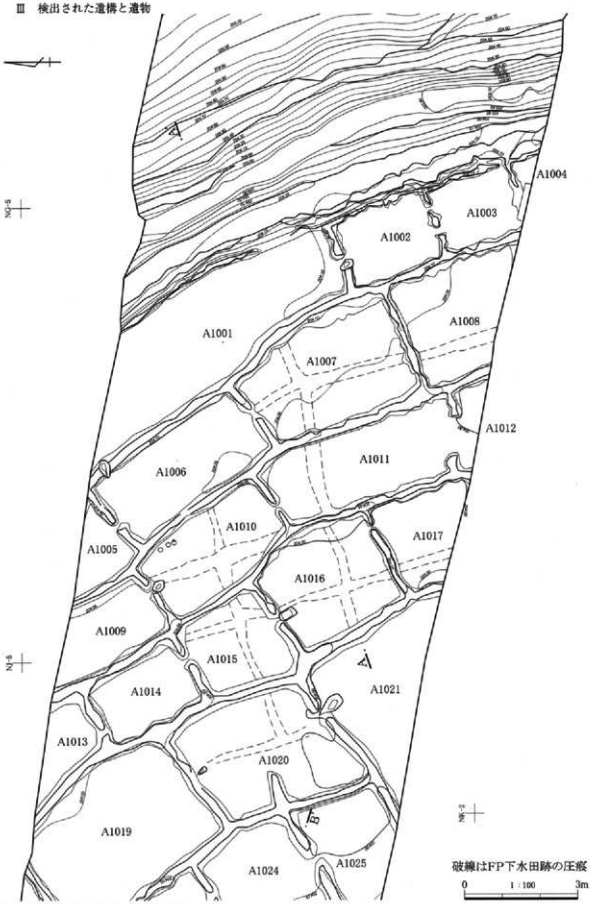
各調査区では、FA下面において凹地を数箇所見ることができた。下位層の古墳時代中葉の住居跡の存在を示すものである。



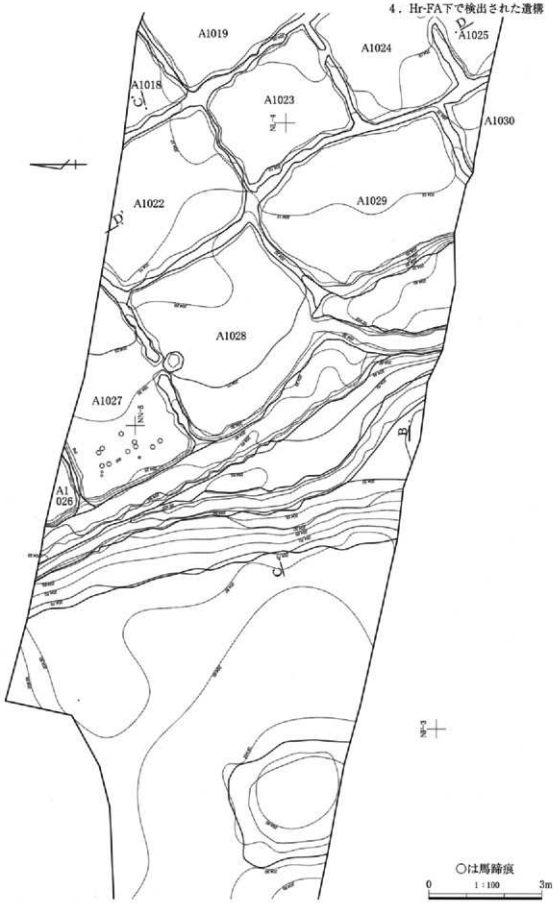

82図　FA下面全体図



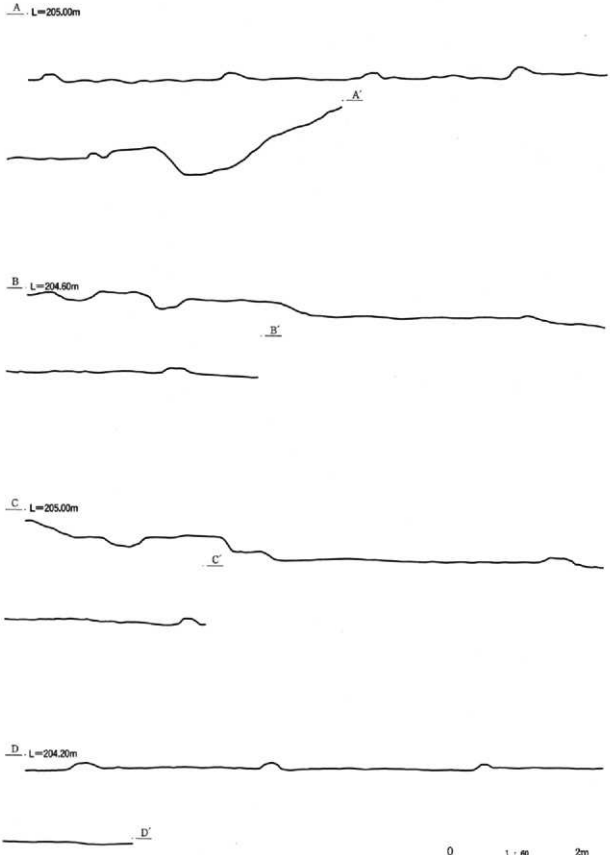

83図　Ⅰ区FA下面全体図



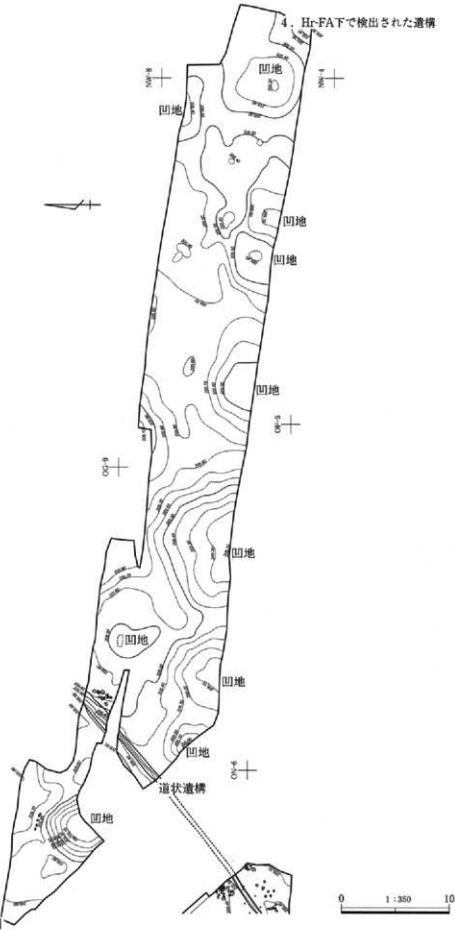

84図　Ⅰ区FA下面小区画水田跡（1）



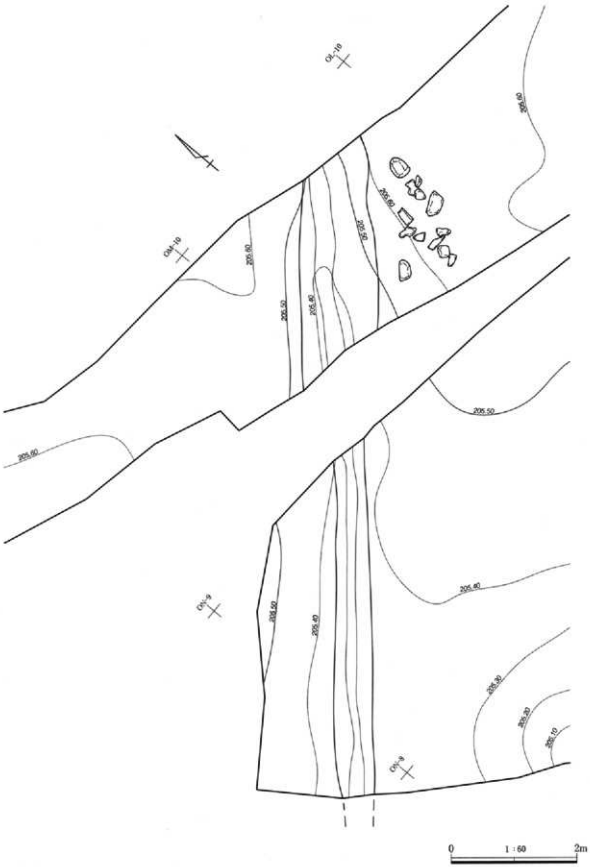

85図　Ⅰ区FA下面小区画水田跡（2）



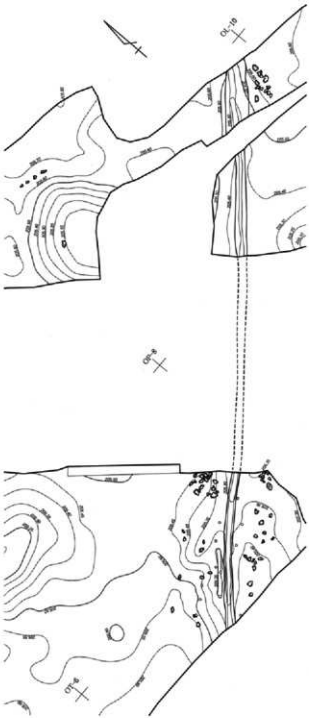

86図　Ⅰ区FA下面断面図




87図　Ⅱ区FA下面全体図

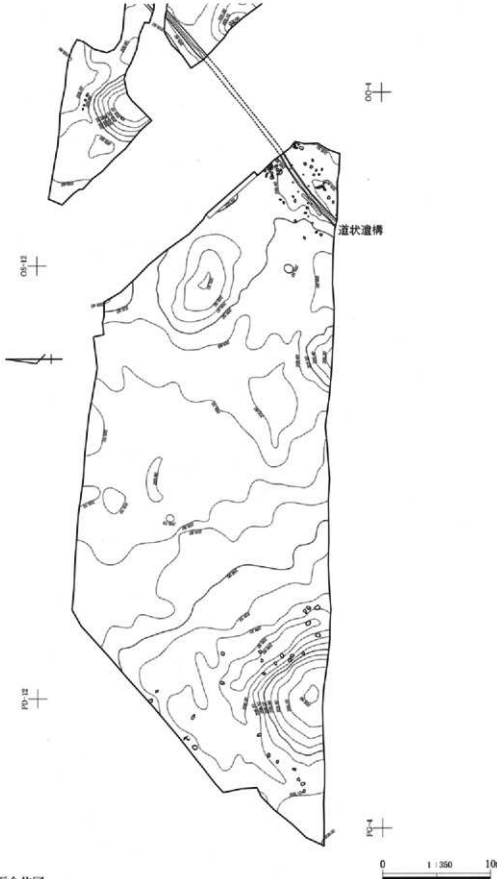



88図　Ⅱ区FA下面遺状遺構

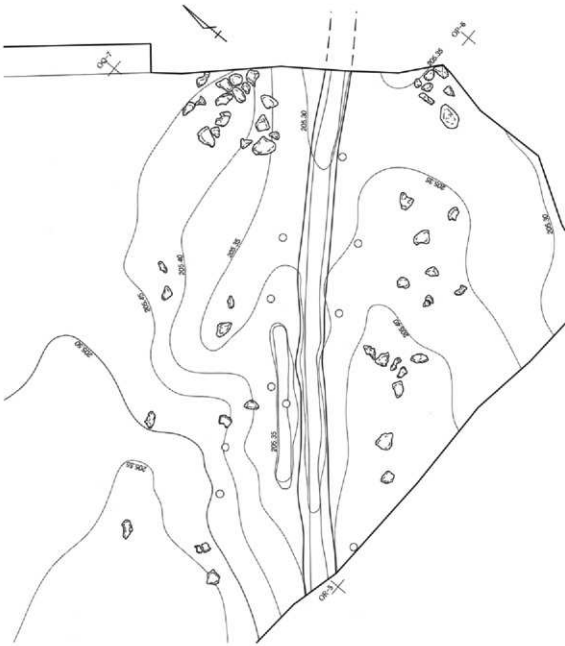


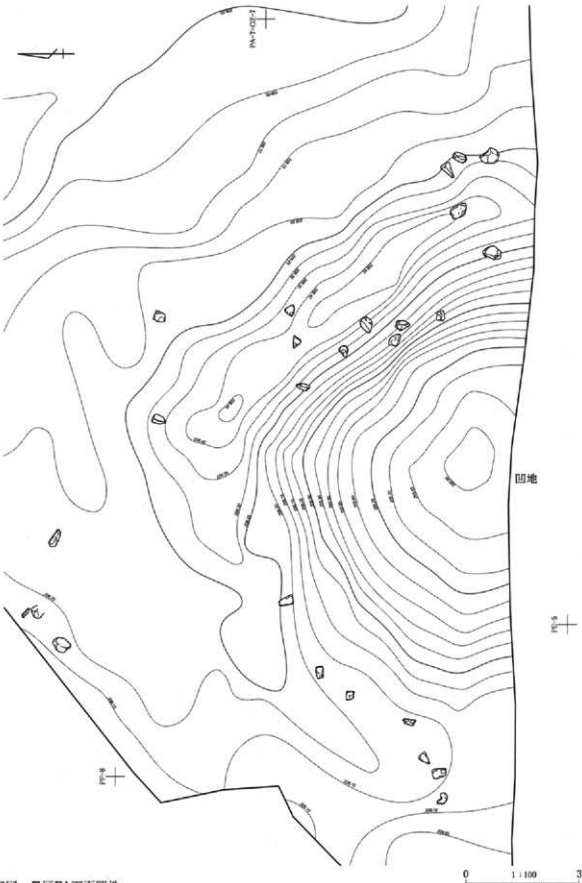
0　1：200　5m

89図　Ⅱ・Ⅲ区FA下面道状遺構




90図　Ⅲ区FA下面全体図


206.00
206.20
206.40
206.60
206.80
207.00
207.20
207.40
207.60
207.80
208.00
208.20
208.40
208.60
208.80
209.00
209.20
209.40
209.60
209.80
210.00
210.20
210.40
210.60
210.80
211.00
211.20
211.40
211.60
211.80
212.00
212.20
212.40
212.60
212.80
213.00
213.20
213.40
213.60
213.80
214.00




92図　Ⅲ区FA下面凹地

# 5．ローム上面で検出された遺構と遺物

## ― 古墳時代中葉の集落跡を中心に ―

### 概要

本節では、FA下黒色土からローム上面（ローム漸移層）にかけて検出された、古墳時代中葉に比定される集落跡を中心とした遺構と遺物に関して述べる。本遺跡の場合、古墳時代地表面がFPとFAによって厚く覆われているため、その良好な遺存度は、他地域の集落遺跡に比してかなり高く、FA下の黒色土中より古墳時代中葉の集落跡の調査を果たせた。竪穴住居跡を主体とした集落跡であるが、他に掘立柱建物跡２棟・土器集中遺構４カ所を検出している。

調査はFA下面の文化層終了後に、人力による下層の黒色土～黒褐色土を下げた。いわゆる遺物包含層であり、多量の土器片が出土した。この際、既にFP下面において凹地として、その存在が把握し得た住居跡等はFA下面よりセクションベルトを設定し、周堤帯の把握に努めた調査を併行した。しかしながら、FA下で確認できた凹地に伴う周堤帯の高まりは、必ずしも中葉段階の住居周堤帯とは一致しないようだ。このため、竪穴住居跡範囲確認の際に土層軸設定の誤りを招き、平面形把握等に不手際を生じてしまった。他の住居跡と同様に、淡色黒ボク土及びローム漸移層において平面形確認を果たすべきだった。

さらに、２棟のみであるが、掘立柱建物跡も重要な施設である。高床式の倉庫や居住施設と思われるが、調査ではその性格までは特定できなかった。

土器集中遺構は４カ所を見た。いずれもⅢ区での検出で、多量の土器を得ることができた。完形土器の存在から廃棄とは思われず、おそらく、様々な祭祀の集合体と考えた。(93～96図／図版12・13)

### 竪穴住居跡

本遺跡で調査した古墳時代中葉の竪穴住居跡は、33軒である。Ⅰ区で４軒、Ⅱ区で17軒、Ⅲ区では10軒を調査したが、Ⅰ区は東台地に分布が偏り、これは東接する中郷田尻遺跡に連続する集落跡と考えられる。Ⅱ区・Ⅲ区で得られた住居跡は一群としてまとまりを見ることができよう。Ⅲ区西に接する北牧大境遺跡では該期住居跡は検出されておらず、現道を挟んで集落の限界が見られるようだ。

以下、個々の住居跡の概略を述べる。

**11号住居跡**（97図／図版32）

Ⅰ区西台地で検出した。Ⅰ区中央の低地部分より西への緩斜面でFA除去後に凹地として確認された箇所である。調査着手時より、凹地を住居跡として意識して、セクションベルトを直交させて黒色土を掘削したが、床面・壁を検出し得ず、小範囲の焼土分布を見たのみであった。おそらく焼土範囲を確認したレベルが床面相当に値するものと思われるが、調査中はさらに掘り抜き、住居跡本体を破壊したものである。

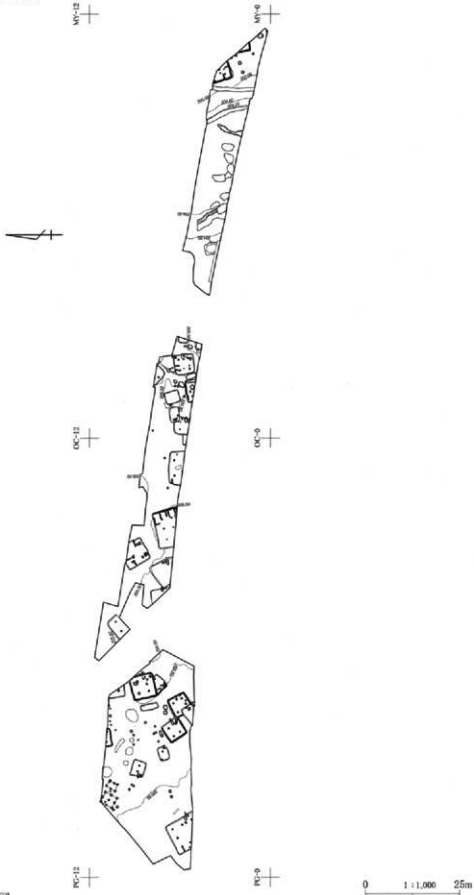
凹地から、住居跡の存在は確実であり、その範囲を把握できなかったのは、ひとえに調査の不手際であり、反省する次第である。記録として、FA除去時の凹地の状況平面図と焼土範囲、埋土中と周辺より出土した鉄製品刀子と勾玉を掲載する。尚、土器類は土師器を数点出土したが、すべて体部小破片である。

**13号住居跡**（98図／図版13・32）

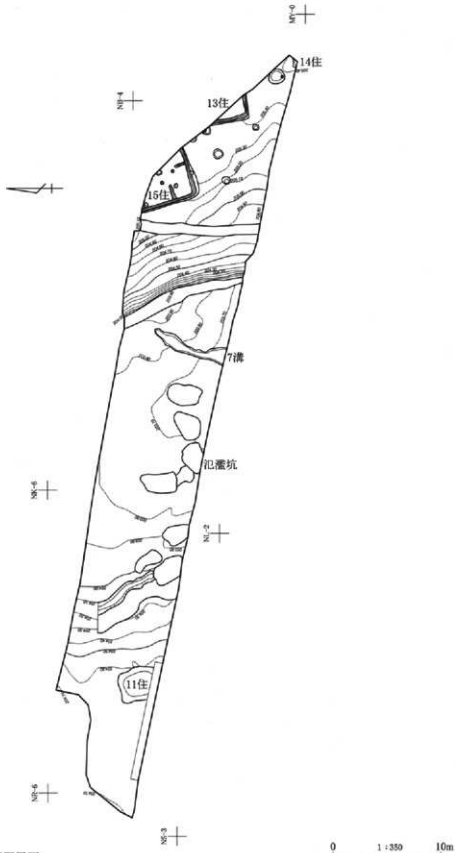
Ⅰ区東台地で調査区北壁にかかり検出した。住居本体の北半以上を調査区域外に延ばす。周辺はほぼ平坦地形で、23～25号土坑が近接する。また15号住居跡は北西約４mに近接するが重複遺構は無い。

平面形は方形と考えられる。南壁・西壁とも直線的で直交する様相から整った形状を示すものである。深さは約60cmを測り、遺存状態は良好である。

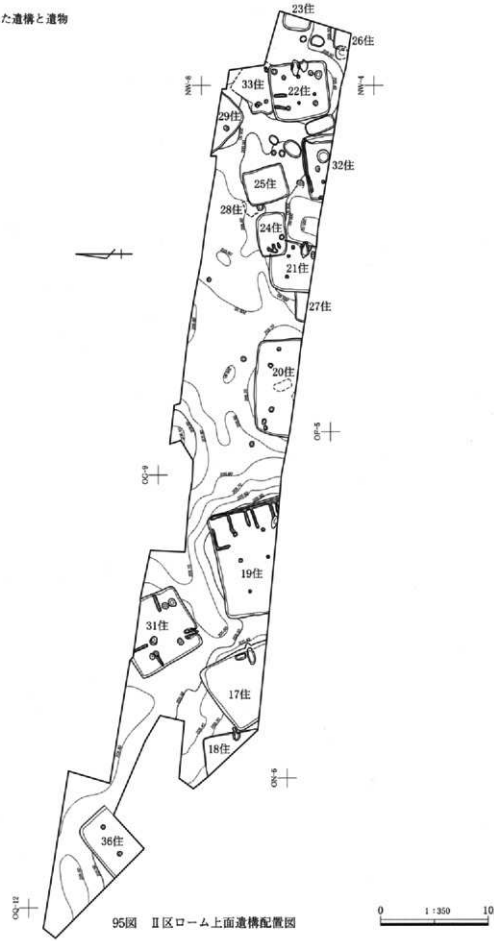
床面はローム層上位に達しており、ほぼ平坦面を



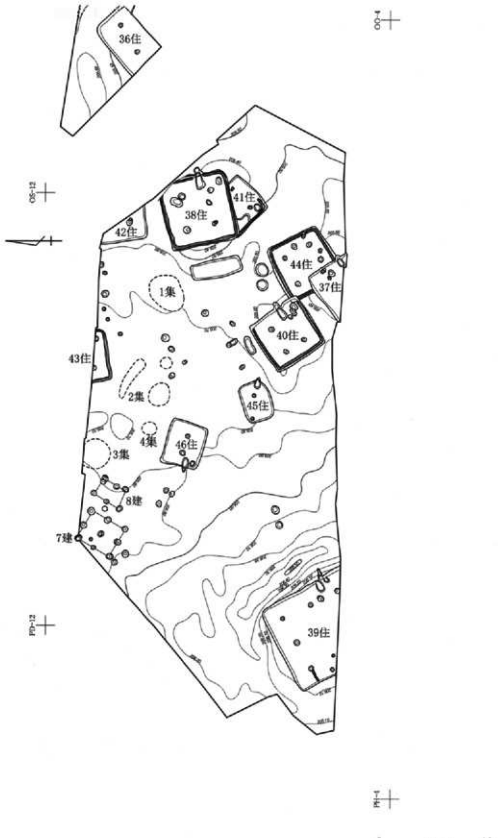

93図　ローム上面全体図




94図　Ⅰ区ローム上面遺構配置図




95図　Ⅱ区ローム上面遺構配置図




96図　Ⅲ区ローム上面遺構配置図

築き、暗褐色土の貼床がなされていた。硬化面は判然としない。

竈・炉址・柱穴は検出されなかった。壁下に壁周溝が巡る。

出土遺物は少なく３点を図示したのみである。高坏（２）は南西隅で埋土中の出土である。また、南壁に炭化材が少量出土している。焼失住居とみるべきであろう。

**14号住居跡**（99図／図版13・32）

Ⅰ区東台地東端で隅部のみの調査となった。29号土坑が近接するが、13号住との間は緩やかながら周堤帯状に高まりが認められた。この周堤帯下より本住居跡が検出され、調査当初は周堤帯を14号住居跡、隅部のみの調査となった本住居跡を16号住居跡と判断して調査を進めた。整理段階で、周堤帯のみの住居跡の存在は煩雑となるため、14号住居跡として掲載した。

床面・柱穴などの施設は判然としない。出土遺物として４点を図示するが、１～３は周堤帯上よりの出土であり、本住居跡の帰属としては疑問が残る。４の高坏脚部破片は埋土中よりの出土である。

**15号住居跡**（100・101図／図版13・32）

Ⅰ区東台地で調査区北壁にかかり検出した。住居本体の北半を調査区域外に延ばす。周辺は西側への斜面地形変換点にあたり、前述の13号住居跡が南東に近接するが、西側には遺構は見られなかった。

重複遺構は無く、単独の検出である。平面形は方形の大型住居跡であろうか。規模は判然としないが、軸長は５ｍを超える例と確信する。深さは約25cm程でやや浅いが、壁の立ち上がりもしっかりしており、良好な遺存状態といえよう。

床面はローム層上位にまで達し、ほぼ平坦面を築く。黄褐色土による貼床が全面にわたり、硬化面も中央部にかけて顕著に認められた。

竈は見られなかったが、床面の中央部にあたる箇所から、小規模な炉を検出した。焼土・炭化物を見ることが出来た。

柱穴はＰ１～Ｐ４を充てたい。配置上は不規則な印象だが、ピット規模から妥当性を求めた。壁周溝は確認された南壁・西壁ともに沿って検出された。さらに、間仕切り溝が両壁から派生している。床下遺構としては、不整形の土坑を中央部から南壁にかけて確認している。

出土遺物量は多く、19点を図示した。中でも、勾玉（19）、臼玉（13～15・18）が西壁際で床直・床直上で出土している。その他では南壁際床直から鉢（３）、器台底部破片（６）、甕（９）も床直出土である。椀（５）は南壁下の壁周溝内より出土した。

**17号住居跡**（102～105図／図版14・32～34）

Ⅱ区西側の調査区南壁にかかり調査した。周辺は後述する19号住居跡等による凹地と周堤帯によって凹凸のある地形で、本住居跡地点も凹地として存在していた。また、黒色土中の確認となったため、壁周囲にはサブトレンチを数本設定して、壁の範囲を確認した。周辺は住居跡が密集しており、東に19号住、西には18号住が接する。また、31号住も北東２ｍに近接する。

平面形は、主軸長約6.6ｍの不整方形を呈する大型住居である。東壁と北壁の走向が直交しておらず、これが歪な平面形の要因となっている。深さは約60cmを測り、極めて良好な遺存度を誇る。壁の立ち上がりもしっかりしていた。

床面は、基盤礫層にまで達しており、黒色土によ

17号住居跡竈

る貼床がなされていた。硬化面は竈周辺に特に顕著で、硬く締まっていた。

柱穴・壁周溝など床面上の施設は確認できなかった。これは、床面の色調が黒色土で、かつ基盤礫層への掘り込みが極めて浅かったためと考える。おそらく存在していたものと反省したい。

竈は東壁に設けられる。煙道部分が2段に突出し、袖及び天井部に自然石を使用した石組み竈である。竈周辺には同様の自然石が散乱しており、竈上部構築体は廃棄時の破壊が加わったと思われる。しかしながら袖石と天井石の一部は残存しており、竈本体の構造が窺い知れた。天井石上には土師器甕破片が乗っていたが、あるいは構築材の一部を構成していたと考えられる。

出土遺物量は多い。33点を図示し得た。土師器類を中心とする。床直出土のものとしては、鉢（4・20）が東壁際で、鉢（8・21）・椀（16）・甕(30)は竈西、椀（11・17）は竈南、椀（14）は床面ほぼ中央、坏（5）・鉢（22）は北西隅部、甕（25）は竈内及び竈南西部で、甕（28）は竈内及び竈南で出土している。量的にも充実した土器量と言えよう。

また、床面中央やや南寄りに炭化材が床直上で出土している。焼失住居と捉えたい。

**18号住居跡**（106図／図版14・34）

Ⅱ区西側の南側調査区壁にかかり調査した。住居跡本体の西半を調査区域外に延ばす。竈の東端が17号住南西隅に接する。本住居跡も緩やかな凹みでその存在を明らかにしていた。

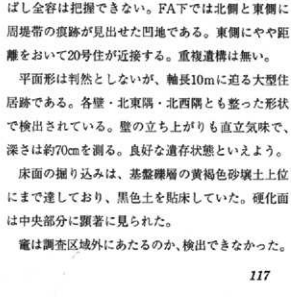
しかしながら、サブトレンチなどの試掘を調査区壁際などに設け、平面形の把握に努めたが、床面が黒色土中に止まり、明瞭な平面形を得るまでに、数回の試行錯誤が繰り返された。最終的には東側で得られた竈を中心に黒色土中の床面を検出し、平面形を確定するに至った。

平面形は西半を調査区域外に延ばすため全容を把握できないが、方形を基調とした中・小型の住居跡であろう。推定の深さは約40cm近くで、遺存度は良好であった。

床面は黒色粘質土を地床とし、明瞭な貼床は確認できず、硬化面も顕著には見られなかった。柱穴・壁周溝も検出し得なかった。これは17号住と同様に、床面の色調が黒色土で、かつ基盤礫層への掘り込みが極めて浅かったためと考えられ、存在を把握できなかった例である。

竈は東壁に突出した煙道をやや北に傾け検出された。床面には袖石と焼土の範囲を確認できた。また燃焼部の中央やや北よりに支脚に供された自然石が立位で出土した。

出土遺物は極端に少ない。土師器細片が多く、図示し得たのは坏１点のみである。



18号住居跡土層

**19号住居跡**（107～110図／図版14・34・35）

Ⅱ区中央やや西側で南側調査区壁に大きくかかり検出した大型住居跡である。南半を調査区域外に延ばし全容は把握できない。FA下では北側と東側に周堤帯の痕跡が見出せた凹地である。東側にやや距離をおいて20号住が近接する。重複遺構は無い。

平面形は判然としないが、軸長10mに迫る大型住居跡である。各壁・北東隅・北西隅とも整った形状で検出されている。壁の立ち上がりも直立気味で、深さは約70cmを測る。良好な遺存状態といえよう。

床面の掘り込みは、基盤礫層の黄褐色砂壌土上位にまで達しており、黒色土を貼床していた。硬化面は中央部分に顕著に見られた。

竈は調査区域外にあたるのか、検出できなかった。

柱穴は、P１～P５である。径20～40cm程の小規模なピットであるが、深さは40～70cmと良好で、配置上からも妥当性のある柱穴と捉えられる。おそらく、調査区域外に対応する数基の柱穴が並ぶものと推定される。また、東壁と北壁北寄りに壁周溝が設けられ、間仕切り溝が延びる。柱穴を囲む範囲外に間仕切り溝が設けられることから、床面中央は床面分割はされていない可能性がある。さらに、東壁の間仕切りには２条平行する例が見られることから、床面分割が複数回行われた状況が看取できよう。新旧は不明である。貯蔵穴は検出できなかった。南壁にかかる不整楕円状の土坑は配置上からも貯蔵穴では無い。

遺物は量的に充実する。43点を図示した。床直・床直上の主な出土遺物を見ると、東壁周辺から床面中央にかけて集まる一群と、北壁の大型自然石周辺に集まる一群に分かれる。前者は椀・鉢（10・12）・甕（29・33・36）・甑（39）が集まり、後者は鉢（５・14）・坩（27）・剣形模造品（43）等が集中する。大型自然石を中心とした屋内祭祀であろうか。

尚、須恵器（１～３）は埋土中の出土である。

**20号住居跡**（111・112図／図版15・36）

Ⅱ区中央の南壁にかかり検出された。南半を調査区域外に延ばす。FA除去時より大きな凹みとして住居跡の存在が予想された箇所である。本住居跡は単独の検出だが、東側に21号住・24号住・27号住が重複して近接する。

平面形は、方形と思われ、19号住と同様に軸長約９ｍの大型住居跡である。深さは約50cmを測り、良好な遺存度である。壁はやや緩やかながら、掘り込みはしっかりしていた。

床面の掘り込みは基盤礫層の黄褐色砂壌土上位にまで達しており、黒褐色土を貼床土としていた。硬化面は中央部より東側に偏る傾向が見られた。

炉ともみるべき焼土集中箇所を２基検出した。１基は南壁にかかり、全容は把握できないが、一方は中央やや北寄りに軸を北西に向け、焼土塊を集めた状態で確認した。掘り込みは極めて浅く、土坑状にはならない。竈は確認できなかったが、あるいは調査区域外に想定できよう。

柱穴はP２・P３が配置・規模とも可能性が高い。またP１・P４・P５とも深さは30cmを超えており、柱穴とみることもできよう。貯蔵穴は確認できなかった。

出土遺物量は多く、11点を図示した。主な出土遺物としては坏・椀類（１～５）・甕（８）は北壁際床直・床直上に集まる傾向がある。19住でも見られたが、北壁際における何等かの屋内祭祀の痕跡であろうか。また、管玉（11）は東壁際に見ることができる。

東壁際に、炭化材の集中をみた。細かな植物繊維がまとまって炭化したもので、組み合わせた痕跡も若干見られる。あるいは壁材に掛かる編み物の痕跡であろうか。焼失住居跡と見做せよう。

20号住居跡炭化材出土状況

**21号住居跡**（113・114図／図版15）

Ⅱ区中央やや東側で、調査区南壁にかかり検出した。東南隅と西南隅及び南壁を調査区域外に延ばす。FA除去時には緩やかな凹地として、住居跡の存在を示唆していた。周辺は竪穴住居跡が群在しており、24号住や27号住が重複する。また、東側には周堤帯を挟んで32号住が近接する。住居跡の重複・周堤帯の存在により、平面形の把握が困難であり、サブトレンチを壁各所に設定し、その把握に努めた。

平面形は方形と思われ、主軸長4.5mを測る中型の竪穴住居跡である。深さは約50cmで良好な遺存度である。

床面の掘り込みは黒色土中に留まり、基盤礫層上面の一部が床下調査段階で認められたが、床面や柱穴の把握は黒色土中で行った。貼床はほぼ全面に認められ、黒色土を埋めていた。硬化面は竈周辺に認められたが、全体に軟弱な印象を得た。

竈は東壁に設けられる。黄褐色粘質土を袖材とし、焼土化した構築材崩壊土が周辺に散乱していた。同時に大型自然石も多数散乱しており、これらが構築材に使用ていた可能性も高い。おそらくかなり破壊を加えて廃棄したものと考える。ただ、燃焼部中央やや北寄りに小型ながら支脚石が位置を保っていた例は注意したい。

柱穴はP１とP２を配置・規模から確定したい。対応する南側の柱穴は調査区域外にあると判断した。貯蔵穴は竈南の不整楕円状の土坑（P４）を充てる。深さ約20cmとやや浅い。

遺物は、遺存度の割には極めて量が少なく、小破片・細片のため、図化に耐え得る例が無かった。

**22号住居跡**（115～118図／図版15・36・37）

Ⅱ区東端の住居跡群中で検出した。FA除去時には明瞭な凹みとして、明瞭に住居跡の存在を示していた。北側に33号住が重複し、32号住が西に近接する。東には23号住と26号住が至近距離にある。

平面形は軸長約5.3mの整った正方形を呈する。深さは約50cmを測り、壁も直立気味でしっかりと掘り込まれていた。

床面は黄褐色基盤礫層上面にまで掘り込み、鈍黄褐色土を貼床土としていた。硬化面は竈周辺から中央部にかけて顕著であり、貼床土と共に２面を観察することができた。

竈は東壁に２基を確認した。南北に接して検出され、北側竈への作り替えを把握した。土層観察等により、北側竈は両袖が残り、南側竈は袖が破壊され、構築土も流れた痕跡が見受けられた。尚、南側竈使用面下では、支脚抜き取り坑が検出されている。

柱穴はP１～P４を充てたい。P４のみ35cmと浅いが他は50cm前後の深さで、配置上も良好な柱穴である。重複痕跡はなく、竈作り替えが単独で行われた例として、注意しておきたい。

貯蔵穴は南東隅やや西よりのP８が妥当であろう。その他では北東隅のP９も可能性がある。尚、P５・P６も住居跡中央で長軸上にのるピットである。柱穴あるいは間仕切りの支持坑など様々な性格が想定できよう。

壁周溝は確認できなかったが北壁西寄りに間仕切り溝が２条確認された。１条はP３と接しており、柱と間取りの関連を窺わせる配置である。

遺物は充実した出土量である。41点を図示した。床直・床直上に近い出土例では、１・15の坏、29の坩が北壁中央周辺で、４・19の坏は床面中央で、坏９・14、小型甕が南壁周辺、甕（38）が東南隅、鉢（32）が竈北で出土している。土器以外では目立った出土はないが、良好な組成と考える。

**23号住居跡**（119図／図版15・37）

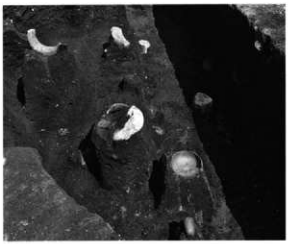
Ⅱ区東端の調査区東壁にかかり調査した。住居跡東側の大半を現道下の調査区域外に延ばす。周辺は平坦地形で、南西に38号土坑、南に26号住が近接する。重複遺構はなく単独の検出となった。

平面形は方形と思われ、軸長（短）が2.6m程の小型の住居跡と考えられる。深さは40cmを超えており、遺存度は良好である。壁の掘り込みも直立気味でしっかりしていた。

床下の掘り込みは黄褐色基盤礫層上面にまで達していたが、床面のレベルは黒色土中にとどまり。黒褐色土による貼床がなされていた。硬化面は確認できなかった。

竈・柱穴・貯蔵穴・壁周溝も確認できなかった。

遺物は調査範囲の割には多くの出土を見ている。６点を図化した。埋土中の出土が多いが比較的大型の破片が目立つ。床直遺物としては２の坏、４の高坏脚部が挙げられる。



23号住居跡遺物出土状態

**24号住居跡**（120～122図／図版16・38）

Ⅱ区中央やや東側で、前述の21号住北東隅に重複して検出された。東に25号住・焼土のみの検出となった28号住・36号土坑が近接する。

凹みとしては確認されず、遺物の集中が認められるため、住居跡として調査したが、黒色土中の確認のため、平面形の把握に不手際を重ね、最終的には黄褐色基盤礫層上面で確定した経緯がある。

平面形は主軸方位を西に傾ける長方形を呈し、約3.9×2.7mを測る。深さは黒色土中からは50cmを測るが前述のように確認面からは10cm程度である。

床面は黄褐色基盤礫層を上面にまで達し、黒褐色土と粘土による貼床が薄くなされていた。硬化面は中央部分に顕著に認められた。

本住居跡の特筆すべき点は西壁より内側に竈に類似した炉を検出したことである。焼土化した粘土塊が集まり、自然石と甕等の土師器が出土している。粘土塊の範囲を精査し、自然石や焼土の範囲の様相から、セクション軸ａ－ａ′よりやや南が燃焼施設長軸と考えた。壁からは距離を保ち、煙道を持たないことから、「炉」として位置付けたが、粘土や自然石の存在から、「竈」の前駆形態と見ることも可能である。さらに、床面西側への偏りは、従来の東竈とは差が見られ、当時の調理施設設営の段階的な傾向を窺う好資料となるだろう。

柱穴・壁周溝は検出できなかった。貯蔵穴として土坑１基を南壁寄りに確認した。

遺物は比較的まとまって出土している。特に「炉」周辺に集中する傾向が見られる。土器類を中心に19点を図示した。主な出土土器としては、炉内及び周辺の床直出土として、４・５の椀、11・13・17の甕、19の甑が挙げられよう。椀（２）は北東隅、坏（３）は南東隅で床直出土である。

24号住居跡炉

**25号住居跡**（123・124図／図版16・39・40）

Ⅱ区東側の調査区中央で調査した。28号住・36号坑と重複する。

平面形は3.9×3.2mを測る不整方形で、長軸を北北西に向ける。深さは約40cmを測るが、調査により床面より上部は南西部分を逸失してしまった。平面形は床下調査によって得られた輪郭を充てている。

床面の掘り込みは黄褐色基盤礫層上面にまで達しているが、床面は黒色土中に留まり、平面形の把握に手こずった。ほぼ平坦面を築く床面で、黒褐色土による貼床がなされていた。硬化面はほぼ床面全域に広がる。壁は直立気味に立ち上がる。

竈・柱穴・壁周溝は検出に努めたが確認できなかった。

床下遺構ではないが、床下調査によって床中央がやや盛り上がる形態を検出した。

出土遺物は多いが完形の出土はなく1、破片類19点を図示した。主な出土土器としては、坏（２）が

東壁際床直上、甕（9）は中央やや南西よりで床直上、甕類（11・12・15）は床面北側で集中して出土している。

**26号住居跡**（125図／図版16）

Ⅱ区東端で調査区東南隅にかかり調査された。隅部のみの検出である。22号住や23号住が近接し、住居群の一隅をなすものである。30号土坑が重複する。平面形は方形と思われ、深さは70cmを測る。良好な遺存度で、壁も強く直立気味に立ち上がる。

床面は黒色土中に留まり、暗褐色土を貼床としていた。硬化面は確認できなかった。

竈・柱穴なども検出し得なかった。

出土遺物も極少量であり、図下に耐え得る例がなかった。尚、床面南西隅にかけて炭化材が数点出土している。焼失住居と判断できよう。

**27号住居跡**（126図／図版16・38）

Ⅱ区調査区中央で20号住と21号住に挟まれ、調査区南壁にかかり調査された。21号住に切られる重複関係である。21号住調査中に南壁サブトレンチの延長により検出された住居跡である。

平面形はおそらく方形であろう。深さはやや浅く確認面より約25cmを測る。

床面の掘り込みは基盤礫層上層にまで達しており、黒褐色土を貼床としていた。僅かな凹凸があり硬化面は顕著ではなかった。

竈・柱穴は検出されなかった。焼土の集中する箇所が東側に認められたが、炉址としての在り方ではなく、焼土塊状の堆積と判断し、焼土の廃棄された例と考えた。

遺物は、6点を図示し得た。完形の出土はなく、甕（4）は床直、坏（1）・甕（3）は床直上の出土である。

**28号住居跡**（127図／図版16・40）

Ⅱ区東側の調査区中央で調査した。25号住・36号坑と重複する。炉（焼土）範囲のみの調査に終始した。各住居跡平面形確認の際、焼土と遺物が集中し、住居跡として精査を重ねたが、北側や西側に壁・床面が検出されず、焼土の範囲と出土遺物のみをもって住居跡として報告する次第である。

調査時は、床面掘り込みが、黒色土中の極浅いレベルで留まった可能性があり、極めて浅い住居跡として捉えた。しかしながら、焼土は緩やかな凹み堆積しているものの、竈や炉としての形態ではなく、例えば小規模な土器集中遺構としての位置付けも妥当性を帯びよう。本報告では住居跡として掲載するが、土器集中遺構―祭祀遺構としての性格付けも可能である。

出土遺物は、炉内出土の土器を中心にして8点を図示した。坏（1・2）はほぼ完形の坏である。

28号住居跡（焼土）遺物出土状態

**29号住居跡**（128・129図／図版16・40）

Ⅱ区東側で調査区北壁にかかり検出した。北側の大半を調査区域外に延ばす住居跡である。

規模などは不明で、おそらく方形の平面形であろう。深さは45cmを測り、遺存状態は良好といえよう。

掘り込みは黄褐色基盤礫層上面にまで達しているが、床面は黒色土中に留まり、平面形の把握に手こずった。ほぼ平坦面を築く床面で、黒褐色土による貼床がなされていた。硬化面は顕著ではなく、全体に軟弱な床である。

竈・炉址は確認できなかった。焼土の散布東壁際に見たが、あるい調査区域外の竈の影響であろうか。

柱穴はP１を充てたい径約50cmで深さも60cmを超えることから、良好な例と見た。貯蔵穴・壁周溝等は確認できなかった。床下土坑としてはP２～P７を充てたい。

遺物は比較的多く出土しており、22点を図示し得た。ただ、完形の土器類は無く、床直出土の坏（２）・椀（７）が主な出土土器であろうか。その他では孤網石が南壁と東壁にかけてまとまって出土している。

**31号住居跡**（130～134図／図版17・41・42）

Ⅱ区西側の調査区北壁にかかり調査された住居跡である。用地の都合上、北側と南側に２分割し、２度にわたり調査をしている。南側の竈周辺が先行調査され、後日北側の床面・壁を検出した。先行調査の分を併せて、床下調査段階で住居跡全体像を把握できた。重複する遺構はなく、単独の検出となった。南側に17～19号住が近接しており、一群をなすと思われる。しかしながら、FA下の凹みとしては認知されず、おそらく住居廃棄後の埋土行為が働いたものと考えられよう。

平面形は整った正方形を呈し、規模は6.8×6.2mを測る。中型の住居跡と言えよう。深さは70cmを超え、壁の立ち上がりもしっかりしており、良好な遺存度である。

床面の掘り込みは基盤礫層上面にまで達しており、床下調査では礫が全面に露出した。床面はほぼ平坦で暗褐色土を貼床していた。硬化面は南側の竈周辺から中央部にかけて顕著である。

本住居跡の特徴は竈位置である。南壁に設けられており、西側へ片寄る。竈主軸は、住居主軸より若干南に傾いており、片寄った印象を受ける。

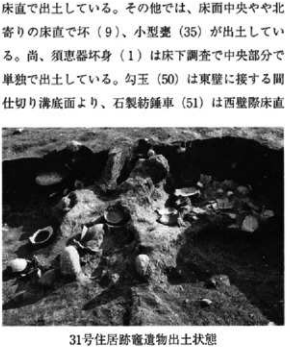
袖等は黄褐色粘質土を構築材としており、芯材として自然石が袖石として立てられていた。袖の突出は著しく、反面燃焼は壁内に収まる程度である。

遺物も周辺より多量に出土しており、竈東には甕口縁部が逆位で出土した。置き台としての再転用であろうか。

柱穴はP１～P３・４を配置・規模から特定する。径40～60cmで、深さも30cm前後で安定する。おそらく調査区域外に対応する１基が存在するのであろう。貯蔵穴は東南隅に近いP６が妥当であろうか、竈からの距離はあるが、規模は良好である。

壁周溝は確認されなかったが、北壁・西壁・東壁より短い間仕切り溝が派生する。西壁の間仕切り溝はP４と接しており、柱穴と床面間取りの関係性を窺わせよう。

遺物の出土量は竈周辺を中心にして充実しており、51点を図示した。前述の竈脇の置き台甕は45である。置き台北より、鉢（22・33）が床直で、竈からは、椀（14）・鉢（28）・小型甕（40）・甕（44・47）が出土している。甕類は竈東や南壁際、床面中央付近とも接合しており、廃棄の状態が示唆されよう。竈西には前述の甕類の他に、椀（６・13）・坏（10）・鉢（30・32・34）、小型甕（41・42）が床直・床直上で集中する。西南隅には埋土下位ながら高坏坏部（21）が出土する。南壁際-竈東には、坏（３）、椀（２・15・25）、高坏（18～20）、鉢（24）、小型甕（37・39）、甕（43）、甑（48）等が床直～床直上・埋土下位に集まる。南東隅の貯蔵穴としたP６周辺は、椀（13）、鉢（23・29）、小型甕（36）が床直で出土している。その他では、床面中央やや北寄りの床直で坏（９）、小型甕（35）が出土している。尚、須恵器坏身（１）は床下調査で中央部分で単独で出土している。勾玉（50）は東壁に接する間仕切り溝底面より、石製紡錘車（51）は西壁際床直



31号住居跡竈遺物出土状態

より椀（11）と供に出土している。

また、北壁際に炭化材が出土している。焼失住居と考えたい。炭化材の種類も、草本状あるいは細枝状の炭化材が北壁に平行して出土しており、梁・桁材ではなく、屋根材や壁材に充てられた部材の炭化と見ることができた。

**32号住居跡**（135図／図版18・42）

Ⅱ区東側の調査区南壁にかかり検出された。南半を調査区域外に延ばす。周辺を21号住・22号住・25号住が近接しており、住居群内に位置する。また、37号土坑や104号土坑、136号土坑が接するように、住居跡・土坑が群在する様相である。本住居跡床面にも105号土坑が重複する。

FA除去時には極僅かな凹みにしか過ぎず、周辺の住居跡凹地とは大きな差があった。31号住と同様住居廃棄後の埋め戻し行為が想起された。

平面形は、中型の方形と捉えられ、軸長約5.8m、深さ30cmを測る。壁の立ち上がりは良好だが、やや浅く遺存状態は他に比してやや悪い。

床面の掘り込みは黄褐色基盤礫層にまで達しており、暗褐色土を貼床土としていた。床面は凹凸をもつもののほぼ平坦面が意識され、中央部にかけて硬化面が認められた。

柱穴はP１・P２を充てたい。径約35cm、深さも30cm前後で規模・配置上も可能性が高い。また、北東隅で検出されたP３も補助柱穴とする位置付けも考えておきたい。貯蔵穴は確認できなかった。壁周溝は北壁と西壁に見ることができる。

竈も確認できなかったが、北壁寄りに、焼土・炭化物の集中が見られた。緩やかな浅い皿状の落ち込みも付帯することから、炉址として位置付けたが、位置的な問題もあり、検討を有する。

本住居跡では、北側にテラス状の段を検出した。10cm程の高まりであるが、平坦面が続くことから、何等かの施設かもしれない。

また、床面中央P１にかかり僅かな高まりを検出したが、これは性格不明である。

5．ローム上面で検出された遺構と遺物

床下調査では中央部と壁際を掘り残す、住居構築時の特徴を見ることができた。東壁際の小ピットも壁材に関わる杭等の存在が想定される。

出土遺物は少なく、５点を図示した。１は住居確認時の埋土上層の出土である。鉢（３）、高坏口縁部（４）、甕（５）は床直出土である。

**33号住居跡**（136・137図／図版18・43）

Ⅱ区東側で、22号住と重複して調査した。北西に29号住が近接しており、周辺住居跡の調査途中、焼土と遺物の出土が果たせ、住居跡として把握するに至った。そのため、確認面は本住居跡の床面とほぼ同じレベルであり、平面形の把握は不確定である。北壁と東壁は床面の範囲からの想定である。

平面形は４ｍ前後の小型の住居跡で、深さも10cmと極めて浅く、遺存状態は良くない。壁は南西隅周辺のみの検出で、立ち上がりも弱く、不安定な印象である。

床面は黄褐色基盤礫層上面で止まり、砂質で軟弱であった。硬化面も認められなかった。

本住居跡の特徴は竈の位置である。西側壁に設けられる。住居跡確認時の焼土・遺物の散布はこの竈周辺に限られ、通常の東竈を念頭においたため、竈位置の特定に苦慮した。煙道部を西壁外に緩やかに突出し、燃焼部に焼土・遺物・自然石を集中する。上記の調査不手際のため、竈土層の観察が限られ、袖等の構築材は確認できなかった。しかし、自然石は燃焼部を囲繞しており、燃焼施設としての位置付けは妥当である。

遺物は、少量が出土したが、破片類を中心に14点を図示し得た。高坏脚部（３）は煙道下端で、燃焼部と周辺では甕破片（６・８・９～11）の出土が目立つ。

西竈を付帯する住居跡として、位置付けたが、24号住「炉」や31住南竈の在り方とも比較検討する必要があろう。

**36号住居跡**（138・139図／図版18・43）

Ⅱ区西端で検出した。用地の都合上、Ⅱ区調査の最終段階で着手した住居跡である。さらに、調査区内に立つ電柱の保護のため、東半分の調査が及ばず、現道下の調査区域外部分と併せて、住居跡3/4が未調査となった。

FA除去時に明瞭な凹地として、住居跡の存在を示唆した地点である。規模は不明だが、おそらく大型の住居跡と想定されよう。深さは80cmを測り、良好な遺存度を示す。

掘り込みは、基盤礫層にまで達していたが、基盤礫層自体が黒褐色土で構成されており、そのため壁の検出は僅かな色調差で判断した。

床面はほぼ平坦面で黒褐色土を貼床としていた。硬化面は顕著ではなかった。

竈は確認できなかったが、中央部にかけて、焼土が散布しており一部を炉址として捉えた（a－a′）。

柱穴はP1・P2を特定した。規模・配置上も良好である。あるいは、西側調査区域外に延長する柱穴も想定できよう。

出土遺物は比較的多く、15点を図示した。坏・椀類（1～4）、小型甕（11）が炉址東で集中して出土する。床直～埋土下位の出土であり、一括性は高いものと考えられる。

Ⅱ区ローム上面全景（西から）

**37号住居跡**（140・141図／図版18・43・44）

Ⅲ区南東部で、調査区南壁にかかり検出した。南半を調査区域外に延ばす。東側を44号住と重複し、40号住居跡が北西に近接するように、住居跡群内に占地する。FA除去時には緩やかながら凹地として確認され、住居跡としての存在が示唆されていた。

平面形は方形と思われ、深さは約50cmを測る。遺存状態は良好である。

床面は、黄褐色ローム質土を掘り込み、ローム塊を主体とする暗褐色土を貼床としていた。硬化面は竈周辺から中央部にかけて顕著で、一部では光沢を見せるほど硬く締まっていた。

竈は、東壁に設けられる。ローム塊を構築材とし、燃焼部前面には大型自然石を両袖石として立てていた。また、板状の自然石が両袖に懸けたままの状態で出土しており、極めて良好な遺存状態を示していた。燃焼部は緩やかな凹みを有し、焼土塊・炭化物を多量に充満していた。構築材崩落土も含まれる。また、燃焼部北寄りには、支脚として小型の円礫が立てられていた。

柱穴はP１を充てたい。径30cm程度の小規模のものだが、深さは30cmを超えており、配置上も妥当と考えた。近接するP２は50cm以上の径ではあるが、深さは25cm程で、貯蔵穴等の性格を想定したい。

遺物はやや少ない。14点を図示した。高坏（３）は北壁際の床直から出土している。５の高坏坏部はP２内より、９の小壺甕は竈北で、10の甕は竈内より出土している。尚、床面からは炭化材も出土している。焼失住居と位置付けたい。

37号住居跡竈

**38号住居跡**（142～147図／図版19・44～47）

Ⅲ区東側で、調査区北東壁に北東隅部を僅かに掛けて調査された。41号住と重複し、北に42号住が近接する。FA除去時より凹地として認知されていた住居跡である。凹地上面より、セクションベルトを設置し、検出作業に努めたが、凹地そのものがFA直下面ではかなり改変されていたのか、必ずしも住居跡に合致する凹地ではなく、若干ずれが生じていた。特に住居軸とセクション軸とは大きな差となってしまった。故に平面形の把握は、確認面を下げ、周辺基盤土色調を一定にして、本住居跡の調査を行った。

平面形は主軸長約6.5cmの正方形を呈する。四辺の壁も整った形態で、標準的な平面形を呈していた。深さは60cmを超え、良好な遺存度を示す。

床・壁は、黒色土中に留まり、その検出は僅かな色調差を目安に行った。

床面はほぼ平坦で、褐色土と暗褐色土を貼床土としていた。また、貼床土に加え、床面西側には白色灰が広く認められた。硬化面は床面全体に広がるが、竈周辺に顕著な光沢が見られた。

竈は、東壁に設けられる。煙道は強く壁外に突出し、燃焼部両脇には袖石を対になるように立てていた。構築材は黄褐色粘質土であり、若干焼土化して崩壊土として検出した。また、燃焼部ほぼ中央に支脚としての自然石が立てられていた。

柱穴はP１～P４を配置・規模から充てたい。極めて可能性の高い配置である。P４は２基の小ピットが重複した状態で確認されたが、建て替えあるいは補強に伴う柱穴の付け替えだろうか。貯蔵穴は南東隅に設けられた長楕円状の土坑（P５）を配置から考えた。その他のピットであるP６・P７は性格不明である。P６はあるいは床下土坑の可能性がある。壁周溝は、竈部分を除き全周する。

遺物量は極めて多く、71点を図示した。主立った出土例を挙げると、竈北には坏（11）の他、甕（48・52・57）、竈南から貯蔵穴周辺には坏（10）、椀（26）と伴に甕（46・51・55）や甑底部（69）や

42の坩が出土する。南壁際にも出土の偏りが見られ、5・6のミニチュア土器と砥石（71）、小型甕（41）・甕（50）、南側床面には坏類（12・18・22）と小型甕（43）が集まる。須恵器ハソウは床面ほぼ中央で、須恵器大甕（70）は床面西側で出土している。いずれも、床直や竈内の出土で良好な出土関係を示している。尚、須恵器大甕は39号住や42号住、1号土器集中・2号土器集中出土などの同一破片とも接合関係にある。

**39号住居跡**（148～150図／図版20・48）

Ⅲ区西端で南壁に掛かり調査された大型住居跡である。本遺跡屈指の竪穴住戸跡で、周堤帯の残存が見られた。調査区域外に南側1/3程を延長するため、全容は把握できないが、主軸長約8.4m、深さは約70cmを測る、方形の大型住居跡である。確認面からの周堤帯上からの深さは、1m近くあり床面からは外への視界が遮られる程の高まりである。FA除去時より、周堤帯と併せて大きな凹地として、大型住居跡の存在が予想されていた。

掘り込みは、黄褐色基盤礫層上層にまで達しており、貼床として黒褐色土が充てられていた。ほぼ平坦面を築き、硬化面は竈周辺から中央部にかけて確認できた。

竈は東壁に設けられる。おそらくやや南寄りへの偏りと見られる。焼土の堆積が薄く、また、竈に使用された自然石と基盤礫層の自然石の分別がつかず、竈の特定に不手際が生じ、土層の観察が果たし得なかった。煙道部は長く壁外に突出し、燃焼部はやや狭く、煙道部にかけて緩やかに昇傾斜を見せていた。袖石が燃焼部脇に立てられており、外側を礫混じりの暗褐色土で補強していた。また、燃焼部出土の自然石は支脚石の可能性もある。おそらく、竈上部構造は破壊された物と考えられる。周辺に散乱する中規模の自然石は構築材の一部と把握できよう。その他では、床面中央に焼土の集中が狭い範囲ながら検出できた。あるいは炉としての可能性もあろう。

Ⅲ区ローム上全景（西から）

柱穴はP1・P2・P4～P6が配置・規模から可能性が高い。P3は柱穴間の間隔から不適当であり柱穴としては除外する。貯蔵穴・壁周溝は確認できなかったが、西壁よりP6にかけて間仕切り溝が確認できた。

遺物は大型住居跡の割には少ない。特に完形土器の出土も見られず、床直出土例も顕著ではない。住居居住に伴う痕跡としては見出せず、僅かに坏(2)、坩（9）、甕（19）が竈内出土である。また、16の甕は北壁脇の床直上で出土している。

極少量であるが、西壁際に炭化材を見ることができた。あるいは焼失住居の可能性もある。

**40号住居跡**（151～154図／図版21・48・49）

Ⅲ区南東部で44号住と重複して検出された。北西に45号住、南東に37号住が近接しており、住居跡群の中にある占地を見せる。

FA除去時には顕著な凹地ではなく、埋土の観察からも、住居廃絶後に埋め戻された例と考えられる。44号住とは南東隅を重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は、軸長約5.3m程の整った正方形を呈す。深さも約40cmを測り、良好な遺存度といえよう。

掘り込みは黄褐色ローム質土を深く掘り込む。壁の立ち上がりも直立気味でしっかりしていた。床面ははほ平坦面を築き、黒褐色土を貼床土としていた。硬化面は竈周辺に認められるものの、顕著ではなく、

40号住居跡遺物出土状態

全体に軟弱な印象を得た。

竈は東壁のやや南寄りに設けられる。煙道を壁外に突出させ、燃焼部も大きく床面に張り出す。燃焼部両脇を袖石が並び、燃焼部中層には構築材が焼土化した焼土塊が厚く堆積していた。燃焼部も強く焼けており、焼土・白色灰・炭化物を確認できた。

柱穴は典型的な四本柱穴（P1～P4）を見ることができた。貯蔵穴は東南隅に穿たれる定型的な例であるがP5・P6と重複しており、貯蔵穴単独の作り替えがあったのかも知れない。壁周溝は東壁を除き、三辺に設けられていた。

出土遺物量は多く、38点を図示した。埋土中の破片出土例が多く、床直出土例は少ない。竈内出土例としては、椀（6）、坩（19）、甕（24・25）等が見られる。また貯蔵穴（P6）内からは坏（11）、高坏（18）、甑（37）が出土している。1の須恵器ハソウは埋土中の出土である。

**41号住居跡**（155・156図／図版21・50）

Ⅲ区東側で38号住に大きく切られて検出された。38号住調査中に、東側に重複遺構が確認され、平面形の確認を重ねて検出し得た住居跡である。新旧関係は不明である。

平面形は軸長約5.5m前後の方形と思われる。深さは40cmを超え、良好な遺存度といえる。

柱穴等の掘り込みは黄褐色ローム質土まで至るが、床面は黒色土中に留まり、壁の確認などは微妙な色調差や壁周溝の存在から判断した。

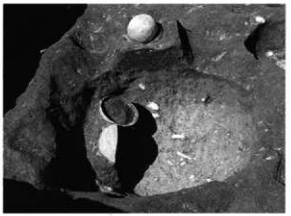
床面は暗褐色土を貼床土とし、硬化面は見られず全体に軟弱な印象を得た。しかし中央部分に僅かではあるが粘質土を使用した貼床がなされており、消極的な貼床ではないようだ。

また、38住との重複部分にかけて南側には性格不明の高まりが認められた。

柱穴はP1・P2が小規模ながら深さは30～40cm程あり、配置上からも妥当と考えた。貯蔵穴は南東隅のP3が良好な配置・規模を示す。内部及び周辺からも遺物が集中する。壁周溝は南壁際に認められ、

東壁の南端で留まる。貯蔵穴の位置や壁周溝の在り方から、本来ならば、東壁に竈が設けられるべき様相だが、残念ながら、竈は確認できなかった。

遺物は貯蔵穴及び周辺に集中して出土しており、良好な組成を見せる。坏（1・2）は貯蔵穴上層から、高坏（5・6）、小型甕（10）は周辺から出土している。



41号住居跡遺物出土状態

**42号住居跡**（157図／図版21・50）

Ⅲ区東側の調査区北壁にかかり検出した。北側と東側の大半を調査区域外に延ばすため、南西部分のみの調査となった。

平面形は方形と思われ、深さは50cmを超える。壁の立ち上がりは直立気味で、床面は黄褐色ローム質土上面に達していた。貼床は暗褐色土が充てられ、硬化面は確認できなかった。

竈・貯蔵穴・壁周溝は検出できなかった。柱穴はP1が規模・配置から妥当性を帯びるが、対応する柱穴も確認できないため、確定的ではない。

遺物は少量の出土で2点を図示し得た。いずれも埋土中の破片出土である。

本住居跡は床面上の炭化材が顕著に検出できた。加えて、南壁にかかり焼土塊がまとまっており、焼失住居としての位置付けと、土屋根崩壊に伴う南壁焼土の存在が想定できた。

**43号住居跡**（158図／図版21・50）

Ⅲ区中央北端の調査区北壁にかかり検出された。北側の大部分を調査区域外に延長する。FA除去時では、凹地としては認知されず、埋土の観察からは暗褐色土を主体とした埋土と捉えられ、住居廃棄時の埋め戻し行為が想定された。

平面形は軸長5m弱程の中型の方形住居跡と思われる。南東隅の湾曲が強いが、南壁・西壁ともに整った形態である。深さは約60cmで壁の立ち上がりも極めて良好である。

床面は黄褐色ローム質土まで達し、黄褐色土と暗褐色土を貼床土としていた。硬化面は床面中央部にあたる調査区壁際に顕著に認められた。

竈は確認できなかった。柱穴はP1・P2が規模・配置・土層の観察から妥当性を帯びるが、軸線とは平行せず、P2を貯蔵穴としての可能性も控えておきたい。壁周溝は確認された壁下全てに検出されている。

出土遺物量は多くなく、5点を図示し得た。1の須恵器坏蓋は南西隅の床直から、2、須恵器把手坏椀は埋土中ながら南壁に接して出土している。5、甕は床面中央とP1上面の床直上からの出土である。尚、少量ながら南西隅に炭化材の出土を見ている。焼失住居跡としたい。

43号住居跡須恵器把手付椀出土状態

**44号住居跡**（159～161図／図版22・50・51）

Ⅲ区南東部で37号住・40号住と重複して検出した。南西部を37号住竈に切られ、北西隅部を40号住と重なるが、40号住との新旧関係は不明である。

FA除去時は凹地ではなく、37号住東の周堤帯残存として認知されていた。堀土の観察でも、ローム塊を多く含む特徴から、意図的な埋め戻し行為による埋没と捉えられた。

平面形は約5.8×5.7mの整った正方形を呈する。深さは約40cmを測り、黄褐色ローム質土上層まで達していた。壁は黒色土中の確認だったが、僅かな色調差を判断材料として検出した。

床面は黒褐色土塊とローム塊からなる貼床が全面を覆い、東壁周辺から床面中央部にかけて硬化面が見られた。

竈は無く、炉址として、南壁に寄る炉址1と北壁際の炉址2を検出した。両者とも、径50cm程で20cm以下の浅い掘り込みを持つ。焼土層の堆積も顕著で、白色灰・炭化物も確認された。特に炉址1には棒状の自然石2個が並列して置かれており、意図的な行為が想定された。

柱穴はP1～P4を典型的な四本柱穴とする。P4は37号住床面下で検出したが、配置から本住居跡の帰属と判断した。またP5・P6ともに規模も妥当であり、何等かの屋内施設の痕跡と把握できよう。例えばP6は梯子穴としても位置的に妥当性がある。貯蔵穴は検出できなかった。壁周溝は全周する様相を見せる。

遺物は多く32点を図示した。主な出土遺物は、坏（3）は床面中央西側で床直上、鉢（4）は北東隅で床直。高坏は個体を揃える。12は南東隅で床直上、13は南壁際で床直、14は北西隅で流れ込む形態で堀土中より、17の台付き鉢も南壁で流入状態で出土している。甕（20）は南東隅で床直出土である。

**45号住居跡**（162図／図版22・52）

Ⅲ区中央やや南寄りで検出した。南東に40号住が近接するが、単独の検出である。

平面形は長方形で約3.6×2.7m程の小型の住居跡である。深さは約30cmを測り、やや浅い。

床面は黄褐色ローム質土上面で留まり、壁は暗褐色土を基盤とするため、確認に手間取った。貼床は暗褐色土を主体に、硬化面を床面全体に広げる。

竈は南東隅に設けられる。壁外に煙道を突出させ、袖石を設けて、燃焼部を囲む。燃焼部上部は構築材崩壊土が焼土化して厚く堆積していた。使用面は焼土・白色灰が見られ、燃焼部ほぼ中央に高坏脚部が支脚として置かれていた。

柱穴はP1・P2を充てたい。規模は良好であるが、配置上は問題が残る。P2は貯蔵穴としての性格も想定しておきたい。壁周溝は見られなかった。

出土遺物は少ない。前述の高坏脚部（3）の他、坏・椀類（1・2）が床面中央に集まる。また甕（4）は埋土下位で出土するが、いずれも破片状態である。

45号住居跡竈

**46号住居跡**（163・164図／図版22・52）

Ⅲ区ほぼ中央で調査された。近接する住居跡は無く、単独の占地である。FA下では凹地ではなく、平坦面下での検出である。

平面形は北西隅に歪みが見られる不整長方形であるが、その他の隅部・壁は整っており、安定した形状といえよう。規模は約4.1×3.6m程で小型の住居跡である。深さは約40cmを測り、遺存度は良好である。掘り込みは黄褐色ローム質土上面に留まり、壁は黒色土中の検出となった。

床面は、黒色土塊とローム塊からなる貼床がなされていた。硬化面は竈周辺から床面中央にかけて比較的広く認められた。

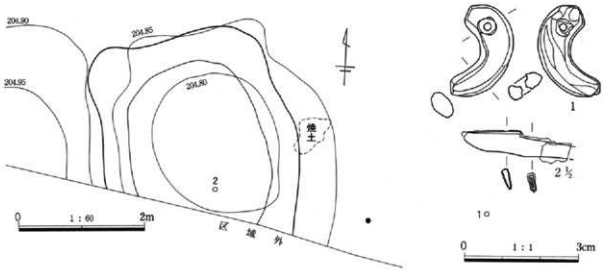
Ⅲ　検出された遺構と遺物

本住居跡の竈は西竈である。西壁やや南よりに設けられる。煙道を壁外に強く突出し、燃焼部は広く凹みを持って取られていた。袖石等の補強材は無く、焼土化したローム塊による構築材が崩壊土として堆積していた。袖材も焼土化したローム塊で、袖本体も原位置を保たず、崩壊-破壊された形跡が見られた。

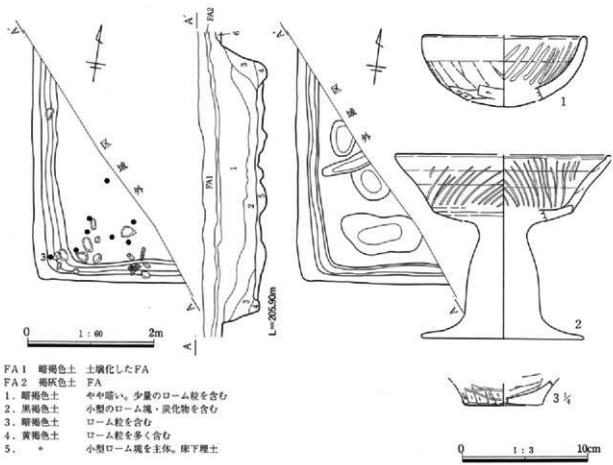
柱穴は住居跡長軸上に乗るP１・P２を充てたい。配置・規模とも妥当性が高い。貯蔵穴は南西隅に設けられた方形状の土坑が良好な位置を示す。壁周溝、北壁に極めて薄く凹みが連続し、壁周溝としての位置付けに苦慮し、範囲を確定できないため、壁周溝としては、認められなかった。

出土遺物量は比較的多く、19点を図示した。床直・床直上出土例がまとまり、良好な組成と評価できよう。特に甕類の出土が目立ち、本住居跡の性格を推定するに示唆的な組成である。椀（１・７）は南壁際で、３は竈北東で、10はほぼ中央と東壁際で床直・床直上出土である。甕類は住居跡東半での出土に片寄る。11の小型甕は東壁際で、13～15は潰された状態で床面に密着して出土している。17は、P１内出土と竈内出土、及び東南床直の破片が接合する。また12の小型甕はP２内及び周辺で出土している。

Ⅲ区ローム上全景（東から）

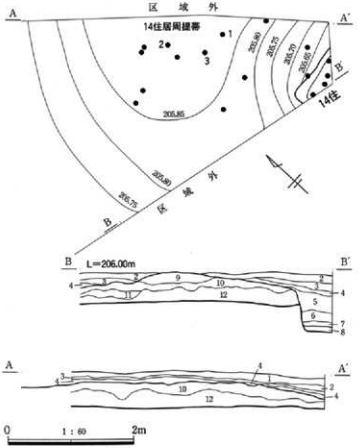



97図　11号住居跡（凹地）・出土遺物

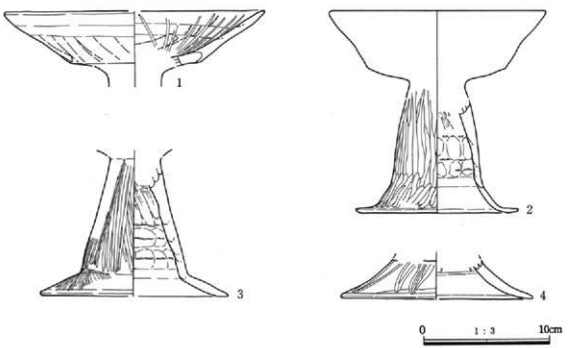



FA1　暗褐色土　土壌化したFA
FA2　褐灰色土　FA
1．暗褐色土　やや暗い。少量のローム粒を含む
2．黒褐色土　小型のローム塊・炭化物を含む
3．暗褐色土　ローム粒を含む
4．黄褐色土　ローム粒を多く含む
5．　〃　小型ローム塊を主体。床下埋土

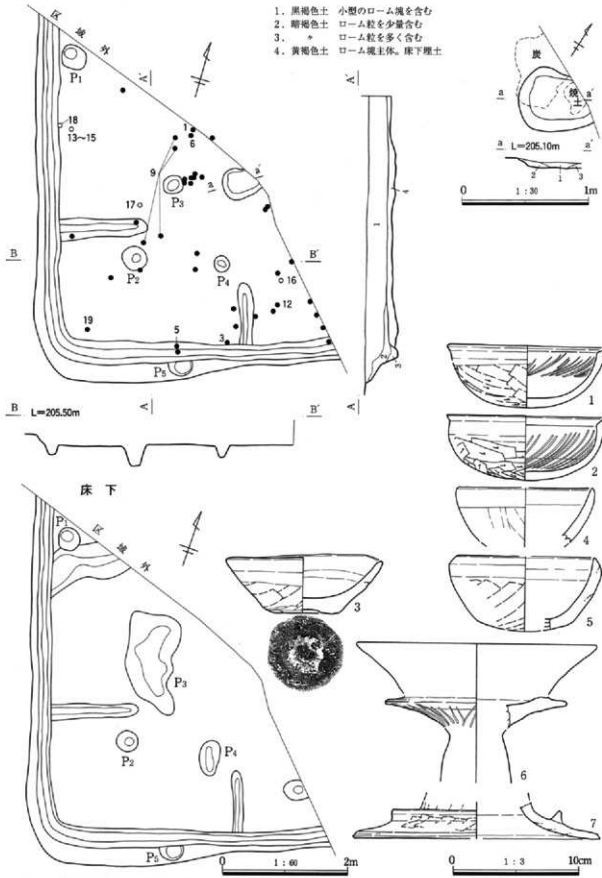
98図　13号住居跡床面・床下・出土遺物



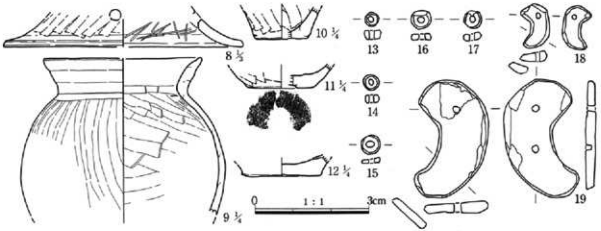

1　褐灰色土　FA主体。暗褐色土塊混入
2　〃　FA層。火山灰層
3　灰褐色土　FA層。粗粒火山灰層
4　〃　FA層。細粒火山灰層
5　暗褐色土　少量のローム塊・炭化物を含む　14住埋土
6　黒褐色土　ローム粒・少量の炭化物を含む　14住埋土
7　〃　少量のローム粒を含む。しまりに富む。14住埋土
8　褐色土　ローム塊を主体とする。14住床下埋土
9　暗褐色土　小型のローム塊を多く含む。周提帯構築土
10　〃　ローム粒・焼土粒を含む。周提帯構築土
11　黒褐色土　ローム粒を少量に含む。しまりに富む。周提帯構築土
12　〃　暗褐色土塊との斑状堆積。基盤層
13　暗褐色土　ローム漸移層



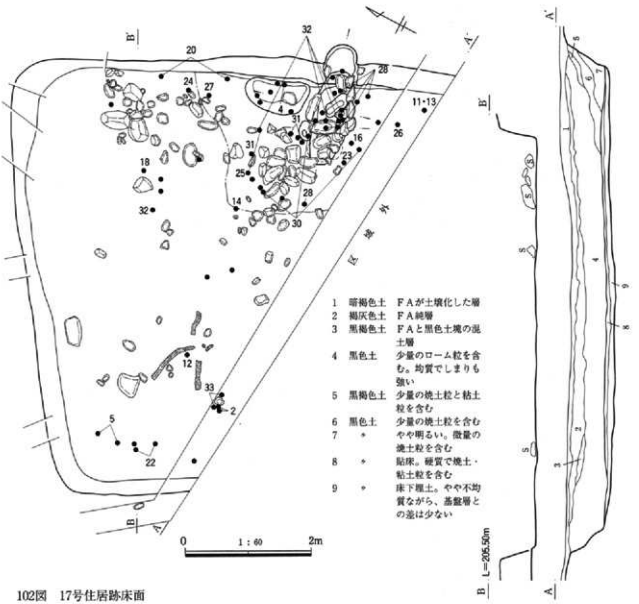

99図　14号住居跡・床面・出土遺物




100図　15号住居跡床面・焼土・床下・出土遺物（1）



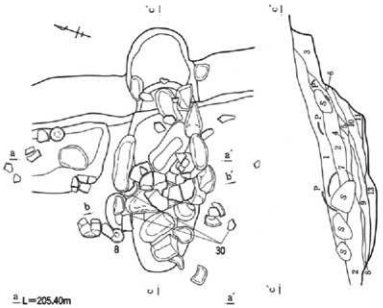

101図　15号住居跡出土遺物（2）

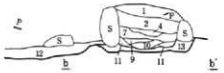


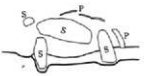

102図　17号住居跡床面

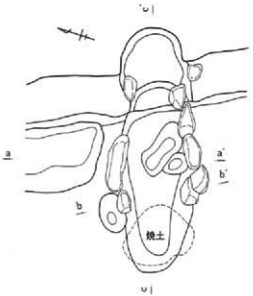
カマド土層

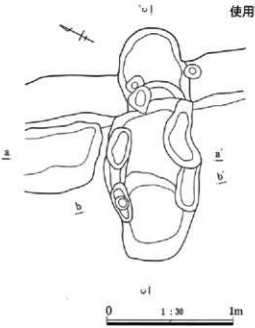
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒を含む |
| 2 | 〃 | 小型のローム塊・焼土粒を含む |
| 3 | 〃 | 少量の焼土粒・炭化物を含む |
| 4 | 暗赤褐色土 | 焼土塊を主体とする。崩落土か |
| 5 | 黒褐色土 | 小型のローム塊を多く含む |
| 6 | 〃 | 微量のローム粒を含む |
| 7 | 灰褐色土 | 白色灰・炭化物を主体とする |
| 8 | 〃 | 白色灰・焼土粒を主体とする |
| 9 | 黒褐色土 | 黒色土塊・白色灰・焼土塊からなる |
| 10 | 〃 | ローム・焼土塊を含む |
| 11 | 暗褐色土 | 焼土塊を多く含む |
| 12 | 黒褐色土 | 小型のローム塊・炭化物を含む |
| 13 | 黒色土 | ローム塊を少量含む。粘質 |



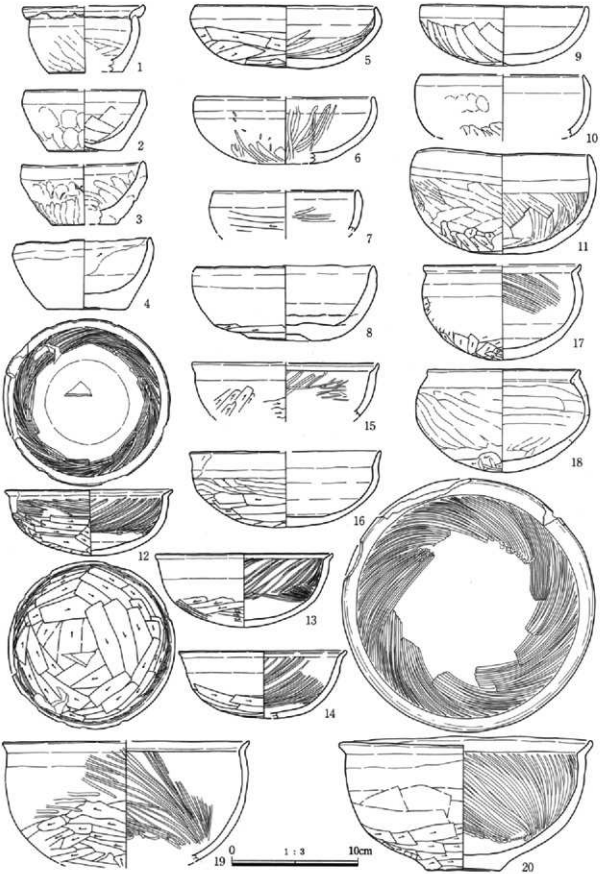



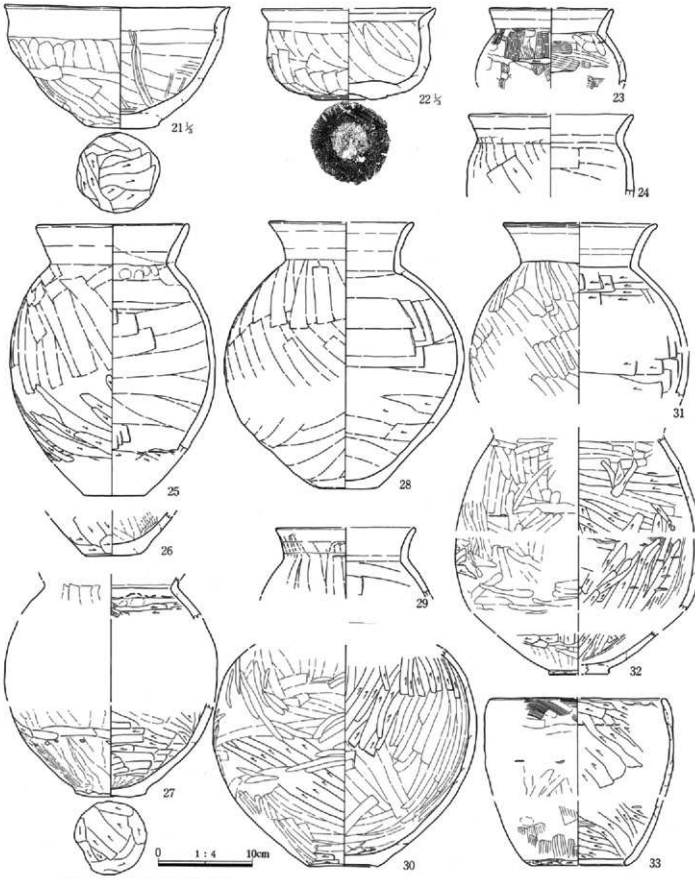



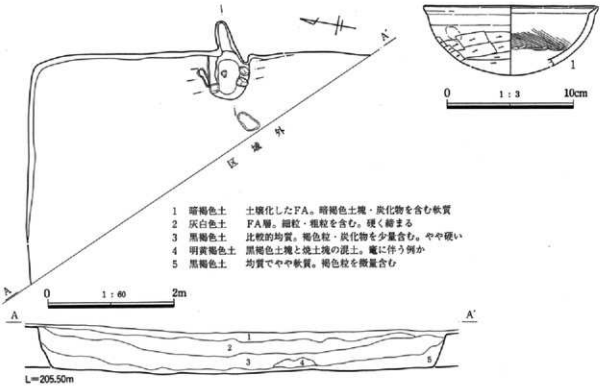

103図　17号住居跡竈

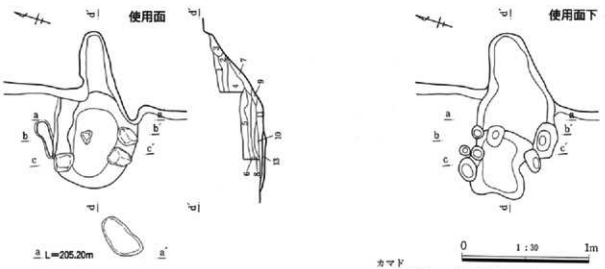



104図　17号住居跡出土遺物（1）




105図　17号住居跡出土遺物（2）

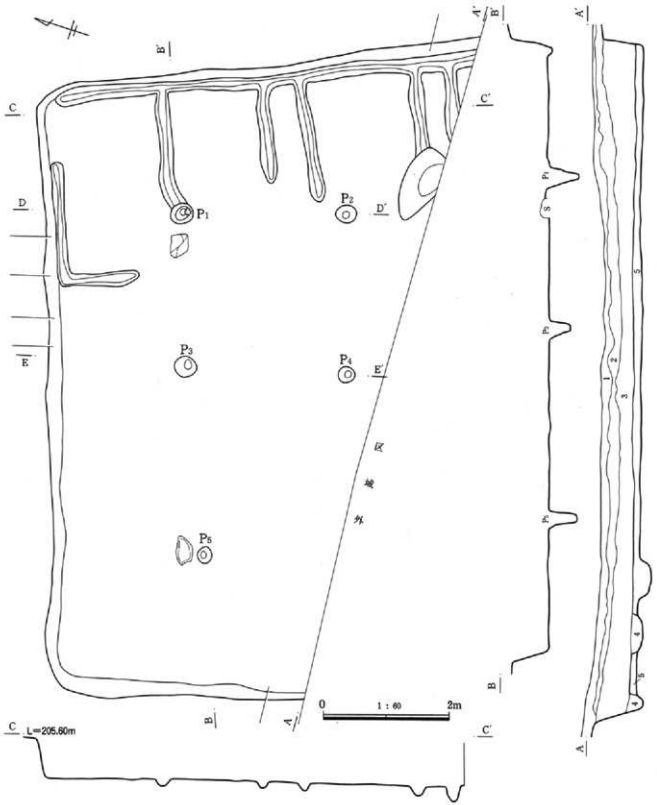



カマド

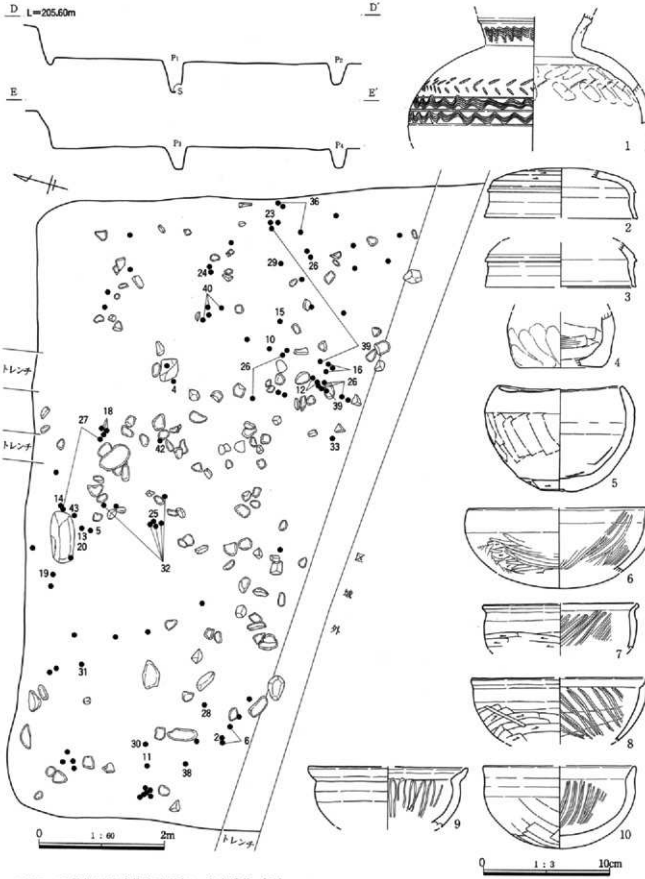
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 小型の焼土塊を含む |
| 2 | 〃 | 小型の焼土塊・黄褐色土塊を含む |
| 3 | 明黄褐色土 | 黄褐色土塊と焼土塊からなる |
| 4 | 橙色土 | 焼土塊を主体とする |
| 5 | 純黄褐色土 | 黄褐色焼土土塊と黒色土塊の混土 |
| 6 | 暗褐色土 | 焼土塊を点在する |
| 7 | 純黄褐色土 | 黄褐色土塊と黒色土塊の混土 |
| 8 | 暗赤褐色土 | 焼土塊を多く含む。しまり乏しい |
| 9 | 褐灰色土 | 白色灰層を主体とする。均質 |
| 10 | 赤褐色土 | 焼土を主体とする |
| 11 | 暗褐色土 | 焼土塊・炭化物・白色灰を多く含む |
| 12 | 赤褐色土 | 焼土を主体とする。構築材の焼土化 |
| 13 | 黒色土 | 粘質。構築面埋土 |
| 14 | 明黄褐色土 | 黄褐色土塊と焼土塊からなる。袖材 |
| 15 | 純黄褐色土 | 黄褐色土塊を主体とする。袖材 |

106図　18号住居跡床面・竈

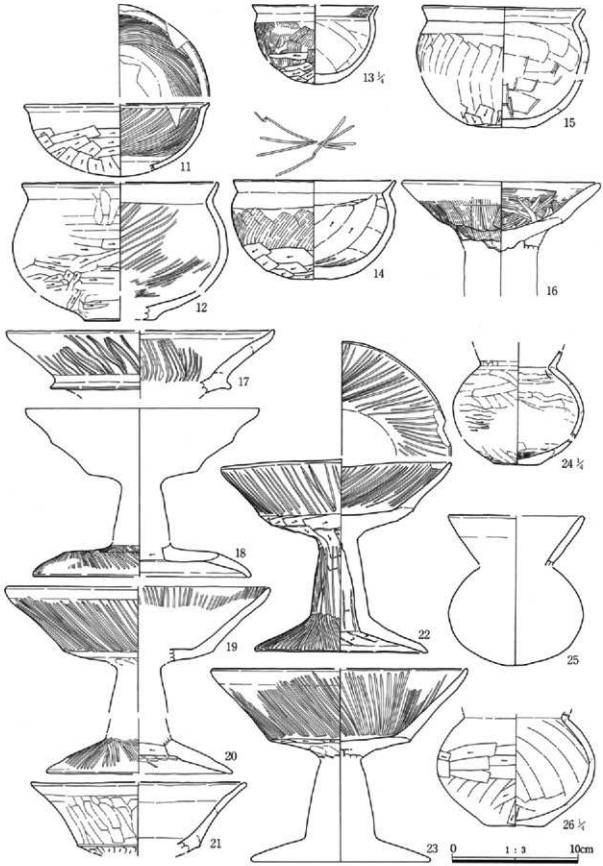



1　暗褐色土　土壌化したFA
2　褐灰色土　FA
3　黒色土　大小の円礫を多く含む。粘性強い
4　〃　少量のローム粒を含む。軟質。壁面溝埋土
5　〃　小型の円礫・砂礫土塊を含む。床下埋土

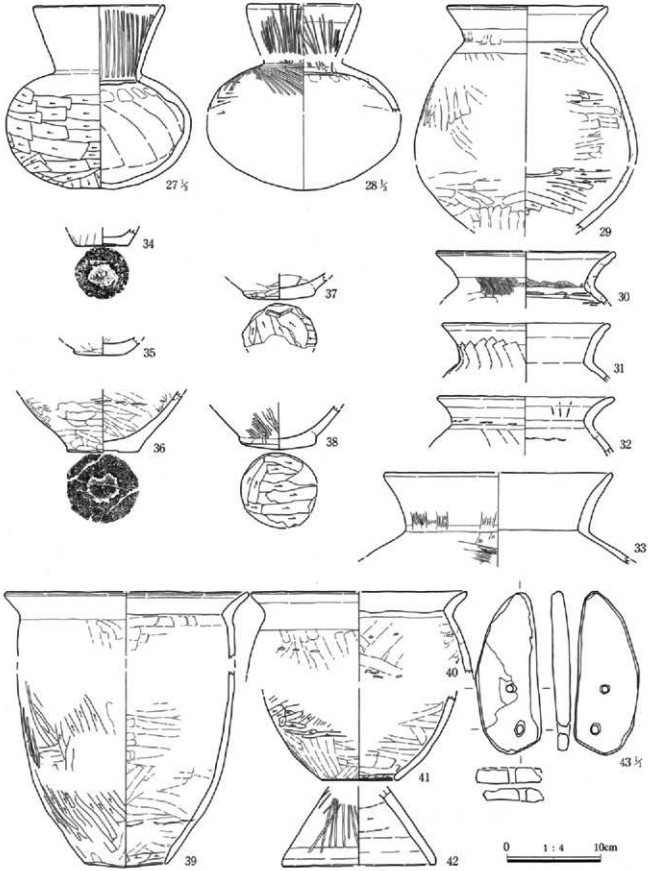
107図　19号住居跡床面



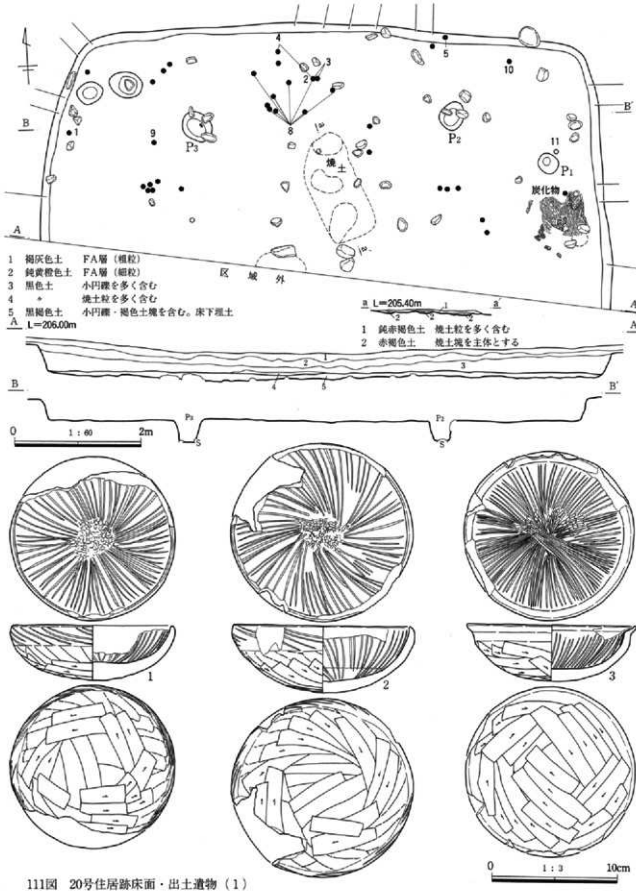

108図　19号住居跡遺物出土状況・出土遺物（1）



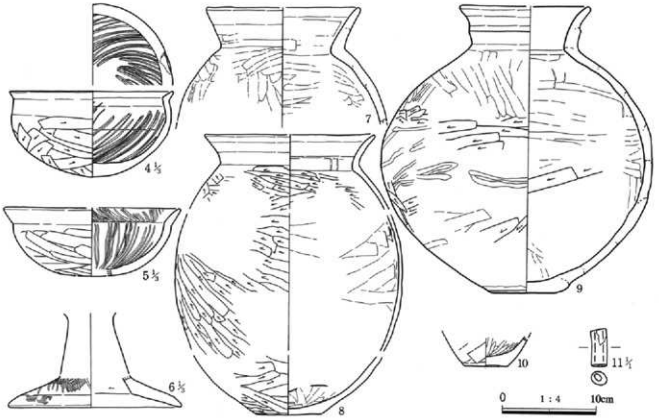

109図　19号住居跡出土遺物（2）



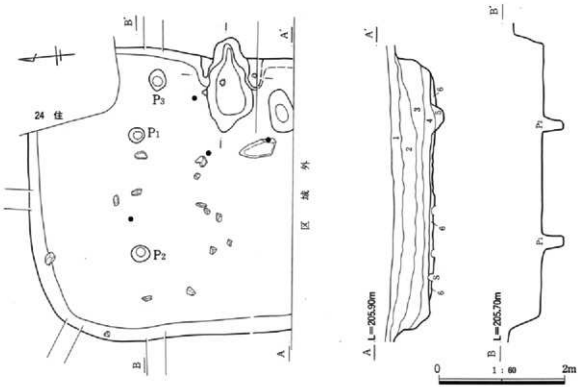

110図　19号住居跡出土遺物（3）



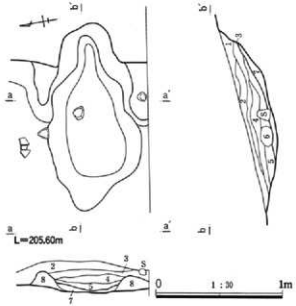

111図 20号住居跡床面・出土遺物（1）




112図　20号住居跡出土遺物（2）



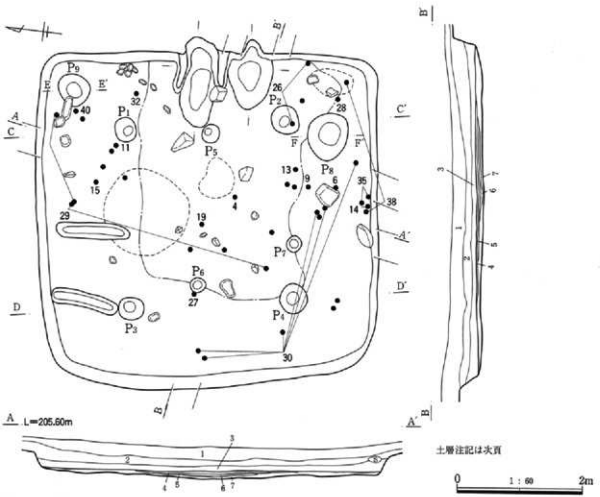

113図　21号住居跡床面



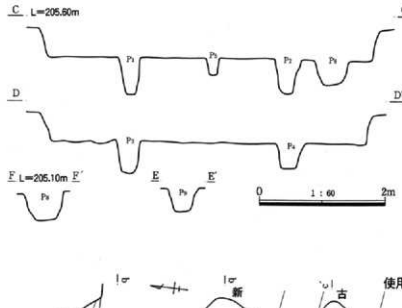

1　暗褐色土　土填化したFA
2　褐灰色土　FA（細粒・粗粒）
3　黒褐色土　比較的均質。炭化材・褐色粒含む
4　〃　比較的均質。円礫を含む
5　〃　貯蔵穴埋土。小円礫を含む
6　黒色土　粘質土。炭化物・褐色土塊を含む。床下埋土

カマド
1　灰黄褐色土　粘土塊と焼土塊からなる。炭化物を含む
2　暗褐色土　黒色土塊と粘土塊を含む
3　〃　灰色粘土塊・炭化物を多く含む
4　黒褐色土　粘土粒・焼土塊を多く含む
5　〃　焼土塊を多く含む
6　赤褐色土　焼土化した大型粘土塊。構築材崩落土
7　黒褐色土　少量の焼土粒と炭化物を含む。使用面下埋土
8　黄褐色土　粘土塊からなる。一部焼土化。袖材

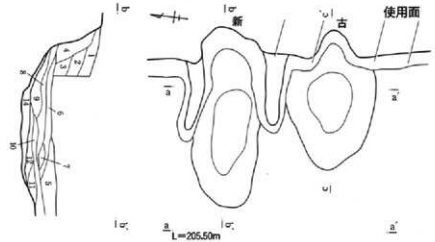
114図　21号住居跡竈




115図　22号住居跡床面




1　黒褐色土　粘質。褐色土塊・炭化材を含む
2　〃　粘質。褐色土塊・ローム粒少量含む
3　〃　粘質。焼土塊・ローム塊・炭化物・円礫を含む
4　〃　焼土・炭化物を含む。上位貼床土
5　鈍黄褐色土　多量の焼土・灰を含む。しまり強い下位貼床土
6　黒褐色土　焼土・灰を含む。床下埋土
7　褐色土　ローム塊・褐色土塊含む。床下埋土

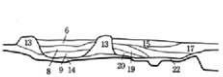


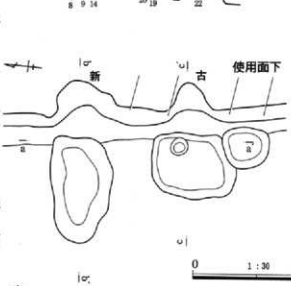

22号住カマド

1　黒褐色土　灰白色粘土塊・焼土粒を含む
2　〃　小型の粘土塊・焼土塊を含む
3　〃　焼土塊多く含む

北側竈

4　鈍黄褐色土　焼土化した粘土塊を主体とする
5　黒褐色土　粘質。ローム塊・円礫を含む
6　暗褐色土　小型の焼土塊を多く含む
7　赤褐色土　焼土塊主体
8　黒褐色土　少量の焼土粒含む
9　〃　多量の焼土粒含む
10　〃　炭化物・焼土粒を含む
11　赤褐色土　焼土塊を主体
12　黒褐色土　焼土粒・灰を多く含む。使用面
13　鈍黄褐色土　ローム塊・粘土塊からなる。袖材
14　黄褐色土　ローム塊・褐色土塊からなる。使用面下埋土

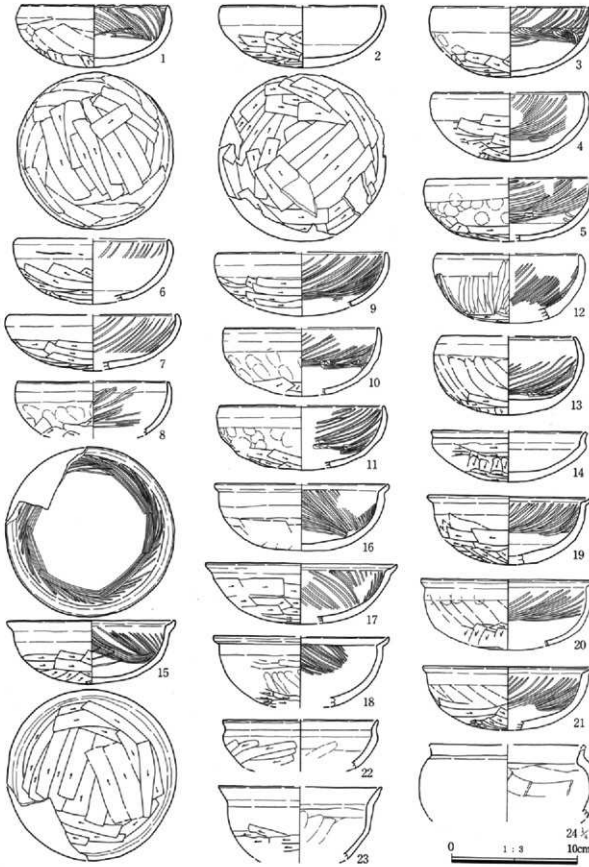


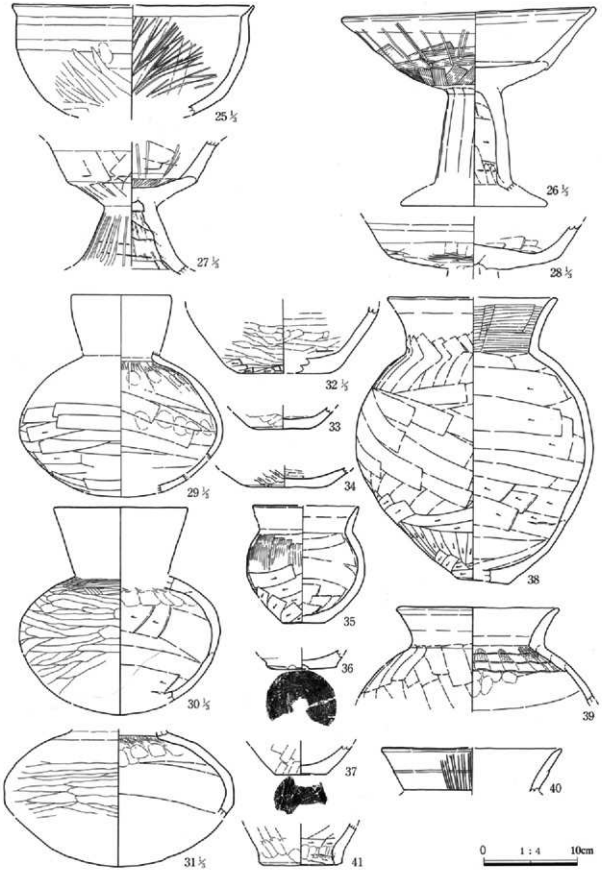

南側カマド

15　黒色土　炭化物・焼土塊を多く含む
16　鈍黄褐色土　焼土化した粘土塊を主体とする
17　暗褐色土　焼土塊と粘土塊を含む
18　黒褐色土　少量の粘土と焼土を含む
19　〃　褐色土塊・少量の焼土粒を含む
20　褐色土　褐色土塊主体
21　鈍黄褐色土　褐色土塊を主体とする。やや焼土化
22　黄褐色土　ローム塊・褐色土塊による埋土

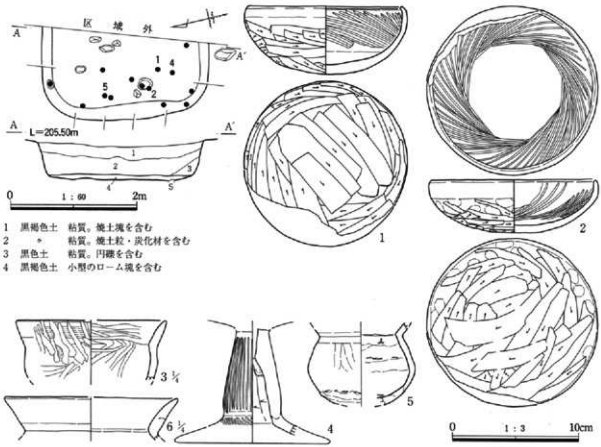
116図　22号住居跡断面図・竈



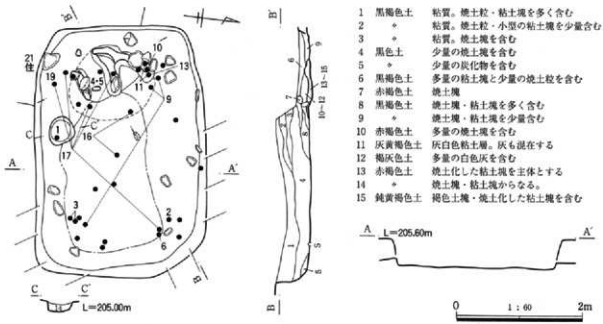

117図　22号住居跡出土遺物（1）



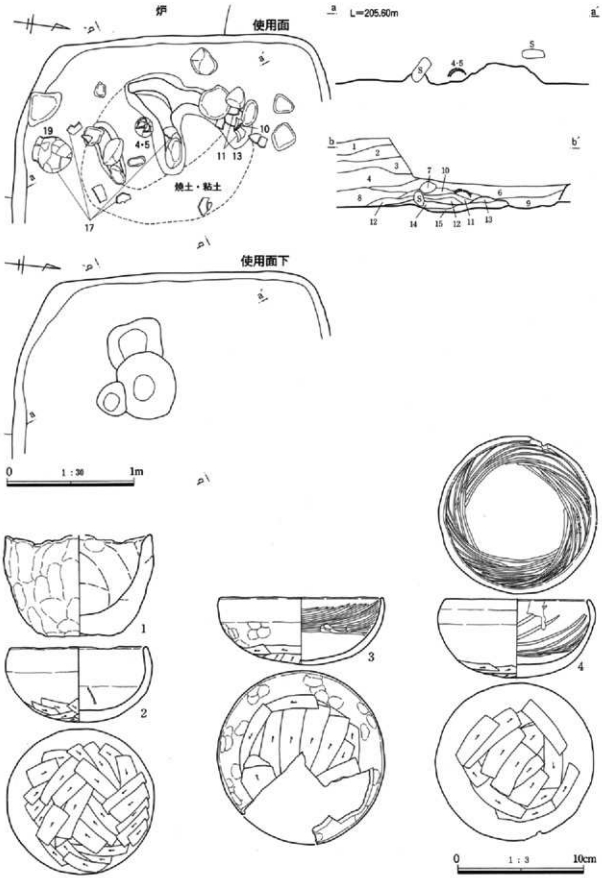

118図　22号住居跡出土遺物（2）



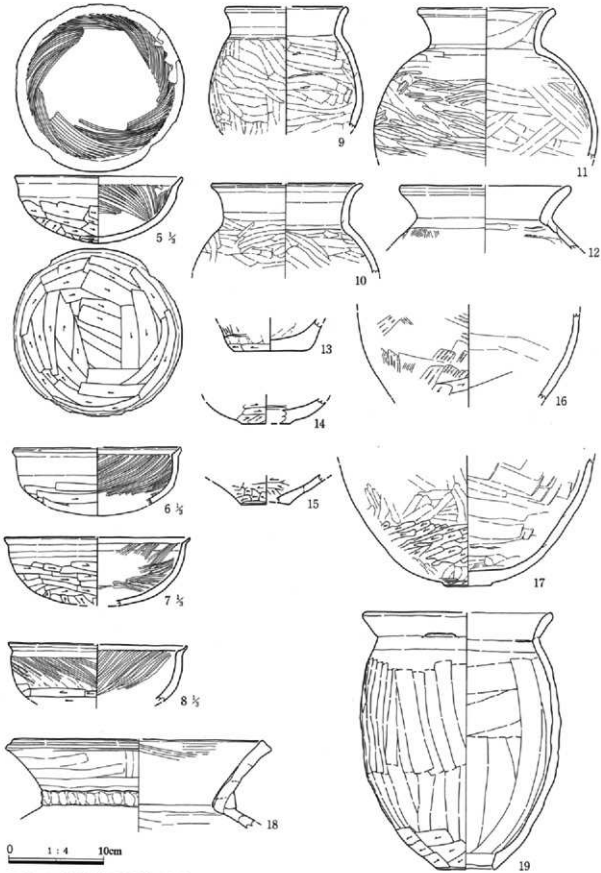

119図　23号住居跡床面・出土遺物



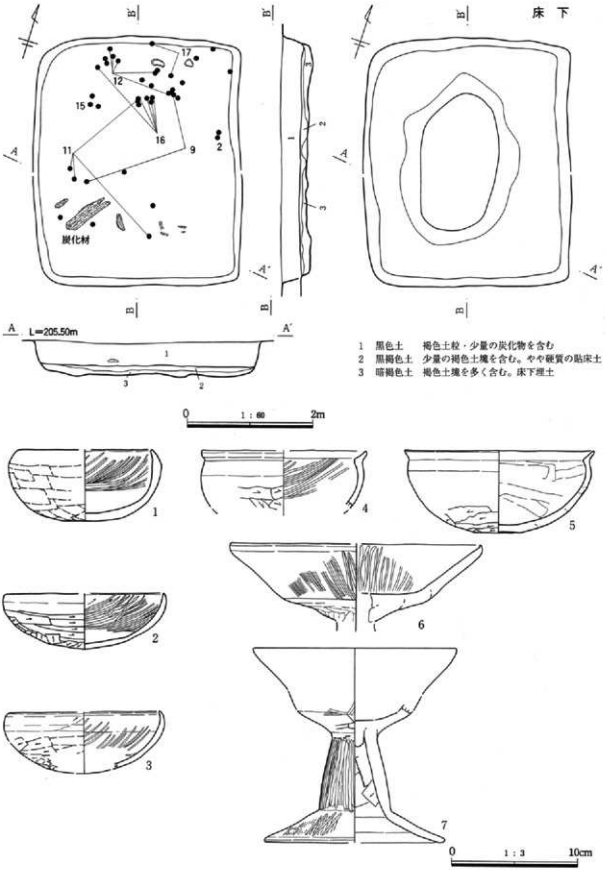

120図　24号住居跡床面



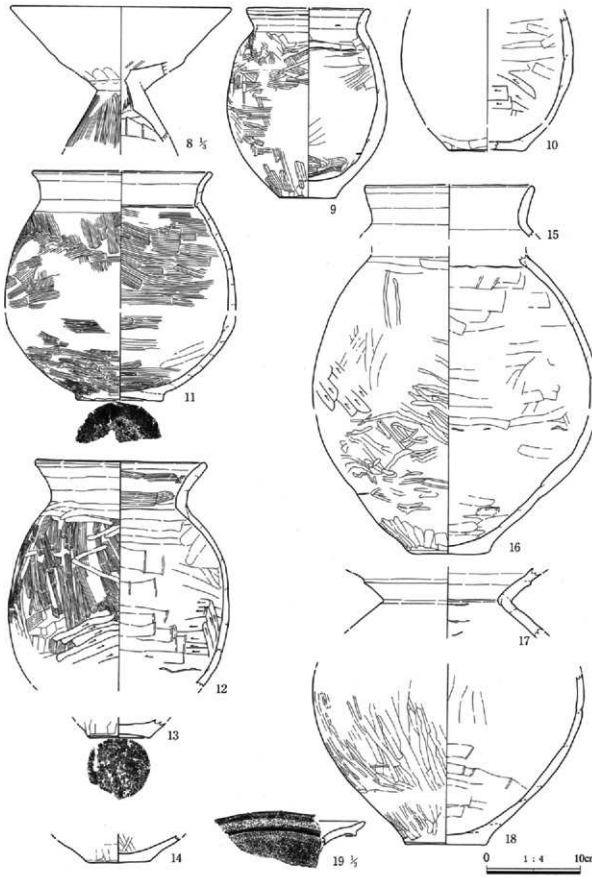

121図　24号住居跡炉・出土遺物（1）



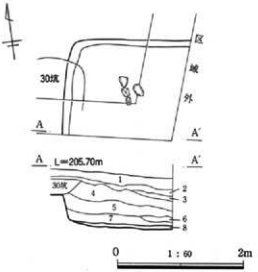

122図　24号住居跡出土遺物（2）




123図　25号住居跡床面・床下・出土遺物（1）

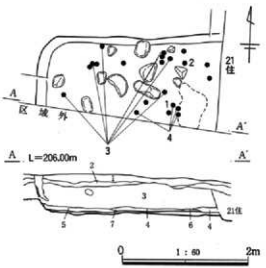



124図　25号住居跡出土遺物（2）

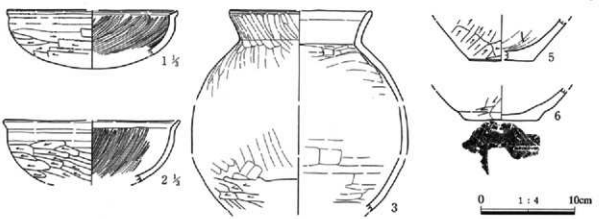



1　暗褐色土　土壌化したFA
2　褐灰色土　FA
3　〃　細粒FA
4　黒色土　微量の焼土粒を含む
5　〃　少量の焼土粒・炭化材を含む
6　〃　焼土塊を少量含む
7　純黄褐色土　ローム塊と少量の粘土塊を含む
8　暗褐色土　褐色土塊とローム塊による床下埋土

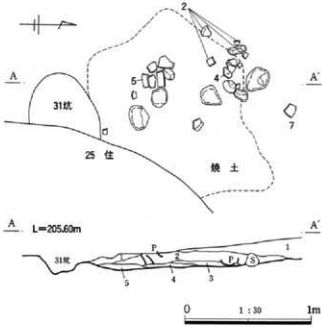
125図　26号住居跡床面




1　褐灰色土　土壌化したFA
2　純黄褐色　FA
3　黒褐色土　粘質。褐色粒・少量の焼土粒を含む
4　〃　焼土を層状に含む
5　〃　白色灰を少量含む
6　褐灰色土　焼土粒・粘土塊・灰からなる
7　黒褐色土　小型の褐色土塊を多く含む。床下埋土

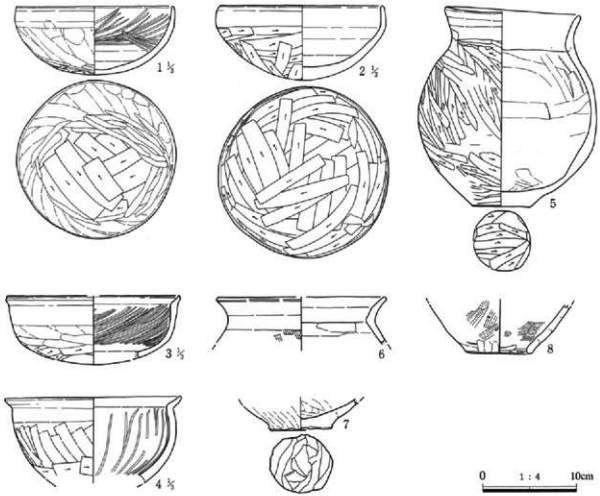



126図　27号住居跡床面・出土遺物

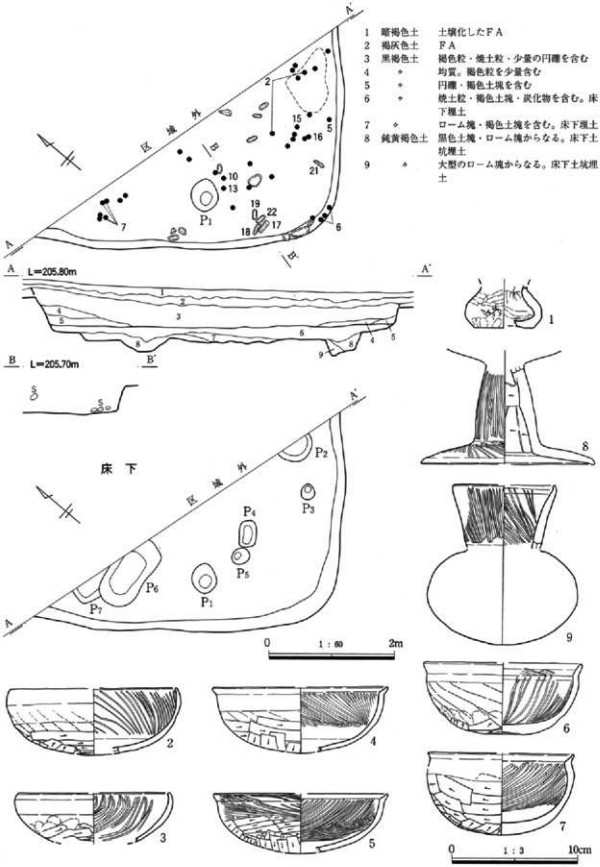



28号住（焼土）

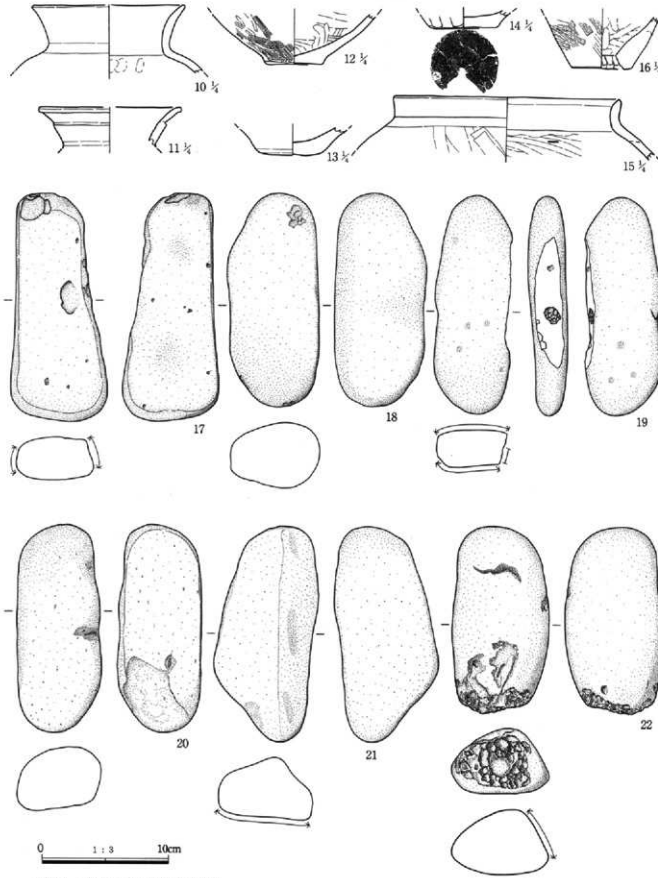
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 微量の焼土粒を含む |
| 2 | 〃 | 多量の焼土・灰を含む |
| 3 | 明黄褐色土 | 焼土・灰を主体とする |
| 4 | 黒褐色土 | 焼土粒を多く含む |
| 5 | 黒色土 | 褐色粒を少量含む |




127図　28号住居跡(焼土）・出土遺物



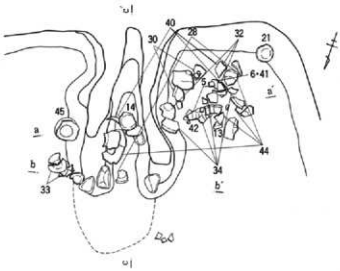

128図　29号住居跡床面・床下・出土遺物（1）

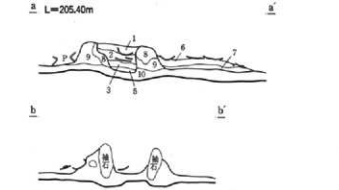



129図　29号住居跡出土遺物（2）

1　暗褐色土　土壌化したFA
2　褐灰色土　FA
3　黒褐色土　大型の円礫・少量の焼土塊・褐色土塊を含む
4　暗褐色土　褐色土塊を主体とする。床下埋土

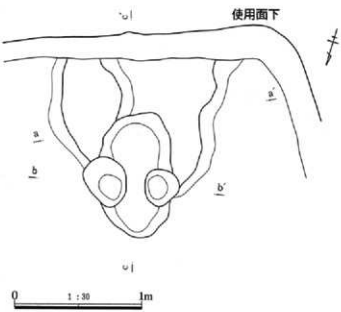
130図　31号住居跡床面



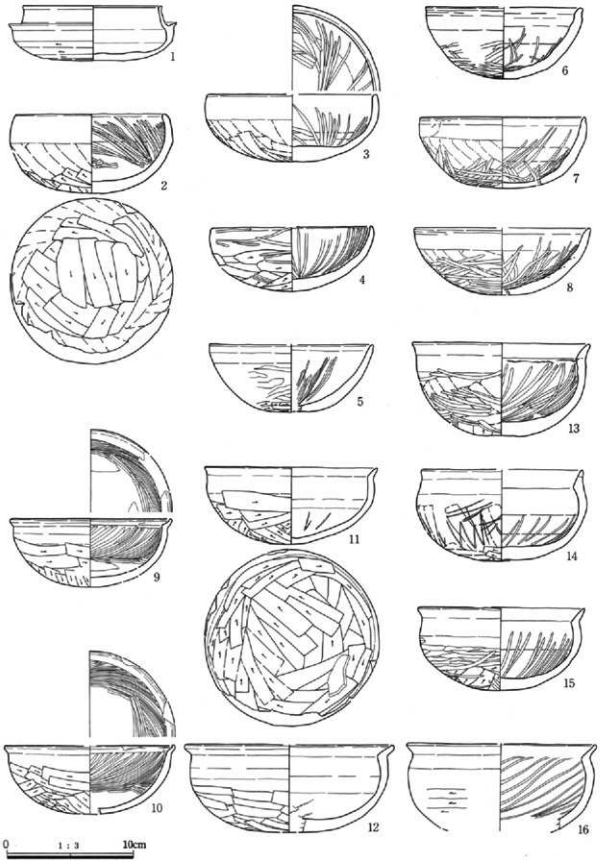



カマド

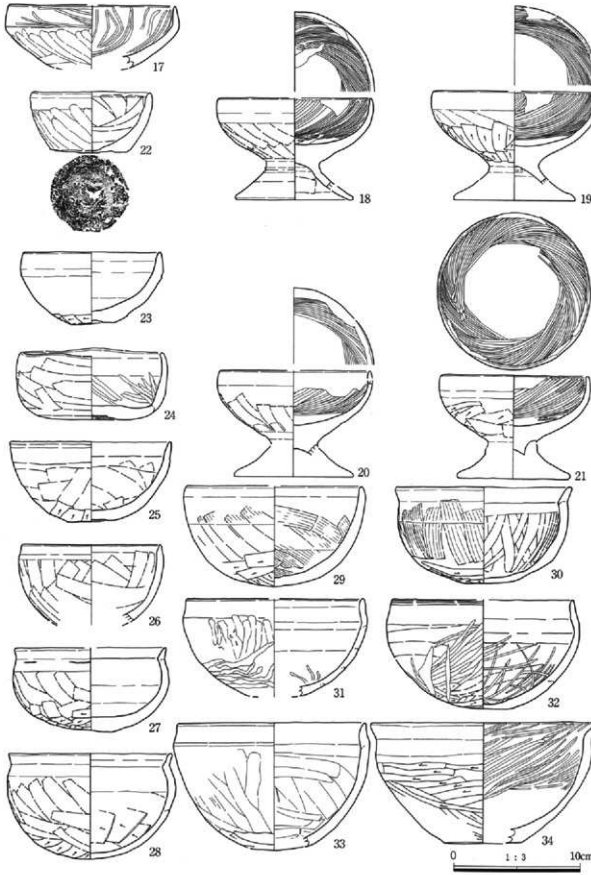
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 少量の焼土粒を含む |
| 2 | 赤褐色土 | 大型の焼土塊を主体。崩落土か |
| 3 | 灰黄褐色土 | 焼土塊・多量の灰を含む |
| 4 | 黒褐色土 | 粘質。焼土粒・炭化物を含む |
| 5 | 褐灰色土 | 多量の焼土・灰を含む |
| 6 | 暗褐色土 | やや暗い。焼土粒・灰を含む |
| 7 | 褐灰色土 | 焼土粒・灰を含む |
| 8 | 赤褐色土 | 焼土化した粘土。袖材 |
| 9 | 純黄褐色土 | 粘土塊を主体とする。袖材 |
| 10 | 黒褐色土 | 褐色土塊・焼土塊を含む。床下埋土 |



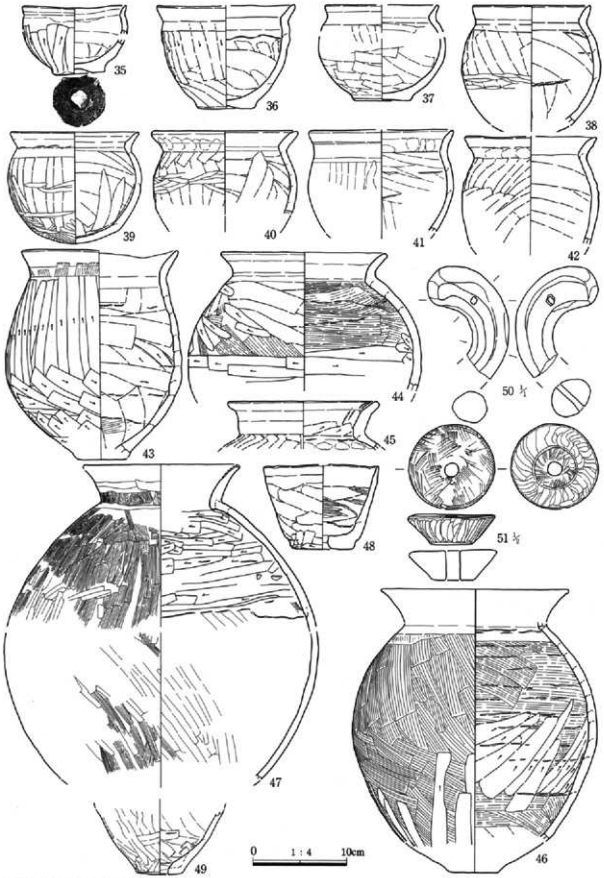

131図　31号住居跡竈



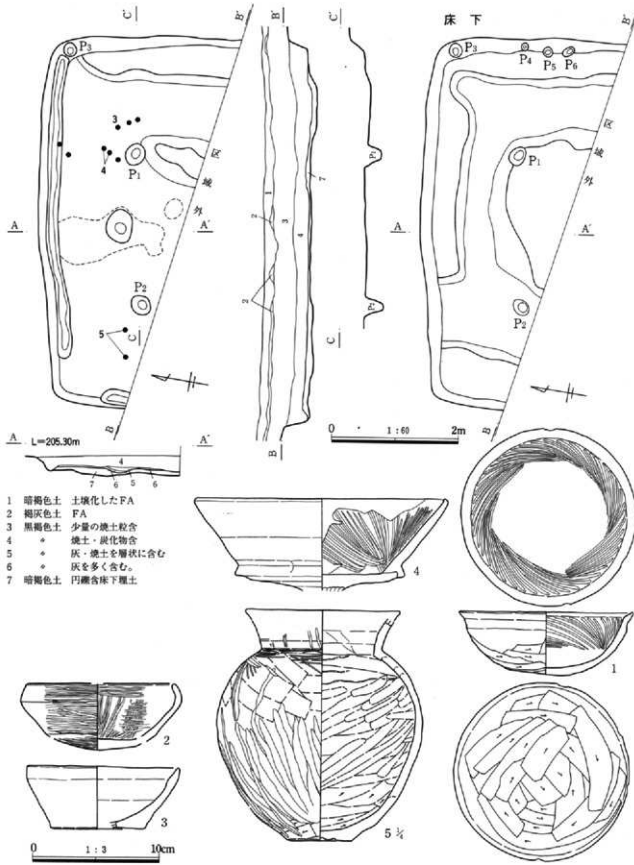

132図　31号住居跡出土遺物（1）



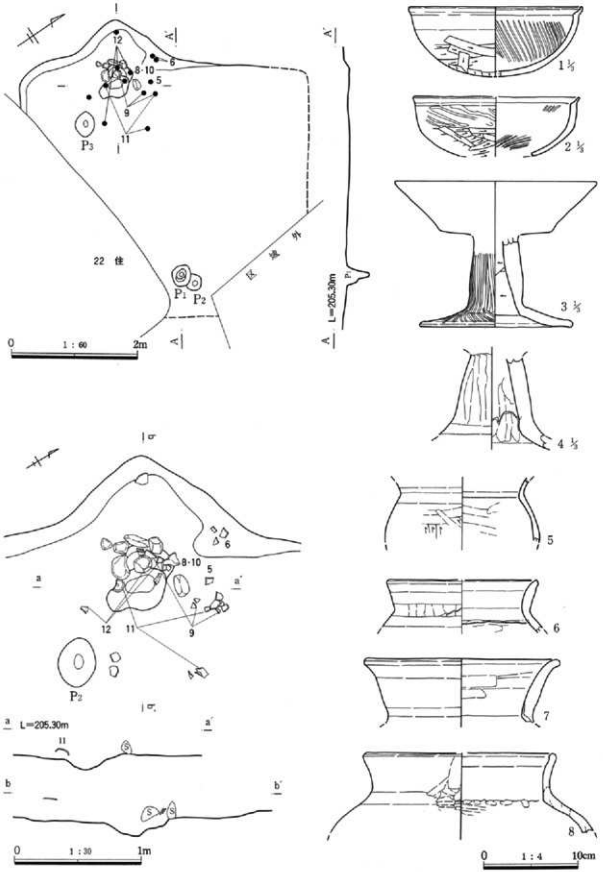

133図　31号住居跡出土遺物（2）



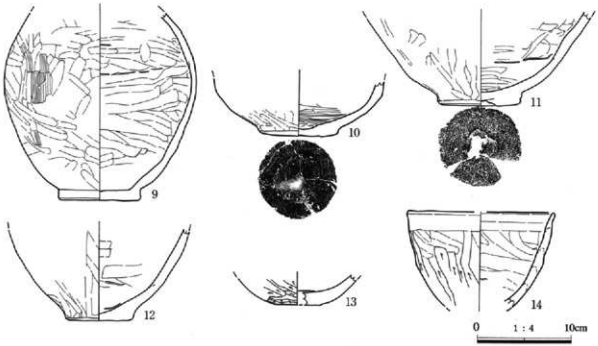

134図　31号住居跡出土遺物（3）



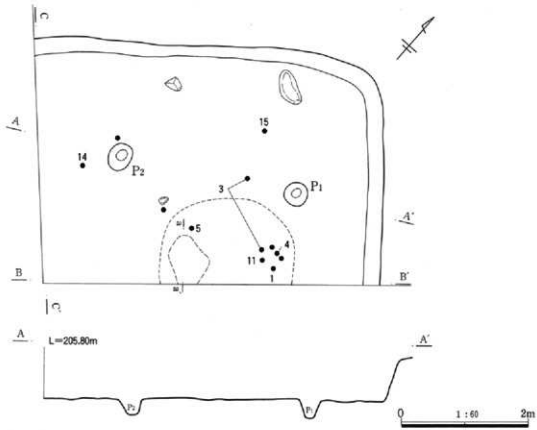

135図 32号住居跡床面・床下・出土遺物



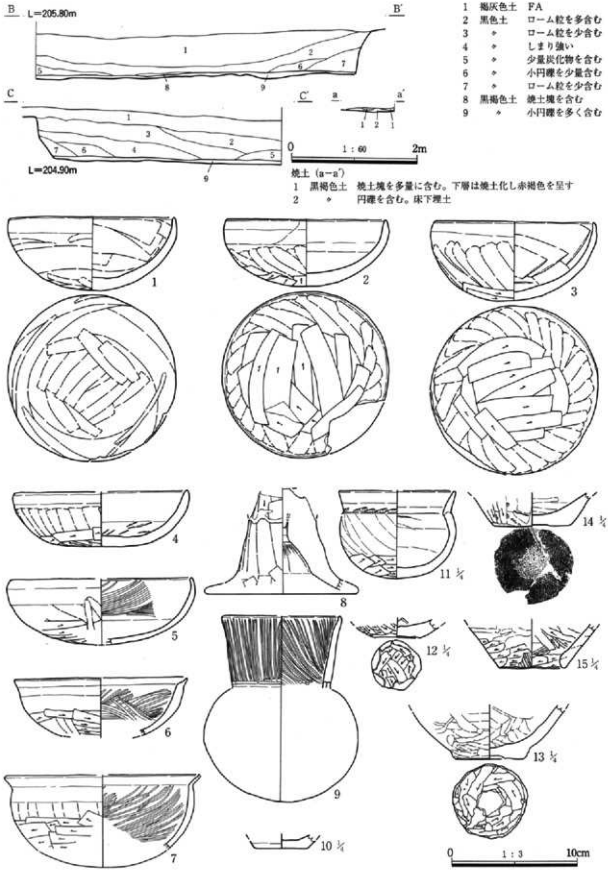

136図　33号住居跡床面・竈・出土遺物（1）



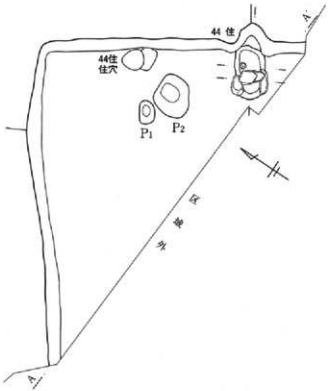

137図　33号住居跡出土遺物（２）



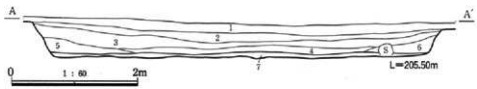

138図　36号住居跡床面

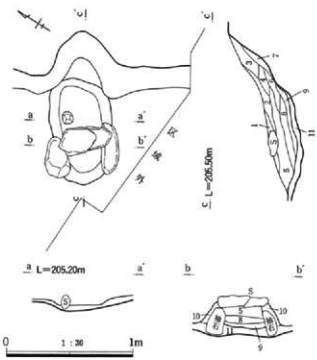



139図　36号住居跡断面図・出土遺物



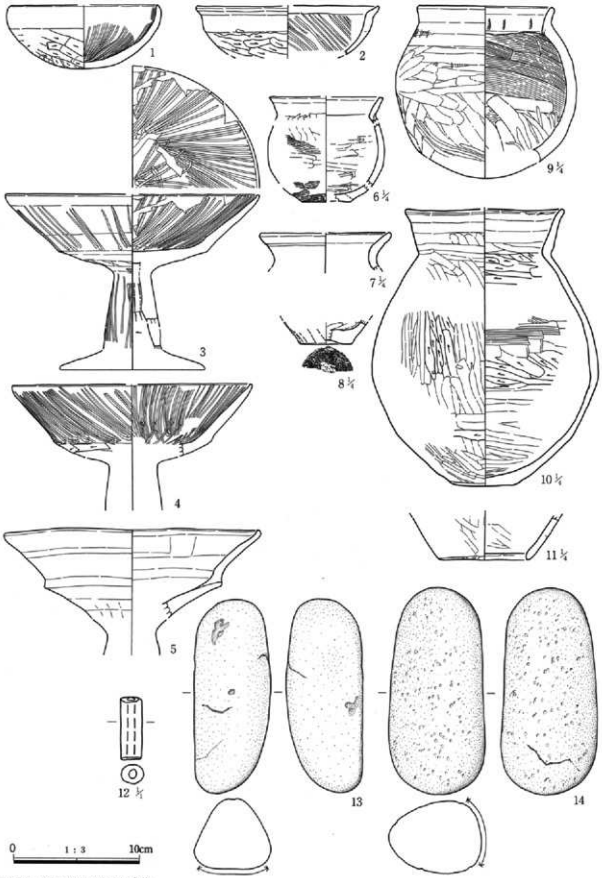

1　暗褐色土　土壌化したFA
2　褐灰色土　FA
3　黒褐色土　炭化物を多く含む
4　〃　ローム粒・炭化材を含む。焼失家屋
5　〃　均質。少量のローム粒を含む
6　〃　大型のローム塊・焼土粒を含む
7　暗褐色土　大型のローム塊からなる床下埋土



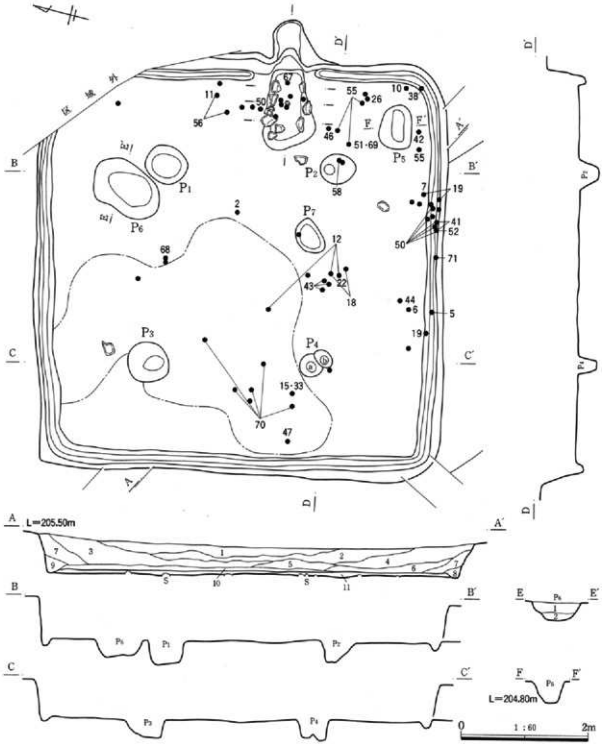




カマド
1　黒褐色土　小型のローム塊・焼土粒を含む
2　暗褐色土　焼土化した小型のローム塊を含む
3　〃　大型のローム塊・炭化物を含む
4　赤褐色土　焼土化したローム塊を主体とする
5　鈍黄褐色土　焼土化したローム塊を多く含む。構築材崩落土
6　〃　大型のローム塊を主体とする。構築材崩落土
7　黒褐色土　少量のローム粒・焼土塊を含む
8　鈍黄褐色土　小型の焼土塊・炭化物・灰を含む
9　暗褐色土　白色灰・焼土・炭化物を多く含む
10　黄褐色土　ローム塊を主体とする袖材
11　黒褐色土　小型のローム塊を多く含む

140図　37号住居跡・床面・竈



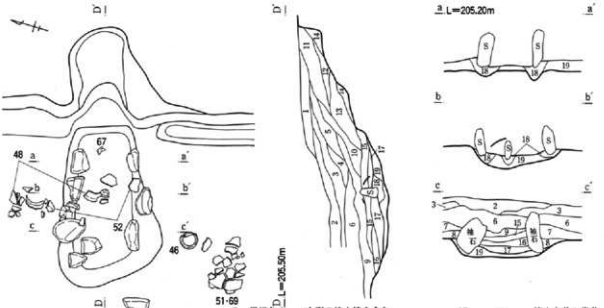

141図　37号住居跡出土遺物




1　黒褐色土　少量のFAが筋状に混在する。炭化物・焼土粒を含む
2　〃　少量の褐色土塊・炭化物を含む
3　暗褐色土　褐色土塊を多く含む。軟質
4　黒褐色土　均質。白色粒・炭化物を少量含む
5　〃　白色灰層が薄く筋状に堆積する
6　〃　炭化物を多量に含む。焼土粒は少量
7　〃　均質。白色粒微量含む。やや軟質
8　褐色土　褐色土塊からなる。しまり乏しい。壁周溝埋土
9　〃　褐色土粒からなる。しまり乏しい。壁周溝埋土
10　〃　大型の褐色土塊からなる貼床土。白色灰を堆積する
11　暗褐色土　褐色土塊・黄褐色土塊からなる床下埋土。炭化物を少量含む

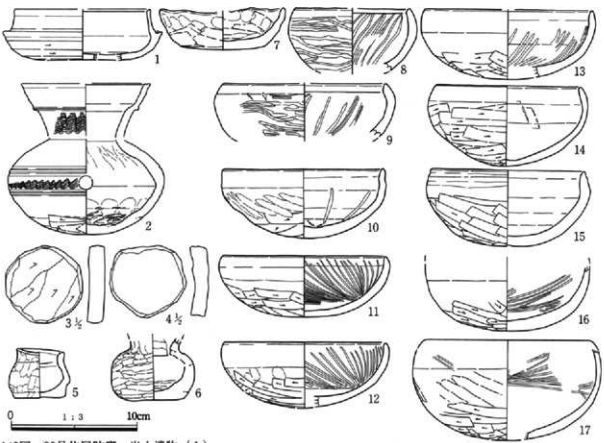
P6（E−E′）
1　黒褐色土　硬くしまる
2　〃　ローム塊含む

142図　38号住居跡床面

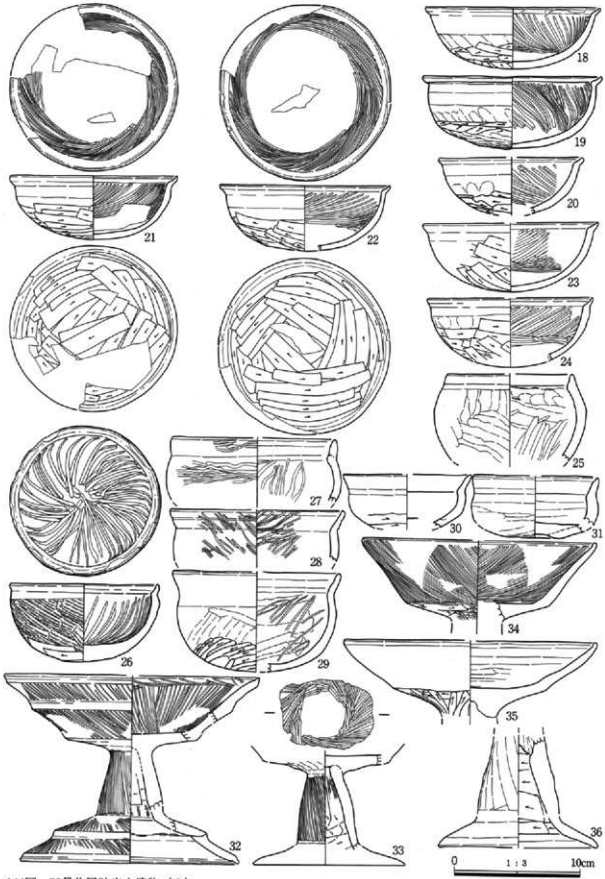



カマド

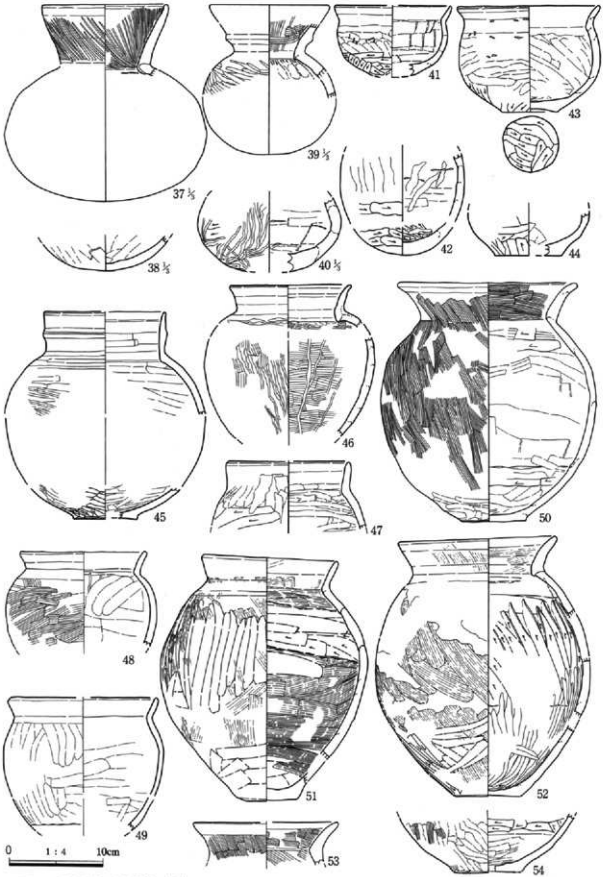
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 少量の焼土を含む。やや軟質 |
| 2 | 黄褐色土 | 粘土塊からなる。天井部崩落土 |
| 3 | 暗褐色土 | 黄褐色土・黒褐色土塊を多く含 |
| 4 | 灰黄褐色土 | 焼土化粘土塊。構築材崩壊土 |
| 5 | 〃 | 粘土塊を主体。構築材崩壊土 |
| 6 | 黒褐色土 | 焼土粒・炭化物を少量含む |
| 7 | 黒褐色土 | 小型の焼土塊を含む |
| 8 | 黒褐色土 | 焼土塊・褐色土塊を含む |
| 9 | 鈍黄褐色土 | 焼土塊と黄褐色土塊からなる |
| 10 | 灰黄褐色土 | 焼土塊を含む。構築材崩壊土 |
| 11 | 鈍黄褐色土 | 焼土化ローム塊を主体とする |
| 12 | 暗褐色土 | 小型の焼土塊を少量含む。軟質 |
| 13 | 〃 | 焼土塊を多く炭化物を少量含む |
| 14 | 黒褐色土 | 壁基盤崩壊土。炭化物少量含む |
| 15 | 鈍赤褐色土 | 大型焼土塊主体。構築材崩壊土 |
| 16 | 明赤褐色土 | 焼土主体。炭化物・小粘土塊含 |
| 17 | 〃 | 焼土主体。炭化物・白色灰塊含 |
| 18 | 鈍褐色土 | 褐色土塊含。支脚・袖石抗埋土 |
| 19 | 黒褐色土 | 褐色土塊・少量の焼土粒を含む |



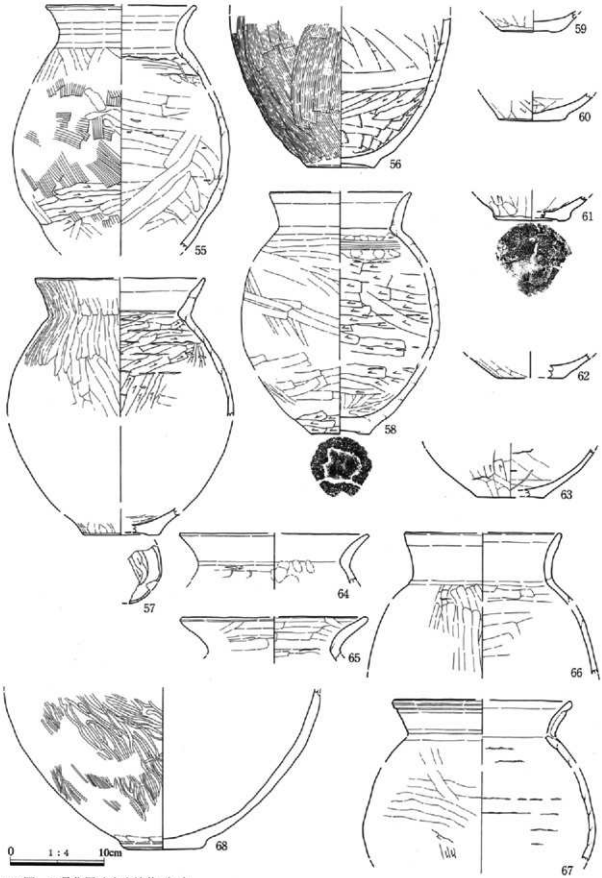

143図　38号住居跡竈・出土遺物（1）



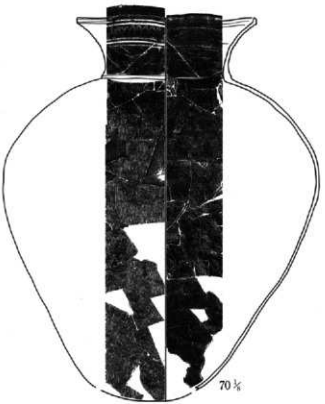

144図　38号住居跡出土遺物（2）



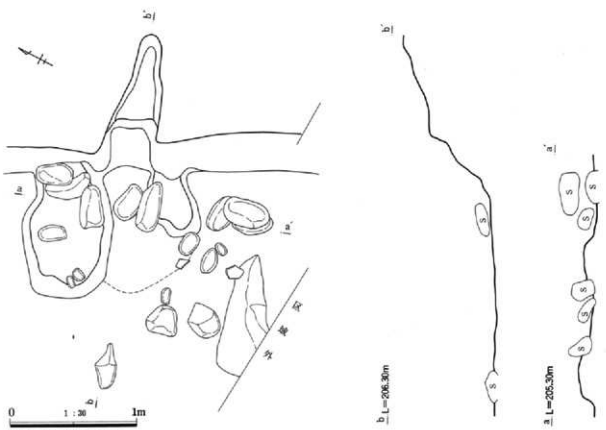

145図　38号住居跡出土遺物（3）



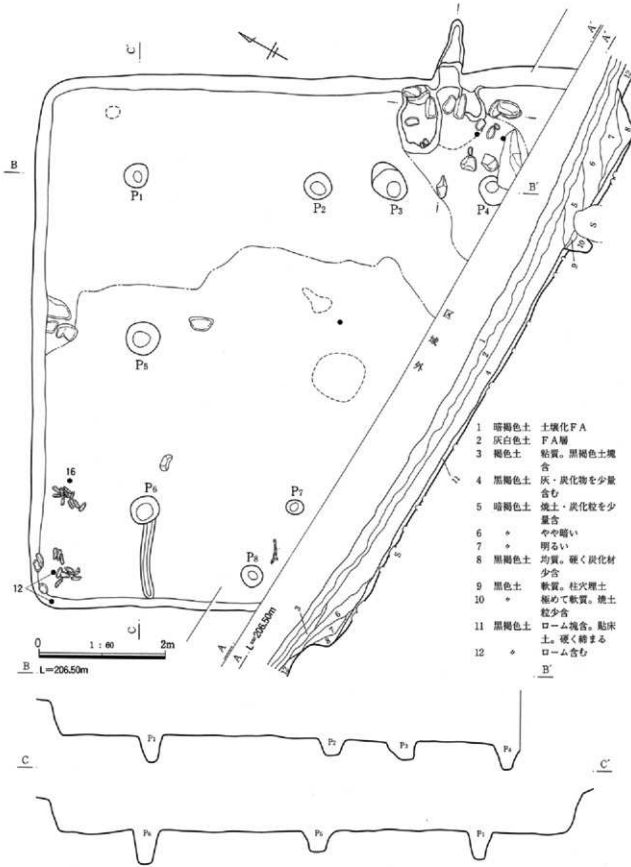

146図　38号住居跡出土遺物（4）



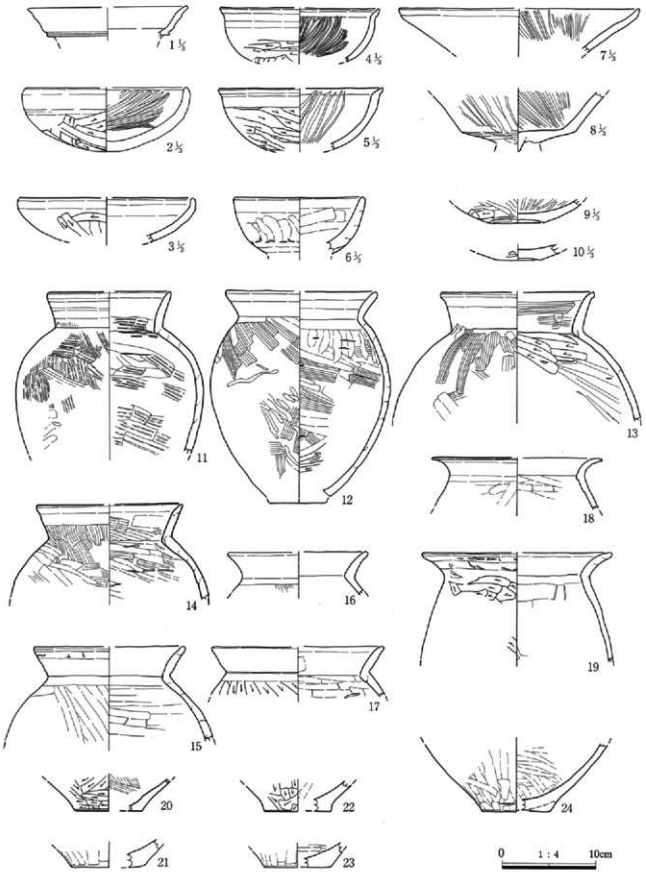

147図　38号住居跡出土遺物（5）



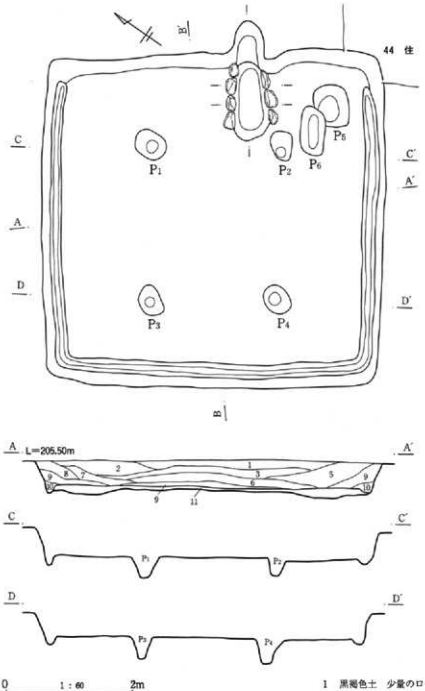

148図　39号住居跡竈




149図　39号住居跡床面

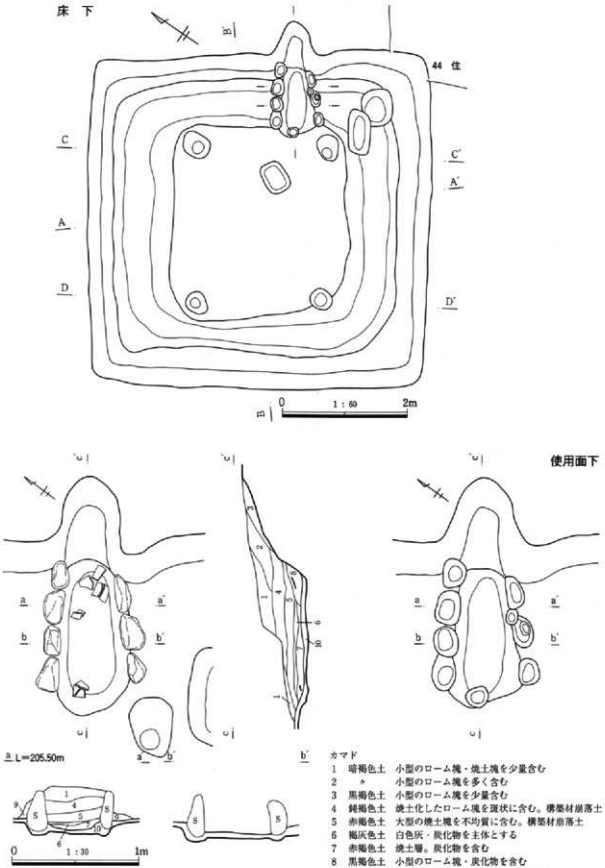



150図　39号住居跡出土遺物




| | | |
|---|---|---|
| 1 | 黒褐色土 | 少量のローム粒・炭化物を含む |
| 2 | 暗褐色土 | 明るい。大型のローム塊・黒色土塊を多く含む |
| 3 | 〃 | やや明るい。大型のローム塊を少量含む |
| 4 | 〃 | 褐色土塊・ローム粒を少量含む |
| 5 | 〃 | やや暗い。小型のローム塊を少量含む |
| 6 | 黒褐色土 | 小型のローム塊を少量含む |
| 7 | 〃 | 小型のローム塊を多く含む |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒を少量含む |
| 9 | 〃 | 均質。炭化物を少量含む |
| 10 | 〃 | 軟質。ローム粒を多く含む。壁周溝埋土 |
| 11 | 黒褐色土 | 大型のローム塊・暗褐色土塊からなる床下埋土 |

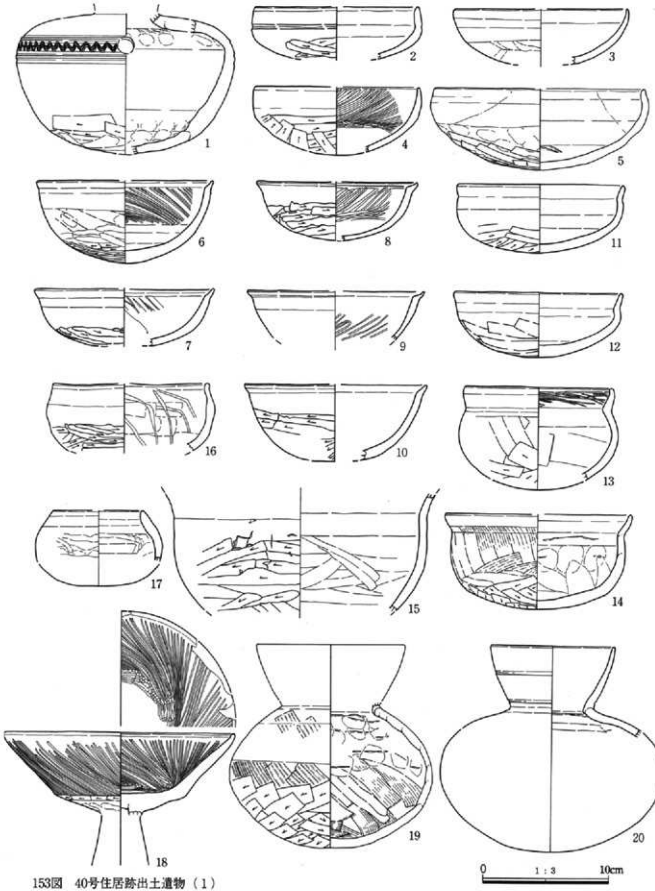
151図　40号住居跡床面



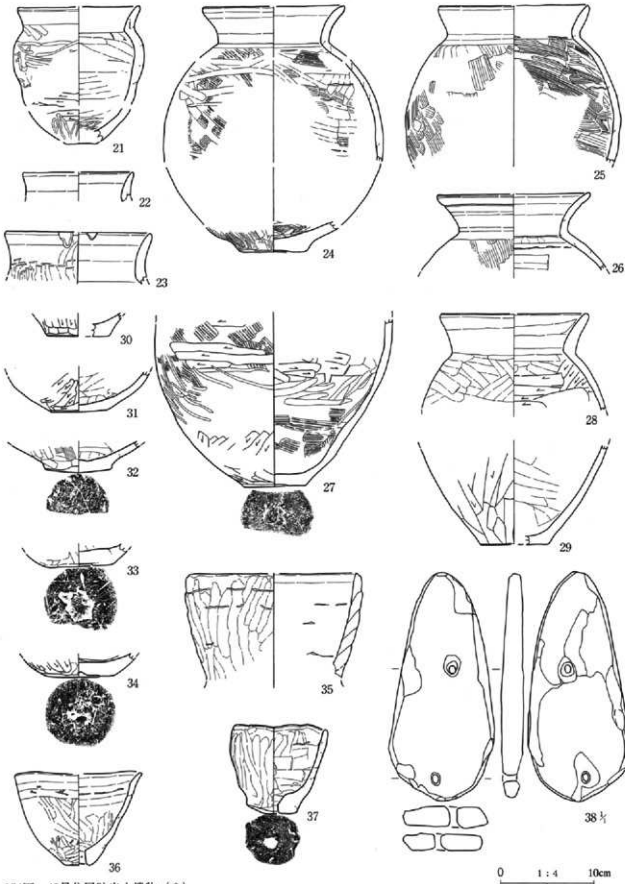

152図　40号住居跡床下・竈

カマド

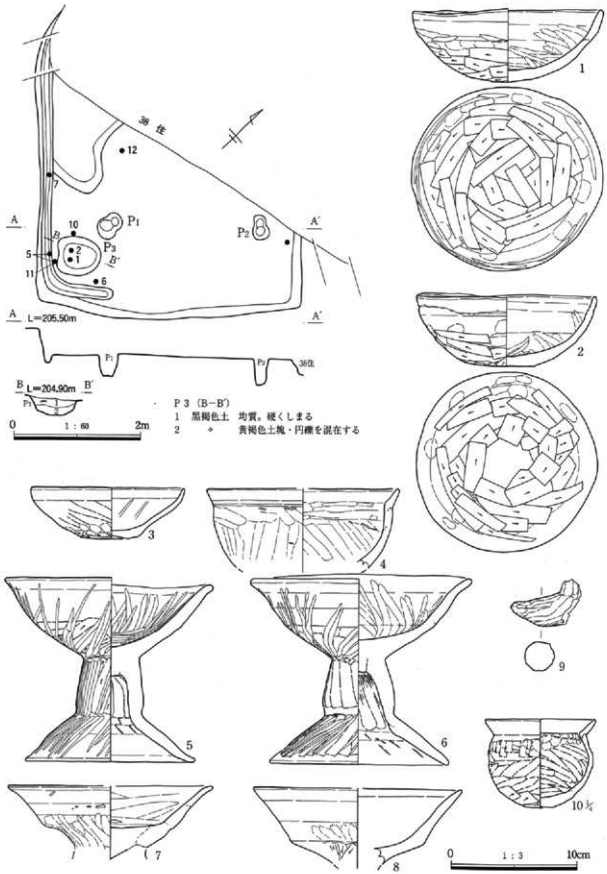
| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 小型のローム塊・焼土塊を少量含む |
| 2 | 〃 | 小型のローム塊を多く含む |
| 3 | 黒褐色土 | 小型のローム塊を少量含む |
| 4 | 純褐色土 | 焼土化したローム塊を斑状に含む。構築材崩落土 |
| 5 | 赤褐色土 | 大型の焼土塊を不均質に含む。構築材崩落土 |
| 6 | 褐灰色土 | 白色灰・炭化物を主体とする |
| 7 | 赤褐色土 | 焼土層。炭化物を含む |
| 8 | 黒褐色土 | 小型のローム塊・炭化物を含む |
| 9 | 暗褐色土 | 小型の焼土塊を含む。袖材崩落土か |
| 10 | 黒褐色土 | ローム塊・褐色土塊を含む |



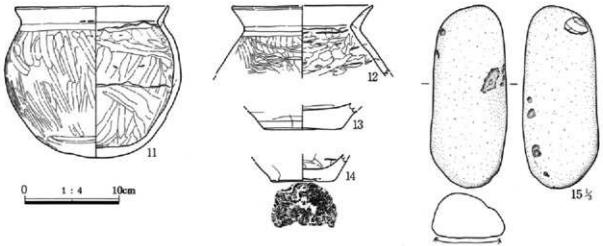

153図　40号住居跡出土遺物（1）



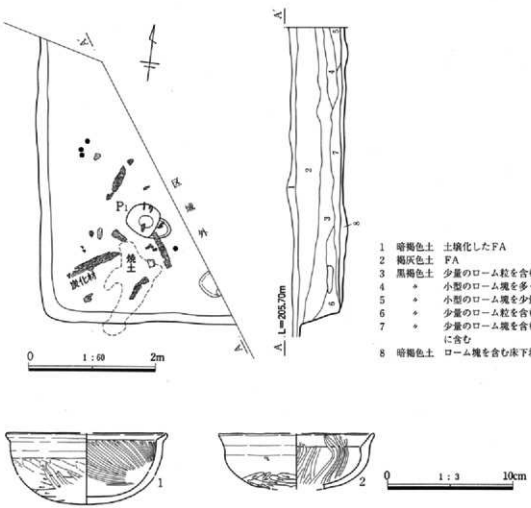

154図　40号住居跡出土遺物（２）



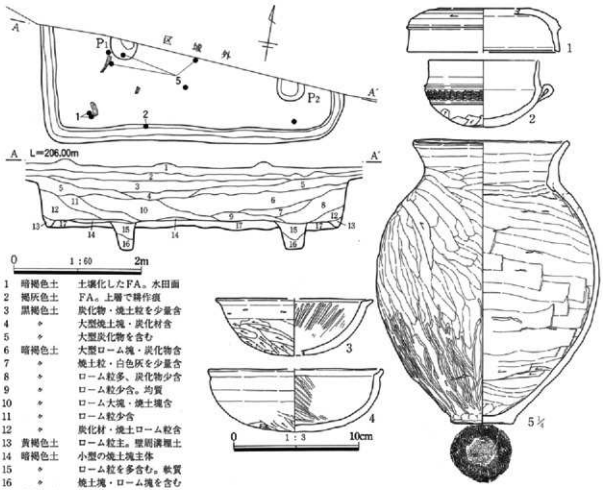

155図　41号住居跡床面・出土遺物（1）




156図　41号住居跡出土遺物（2）

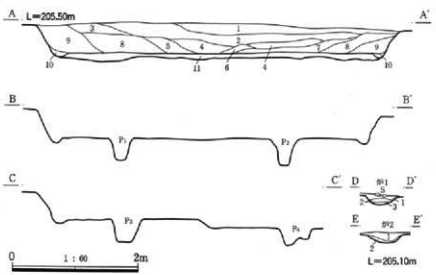



157図　42号住居跡床面・出土遺物




| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | 土壌化したFA。水田面 |
| 2 | 褐灰色土 | FA。上層で耕作痕 |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒を少量含 |
| 4 | 〃 | 大型焼土塊・炭化材含 |
| 5 | 〃 | 大型炭化物を含む |
| 6 | 暗褐色土 | 大型ローム塊・炭化物含 |
| 7 | 〃 | 焼土粒・白色灰を少量含 |
| 8 | 〃 | ローム粒多、炭化物少含 |
| 9 | 〃 | ローム粒少含。均質 |
| 10 | 〃 | ローム大塊・焼土塊含 |
| 11 | 〃 | ローム粒少含 |
| 12 | 〃 | 炭化材・焼土ローム粒含 |
| 13 | 黄褐色土 | ローム粒主。壁崩溝堆土 |
| 14 | 暗褐色土 | 小型の焼土塊主体 |
| 15 | 〃 | ローム粒を多含む。軟質 |
| 16 | 〃 | 焼土塊・ローム塊を含む |
| 17 | 黄褐色土 | ローム塊を主体とする |

158図　43号住居跡床面・出土遺物




| | | |
|---|---|---|
| 1 | 暗褐色土 | ローム塊・FA含 |
| 2 | 黒褐色土 | 少量のローム粒含 |
| 3 | 純褐色土 | 小型ローム塊多含 |
| 4 | 黒褐色土 | ローム粒炭化物含 |
| 5 | 〃 | ローム粒少含 |
| 6 | 黄褐色土 | ローム小塊を主体 |
| 7 | 〃 | 褐色土塊多含 |
| 8 | 暗褐色土 | ローム粒少含 |
| 9 | 〃 | ローム粒少含 |
| 10 | 純褐色土 | ローム粒多 |
| 11 | 黒褐色土 | ローム大塊含 |

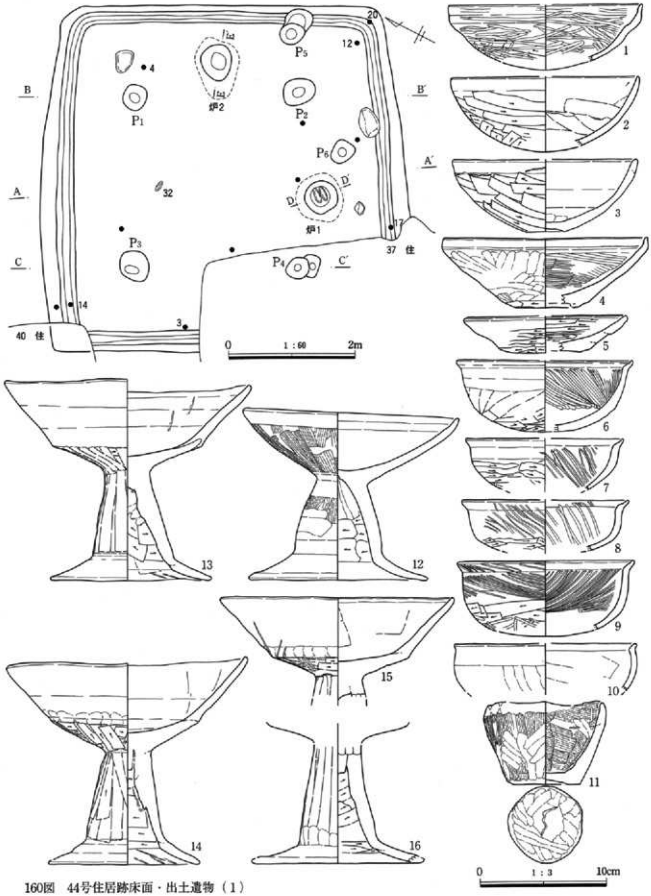
炉1（D−D'）

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 純赤褐色 | 土焼土小塊を主体 |
| 2 | 〃 | 焼土・黒色土含 |
| 3 | 暗褐色土 | 焼土・ローム含 |

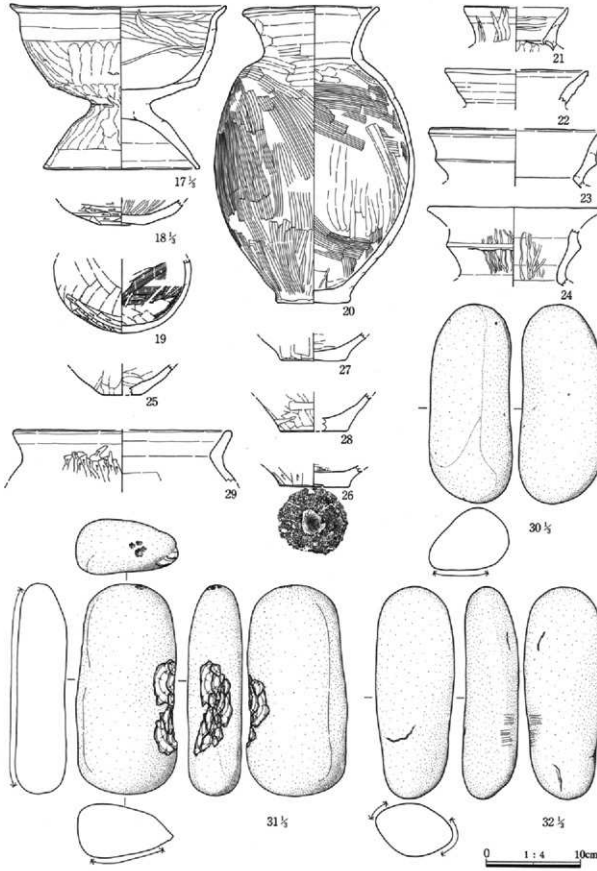
炉2（E−E'）

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 褐灰色土 | 白色灰・焼土含 |
| 2 | 赤褐色土 | 焼土層 |

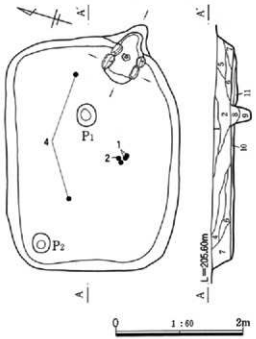
159図　44号住居跡断面図




160図　44号住居跡床面・出土遺物（1）

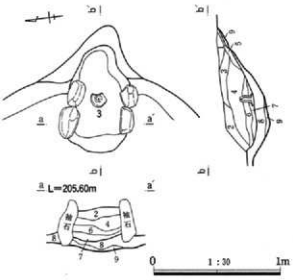


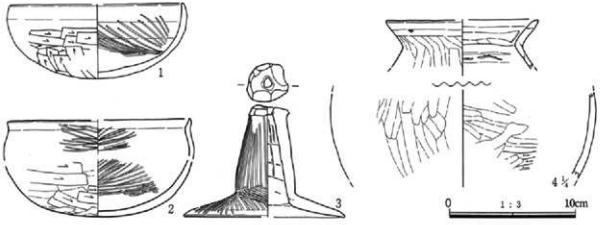

161図　44号住居跡出土遺物（2）



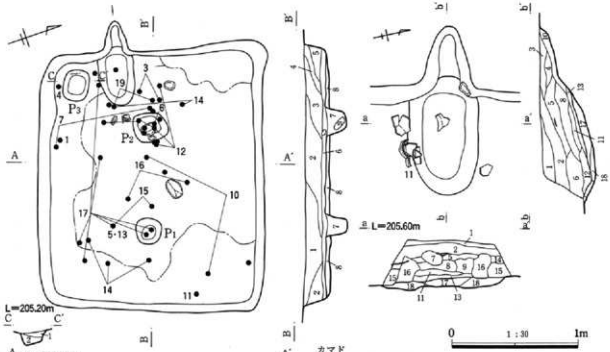

1　暗褐色土　ローム塊を多く含む。しまりは乏しい
2　黒褐色土　小型のローム塊を多く含む
3　〃　ローム粒と小型の焼土塊を含む
4　〃　多量のローム粒と焼土塊を含む
5　〃　ローム塊と黒色土塊を含む
6　〃　少量のローム塊と黒色土塊を含む
7　暗褐色土　少量のローム粒と焼土粒を含む
8　〃　ローム粒を少量含み軟質。柱痕の一部か
9　褐色土　ローム塊と褐色土塊を含む。柱穴埋土
10　暗褐色土　焼土粒を少量含む。硬く締まる。貼床土
11　褐色土　小型のローム塊を多く含む。床下埋土

カマド
1　暗褐色土　多量のローム粒と小型の焼土塊を含む
2　褐灰色土　ローム塊と黒色土塊からなる
3　黒褐色土　黒色土塊を主体とする
4　褐灰色土　焼土化ローム塊と黒色土からなる。崩壊土か
5　褐灰色土　焼土化したローム塊を主体とする
6　黒褐色土　軟質。ローム塊・炭化物を多量に含む
7　赤褐色土　焼土塊を主体とする。崩壊土か。下面使用面
8　黒褐色土　ローム塊と焼土塊を含む。埋土
9　褐色土　小型のローム塊を含む。床下埋土





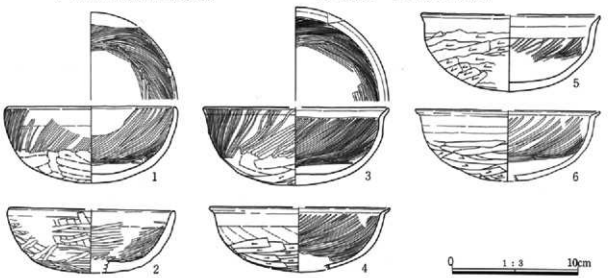

162図　45号住居跡床面・竈・出土遺物



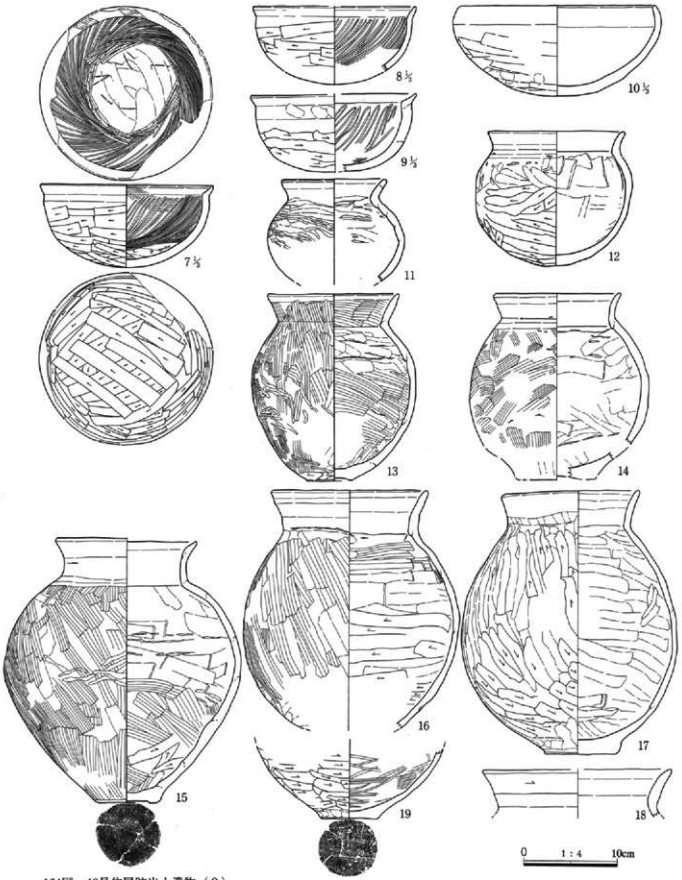

1　暗褐色土　ローム粒を層状に含む。しまり乏しい
2　〃　小型のローム塊を少量含む
3　黒褐色土　小型のローム塊を多量に含む
4　〃　少量のローム粒・焼土粒を含む
5　〃　均質。微量のローム粒を含む
6　〃　ローム塊を多く含む
7　〃　褐色土塊を含む。軟質。柱穴土層
8　鈍黄褐色土　大型のローム塊・黒色土塊からなる

P 3（C−C'）
1　黒褐色土　ローム粒・焼土粒を少量含む
2　暗褐色土　小型のローム塊を含む

カマド
1　暗褐色土　少量のローム粒と・焼土粒を含む
2　〃　大粒のローム粒と焼土粒を少量含む
3　黄褐色土　ローム塊を主体とする
4　暗褐色土　焼土塊を主体とする
5　黒褐色土　小型のローム塊と灰を含む
6　〃　小型のローム塊を多量に含む
7　鈍黄褐色土　焼土化したローム塊。構築材崩壊土か
8　暗褐色土　ローム塊と黒色土塊を含む
9　鈍黄褐色土　黒色土塊と多量のローム塊からなる
10　黒褐色土　焼土粒・ローム粒を含む
11　褐灰色土　白色灰を主体とする。粒子が細かい
12　暗褐色土　灰・焼土粒を含む
13　〃　灰・焼土粒を多量に含む
14　黒褐色土　ローム粒を多く含む
15　〃　黒色土主体。焼土粒を含む
16　鈍黄褐色土　焼土化したローム塊。袖材崩壊土か
17　黒褐色土　ローム塊を多く含む
18　黄褐色土　ローム塊を主体とする




163図　46号住居跡床面・竈・出土遺物（1）




164図　46号住居跡出土遺物（2）

**掘立柱建物跡**

本遺跡の古墳時代中葉に比定される掘立柱建物跡は、2棟を検出した。出土遺物などはなく、詳細な時期特定には至らないが、周辺の遺構・遺物が古墳時代中葉に限られることから、2棟の建物跡も同時期と考えたい。2棟ともⅢ区の検出であり、奇しくもFP上面の掘立柱建物跡と同様である。これは、調査区面積の差が大きく関係しており、幅広の調査区であるⅢ区は柱穴相互の関係性を把握しやすく、掘立柱建物跡を確認しやすい条件を備えていた。次に、古墳時代竪穴住居跡占地状況を考えてみると、Ⅱ区は竪穴住居跡が群在するように、竪穴施設を設ける空間と考える。この傾向はⅢ区東にまで続き、Ⅲ区西側で竪穴区域が途切れる辺りで、掘立柱建物跡が設けられるようである。この傾向を再度Ⅱ区に当てはめると、20号住の北東で竪穴遺構は極端に少なくなる傾向がある。北側区域外に竪穴以外の施設が存在する可能性は高い。おそらく、竪穴区域とは一定の距離をおき、平坦地形を選んで掘立柱建物を設定したものと思われる。古墳時代中葉段階の集落内の施設の一つに、掘立柱建物跡が普遍的に加わる様相は把握しておかなければならないだろう。

Ⅲ区で、検出された掘立柱建物跡は、7号掘立柱建物跡と8号掘立柱建物跡である。両者ともⅢ区北西部で近接して調査されたが、周辺には類似したピットが散在する傾向が見られ、北側への建物群の延長が予想される。さらに、建物跡東側に展開する土器集中遺構との関連も深いものと位置付けたい。

**7号掘立柱建物跡**（165図／図版23）

Ⅲ区北西隅で検出した。8号掘立柱建物跡が東に近接する。周辺は同規模のピット・土坑があり、分別に苦慮したが、北辺と東辺を基軸に検出した。また、調査当初P4は検出できず、確認面を下げて調査した。故に他のピットとは平面形に差があり、深さは確認面からの推定値を記載した。P1も調査区壁に掛かるため、確認が遅れた。

長軸方位を北北東に向ける、9基のピットからなる2×2間総柱の建物跡である。外形規模は、3.4×2.9m程の中型の例である。あるいは、調査区域外に対応する柱穴が存在する可能性はあるが、全体規模から、調査例に留まると判断した

柱穴規模は、ほぼ径50～60cm、深さは60～70cmにまとまる。柱穴間距離も長軸方向は約1.7m、短軸方向は1.4m前後で配されており、統一性の取れた柱穴である。総柱とすると堅牢な作りの建物であろう。出土遺物や焼土、その他の施設は検出されていない。

**8号掘立柱建物跡**（166図／図版23）

Ⅲ区北西隅で検出した。7号掘立柱建物跡が西に近接し、北東に3号土器集中遺構がある。

7号掘立柱建物跡の東辺に平行して、P1・P3・P5が検出されたため、対応する柱穴としてP2・P4を抽出した。P5に対応する柱穴として、P6を見たが、位置的に極めて問題があった。

同規模の柱穴6基からなる1×2間の建物跡である。柱穴規模は径50～60cmにまとまり、深さも60cmを超える例を主体にした、しっかりした柱穴群である。長軸方位は7号掘立柱建物跡と同様に北北西に向ける。全体規模は2.7×1.7mで小型の長方形を呈するが、前述のP6の配置に問題があり、南側で不整形状となる。各柱穴間の距離は、短辺が1.7m、長辺が1.4m×2であるが、P6とP4の間は0.7mしかなく、約1/2の間隔である。そのため、P5とP6の短辺距離が約2.0mと長くなり、全体の形状が歪になった。調査では、この南東の柱穴検出を重ねたが、良好な例を得ることができず、やむなくP6を建物跡南東隅の柱穴と判断した。

焼土・遺物は確認できなかった。

**溝　7号溝**（167図／図版－）

本遺跡で古墳時代中葉に比定される溝は僅かに1条でしかない。Ⅰ区低地部で検出された7号溝が該当するが、本溝も検出層位からの判断で古墳時代中葉とした。1区低地部は、自然流路が多数検出され、

土坑状の深みを溝として調査した経緯がある。その殆どが、自然営力によるもので、遺構ではなく、報告書では掲載していない。その中で、7号溝のみが、若干の掘り込みを有し、溝底面も安定することから、人為的所産と考えて、報告に至る。

7号溝は、Ⅰ区東側で南北の走向を持って検出された。FA下水田跡調査後、更に下層の文化層の検出に努めた際に、遺物包含層下層-基盤礫層面で確認された。Ⅰ区東台地の下端部にあたる。

ほぼ地形に沿って、北から南へ傾斜し、幅約0.3～1.5mと不連続で、深さも約10cm程度と浅い。溝底面は比較的平坦で、他の溝に比して凹凸は少なかった。北端部に自然石が集まる他に、出土遺物など詳細な時期を特定する資料はない。周辺からは、縄文時代・弥生時代～古墳時代中葉の遺物が出土するが、本溝に伴う出土例は見られなかった。

性格は特定できないが、Ⅰ区東台地に占地する竪穴住居跡群との関連性を想定しておきたい。

土坑（168～170図／図版24・25・59）

古墳時代中葉の遺構遺物が調査されたローム上面では、幾つかの土坑も検出されている。その多くは、住居跡平面形確認時や床面検出作業の際に同時に調査された例である。しかしながら、遺構確認面全てがローム上面ではなく、黒色土中に留まる箇所も多く、土坑のような小規模遺構が的確に検出できたとは言い難い。これは、住居跡埋土中に設けられた土坑も同様で、黒色土中の黒色土埋土の検出と遺構確認は、判断が難しく、全ての土坑-小遺構を網羅出来たわけではない。

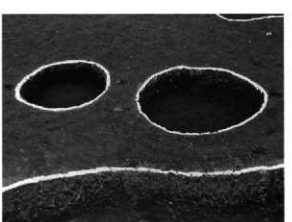
また、本遺跡で検出された土坑の殆どが無遺物でその性格を特定できる例は少ない。特筆すべき土坑は無く、故に個々の土坑の詳細は控え、各区の主な土坑の概要を述べるに止める。

Ⅰ区の土坑は東台地に集中する。23号土坑～29号土坑が調査された。すべて円形・不整円形の形状で、規模も径1m以下のものである。その中で29号土坑は径1.2m以上の不整円形土坑で深さも30cmを超える。出土遺物は無いが、住居周堤帯下の検出である。

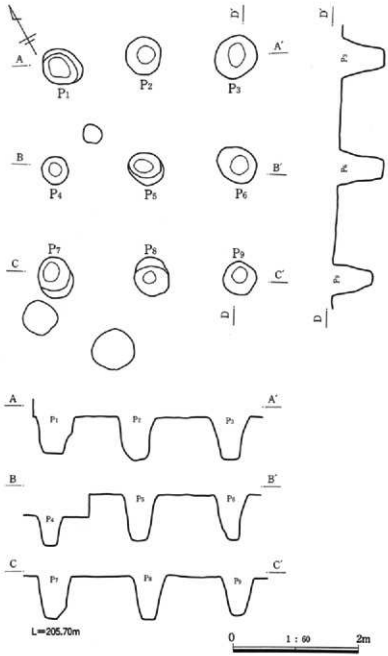
Ⅱ区では、東側に集中が偏る。西側は黒色土が厚く堆積しており、確認が果たせなかったためと考えられる。Ⅱ区では、30号土坑・36号土坑～38号土坑、104号土坑～106号土坑、128号土坑・130号土坑・136号土坑が調査された。36号土坑は、25号住や28号住と重複して検出された。新旧関係は判然としないが、28号住焼土を切る重複である。3個体の坏・椀類（168図1～3）が出土している。136号土坑は22号住と32号住の間で検出された。北北西に長軸を向ける不整楕円形を平面形とし、深さは15cmと浅い。形状から墓壙とするには、住居群内にあり位置的には問題がある。

Ⅲ区の土坑は散漫な分布である。特に集中する箇所もなく、遺物を主体的に出土する例も見られなかった。その中で131号土坑は長軸が4.7mもの縦長の長方形を呈し、極めて異質な形態を示す。調査時は住居跡として着手した土坑である。38号住西の周堤帯下にあたり、長軸を38号住と平行することから、あるいは住居構築時の所産であろうか。埋土中より高坏坏部破片が出土している。

その他では、2個一対の配置を見せる土坑を確認している。顕著な例が132号土坑と133号土坑であるが、129号土坑と134号土坑、137号土坑と138号土坑も近接した不整円形土坑が並ぶ。用途・性格等は不明だが、今後検討するべき土坑配置であろう。

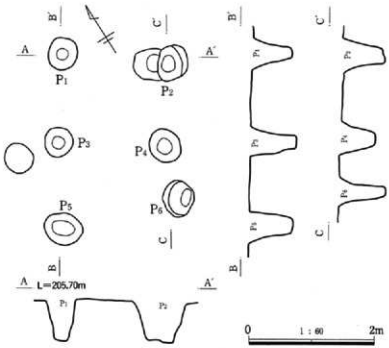


132号土坑・133号土坑

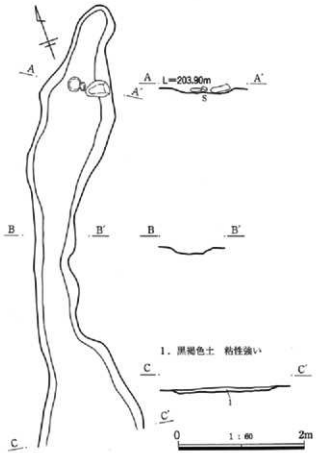


165図　7号掘立柱建物跡

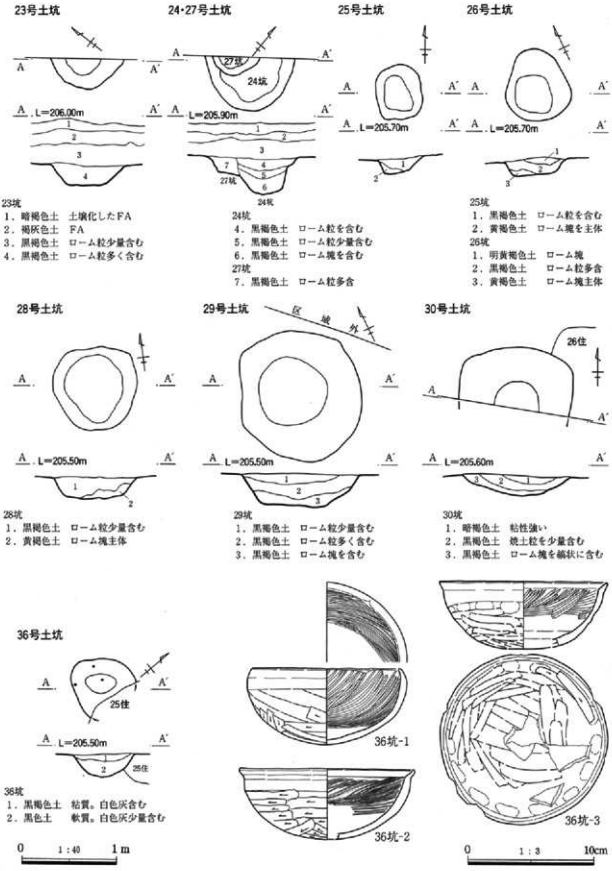
7号掘立柱建物跡(手前)・8号掘立柱建物跡



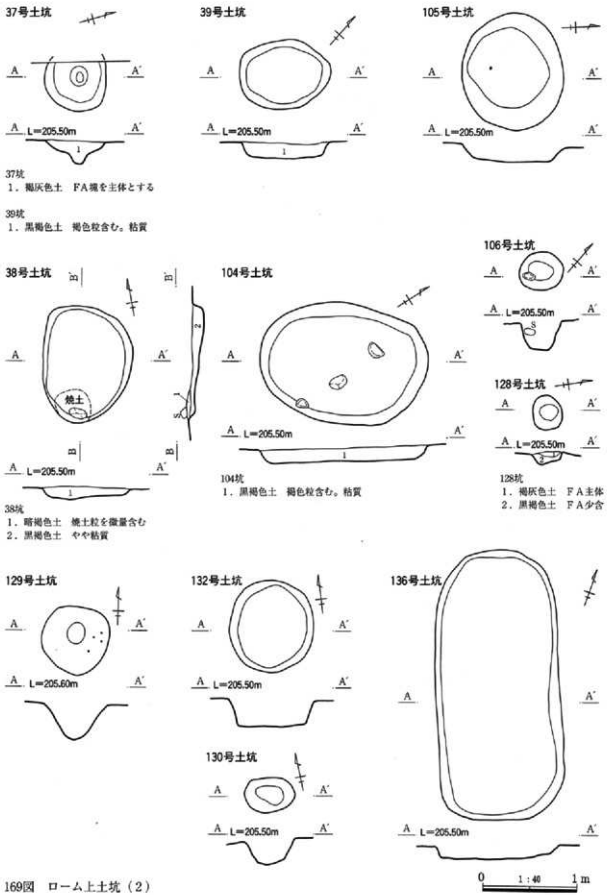

166図　8号掘立柱建物跡




167図　7号溝




168図　ローム上土坑（1）・出土遺物




37坑
1．褐灰色土　FA層を主体とする

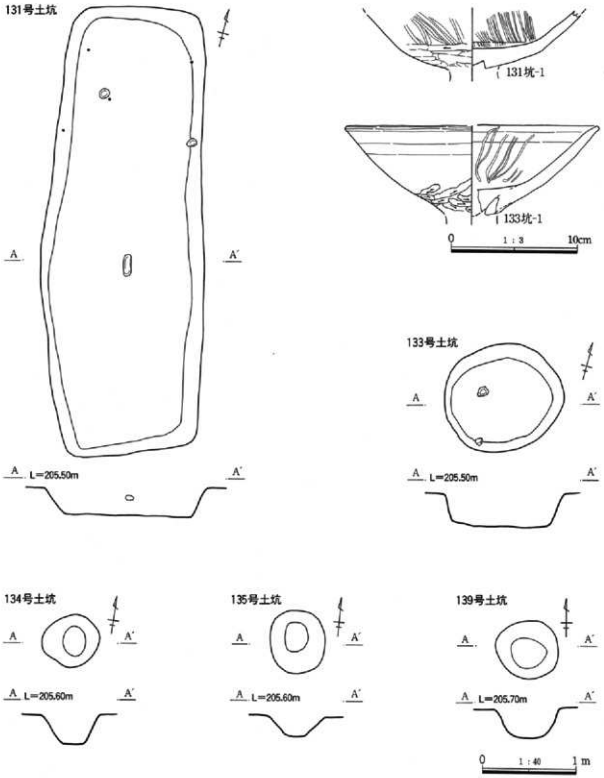
39坑
1．黒褐色土　褐色粒含む。粘質

38坑
1．暗褐色土　焼土粒を微量含む
2．黒褐色土　やや粘質

104坑
1．黒褐色土　褐色粒含む。粘質

128坑
1．褐灰色土　ＦＡ主体
2．黒褐色土　ＦＡ少含

169図　ローム上土坑（2）




170図　ローム上土坑（3）・出土遺物

**土器集中遺構**

Ⅲ区で4基を調査した。43号住が2号土器集中遺構の北側に近接するが、掘立柱建物跡と同様に住居群から一定の距離を保つ傾向が見られる。重複する遺構もなく、集落内で限られた区域に占地する様相が看取されよう。

土器集中遺構という名称であるが、必ずしも土器のみで構成される遺構ではない。大型の自然石や石製品なども混在するが、多数を占める遺物が土器であり、意図的な土器設置を優先して土器集中遺構として命名した。

土器集中遺構の性格であるが、一括廃棄とする考えもあるが、本遺跡の場合、平坦地にある一定範囲にまとまる傾向が見られ、何等かの意図を含めた、土器設置行為と考えた。本報告では祭祀遺構の一形態とし、その性格を推定したいが、周辺地域の様相を踏まえて、資料の蓄積と判断を待ちたい。

祭祀儀礼を伴う土器設置と考えた場合、短時間で行われた祭祀ではなく、ある程度の時間幅を持って、複数回の祭祀行為の蓄積として考えておくべきであろう。しかしながら、本遺跡土器集中遺構出土土器そのものに、時間幅を示唆する差は確認できなかった。調査時における詳細な観察が必要であった。反省点である。

**1号土器集中遺構**（171・172図／図版23・53）

Ⅲ区中央東寄りで調査した。グリッドはOU－9にあたり、東約2mに38号住が近接する。38号住の周堤帯を勘案すると周堤帯際に位置することになるが、層位的にも同時性は保証できず、調査の所見では周堤帯を構成する封土の下層における検出と見ている。黒色土中の検出で、調査着手時は竪穴の存在も念頭におき、周辺の精査を重ねたが、明瞭な落ち込みはなく、20～30cm程の土器集中層が連続したため、土器集中遺構と捉え、出土土器全てを記録化して調査を進めた。これは他の土器集中遺構も同様の調査方法をとっている。

土器の集中範囲は北西方向に帯状に集中する傾向が見られたが、北東・南西方向にも散布していた。北西方向へは約2.5m、北東方向へは約3.4m程の範囲で出土を見ることができた。

最も土器が集中する北西方向の帯状集中には、大型の自然石数個が置かれ、その間を多量の土器が焼土塊と伴に出土する状況である。図示し得た遺物の大半がこの帯状集中からの出土である。殆どが破片状態での出土であるが、完形・半完形も見られる。ミニチュア土器（1）、鉢（3・4）、台付鉢（6）、高坏（7～9）、小型甕（10・11・14）、甕（15～18）は安定的な出土である。

出土土器の特徴を見ると、甕・小型甕への比重が高い。また、高坏3個体の安定的な出土も示唆である。反面、坏・椀類は少なく、鉢・台付鉢が加わる様相は、住居跡出土土器組成とは差がある。大型の自然石を中核として、複数回の甕・高坏を使用し

1号土器集中遺構出土状態

1号土器集中遺構作業風景

た祭祀儀礼を重ねた集積体として捉えられよう。

**2号土器集中遺構**（173～179図／図版23・54～56）

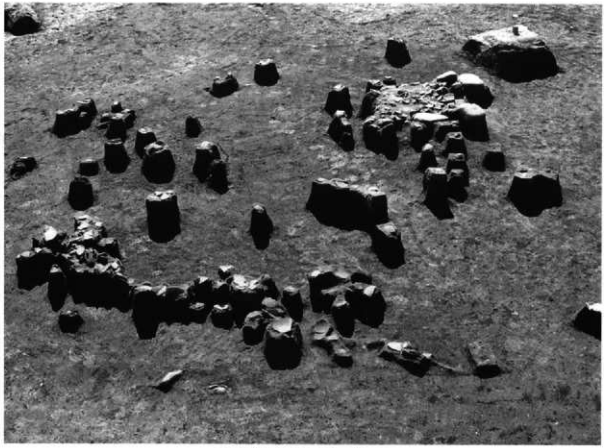
Ⅲ区中央やや北よりのOV・W－9・10グリッドで検出された。43号住と46号住の間に位置し、4号土器集中遺構が西に近接する。2号土器集中遺構は、2基の集中分布を一括して土器集中遺構として捉えた。北側の集中分布と南の集中分布に分けられ、2基は約2m程の距離を保つ。2基を併せた規模は、径4.5m程の範囲で、帯状の北側分布と不整円形状の南側分布からなる。

北側分布は平面形を北西方向を向く帯状をなし、約3.5mにわたり土器が集中していた。数個の自然石が置かれ、破片状態の土師器破片が集まる。土器の集中は若干ながら、南東部分に偏りが見られた。

南側分布は大型の自然石が置かれ、径1.5m程の不整円形状の平面分布を呈す。厚さ20cm程のローム塊と焼土層と伴に、土師器破片がかなりの密度で集中していた。

出土土器は多量であり、36点を図示した。甕が主体を占め、坏・椀類は少ない特徴が見られる。坏・椀類は南側分布に1～3が、北側分布に5が見られる程度である。その他は殆どが甕類の破片出土であり、北側と南側に跨って接合関係にある個体も多く見られる。特徴的な甕類としては、32・34が異系統の様相である。

2箇所の集中分布に分かれ、両者に接合関係が見られることから、北側・南側集中分布が一体の集積遺構と捉えられる。甕類に偏る出土も極めて興味深い組成である。



2号土器集中遺構全景（北から）

**3号土器集中遺構**（180～183図／図版24・56～58）

Ⅲ区北側の調査区壁にかかり検出された。8号掘立柱建物跡が東に近接する。調査した範囲では径2.0×1.5m程度の不整円形状の平面形を呈する。検出時よりローム塊と焼土塊が土師器破片とともに確認され、可能な限り北側へ拡張調査した。おそらく北側の未調査部分は僅かと思われる。

大型の自然石が置かれ、土師器甕を中心に多量の土器が出土した。全体感としては、北側と南側に小範囲ながら集中分布が分かれる。南側は北西方向へ帯状に集まる傾向を見せる。出土量が多く、完形土器や半完形土器も多く見られた。北側も大型の自然石を東端に置き、出土量は充実する。しかしながら、破片状態の例が多く、完形土器の出土は見られなかった。

出土土器は多く、29個体を図示した。2号土器集中遺構と同様に甕類が主体である。特に南側の集中分布からは、9・17・19が逆位で置かれた状態を見ることができた。9の東には13が横位で潰れた状態で、17・19の東に10・12・15が破片状態でまとまって出土している。16は西端でまとまる。坏・椀類は少量の出土である。1が南西側で4が北側で出土している。高坏は2個体を図示したが5が北側で6が東側で出土している。小型甕（7）も同様に北側から東側にかけて破片が散る。8の台付鉢は北側と南側の破片が接合している。

2号土器集中遺構と同様に甕主体の土器組成ではあるが、高坏が加わる様相は注意したい。また、甕類の残存度も高く、原位置を保つ出土状態は祭祀の集積状況を考える際に、重要な観察項目と捉えられよう。

**4号土器集中遺構**（184図／図版24・58）

Ⅲ区中央北寄りで調査した。46号住が南に、2号土器集中遺構が東に近接する。

小規模な集中遺構である。径1.5m程の範囲に高坏を主体にしたまとまりを見せた。完形の高坏（2・3）以外に坏部（4・5）、脚部（6）のみの出土も見られた。その他に完形の小型甕（7）が加わる組成である。

また、高坏（4）と小型甕の間は白色灰の集中が見られた。

1～3号土器集中遺構と違い小規模で出土遺物は少ない。器種も大型の甕は加わらず、高坏と小型甕が目立つ。あるいは、祭祀形態として短時間の集積とも考えられよう。

3号土器集中遺構

4号土器集中遺構

**遺構外出土遺物**（185～206図／図版59～76）

本遺跡では、多量の遺構外出土遺物を得た。本報告書では土器類を中心に300点以上を図示した。その多くが、遺構平面形確認時の出土であり、竪穴住居跡内や土器集中遺構として認定できなかった出土である。竪穴住居跡内出土遺物は、例え上層の遺物でも埋土中出土として扱い、竪穴を伴わない出土であっても、ある程度の集中が見られたら、集中遺構として取り扱った。竪穴の範囲外出土で、まとまりを見なかった遺物をグリッド出土—遺構外出土土器として扱った。しかしながら、完形・半完形土器の出土も見られ、さらに、ミニチュア土器や臼玉や管玉等石製模造品も見られた。

発掘調査における精度という問題もあるが、完形土器や石製模造品の竪穴遺構外出土は、屋外の小規模祭祀遺構の可能性もある。例えば、竪穴住居周堤帯上における祭祀等も想定できよう。残念ながら、発掘調査の段階では、竪穴住居跡の把握に追われ、小規模な遺物集中にまで考えが及ばなかった。周堤帯として認知できても、生活面としての周堤帯上を捉えることは適わなかった。

さらに、古墳時代集落跡内の遺構組成を見ると、竪穴住居跡以外に、掘立柱建物跡や平地住居跡等、竪穴以外の施設の多様性がある。平地住居跡等は、通常の発掘調査では把握できず、火山灰下の調査によってその存在が明らかになる例ではあるが、本来ならば、遺構外出土遺物の幾つかは、そのような竪穴施設以外の遺構に帰属し得る可能性が極めて強い。竪穴以外の遺構推定方法としては、遺物出土位置の詳細な記録化も有効な方法かも知れないが、古墳時代における、土の移動－耕作行為を念頭におくと、かなりの土と伴に遺物も動いているように思われる。厳密な原位置復元は困難であり、遺構外出土遺物の扱いも、竪穴住居跡出土遺物に比して、その一括性を含む問題点のため、なかなか有効な手段を得ることができない。

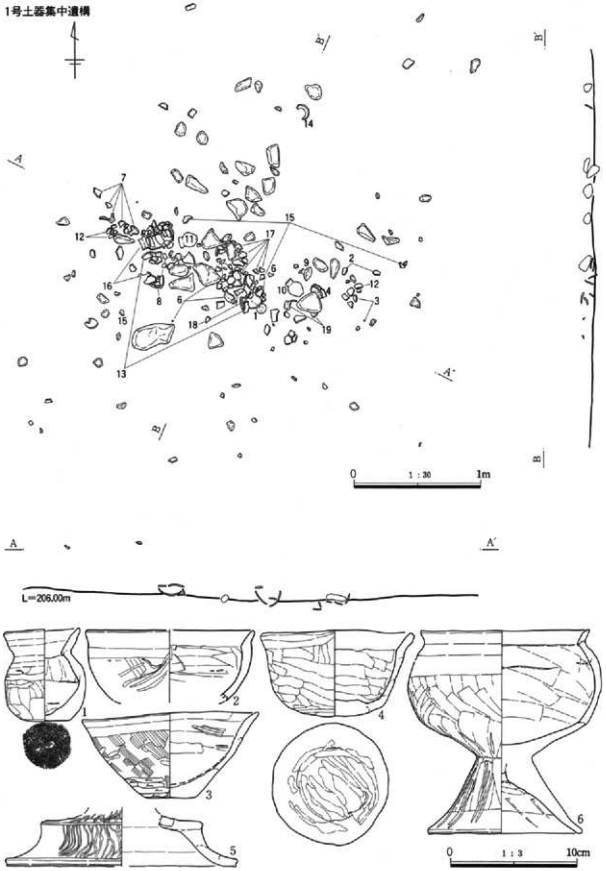
また遺物接合関係を見ると、住居跡出土土器とグリッド出土土器が接合する例が多々見られた。住居への廃棄行為や周堤帯を埋土として利用する場合を想定すると、土器の接合関係から遺構の同時性や性格を安易に特定することも、問題が多い。周堤帯上の土器と周堤帯内の土器には大きな時間差が存在するはずであり、その両者が埋土行為によって、住居跡内に混在する可能性も極めて高いものと考える。

このように、本遺跡における遺構外出土土器は厳密な一括性はなく、複雑な様相を提示するものである。しかしながら、個々の土器相を捉える研究も今後着手するべきであり、その際に活用されるべき資料群として認識している。

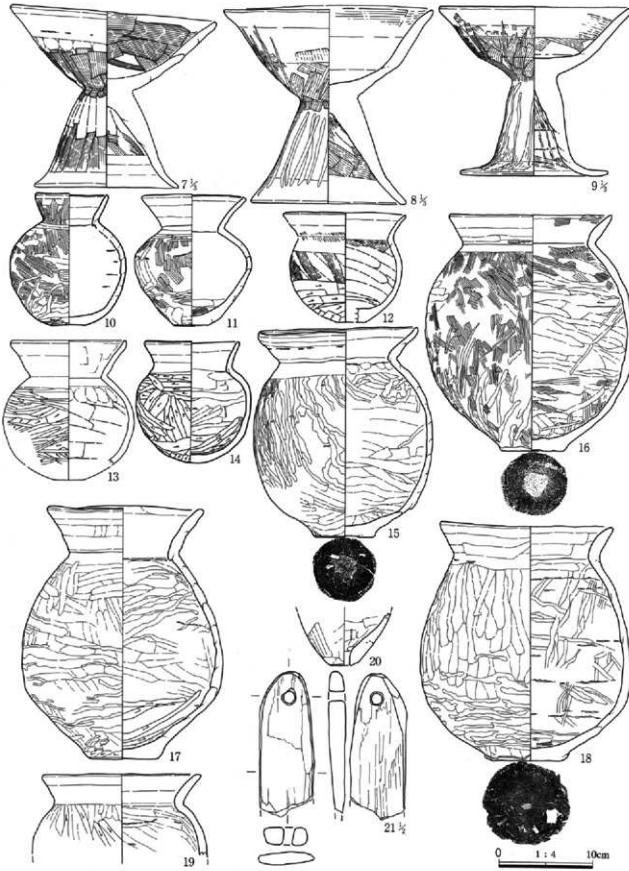
古墳時代の遺構外出土遺物以外に弥生時代と縄文時代の出土遺物も見られた。弥生時代の土器はⅠ区出土が多く、周辺に該期集落跡の存在が予想される。

作業風景

1号土器集中遺構




171図　1号土器集中遺構分布図・出土遺物（1）




172図　1号土器集中遺構出土遺物（2）

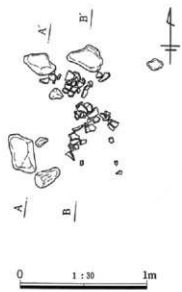
**2号土器集中遺構**

173図　2号土器集中遺構分布図（上層）

2号土器集中遺構

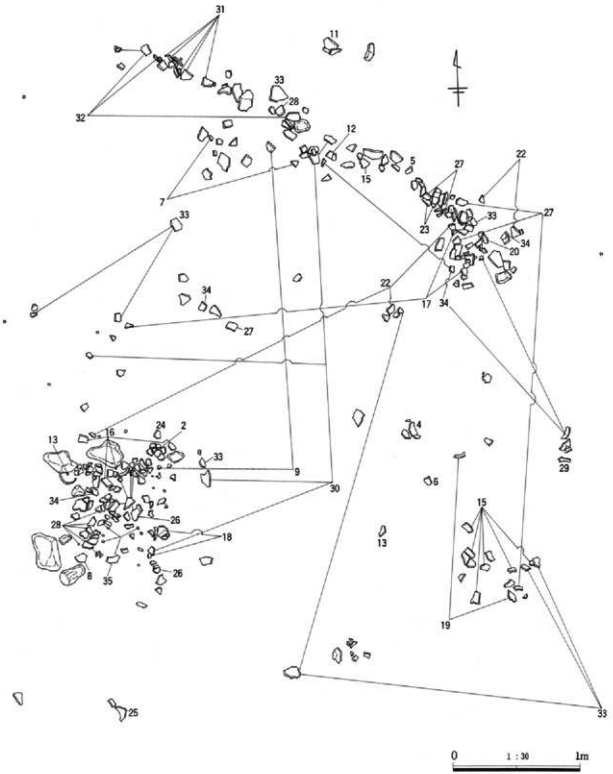
下層の北

下層の南

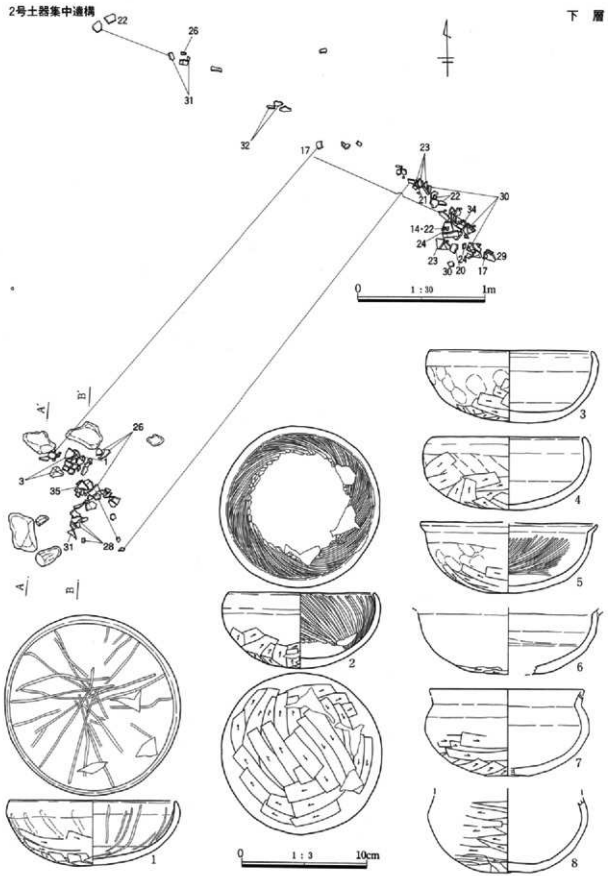



174図　2号土器集中遺構分布図（下層）

**2号土器集中遺構**　　**上　層**




175図　2号土器集中遺構遺物出土位置（上層）




176図　2号土器集中遺構遺物出土位置（下層）・出土遺物（1）